ゼロの使い魔～一騎当神～

昭栄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔～一騎当神～

【Ｎコード】
Ｎ０４４１Ｙ

【作者名】
昭栄

【あらすじ】
属性ゼロ、魔法の成功率ゼロ、近年まれにみる魔法劣等生、ゼロのルイズ。そんな彼女が呼び出したのは、異世界で邪神とまで呼ばれた男だった。見かけは貧民、契約は拒否する、全く言うことを聞かない最低で最強の使い魔。彼の召喚がハルケギニア大陸とゼロのルイズの運命を大きく変えることを、今は神さえも知らない――――。

プロローグ

青年は、駆け上がった。彼の人生１８年の間において、感じたことないほどの焦燥感を抱えて。

青年は、駆け上がった。身にまとう鎧の重さも忘れ、蝋燭が揺らめく石畳の螺旋階段を。

階段を駆け上がると、青年の眼前には広い石畳の廊下が広がる。青年の体力は限界を超えていたが、気力が彼を走らせた。彼がお気に入りだった絵や花瓶の横を通るが、それはもはや気にならない。

やがて暗がりの中から巨大な木製の扉が姿を現し、彼は扉に体を打ち付けた。扉が激しく開いて、壁にぶつかり跳ね返る。脚がもつれ、転倒し、彼は顔に石畳の冷たさを感じた。

その心地よさに身を任せたかったが、彼は最後の気力を振り絞り、ようやく頭を少し上げた。

「か、彼、ゴホッ！」

息がつまり、彼はせき込んだ。その伝えるべきことを伝えようと、口だけが空回りしている。

そこへ、彼と同様に鎧に身を包んだ者が二人両脇に駆け寄り、彼の上半身を起こしあげた。青年は息を整え、再度口を開く。

「彼の者が、現れました！」

周囲にどよめきが起こり、初めて青年はこの場に多くの人々が集まっていることに気がついた。鎧をまとう者、マントをはおっている者、宗教をにおわせる着物をまとう者、各々が独特の服装をしているが、それのみは共通していた。

彼らの表情は恐怖にひきつっていたのだ。

その者達の中から、一際目立つ二人の影が立ちあがった。

「それは誠か！？」

青年は今にも途切れそうな意識をかろうじて繋ぎとめ、二人の影を見やる。一人は赤いマントをはおった威厳のある老人で、立派な顎鬚を蓄えている。頭に黄金の冠をかぶり、ぼんやりとした青年の頭でも我が最後の王であることが分かった。

もう一人は、白い綺麗なドレスに身を包んだ気品漂う老女で、頭には銀の冠を載せている。ぼんやりとした青年の頭でも、我が最後の女王あることが分かった。

青年は義務感にかられ、動かない口を無理やり動かす。

「はい。間違いございません！」

周囲に再度どよめきが起き、青年は再度石畳へと倒れ伏した。最後の王は手を振りかざし、倒れた青年をかばうことなく、言い放った。

「全軍に、戦の準備をさせよ！」

青年の周りで、けたたましく金属こすれあう音とせわしない足音が起こる。青年はその様子を瞳に写し、自分の義務を果たした満足感を持って眼を閉じた。

昔、この世界には一つの大陸と9つの国があった。9つの国はそれぞれ強大な武力をもち、拮抗した武力は人々に平和をもたらした。人々は有り余った活力を文化へと注ぎこみ、有り余った魔法を生活に溶け込ませることでそれまでになかった繁栄を享受、謳歌してい

た。
だがそれは、今、たった一人の男によって滅亡の時を迎えていた。
男の名は、バルス＝タイラント。
彼は、その絶大な魔力によって９つの国の内８つの国までを滅ぼした。人は老若男女を問わず殲滅され、彼の通った後には灰だけが残った。
そして今、彼は最後の人類１５万人が立てこもるこの場所へとやってきた。
１５万人の人々の中に、彼を人と呼ぶ者は一人もいない。人々は、彼を目してこう呼ぶ。
ディアブロ、魔王、邪神、一騎当神と――――――――。

邪神召喚の章

【オリジナル登場人物紹介】

バルス＝タイラント

本作の主人公。年齢は十八歳で、身長は百七十五サント。青い髪は己の魔力に煽られて揺らめき、冷たい紫色の瞳はまるで全てを見通しているかのように透き通っている。小汚く破れた白いローブを纏っており、一見ただの貧民に見えるのもその特徴。

その外見とは裏腹に、八つの国を滅ぼし、二十億の人々を殲滅するほどの魔力を持っている。二つ名は「邪神」。

未来を見ることができ、己の人生を全て把握している。そのため、あらゆることに無関心で冷酷な性格。

ムラマサ

バルスの愛刀。バルスの身の丈を超える日本刀のような大刀で、意志を持つ魔剣でもある。ハルケギニアにおける、インテリジェンスソードのような存在。

性格は自由奔放で、主であるバルスの意向すら気にしない。趣味は「主弄り」と「主自慢」。

第一話　ゼロと邪神

草原の広がる小高い丘に、その男は立っていた。背には背丈を超える日本刀のような剣をさし、所々穴の開いた小汚い白のローブを頭からまとい、紫色の瞳だけを覗かせている。男はやがてその丘の一番頂上で腰をおろし、顔を隠していたローブをとった。青い髪がふわりと揺れ、ローブの下から姿を現す。腰にある袋をゴソゴソとやると、男はパンを取り出して口に運んだ。

彼、バルス＝タイラントは未来を見ることができた。予測するのではない。実際に、見ることができたのだ。

そして、彼は見た。今日この日、彼の意識が途切れる瞬間を。彼の人生、１８年の終焉を。

「つまらなかったな」

誰にいうでもなく、彼はボソリとつぶやいた。

彼の人生は、その見ることのできる未来に支配されていた。何故か彼はその未来に逆らってはいけないような気がして、その見た未来と同じ事を喋り、同じことをしてきたのだ。

バルスにとって、８つの国を滅ぼすことも、呼吸のタイミングさえも同様のことでしかなかった。そして今、目の前の無数の灯火の下にいる１５万の軍勢と戦うことも、石と山に護られた要塞を攻めることも。その中で、死ぬことですら。

「さて、はじめるか」

バルスは、定められた言葉を、定められたタイミングでつぶやく。定められたタイミングで立ち上がり、定められた場所へと、定められた歩調で歩き始めた。

一方で、未来の見えない者たちはそのバルスの姿を見て狼狽していた。１５万人の軍勢とはいえ、その内容は殆どが一般人。正規の軍は、１万人にも満たない。

人類皆兵。武器も持てないような老人や幼い子供たちですら武器を持ち、バルスへとその切っ先を向ける。世界中から集められた名工作の武具が全員に支給され、まさに人類の総力を結集した烏合の衆の軍だった。

その中から、一人の少年が歩み出た。

「あんな奴、僕がやっつけてやる！」

それは、幼少期に特有の言動だったかもしれないが、その薄っぺらい台詞とは裏腹に全軍の士気を上げることとなる。

「おお、そうだ！敵は一人だけだ！」

「子供に負けてはおれんぞ！」

「そうよ！私たちだって、子供たちを守らなくては！」

大地に１５万の雄たけびが上がり、士気は天を衝く。赤い旗が翻り、馬はいななき、大きな土ぼこりをあげて１５万人は動き出す。その敵意はたった一人の人物へと向けられた。いや、人などではない、邪神に。

邪神は、紫色の瞳に巨大な砂塵を写すと静かに口を開いた。

「立て、ゴーレム」

邪神の周りに怪しい紫色の光が輝き、大気の中へと流れ出る。流れ出た光は、吸い込まれるように大地へと消えていった。やがて草

原が盛り上がり、無数の黒いそれが這い出てくる。
四角くごつごつした胴体に、腕は細いパイプが円計上につき、それは私たちの概念で言うガトリングガン。脚は鳥のような逆間接だが、野太くしっかりとしている。頭部は胴体と一体化しているらしく、胴体に光を放つライトのようなものが二つ付いており、それが眼の役割を果たしていた。口や鼻に当たるものは見当たらず、身体全体の質感から砂鉄でできているようだ。
無数の黒いそれを、バルスはゴーレムと呼んだ。

「殲滅せよ」

無数のゴーレムの腕が一斉にガチャリと金属音をあげ、安全装置を解除する。砂塵を上げて迫りくる１５万の軍勢の先頭、馬にまたがるランスを構えた鉄騎兵へと銃口が定められた。
バリバリという音とともに銃口が火を噴き、無数の黒い弾丸が鉄騎兵を襲う。馬は嘶いて倒れ、同時にまたがっていた者たちもバタバタと地に伏した。無数の悲鳴が上がり、地に伏していく者の数だけが増えていく。
１５万の軍の後方でその惨状を見ていた、赤いローブを纏った部隊。最後の魔法戦闘部隊７０００名は、
ゆっくりと前に進み始めた。

「我らを守護する者よ…」

「我が聖霊よ…」

各々が持つ守護の魔法の呪文を唱えると、突撃を続ける鉄騎兵の鎧が淡く白く輝き始める。ゴーレムの放つ黒い弾丸の雨は、その鎧によってはじかれた。倒されることのなくなった鉄騎兵は、ゴーレムに肉薄してランスを突き立てる。

だが、砂鉄でできたゴーレムの装甲は堅牢で、それを破れた者は一人としていなかった。
赤いローブの部隊が、更に魔法をかけようと試みる。

「我が盟約に…」

赤いローブを纏った者たちは、その途中で詠唱をやめてしまった。
ゴーレムを貫く攻撃力をランスに与える呪文をかけようとしたのだが、正確にはやめさせられたのほうが正しい。
彼らは、口を途中で開けたまま、体内に今まで感じたことのない熱いものを感じていた。そして、見開いた眼には、遠くにポツンと見える邪神の姿が映っていた。
邪神は赤いローブを纏った者たちに掌を向け、空気をなでるかのように腕を動かす。

「フレイム・オブ・フレイム」

断末魔の間もなく、赤いローブの部隊は消え去った。７０００の、灰の山だけを残して。
この魔法はバルスを邪神たらしめている魔法の一つで、敵と認識した者を物理的なものに左右されずに一瞬で焼き尽くすというものだ。フレイム・オブ・フレイムとゴーレムの魔法が、この世界のほとんどを滅亡へと導いていた。
その滅びの魔法が赤いローブの部隊を消していく様を見た鉄騎兵は蹄をかえし、ある者が叫んだ。

「た、退却だ！」

それを皮切りに同様の声がそこかしこから聞こえ、１５万の軍は散り散りになって逃げ惑う。多くの者が背後からゴーレムに襲われ、

バタバタと倒れた。それでもその場の全ての者が要塞の門を目指し、その顔に恐怖を孕みながら懸命に走る。それを眺めるバルスの眼には冷ややかな感情のそれしかなく、眼の前に広がる死の平原を彼らとは対照的にゆっくりと歩いていた。

チリチリと焼ける肉の匂いに、血の生臭い匂い。やがてバルスは、折り重なった6体の騎士と見受けられる死体の山の前で立ち止まる。バルスはその光景を見てニヤリと微笑を浮かべると、再びゆっくりと歩き始めた。バルスは、彼の最後の時を前に、笑っていた。

さあ、これで最後だ。

騎士の死体の一つに脚をかけた瞬間、騎士の死体が揺れ動く。死体の山の中からは、顔をぐしゃぐしゃにして泣いている幼い少年が飛び出した。両手に槍をもち、切っ先がバルスの首へと向けられる。

「うわあああああ！」

少年の雄たけびは、彼の者を貫いた。かつて8つの国までを滅ぼし、人類を15万人にまで追い込んだ邪神を。その瞬間、少年は泣き、邪神は笑っていた。

広がる緑色の草原、美しい日の光、白い城壁ともいえる壁に囲まれた、白く美しい塔。ここはハルケギニア大陸トリステイン王国、トリステイン学院。メイジと呼ばれる魔法使いを養成する施設である。

その緑広がる学院の中庭では、生徒たちが集まりある行事が催されようとしていた。青いローブを纏って眼鏡を掛けた、頭の禿げた

細身の男を中心に、黒いマントにカッターシャツを着た者たちが囲っている。
頭の禿げた細身の男の名はコルベール。彼の周りに集まっているのは、その生徒たち。コルベールは口を開き、行事の名を告げた。

「静かに。これから、召喚の儀を執り行います」

その言葉を耳にし、多くの生徒たちは期待に胸を膨らませる。しかし、その中に憂鬱な感情を内包する者がいた。ルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエール。桃色がかったブロンドの長髪と鳶色の瞳を持ち、体格は小柄で華奢だが中々の美少女である。そんな彼女が頭を悩ませるのは、この召喚の儀に切ってしまった大見栄だった。
ルイズは座学においてトップクラスの実力の持ち主であったが、魔法が大の苦手であった。事実、魔法が成功したことはなく、ゼロのルイズと称されるほどである。他の生徒たちはその魔法の特徴から二つ名を与えられていたが、ルイズだけは二つ名すら持っていなかった。
そんなルイズが切ってしまった大見栄とは、この召喚の儀において自分が一番素晴らしい使い魔を召喚するというものである。使い魔とはメイジが使役する魔物のことであるが、当然魔法にて呼び出される。一度も魔法の成功したことのないルイズにとって、一番素晴らしい使い魔どころか召喚できるかどうかすら怪しい。
その不安そうなルイズの顔を覗き込むように、耳打ちする者があった。

「楽しみにしてるわよ、ルイズ。あなたがどんなに凄い使い魔を召喚するのか」

燃えるような赤い髪と瞳、褐色の肌を持ち、高い身長とグラマラ

スな体格を持つモデルのような女性。キュルケ＝アウグスタ＝フレデリカ＝フォン＝アンハルツ＝ツェルプストー。二つ名は微熱。キュルケは、意地の悪くも美しい微笑みをルイズに見せつけた。
ルイズも負けじとにらみ返す。

「ほっといて」

中庭で生徒が思い思いの場所へ散らばり、各々の思う呪文で次々と使い魔を召喚していく。一喜一憂の声が上がり、中庭は喧騒に包まれた。
その喧騒は、クライマックスを迎えるとともにどよめきへと変わる。

「サラマンデル！最後に来て大物を召喚しましたね」

コルベールは、その尾から炎を噴くワニのようなトカゲのような生物をサラマンデルと呼んだ。サラマンデルとは火トカゲのことで、文字通り炎の系統魔法を操るトカゲである。
そのサラマンデルを召喚した褐色の美女は、誇らしげに答えた。

「私の二つ名、微熱のキュルケにふさわしい使い魔ですわ」

そのキュルケの姿を、苦々しくみるルイズ。ルイズには、あれ程の使い魔が自分の元に来てくれる自信がなかった。その不安感が、彼女を中庭で一人取り残した。
そんなルイズの心境を知るはずもなく、コルベールは無情にも告げる。

「えー、これで全員ですかな？」

その言葉に、キュルケはいち早く反応する。

「いいえ。まだ、ミス・ヴァリエールが」

その言葉に押し出され、ルイズは生徒たちの輪の中心へと歩みだした。ルイズの不安はルイズを取り残し、一番オオトリという立場へと追いやった。生徒たちの嘲笑的な笑みの中、ルイズは念じる。

お願い、来て。

ルイズは震える手を押さえ、強く己を信じて杖を握る。杖を天にかざし、ルイズは口を開いた。己の、未だ見ぬ使い魔を信じて。

「宇宙の果てのどこかにいる、私のしもべよ！」

ルイズの独自性のある呪文に、生徒たちはクスクスと笑い声を立てる。その残酷なまでの嘲笑を、ルイズは無視して呪文を続けた。

「神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！私は、心より求め、訴えるわ！我が導きに、応えなさい！」

ルイズは大きく杖を振り、使い魔を召喚すべき地をさす。同時に、あたりは白い煙に覆われた。

爆発。この言葉がふさわしい。召喚術にも関わらず、ルイズの呪文は爆発を呼び起こした。

失敗？

その二文字が、ルイズの頭の中をぐるぐると回る。その白い煙の中に潜む者があることを信じ、ルイズは眼を凝らした。

邪神、バルス＝タイラントは眼を開けた。眼の前には白い煙が広がり、顔には緑色の草が当たっている。ゆっくりと晴れていく煙の中、バルスは上半身を起こし、眼を凝らした。

俺は、死んだはず。地獄か？

だが、バルスの望んだ答えとは裏腹に、晴れた煙の先には顔をひきつらせた少女の顔があった。少女は顔をうつむき、肩を震わせ、こぶしを強く握る。少女の周りを囲う集団から、大きな笑い声が沸き起こった。

「あれって、平民じゃない？」

「あの格好、間違いない」

「それも、貧民。乞食の類かしら？」

ルイズ自身、そう思った。ぼろぼろの布切れを纏った、小汚い男。自分の望んだ使い魔とは程遠い、己の使い魔。悔しくて、一度だけ涙が頬を伝うのが分かる。

一方で、バルスはその少女の涙を見逃さなかった。そして、周囲の嘲笑から召喚という単語が漏れ聞こえたのも。

召喚！？この俺を、召喚だと！？

８つの国、２０億の民を尽く滅ぼした絶大なる魔力。その分厚い魔力に護られた自分を召喚した少女。バルスは、人生で初めて恐怖を感じた。その少女から感じる、己と対することのできるであろう魔力に。

少しの沈黙と延々と続く嘲笑の間、バルスは冷静さを取り戻し、己の異変に気がついた。

魔力を、感じない。

あれ程満ち溢れていた、バルスの魔力。それが、初めからなかったように消えうせている。

未来が、見えない。

バルスの行動を決めていた、見える未来。それが、見ることができない。

バルスは、こぶしを高く上げた。上げずには、いられなかった。

「素晴らしいっ！！」

バルスを縛るものは、何もなかった。自分で自分の人生を決め、自分の意思を選択する権利を得たのだ。人が自由と呼ぶそれを、バルスはようやく手に入れた。今の彼にとって、少女の魔力などもはやどうでも良いものとなっていた。

その不自然にガッツポーズをとる貧民に背を向け、ルイズは言い放った。

「ミスターコルベール！」

「何だね？」

「もう一度召喚させてください！」

ルイズの言葉に、コルベールは首を横に振る。ルイズ自身、それは分かっていた。やり直しなど、効かないことを。この儀式はメイジの一生を左右する神聖な儀式であり、やり直しは禁止されているのだ。

ルイズは己の召喚した使い魔へと向き直り、覚悟を決めた。

「平民が、それも貧民が貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

それをしなければ、退学。ルイズにとってそれは許容できるものではなく、儀式の内容は何とか許容できる内容であった。ルイズは前かがみとなり、地に座る小汚い男へと近づく。

「感謝なさい」

ルイズは眼を閉じ、小汚い男の口へと唇を近付ける。瞬間、男は立ち上がり、後ろへと飛びのいた。

「貴様、何のつもりだ！？」

少女の唇に魔力が集中し、それが何らかの束縛を伴う魔法であるとバルスは瞬時に見抜いた。この少女がどんなに強力な魔法使いであろうと、せっかく得た自由を手放すバルスではない。背に背負った剣のつかに手を伸ばす。

あれ？ない！？

バルスの手は空をきり、つかむべき愛刀、魔剣ムラマサをつかむに至らなかった。

ムラマサがあれば、まだ勝機はあった。２０億の民を滅ぼしたのは彼の魔力であったが、彼の力はそれだけではない。剣技においてもそれは断トツに秀でており、剣士となれば一騎当千といっても過言ではなかった。だが、素手においてはそれほどでもないのだ。

「つ、使い魔のくせに、契約を拒否するの！？」

ただでさえ傷ついたルイズの自尊心が、更に傷つく。使い魔で、平民で、貧民のこの男の手によって。

「おっことわりだ！！」

バルスの一言に、周囲は大爆笑の渦に巻き込まれた。生徒たちが腹を抱え、苦しそうに笑い続けている。

「さっすがゼロのルイズ！期待を裏切らない！」

「使い魔に契約拒否されるなんて、おかしすぎ！」

この前例のない事態に、コルベールは頭を抱えた。普通、使い魔は人間ではないし、意志を持って契約拒否してくることはない。尋常ではないバルスの敵意の眼を見たコルベールは簡単に解決できる問題ではないと判断し、ルイズのそばへと歩みよる。

「焦ることはありません。時間はたくさんあるのですから、契約を急ぐ必要はないでしょう」

コルベールの助け船に乗りたかったルイズであったが、プライド

がそれを許さない。ルイズはそれをよしとせず、首を横に振る。

「ですが、それでは主人の威厳が」

「彼の眼を見なさい」

頭からかぶった白いローブから覗く顔に、宿った激しい敵意の黒い瞳。ルイズは息をのみ、うなずいた。

ルイズは、まだ知る由もない。自分の望んだ、神聖で、美しい、強力な使い魔。神聖ではない、美しくもないかもしれない。だが、これだけははっきりしている。世界最強の使い魔を、呼び出したことだけは。

第二話　手荒な親睦会

「あなた、名前は？」

その会話は、塔の一室で始まった。床は木造り、一つの木製円机が部屋の中央に置かれ、窓際にピンク色の豪華なベッド、壁際に豪華な鏡台とクローゼット。床に藁で作られたベッド。

その藁のベッドに座らされ、バルスは仁王立ちするルイズを見上げていた。

「名を尋ねるのなら、先にそちらから名乗れ」

バルスは、自分を見下す少女から目線をそらし、そっぽを向いた。鏡台が瞳にうつり、鏡台に自分の姿が映し出される。黒い髪に黒い瞳に戻った、自分の姿が。

バルスは、魔力を使用していないときは青い髪が黒となり、紫色の瞳も黒となる。青い髪も紫色の瞳も溢れだす魔力がそうさせるのであって、実際のバルスは黒髪に黒い瞳なのだ。

そのそっぽを向く小汚い男を見下し、ルイズは不本意ながらも応えた。

「私の名は、ルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエールよ」

以外にも素直に答えたルイズに、バルスは自分の態度を少し恥ずかしく思った。そっぽを向けた顔を元に戻し、ルイズを見上げる。

「ルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエールさんね」

「え！？」

ルイズは、ただ驚いた。できるだけ早口で名乗った自分のフルネームを、ただの一度で覚えてしまったこの男に。貴族でも、一度聞いただけで自分の名をフルネームで言えるものは少ない。

「俺の名は、バルス＝タイラント。バルスと呼べ」

「私も、呼ぶときはルイズでいいわ」

無事自己紹介を終えたことで、ルイズは胸をなでおろす。敵意だけを向けられていた先ほどと比べれば、大きな進歩だ。

ルイズは鏡台の前に立ち、使い魔に次なる指令を出すためにそれをとった。それとは、男物のカッターシャツと黒いズボン。トリステイン魔法学院の、制服であった。それを己の使い魔の前に差し出し、受け取るように促す。

「とりあえず、お風呂に入ってきなさい。話はそれからよ」

風呂から上がったバルスは、言われるがままにルイズに渡された服に着替え、ルイズの部屋へと戻ろうとしていた。

バルスは風呂に入る前から、ずっとルイズについて考えていた。あれ程強力な魔力を持ちながら、それを行使しようとする気配がない。今の自分を従わせることなど、その魔力を用いれば簡単なことなのにもかかわらず。

それどころか、同じ魔法使いの仲間からバカにされている節があった。あの程度の者たちなど、ルイズの魔力に比べればゴミクズ同然なのだ。ルイズが悔し涙を流す理由など、本来なら見当たらない。

あいつ、魔法がコントロールできないのか？

その結論にはいとも容易くたどりついたが、風呂とルイズの部屋の距離がそれほど離れているわけでもないため、バルスは目的地に到着してしまっていた。ドアをノックし、ゆっくりとルイズの部屋へと入る。

中ではルイズがピンク色の寝巻に着替え、長い髪をといていた。話とやらがあるので自分を待っていたのだろうとバルスは推測するが、いかんせん、自分に向けられるルイズの視線がおかしい。

「あんた誰よ？」

ルイズの無愛想な声とジト目に、バルスはムッとする。先ほど挨拶を交わしたばかりだというのに、この小娘はもう自分の顔を忘れてしまったようだ。

「さっき風呂に入れと言ったのは、どこのどいつだ」

「へ？」

ルイズは髪をとくのをやめ、思わず立ち上がった。

「バルスなの？使い魔の？」

「契約してないから、使い魔じゃない」

端整な顔立ちの、少し優雅ささえ纏った男が、似つかわしくない藁のベッドへ腰を落ち着ける。先ほどまでの小汚い男とは少し違い、いや、変わり果てすぎて、ルイズはその男をすぐにバルスと判断できなかった。

自分の使い魔の変貌ぶりに、ルイズの心は少し軽くなる。バルスの今の姿を見て、ルイズのクラスメイトが今のルイズと同様に驚く様を思い浮かべて。

「で、話とは何だ？」

一向に話を切り出さないルイズに、バルスはそう尋ねた後一度大きな欠伸をした。眠そうに眼をこすり、早く寝かせろとアピールする。

そのバルスの眠そうな顔に、ルイズは手に持った布を投げつけた。

「ぶ。何だこれは？」

バルスは顔に張り付いた布を引きはがし、それが女性用のカッターシャツとミニスカートであることが分かる。しかも、使用済みのものであると。

「それ、よろしく」

「は？」

女性用の使用済み衣服を渡され、それ、よろしく。バルスは古い記憶をたどり、それがどういう意味であるか計ろうと試みた。

古い記憶によると、選択肢は４つ。嗅ぐ、被る、着る、舐める。

それは昔バルスの悪友が吹き込んだ男のロマン？だったが、バルスはどれも間違っているような気がした。

だが、あえてバルスはその中から選択することを選んだ。衣服に鼻を近づける。ほんのりとあまい香りがして、物凄く嫌な予感がした。

何かが空をきるいい音を、バルスはほのかな香りの中で聞いていた。

「明日の朝までに、洗濯しておいて！」

後頭部に激痛が走り、バルスは藁のベッドへ倒れ伏す。自業自得という言葉がバルスの頭をよぎったが、やっとできるようになった選択に後悔はなかった。

しばし部屋を沈黙が支配し、チリチリと蝋燭の焼ける音だけが二人の耳をつく。やがてか細い声で沈黙を破ったのは、ルイズだった。

「それと、明日使い魔との親睦会があるの」

「親睦会？」

バルスのルイズに対する異常な敵意に対し、コルベールは一計を案じた。普通、使い魔との親睦会はお茶会程度のもので、安らぎの時を使い魔と過ごすことで親睦を深める。だが、得体のしれないバルスと不器用なルイズにそんなことをさせても、変に関係がこじれる可能性があった。

そこで、コルベールは生徒同士によるトーナメントを思いついた。無論先生による立会いの下怪我の無いように行うが、その共闘によりバルスとルイズに仲間意識を芽生えさせるのが狙いだ。それに加え、各自が己の使い魔の能力を正確により早く把握できるということもある。

平和主義者のコルベールにとって、それは大ばくちだった。

「そう。それで、使い魔と協力しての、実戦形式のトーナメントがあるの」

「へ？」

バルスは、顔を上げた。それはあらゆる生物がかなわないほど、めんどくさそうに。

「で、あんたは気に入らないかもしれないけど、私に協力してほしいの」

「やだ」

予想はしていたが、改めて言われるとルイズは怒りを抑えずにはいられなかった。肩がふるえ、こぶしを強く握り、我慢する。

明日のトーナメントは、ルイズにとって名誉挽回のチャンス。出場するからには、是が非でも1位をとりたい。無理とは分かっていても、せめて、自分の使い魔が他の者たちの使い魔と比べて何ら遜色ないことを示したかった。

「何でもしてあげるから、協力してよ！」

バルスは、ビクリと身体を震わせて起き上った。ルイズの怒気を孕んだ声もそうだが、同時に声が震えていたからだ。バルスはルイズを見るが、うつむいていてその表情は読み取れない。

バルスはやれやれと横に首を振ると、静かに口を開いた。

「いいだろう」

「え！？」

希望に満ちたルイズの目が、バルスへと向けられる。バルスは、その目から目をそむけた。なんだか、これから出す自分の要求が意地の悪いもののような気がして。

「ただし、俺の剣を見つけてこられたらな」

バルスは、魔剣ムラマサについて事細かに説明する。身の丈を超える大刀であることや、鞘が深緑の光沢を出す黒いものであることなど。その説明を聞くルイズの眼は真剣そのもので、しきりにうなづいていた。

実際、バルスが素手で戦えば、普通の人並みの力しか出せない。ルイズに大恥をかかせるのは明白であり、バルスは大怪我をすることが明白だった。

だが、おそらく、ルイズはムラマサを探し出すことはできない。あの魔剣は、あっちの世界に置いてきた可能性が高いのだから。

バルスがムラマサの説明を終えると、ルイズはスッと立ち上がった。バルスの眼の前で臆面もなく寝巻から制服へと着替え、部屋の外へと走り出す。

「あんたは明日の朝中庭に来ること。いいわね!?」

ルイズはムラマサを見つけることに何の疑いもなく、廊下の闇へと消えていった。

一夜明け、バルスはルイズに指定されたとおりに中庭にいた。日が昇ってから二時間ほどして、キュルケと青い髪の眼鏡をかけた小柄な少女が現れる。それまでバルスは一人、ただルイズを待っていた。

「あら？見かけない顔ね？どちら様？」

燃えるような赤い髪の美女、キュルケがバルスを見つけ、駆け寄る。その後ろから、青い髪の少女はゆっくりとした足取りでついてきていた。

バルスはうつむいていた顔を上げ、キュルケと目を合わせる。

「ルイズの使い魔候補」

ぼそりとそれだけをつぶやくと、バルスはまたうつむいた。キュルケはあっけにとられていたが、青い髪の少女が言葉足らずの言葉を補足する。

「ルイズが呼び出した、使い魔…」

「え！？昨日の貧民！？うそ！？」

間もなくして続々と生徒たちが集まり、バルスの周りには人だかりができていた。ルイズの思惑通り生徒たちは驚嘆するところとなったが、それを胸のすく思いで見るべきルイズの姿が見当たらない。

コルベールを含む教員も集まり始め、中庭の話題はトーナメントの優勝者予測へと移っていた。

「やっぱり、優勝候補はキュルケとタバサね」

そんな声が大勢を占める中、当然逆優勝候補の話題も盛り上がりを見せていた。その候補筆頭はゼロのルイズであるのだが、そのルイズの姿が中庭に見えないのもその話題に拍車をかけている。いわく、ゼロのルイズは逃げだしたと。

バルスはその話を聞いて少し不快感を感じていたが、ルイズを弁護する理由も見当たらないので放って置いていた。

やがて中庭の中央が騒がしくなり、教員を中心に生徒たちが集まる。今まさに、コルベールが一回戦の組み合わせを読み上げんとしている。バルスの瞳に、ルイズの姿は映らない。

「一回戦は、キュルケとフレイム対…」

優勝候補がいきなり指名されたとあって、中庭には緊張感が漂う。ほとんどの者が皆、自分が指名されないように祈っていた。

「ルイズとバルス」

微熱のキュルケとサラマンデルのフレイムが中庭の中央に残り、バルスと対峙する。他の生徒や教員は離れ、広い円陣を作った。まるで、闘いのリングであるかの如く。コルベールだけがバルスとキュルケ、フレイムの間に審判役として残った。

「ミス・ヴァリエールは？」

そのコルベールの問いかけに、バルスは首を横に振った。不戦敗。キュルケとバルスの脳裏に、その言葉だけがよぎる。コルベールはキュルケの腕をそっとつかみ、高らかに上げた。

「待って！」

中庭の一同は、その声のする方向へと振りかえる。バルスはその瞳に桃色の髪を認めると、微笑を見せた。

「私はここにいるわ！」

目にクマを作り、少し髪の毛が縮れた姿の、ボロボロのルイズがそこにはいた。手に何も持たないところをみると、ムラマサはやはり見つけられなかったようだ。キュルケの前まで足早に歩き、バルスとともに対峙する。

そのルイズの腕を、バルスはつかんでとめた。

「棄権しろ」

その言葉が、ルイズの心を深く傷つけた。バルスに悪気はなかったのだが、ルイズにはその言葉が裏切り者の言葉に聞こえた。寝不足のせいもあったのだろうが、自分の努力を踏みにじるようなその言葉が許せなかったのだ。

こいつも、同じよ！

「ほっといて！」

ルイズの心を悲しみが支配し、やり場のない怒りをバルスに向ける。努力したのに報われない、だれも認めてくれない。私の心を分かってくれない。挙句ついたあだ名がゼロのルイズ。

もうたくさんよ！

コルベールの試合開始の声が、ルイズの頭に響く。魔法陣が起動し、円陣をつかさどる生徒たちの前面に光の壁が作られた。バルス

はその壁ぎりぎりのところで座り込み、ルイズの遠い背中をボーッとみている。

コルベールは、己の描いた計画とのあまりの違いに頭を抱えたが、既に時遅し。キュルケの炎の呪文、発火が文字通りに火を噴く。

試合開始5分を待たずして、ルイズは地に足をついた。手加減されているとはいえ、キュルケの魔法と寝不足が、ルイズの体力をみるみる奪っていく。

さすがに見かねたバルスが、ルイズの元へと駆け寄った。ルイズの腕を引っ張り上げ、肩を貸す。そして、バルスはまた言ってしまった。

「棄権しろ」

ルイズの身体がビクリと動き、バルスから懸命に離れようとする。バランスを崩し、バルスはルイズに引っ張られるように転倒した。

ルイズはもがき、また懸命に立ち上がろうとしている。

「貴族はね」

うつむいたルイズの口から、こぼれだす言葉。バルスはそれに鬼気迫るものを感じ、聞き入った。

「貴族はね、敵に背を見せないの。名誉を失うくらいなら、死んだ方がマシなんだから！」

バルスは、反射的にルイズの腕をつかんでいた。そうしなければならない気がしたからだ。

「離してよ！あんた、私のことが嫌いなんでしょ！？」

バルスに握られた腕を、振りほどこうとルイズは腕を振る。

「嫌いなら、私のことなんて放っておけばいいじゃない！」

いつの間にか、ルイズの頬から涙が伝っていた。そしていつの間にか、バルスとルイズの間に、緑色の光が差し込んでいた。

こいつ、喚びやがった…！

腕を振り続けるルイズをよそに、バルスはその光に魅入られたように見つめ続ける。ルイズは腕がフッと軽くなるのを感じ、続いてそれがバルスの腕が離れたからであることを理解した。そして、バルスの腕が、その光に飲み込まれている。

バルスはうつむき、つぶやいた。

「約束だ」

引き抜かれた腕につかまれたるは、身の丈を超える大刀。鞘は深緑の光沢を放つ、漆黒。その神秘的な光景に誰もが息をのみ、ルイズは涙を流すのも、拭くのも、隠すのも忘れて見入っていた。

バルスは立ち上がって背中に魔剣ムラマサをさし、ルイズに背を向ける。右腕を上げ、刀のつかに手をかけた。

キュルケもその光景に息をのんでいたが、バルスが刀に手をかけたことで我に返る。そして余裕の笑みをその顔に浮かべた。

「いいのかしら？それを抜けば、私も容赦しないわ」

そのキュルケの警告に、ルイズはハッとする。剣を持とうと、所詮は平民。魔法を操る貴族に、平民はかなわない。ルイズは自分の名誉のことばかり考えていた自分に気が付き、その愚かさと危険性

気がついた。
このまま剣を抜けば、バルスはよくて大怪我、最悪殺されてしまう。愚かな、自分のせいで。
ルイズはいてもたってもいられず、バルスの左腕に飛びついた。
「待って！抜いてはだめよ！」
しかし、ルイズは一瞬躊躇した。それに続く、棄権するという言葉を口にすることを。その一瞬の隙をつき、バルスが口を開く。
「あんたは、ゼロなんかじゃない」
「え？」
ルイズは己の心を見透かされたようで、胸が高鳴る。その鼓動が腕を伝ってバルスに伝わりそうで、ルイズは思わず手を離してしまった。
バルスはルイズに顔だけを向け、優しく笑いかける。
「よく見ておけ、あんたが何を召喚したのかを」
バルスは、ルイズの反応を見てルイズが存外悪い人間ではないことに気が付いていた。だから、素直に力を貸す気になっていた。
剣のつかに掛けられた腕が上がり、カチリという音とともに鞘から銀色の刀身が姿を現す。刀身は朝日を跳ね返し、誰の目にもバルスが刀を抜いたことを知らせた。
「何かっこつけてんのよ、バカーー！！」
ルイズの叫びもむなしく、バルスを巨大な炎の玉が襲う。先ほど

ルイズを攻撃した炎の魔法、発火よりも数倍の威力をもった炎の玉、ファイアボール。平民相手に少し気のどくに思ったが、キュルケは本気でファイアボールの呪文を放っていた。

死んじゃったら、目覚めが悪そうね。

バルスに向かう炎の大きさを見て、キュルケは何となく後悔した。だが、その場の全員が、息をのむことになる。

「消えた！？」

「嘘！？」

その場の全員が消えるのを見たのは、キュルケが放った巨大なファイアボール。巨大な炎のあった場所は空気が焼け、蜃気楼のようにユラユラと揺れている。バルスの腕は剣のつかにかけられたままで、微動だにしていない。

正確には、バルスは微動だにしていないわけではなかった。目にもとまらないほどの凄まじい剣撃が、キュルケの炎を切り裂いたのだ。

その剣撃をかろうじて捉えられたのは、眼鏡をかけた青い髪の少女とコルベールだけだった。

「逃げなさい！ミス・ツェルプストー！」

「え！？」

コルベールの言葉に、キュルケは少し不快感を感じる。その言葉の真意も理解しがたく、まるで自分が負けるように聞こえるのだ。確かに何らかの作用でファイアーボールは消えてしまったが、まだ

まだキュルケは全力を出していない。
キュルケは再び不敵な笑みを浮かべなおす。

「やるわよ、フレイム！」

「アオオ！」

フレイムとキュルケの魔力が混ざり合い、巨大な炎の玉を作り上げていく。ファイアーボールは二乗し、フレイムボールを超え、なおもその大きさをとどまる様子はない。
ルイズは大きくなっていく炎の玉を茫然と見ていたが、我に返るとともにバルスが殺されると確信した。コルベールへ向き、ルイズは叫ぶ。

「棄権す…！」

「フレイムボール！」

ルイズの決断より先に、キュルケの呪文が完成する。通常よりも大きめのフレイムボールが動き出し、キュルケの杖が指す方向へと急激に加速した。その炎の玉がバルスにぶつかると同時に、強烈な爆風が周辺を襲う。ルイズは思わず目をそらし、己の顔を腕でかばった。
ルイズと同様の行動をとったキュルケは、その手ごたえに己の勝利を確信していた。勝利の高揚感に、ふわりと身体が浮くのを感じる。

「えっ！？」

だが、キュルケの身体は本当に宙に浮いていた。キュルケは腰の

あたりに衝撃を感じ、続いて左目のすぐ横を銀色に輝く何かが通り過ぎるのを瞳に写す。
爆風によって巻き上げられた砂塵が晴れ、やがて何が起こったのかをその場の全員につきつける光景があらわとなった。
キュルケは仰向けで草むらに倒れ、その細い首の横には銀色の刃が拳ほどの長さを残して深々と突き刺さっている。剣を握ったバルスの顔が目の前にあり、その鬼気迫る瞳にキュルケはポソリと呟いた。

「…ま、まいりました…」

音を一切排した沈黙の中、バルスは魔剣ムラマサを地面から引き抜いて立ち上がり、目にもとまらぬ速さで鞘へと刀身を納める。カチリという納刀の音と同時に、コルベールが手を天に上げて高らかと宣言する。

「勝者、ルイズとバルス！」

その成り行きを静かに見守っていた生徒たちが沸き立った。

「すっげえー！」

「おいおい、ルイズが勝っちまったよ」

「あれ、本当にルイズが召喚した使い魔なのか！？」

魔法を使わず、剣一本でメイジをねじ伏せた使い魔に生徒たちが驚くのは当然だった。ドットクラスやラインクラスでもない、トライアングルクラスのメイジ、キュルケを剣一本でねじ伏せたのだ。
それは、アリがドラゴンを倒すほどにあってはならないことなの

である。このトーナメント戦、ルイズとバルスのタッグはダークホースと呼ばれるのにふさわしい。

一方で、ルイズはこの勝利に喜びを感じることができていなかった。魔法の行使できない自分がキュルケに勝ったという現実感のない事実と、バルスへの心配がルイズの喜びを吹き飛ばしていたのだ。

何しろ、ルイズはバルスを何もできないただの弱い平民だと思っていたのだ。バルスに協力するように言ったのは焦りから来る一種の気の迷いで、我に返ってからはずっとバルスが殺されないかと心配で仕方がなかった。

喧騒と注目を集めるバルスにルイズは駆け寄り、その心の内をぶちまけた。

「大丈夫!?怪我はないの!?」

よくやったとルイズに偉そうに褒められると思っていたバルスは、心配されて面食らった。そんなバルスを横目に、ルイズはバルスが怪我を隠していないかバルスの身体を見まわす。

だが、バルスが怪我をしているはずがなかった。フレイムボールが命中したときに起きた爆風は、実はバルスがフレイムボールを切り裂いた時の剣撃に由来するものだったのだ。バルスの一撃は完全にフレイムボールを両断しており、故にバルスはかすり傷一つ負っていないのであった。

そのことを知る由もないルイズは、バルスが怪我をしていないことに胸をなでおろす。

「…無茶して。バカなんだから。」

未だ続く生徒たちの喧騒の中、フイッと踵を返し、ルイズはバルスに背を向けた。そのまま歩き始めるルイズの後姿に、バルスは語りかける。

「力を貸すのは、このトーナメントの間だけだ」

「わ、分かってるわ」

ルイズは、歩みを止めるでもなく、振り替えるでもなく、不機嫌そうに答えた。

「ルイズ。何者も、お前には指一本触れさせない」

一瞬、大きく胸が高鳴るのを感じ、ルイズは振りかえった。自己紹介を終えて以来、バルスは初めてルイズに対して名を呼んだのだった。

第三話　雪と風は強敵

「こ、降参～。」

バルスが勢いよく剣を引き抜いた瞬間、女子生徒は泣き声を孕んで腰を抜かした。

「勝者、ルイズとバルス！」

コルベールがこの言葉を宣するのは、これで三度目である。ルイズとバルスは3回戦までを順調に勝ち進んでいた。

2回戦目にバルスが対戦相手の女子生徒を峰打ちにしようとしたが、誤って力が入りすぎ、2，3m程吹き飛ばしてしまった。そして、この3回戦目の結果である。

バルスとしては皆キュルケ並みの実力があるものと思って2回戦を戦ったという言い訳があったが、女の子相手ですら容赦しないというイメージがついてしまっていた。3回戦では、考えられる限り手を抜いて戦うつもりであったのだが。

一方で、ルイズはバルスの言葉がどのような気持ちで発せられたものなのか気になって仕方がなかった。

指一本触れさせない――――。

その言葉のせいで、2回戦のバルスの戦い方にもルイズは怒る気が起きなかった。たかが平民の戯言なのだが、気になるものは気になるのだ。

なんで私が、こんなことを気にしなくちゃいけないのよ！

ルイズがその結論に達するころには、次の対戦相手が決まっていた。

サラリとした金髪に端整な顔立ちをした青年が、バラを手にルイズとバルスの前に歩み出る。青年はバラを口元に近づけ、笑みを浮かべた。

その印象は、誰が見てもこういうだろう。ナルシスト、キザ野郎と。

「君は、なんて罪深いんだ」

バラの花がバルスへと向けられるも、バルスは表情一つ変えることはなく、普段その行動に慣れきっているルイズも冷ややかな表情を崩さない。だが、バルスはその無表情の裏側で爆笑していた。

「女性に本気で手を上げるとは。いくら平民とはいえ、恥を知りたまえ」

こいつ、アホだ！

鼻にかかった独特の気取った喋り方が、よりバルスの笑いを誘う。バルスは、この金髪の青年の名前をぜひとも聞いておきたくなった。

「俺の名はバルス＝タイラント。お前の名は？」

「僕の名はギーシュ＝ド＝グラモン。二つ名は青銅」

ギーシュがバラの花を振ると、一枚の花弁が舞落ちる。地面に落ちた花弁が光り、青い銅でできた鎧姿の女性が現出した。手には槍をもち、背中には白い羽が生えている。

「よって、青銅のワルキューレがお相手する」

その自立して動くワルキューレの姿に、バルスはゴーレムを思い浮かべる。バルスの世界でゴーレムは一流の魔法使いが使用するものであり、一度の魔法で操れるのはせいぜい5，6体。だが、バルス自身は独自の魔法体系を確立することで億単位以上のゴーレムを操ることができた。

従来の魔法はゴーレムを魔法の行使者が完全に支配し、操らなければならなかった。いわゆるラジコンのようなもので、行使者は同時に何体ものゴーレムを操ることができなかったのである。

それに対してバルスのゴーレムは、自立型。人工知能ＡＩ機構のようなものを持っており、目標を設定してやるだけで後は各々の判断でそれを達成する。目標は随時遠隔での更新が可能で、結果は行使者の思うがままにいつでも閲覧できるというものだった。そしてこの自立機構を完成させるのに、バルスは5年もの歳月を費やしている。

よって、この目の前の自立して動く青銅のワルキューレがゴーレムである可能性は亡きにしもあらずだが、ギーシュが自立型のゴーレムを創る魔法を体得しているとも思えない。バルスは、結論に至った。

「使い魔か？」

その言葉に、ギーシュとルイズは頭に疑問符を浮かべる。ギーシュは首を横に振り、バルスの結論を否定した。

「来い、ヴェルダンデ！」

地鳴りとともに地面が揺れ、ルイズは倒れないようにと脚を踏ん張る。しかし、寝不足のせいで足元がおぼつかず、脚がガクリと崩

れた。
ルイズは転ぶという行為に、思わず目をつぶる。だが、誰かの腕に背を抱きとめられ、ルイズは転倒することはなかった。続いて誰かの腕がルイズを抱きよせ、ルイズのおぼつかない脚を強く支える。
バルスという男は、どちらかといえば約束を大切にするほうであった。ルイズに指一本触れさせないという約束を守るため、バルスはルイズを抱きよせて身構える。
やがて地鳴りが収まってギーシュの立つすぐ横の土が盛り上がり、土の盛山が崩壊することでそれは現れた。

「も、もぐら!?」

バルスの言葉通り、人の半身はあるであろうでかいモグラが顔をのぞかせている。目は純粋なほどにキラキラと輝き、表情が妙に愛くるしい。

「僕の使い魔、ベルダンデだ」

ギーシュの得意顔に、バルスはワルキューレが使い魔でないことを確信する。魔力は大したことはないが、ギーシュを強敵と判断したバルスは即座に剣のつかに手をかけた。
自分を抱きよせる誰かの腕に力が入るのを感じ、ルイズはゆっくりと目をあける。見上げた目の前の顔がバルスとわかるのに、そうそう時間はかからない。何かを見るバルスの強いまなざしを、ルイズは寝不足も相まって茫然と見ていた。

「ところで、二人ともいつまでそうしているつもりだい?」

ハッとして、バルスは腕に抱えたルイズを見る。ハッとして、ルイズは我に返る。二人の目が合わさり、その距離の近さに互いに驚

く。ルイズは思わず手に力を込め、バルスから離れようとした。

「は、ははは、離しなさいよ、バカ！」

「す、すまん」

バルスの構えが解け、ルイズは少しよたよたとしながら後ずさる。その一瞬を見逃さず、ギーシュは目を光らせた。

「いけ、ワルキューレ！」

青銅のワルキューレが上半身を振りかぶり、その拳がバルスを襲う。

しまった！

バルスの視界が青い銅の拳で埋め尽くされ、頬に激痛が走る。視界が歪み、バルスは思わず草原に倒れこんだ。周囲が沸き立ち、ギーシュは得意そうに笑みを浮かべながら倒れたバルスを見下す。

あれ程圧倒的に強かったバルスが倒れるのを見て、ルイズは思わず駆け寄った。

「大丈夫！？」

しゃがみ込み、殴られたバルスの頬を覗き込む。バルスが殴られる瞬間に後ろに飛びのいたため、少し赤くなる程度ですんでいた。

バルスの口が、ゆっくりとうごく。

「忘れてたいたな」

「バルス？」

「魔法が使えないってことを」

バルスはゆっくりと立ち上がると、笑みを浮かべる。殴られそうになった瞬間、バルスは魔法で防壁を作ろうとしていた。それができないことにすぐ気がついたからよかったものの、バルスでなければ重症である。

「ありがとな」

「え？」

「油断禁物。忘れていた」

一歩、二歩と歩み出て、バルスはワルキューレと気障な笑みを浮かべるギーシュと対峙する。剣のつかに手をかけて身構えるバルス。その更に強くなった自信の満ち溢れる眼光に、ルイズの胸がまた高鳴った。

「君…」

ギーシュが口を開いた、瞬間だった。ギーシュは背中に痛みを感じ、次いで首のすぐ横にある銀色の刃に気がつく。燃え上がる空気の蜃気楼を纏った刃から視線をそらすと、目の前には無表情のバルスの顔があった。

「ま、まいった」

その言葉と同時に、立っていたワルキューレが胴から真っ二つと

なって崩れた。バルスはゆっくり立ち上がり、目に見えない速さで刀を納める。キュルケの時、いや、それ以上の速さで、バルスはギーシュを倒していた。

そのバルスの実力に、コルベールは息をのむ。今度はバルスの動きを捉えられず、結果でしか彼が何をしたのか知ることができなかったのだ。バルスがルイズのために戦っているのは計画としてまず成功だが、バルスが学院を敵だと判断した時の結果を考えると空恐ろしさを感じずにはいられない。

「勝者、ルイズとバルス！」

近年まれにみる強力で危険性の高い使い魔。近年まれにみる魔法の才能ゼロのルイズ。二人の関係がよりよくなるようにと、それは教師としての願いではなく、一人の人としてコルベールは祈るのだった。

青い髪、眼鏡をかけた小柄な少女は読んでいた本をパタリと閉じた。

あれは、危険。

青くなったギーシュに背を向け、勝利を宣された黒髪の男。その男の実力を見た瞬間、少女は背筋にゾクリとしたものを感じていた。少女の名はタバサ。学院内でも数少ないトライアングルクラスのメイジであり、キュルケ戦でバルスの動きを捉える事のできた数少な

い者のひとりである。
だが、今のギーシュ戦でのバルスの動きは捉えられなかった。
タバサは身の上事情から多くの危険な任務をこなしてきたが、相手の動きを捉えられないようなことはなかった。たとえ、それが強力な力を持つ龍であったとしてもだ。
その化け物と優勝をかけて戦うのはタバサ。コルベールからしばしの休憩が生徒たちに伝えられると、タバサは心を落ち着けるためにもう一度本を開き、バルスと対峙する時を待った。
一方で、ルイズとバルスには大きな問題が生じていた。ルイズの体力の限界である。ほとんど何もしていないルイズであったが、寝不足と感情の起伏がルイズの体力を奪っていたのだった。

「これくらい、なんともないわよ！」

その言葉とは裏腹に、ルイズの足元はそれを強がりであると表現する。フラフラとして、今にも倒れそうなのだ。

「いいから休め。試合の時には起こす」

「し、仕方ないわね」

そうまで言うならと、ルイズは地面に腰を下ろす。それに続き、バルスもすぐ横に腰を下ろした。
腰を下ろすと同時にバルスは右肩のあたりに重みを感じ、振り向く。そこには、先ほどまで悪態をついていたルイズの寝顔があった。穏やかで、安心しきった寝顔。ルイズに許された３０分という僅かな休憩時間を、バルスは１分たりとも奪うことはしなかった。

「ほら、起きろ」

「うー」

身体をゆすられる感触に、邪魔しないでとルイズは身体をよじる。せっかく気持ちよく寝ているのに、だれかが邪魔をしてくるのだ。

「おい」

「うー、何なのよ」

ルイズが目をこすって開くと、自分がよく知らない男に寄りかかって寝ていたことに気がついた。驚いて飛び起き、黒髪の男に向かって指をさす。

「あ、あああ、あんた誰よ!?」

指を差された黒髪の男は、頭をかくとゆっくりと立ち上がった。

「待たせたな」

男の視線の先を追うと、ルイズの目に青い髪の少女、タバサが映る。タバサは本を読んでいたが、ルイズが立ち上がったのを見てそれを閉じた。

ルイズの意識がだんだんとはっきりし、自分が今何をしているのか思い出す。

「あ、バルス…。」

ルイズの意識が覚醒し、今までの記憶を呼び覚ました。目の前にいる黒髪の男はバルスという名で、自分が呼び出した使い魔であること。契約拒否してくるような貧民のくせに、とてつもない力で自分をトーナメントの決勝戦まで連れてきたこと。そしてその決勝戦が、今まさに行われようとしていること。

そのめまぐるしく思い出される記憶は、タバサの口笛によって遮られた。

「おおっ」

「美しい」

周囲がほめたたえたのは、空から現れた一匹の風龍だった。全長６メイル程の青い龍で、タバサのすぐ横に降り立つ。決勝戦の当事者それぞれの準備が整ったのを見届け、コルベールは天へと腕を高らかに上げた。

「タバサとシルフィード対ルイズとバルス。始め！」

試合開始の合図とともにタバサは風龍シルフィードの首元に乗り、バルスは剣のつかに手をかけて身構える。キュルケ以上の魔力を持つタバサに、バルスは様子見を決め込んだ。ルイズの前に立ち、シルフィードの羽ばたきによって発せられる風を受ける。

３０分ほど寝たとはいえ、先ほどの寝ぼけ方から見てもルイズの体力はさほど回復していない。ルイズの負担を減らすため、バルスは風よけになるようルイズの前に立ったのだった。

あの女…！

しかし、バルスの様子見は裏目に出る。タバサは龍に乗って攻勢に出るかと思いきや、バルスの攻撃の届かない空へと逃げたのだ。

タバサはバルスには接近戦でかなわないと判断、同様にバルスを倒すことを無理と判断し、ルイズの体力を奪う作戦を考えた。消耗しているルイズの体力を寒気と風で奪い取り、試合続行を不可能にして判定勝ちを狙う作戦だ。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース」

タバサがその持ち手の彎曲した独特の杖を振りかざすと、氷が収束して空中に槍を創りだす。氷の槍は、杖の指す先、バルスへと向けられた。

降り注ぐ氷の槍が、バルスの前でかき消える。氷の放った冷たい風だけが残り、バルスとルイズを襲う。ルイズはその冷たさに、思わず自分の身を抱き締めた。

「寒い…」

ルイズの身を縮こませる姿から、バルスはこの勝負を早く決めなければならないという焦燥感にとりつかれる。

しかし、どうする？

空を飛ぶタバサに、バルスは攻撃する手段を持ち合わせてはいない。剣を投げてもいいが、当たったらタバサは即死である。

そうか、いいものがあった。

抜き放った剣を構えたまま、バルスは片腕を背中へと伸ばす。

いいものとは、魔剣ムラマサを納めていた鞘。その鞘はバルスの手に握られ、ゆっくりと背中から姿を現す。バルスは振りかぶると、鞘をタバサとシルフィードへと投げ放った。

その動きを予測していたタバサとシルフィードは、ヒョイと軽々よけて見せる。グルグルと回転する鞘は目標を失い、ドカッと言う音と巨大な土煙を上げて学院のどこかに突き刺さっていた。

何か、悲鳴のような声が聞こえた気がしたが、バルスは聞かなかったことにした。

「あの娘、白のパンツね」

その言葉は、前触れもなくバルスから唐突に放たれた。だがその唐突さよりも、その内容に衝撃をうけ、ルイズの激情メーターが一気に振り切る。

「こ、こんな時に何言ってんのよ、バカ！」

「俺ではない」

はあ、というため息をつくと、バルスは剣を指さす。まるで、剣が喋ったかのように振る舞うバルスであったが、ルイズにはそれが剣のせいにしているようにしか見えない。ルイズは杖を振りかざし、バルスへと向ける。

「あの気の強そうな娘は、ピンク色のパンツね」

「黙れ」

ルイズは今にもバルスにかみつきそうだったが、その声が女の声であることに気がついた。杖を下ろし、不思議な声の主を探す。バ

ルスがもう一度剣を指さしたが、ルイズはそれを信じきれないでいた。

「ピンクと白、どっちが本命なのかしら？」

三度発せられた声が、ルイズをその剣が喋ったものと確信させる。

魔剣ムラマサは、意志を持つ剣であった。その意思表示である言葉は納刀状態では発することができないが、抜刀状態の現状では発することができる。元々は非常に荒んだ血を求める性格であったが、主人となったバルスがもっとひどい性格であったため、今では大人しい性格となっている。最近の心配事は主人たるバルスに恋人ができないこと、いや、バルス自身が異性に興味を示さないことであり、こうして少しでも興味を持たせようと努力しているのであった。

「ねえねえ、どっち？」

バルスはルイズに背を向けると、ムラマサの切っ先を迷うことなくタバサへと向ける。そのあまりの潔さにタバサの胸が少し高鳴り、ルイズは腹の底から怒りが這い上がってくるのを感じていた。

「あいつをたたき落とす。どうすればいいか、お前も考えろ」

「やっぱりそう来るのね…」

ムラマサはガックリと項垂れたような声を出す。ルイズの腕がワナワナと言っていたのが止まり、タバサとシルフィードはその殺気に身構えた。

ムラマサは主人の意識改革をあきらめ、思考を切り替える。空を飛ぶ龍を落とす。そんなことは、以前の主人を知るムラマサにとって簡単に出る答えであった。

「魔法使えばいいじゃない」

だが、その結論にバルスは首を縦に振らなかった。

「使えない。だから困っている」

確かにバルスの言うとおり、ムラマサはあれ程満ち溢れていたバルスの魔力を微塵も感じなかった。あの、近くにいるだけで溺れそうな感覚に襲われるバルスの魔力がだ。

本当に魔法が使えないことを悟ると、ムラマサは次の手段を考える。その結論は、すぐに出た。

「跳べばいいじゃない」

「それはだめだ。避けられる」

それを試すために、バルスは鞘を放ってみた。その直線的な攻撃は、タバサとシルフィードにいとも簡単に避けられている。ただの跳躍では同じ結果が待っているだろう。

「降りてくるように言ってみたら？」

「アホか」

いや待てよ、とバルスの脳裏に作戦が閃いた。

バルスの閃いた作戦とは、いわゆる挑発の類である。タバサをよく知らないバルスにとってそれは容易ではないが、貴族を挑発するのは慣れていた。

何しろ、バルスのいた世界も王権と貴族の体制だったのだ。散々

貴族は挑発したし、大抵その者の名誉を傷つける言葉を吐けば怒らせることができると分かっている。

「ムラマサ、お前天才かもな」

「当り前よ」

バルスはタバサを見上げ、大きく口を開いた。

「臆病な貴族もいたものだな。空を逃げ回るだけとは」

タバサは眉一つ動かさず、心波立つこともない。感情の起伏を現すことの少ないタバサにとって、そんな安い挑発を受け流すことは簡単だった。それに加え、バルスがどういう作戦をとってきたか既に見通している。

「臆病者の両親の顔を、見てみたいものだな」

「！」

感情の無かったタバサの瞳に怒りが宿り、杖が大きく振られる。タバサの感情を逆撫でする唯一のポイントに、バルスは偶然引っかかった。

「ラグーズ・ウォータル・デル・ウィンデ！」

巨大な風が巻き起こり、渦を描いて竜巻となす。風の中には氷が混ざり、絶対零度の風が吹く。トライアングルスペル、アイス・ストームがバルスを覆った。タバサの一瞬沸騰した頭はそれを行ったことで一気に冷え切っていく。

しまった！

殺してしまった、とタバサは我に返る。突然現れた竜巻にルイズは何もなす術を知らず、何が起こったのか理解できずにいた。

タバサはあわててアイス・ストームを解き、中の様子を確認する。竜巻によって舞い上がった砂塵が晴れると、その結果は現れた。タバサへと剣の切っ先を構えた姿のまま、氷塊に閉じ込められたバルス。タバサとルイズ、その場にいるだれしもが、バルスが死んだと思った。

氷塊の中でピクリとも動かないバルスに、ルイズは今までになく憔悴して駆け寄る。タバサもシルフィードを慌てて着地させ、氷塊へと駆け寄った。周囲はこの大事故にどよめき、死者が出たことに動揺の色を隠せない。

まず一番最初にバルスの元へたどり着いたのは、ルイズだった。

「バルス！バルス！」

氷の壁を何度もたたくが、びくともしない。バルスの強い眼差しは生きているように見えるが、この状況はどう考えても死んでいる。何度も氷の壁を叩いているうちにルイズの手は赤くなり、頬からは自然と涙が伝っていた。

そのルイズの後ろから、その魔法をかけた張本人であるタバサが追い付く。ルイズはその足音に振りかえり、タバサをにらみつけてその細い両肩につかみかかった。

「なんてことしてくれるのよ！早く何とかしなさいよ！死んじゃうじゃない！！」

ルイズの異常な剣幕に押されることもなく、タバサは冷静にコク

リとうなずく。

「早くしないと。邪魔しないで」

ルイズの身体を押しのけ、タバサはバルスを閉じ込めた氷塊の壁へと駆け寄っていく。タバサは氷塊の壁へと手をかざし、その動きを止めた。

数秒の沈黙とともに時が流れ、氷塊が溶ける様子はない。微動だにしないタバサに、ルイズはしびれを切らす。

「何やってるのよ!?」

タバサはそのルイズの声を後ろに、微動だにせずにいた。いや、できずにいた。タバサの額から一筋の汗が流れ出て、背筋を悪寒が襲う。首に充てられた銀色の刃の切っ先を、タバサは青い瞳がうごく範囲で確かめようと、必死だった。

「まいった」

氷塊から突き出た剣の切っ先が氷塊へと引き込まれ、タバサは大きく息を吐く。氷塊が崩れ、バルスが姿を現すことでルイズもその状況を少しずつ理解していく。

これは、バルスの作戦だった。挑発して地面までタバサに降りてきてもらう作戦ではなく、挑発して攻撃させ、あえてその攻撃を食らうことでタバサを油断させ、降りてこさせる作戦である。

だが、この作戦には命の危険が伴っていた。タバサがすぐに冷静になってアイス・ストームを解いたからよかったものの、最後まで魔法が完成していたらバルスは間違いなく死んでいたのだ。

慌てて駆け寄ったルイズがバルスに触れると、まるで氷のようにその身体は冷たかった。

「さむっ」

「当り前じゃない！バカ！」

ガチガチと震えの止まらない歯を無理やり抑え込もうとするが、バルスにそれを止めることはできなかった。自分の体に触れるルイズの手が、異常なまでに暖かい。

低体温による生命の危機を感じたバルスは、自分の身を守るためにある我慢が出来なくなっていた。その行為も十分生命の危機をもたらすのだが、バルスは背に腹は代えられないと腹をくくる。

「悪いな、先に謝っとく」

「へ？」

ルイズの腰に両手を回すと、バルスはルイズを思い切り抱きよせた。バルスは、そのルイズの体温から来る暖かさを手に入れることに我慢できなくなっていたのである。

ひゃっという短い悲鳴とともに、ルイズの顔はバルスの胸板に触れる。ガタガタと震えるバルスの身体がなぜそうさせたのかをルイズに伝え、ルイズは拒否することもできずにただ抱きしめられた。

周囲が二人をはやし立てる中、ルイズはみるみる顔が赤くなり、ギュウッと胸が締め付けられる。ルイズの鼓動がその日最高潮に達する中、勝利の宣言は出された。

「優勝者、ルイズとバルス！」

第四話　邪神の恩返し

バルスは、頭の禿げた冴えない中年の男と対峙していた。少し古びた木の床に、木のテーブルにはフラスコやら試験管やらが所狭しと並ぶ。棚は本で埋め尽くされ、部屋内には薬品のにおいが立ち込める。

中年の冴えない男、コルベールは、木の椅子に腰かける。バルスにも同様に腰かけるように促すと、バルスはそれに従った。

あのトーナメントでの優勝宣言の後、バルスはコルベールに呼び出された。疲れて寝てしまったルイズを部屋まで送り届け、今こうしてコルベールの部屋まで出向いてきたところである。

先ほどまで凍死しかけていたバルスであったが、２０億人を殲滅した体力は尋常ではない。何事もなかったかのように、バルスの顔に疲れの色は見えない。

コルベールはそのバルスの体力、戦闘力を見て、恐怖を感じずにはいられなかった。その畏怖の念がバルスを知りたいという感情へと繋がり、ここへ呼び出すに至っている。

「君は一体、何者なんだい？」

そのコルベールの質問に、バルスはどう応えるべきか迷った。かつて異世界で２０億人の人間を殲滅し、人類を滅亡寸前まで追いやった邪神です。どう考えてもまずい。

バルスは、己の経歴を思い出す。最後の自分の経歴は、９つあった国の一つ、ラインハルト帝国の宮廷魔法士。爵位は侯、軍内では少将、二つ名は戦慄。平民上がりのため、隠語は成りあがり。これで応えたら、嫌な予感しかしない。

バルスは、嘘をつくことにした。

「ただの貧民だ」

それだけを応えると、バルスはそそくさと立ち上がった。これ以上質問されたら、簡単にボロが出るからである。一方で、コルベールはそれだけの回答でバルスを逃がすわけにはいかなかった。バルスの腕をつかみ、引き止める。

「待ちたまえ！」

「話すことなど、何もない」

バルスはコルベールの手を振り切り、部屋の外へと出て行く。抜き身の剣がバルスの背中に光り、コルベールに戦慄だけを残したのだった。

抜き身の剣を背にした黒い髪の青年は、学院中をうろついていた。学院の廊下は広く、大きな窓から差し込む光でとても明るい。だが、青年バルスの探すものはそのような環境下でなくとも簡単に見つかるものだ。何しろ、自分の身の丈ほどもあるでかい鞘なのだから。

しかも、あのタバサに投げつけた鞘は、でかい音と悲鳴と土煙を上げてどこぞに落下していた。人だかりを探せば、見つかりそうなものである。

バルスが廊下を曲がると、騒がしい声と壁に開いたどでかい穴が見えてきた。恐らく、あれで間違いないとバルスは廊下を走る。

ぽっかりと空いたどでかい穴を覗き込むと、何とも不思議な服を

着た5，6人の女性たちが黒い鞘を持ち上げようと頑張っている姿が飛び込んできた。

黒いドレスにエプロンのようなものを羽織った服に見覚えを感じ、それが昔自分の屋敷で見たメイドの服であることをバルスは思い出す。そのメイドのうち、やや長めのボブカットにした黒い髪のメイドがバルスに気が付き、手を振りながら声をかけた。

「すみませーん！手伝っていただけますかー？」

メイドたちの後ろをよく見ると、豪華な食事を載せた台車が鞘のせいで通れず、つかえているのが見えた。どうやら、鞘は食事を食堂に運ぶための通路に突っ込んだらしい。

バルスは軽くうなずくと、ボブカットのメイドに駆け寄った。メイドたちの表情が焦りから安堵へと変わっていく。

「よかった、どうしようかと。男の方がいなかったので私たちで動かそうとしてみたのですが、びくともしなくて」

ボブカットのメイドが、にこりとほほ笑む。その瞬間、ムラマサは起動した。この娘なら、いけるかもしれないと。何しろ先ほどの白やピンクのパンツの娘たちとは違い、気立てがよさそうで胸もそれなりにあるのだ。

「少し低い鼻とそばかすがチャームポイントね」

「黙れ。今鞘に封印してやる」

小声でぼそぼそと喋るバルスに少し違和感を覚えたメイドだったが、微笑みを崩さずに話を進めた。

「私たちもお手伝いしますので」

「いや、いい」

バルスは剣を背中から抜き放つ。メイドたちの顔が青くなり、全員が目を閉じた。カチリという音がして、メイドたちは恐る恐る目をあける。メイドたちの目に飛び込んできたのは、剣が納められたあの物凄く重い鞘が軽々とバルスの背に納められるところだった。

メイドたちは目を丸くし、バルスから目が離せないでいる。

すごい…！

服は学院の制服を着ているが、貴族の忠誠の証である黒マントを羽織っていないことからバルスが貴族ではないことがメイドにも分かった。そんな貴族でもない男が、まるで魔法のような力で剣を自由自在に操っているのだ。十分、驚嘆に値するだろう。

一方で、バルスは鞘を見つけたことの安心感からか、別の感情に襲われていた。空腹感である。

ぐぎゅるるる…。

そのバルスの腹の虫に、メイドたちは目をしばたたかせる。プッという噴き出す笑い声に、場の緊張感が一気に解けた。ボブカットのメイドがバルスに向き直り、頭を下げる。

「ありがとうございました。もしよかったら、お食事でもどうですか？」

「頼む」

バルスは少し恥ずかしそうに笑って答え、メイドの後へとついて行った。

「あー、喰った。もう喰えない」

バルスは目の前のシチューを食べ終え、木の椅子の背もたれへと身体を預けた。机には空になった大きな皿が実に8枚を数え、ボブカットのメイドは唖然としてそれを眺めている。

バルスは顔をあげ、その瞳に茶髪で揉み上げまで続くひげを蓄えた豪快な男を写すと口を開いた。

「いい腕だな、料理長」

「あったりまえよ！このマルトー様にかかれば、どんな食材も絶妙な味に仕上げて見せるさ！」

その素直なバルスの反応に、うんうんと料理長はうなずく。その料理の味に大変満足したバルスは、続いてボブカットのメイドへと視線を写した。

「お前、名前は？」

「わ、私は、シエスタといいます」

唖然として意識が止まっていたシエスタは少し動揺を見せたが、すぐに笑顔で答える。その笑顔に、バルスはいつしか好感を持ち始めていた。何しろ、バルスが元いた世界では、バルスに笑顔が向けられることなどなかったのだから。

「俺の名はバルス。あんた、いいやつだな。困ったことがあったら何でも言ってくれ。力になりたい」

「えっ！？」

バルス、とシエスタが呟くと、マルトーや周囲で仕事をしていた者たちの手が止まり、全員がバルスに注目した。シエスタは身を乗り出し、バルスに顔を近付ける。

「あの、先ほどのトーナメントで並みいる貴族を一人で倒した貧民っていう！？」

続いて、マルトーが身を乗り出し、顔をバルスに近付けた。

「我らが剣の！？」

あ、ああ、とバルスが応えると、周囲が沸き立ち、にわかにお祭り騒ぎとなった。お祭り騒ぎが収束するころ、バルスは料理長に告げられる。

「腹が減ったら、またいつでもきな」

バルスはそれに静かにうなずくことで応え、この世界で一つ帰る場所を手に入れた。彼を受け入れてくれる、この世界で唯一の場所を。

帰る場所を手に入れてから数日後、トリステイン学院、緑色の草

が広がる中庭で、バルスは重大なことを思い出した。寝転ばせていた身体を起こし、厨房へと走り出す。

先日、力になると約束したシエスタに、重大なものを渡すのをバルスはすっかり忘れていた。それは、相談の耳と呼ばれるバルスの世界の宝石である。ただの宝石ではなく、それを持つ者は特定の者に対して悩みを伝えることのできるマジックアイテムであった。

それは距離に関係なく意志を伝達することができ、所有者が相談しにくいようなことでも勝手に伝える微妙なアイテムである。

その微妙な効力はさておき、バルスはその宝石を渡しておかないといざという時にシエスタの力になれないと考えており、渡しそびれたのは重大なことであったのだった。

バルスは厨房へと駆け込み、首を右に左に振ってシエスタの姿を探す。目に留まったのは、忙しそうにするマルトーの姿だった。

「料理長、シエスタは？」

マルトーはせわしなく動かす手を止め、不思議そうな顔をバルスへと向ける。

「なんでえ、シエスタから聞いてねえのか？」

「何を？」

「シエスタは、今日から他の屋敷で給仕することになったんだよ。」

マルトーの話によると、シエスタは他の貴族の屋敷で仕えることになったとのことだった。それで今朝方、馬車に乗って学院を出て行ったと。

だが、バルスにはそんなことは関係ない。相談の耳を渡せれば、距離は関係なくなる。要は、シエスタへの借りが返せればいいのだ。

一飯の恩は、バルスにとってとても重要なものだった。

「貴族の名は？」

「モット伯とか言ったな」

バルスはマルトーに礼を言い、厨房から蹄を返す。

朝に馬車を出したとなると、今頃は屋敷についているか、ついていなくとも今から追いかければ同じことである。屋敷に何の約束もなしに飛び込むのは嫌な予感がしたが、それもやむなしとバルスは学院の門へと向かうために廊下をひた走った。

その廊下を走る途中、いつの日か見た青い髪の小柄な少女が目にとまった。本を読んでいるせいか、バルスには全く気がつく様子がない。

バルスはその少女がタバサという名であることを思い出すと同時に、その使い魔も思い出す。シルフィードとかいう龍で、飛ぶのが速そうだった。ここでバルスは閃く。乗せてってもらえばいいじゃないか、と。

「おい」

突然掛けられた声に、タバサの歩みがピタリと止まる。普段なら無視するところなのだが、この印象に残った男の声に、タバサは歩みを止めないわけにはいかなかった。

本から目を離し、一度だけちらりとバルスの表情を確認し、また視線を下に落とした。

そのタバサの様子にバルスは話を聞いてもらえるものと考え、話を続ける。多分、この目線の移動がタバサの問いかけなのだろうと、バルスは判断したのだ。

「お前の使い魔の、シルフィードに乗せてもらえないか？」

タバサはもう一度バルスを見ると、それほど必死さも感じられないその表情に横を首に振った。

「授業…」

その言葉に、バルスはハッとする。そういえばルイズも今授業中であり、ほとんどの学院内の生徒たちが暇ではない。だが、タバサに乗せていってもらわないとシエスタに相談の耳を渡すことが困難になってしまう。

バルスの顔に少し緊迫感が生まれ、横を通り過ぎようとしたタバサを呼びとめた。

「すまない！シルフィードだけでも借りられないか！？」

タバサがもう一度本から目を離すと、そこには頭を下げるバルスの姿があった。その姿を見たタバサは、バルスが感情を表に出さないようにする人間だということに気がつく。

タバサはバルスが余程自分の力を必要としていると判断し、静かに口を開いた。

「どうして？」

「シエスタに追い付いて、あるものを渡しておきたい」

シエスタというメイドに世話になったが、あるものを渡しそびれてしまったこと。シエスタが他の貴族に仕えることになったため、屋敷に入る前に渡しておかないと渡すことが困難になること。それらの理由を、力を貸してほしい理由を、バルスはタバサに訴えた。

その内容はタバサにとってどうでもいいことではあった。恐らく、他の者にとってとるに足りないことだろう。だが、タバサにはバルスの必死さが伝わり、少なくともバルス自身には大事なことであると理解できた。

実際のところ、タバサはバルスに力を貸すことにやぶさかではなかった。タバサには、バルスを殺しかけた負い目があったからだ。両親の悪口を言ったとはいえ、それは戦略的な挑発であるとあの時のタバサには分かっていた。カッとなってしまった自分を恥じ、借りを返したいと思っていたのである。だからタバサはバルスを無視することなく、その呼びかけにも応えたのであった。

タバサは口笛を吹き、シルフィードを呼ぶ。廊下の窓の向こう側にシルフィードが現れ、タバサは窓を開け放った。

「乗って」

タバサの無愛想なｙｅｓの返事にうなずき、バルスはシルフィードへ飛び乗る。その首筋にまたがると同時に、バルスは背中に少し重みを感じた。振り返ると、タバサがシルフィードにまたがっている。

「お前、授業は！？」

「気にしないで」

トライアングルクラスのメイジのタバサにとって、学院の授業は一度くらい受けなくとも問題ないものだった。現に、先ほどまでは授業をさぼって本を読んでいたのである。

一本取られたと苦笑いするバルスをよそに、タバサはシルフィードに静かに語りかけた。

「目標は馬車。食べちゃダメ」

龍は空をかけ、バルスとタバサはモット伯の屋敷へと向かっていった。

シエスタは馬車の揺れに身をまかせながら、おぞましい気持ちと嫌だという気持ちを少しずつ整理していた。窓の外を見れば草原が続き、地平線は遥かかなたへと見える。大地はこんなにも広いにも関わらず、自分はこの馬車から一歩も出ることはできない。これから起こることと境遇に、シエスタの黒い瞳からは自然と涙が伝っていく。

馬のいななきとともに馬車が止まり、周囲が騒がしくなったことでシエスタは目的地へと到着したことを悟った。涙を拭いて覚悟を決め、馬車を降りる。

その時、周囲のだれかが叫んだ。

「ドラゴンだ！」

シエスタが慌てて周りを見回すと、遠目に大きな屋敷が映る。しかし、そこを目的地としているのなら、馬車が止まるには早すぎる場所であった。周りには果てしなく草原が広がり、雲一つにさえ遮られることのない太陽の日が降り注ぐ。だが、シエスタのいる場所だけが何かの影に覆われて暗くなっていた。

何かしら？

シエスタが空を見上げると、黒く巨大な影が自分のほうへと落ちてくるところであった。ヒッと短い悲鳴を上げ、シエスタは目を閉じて身を縮める。

「シエスタ」

肩に手が優しく置かれるのを感じ、その聞き覚えのある声にシエスタはゆっくりと目をあける。

「ば、バルス、さん？」

シエスタは目を見開いて驚く。バルスの後ろには、蒼い龍とそれにまたがる青髪の小柄な少女がこちらを見ているのを見てとれた。

「ど、どうしてバルスさんが！？」

今にも食いつこうかというほどに問い詰めるシエスタであったが、バルスはそれに構わずにシエスタの手を握る。

「忘れものだ」

「え？」

シエスタの手からバルスの手が離れ、シエスタはその手に残されたものを見る。シエスタの手に握られていたのは、ごつごつとした不格好な緑色の石であった。不思議そうにするシエスタに、バルスは得意そうに話す。

「この石を持っていれば、困った時、すぐに力になれるだろう。た

とえどれだけ距離が離れていようとな」

今助けてほしいのに、とシエスタは思ったが、あえてその気持ちを押し殺す。今バルスに助けを求めれば、バルスはモット伯と戦うことになることは明白である。そうなればバルスは殺され、シエスタには悲しみしか残らない。シエスタは自分が我慢すればすべて円く収まると、自分に言い聞かせる。

「あ、ありがとうございます」

いつもの笑顔を作り、シエスタはゆっくりとバルスに頭を下げた。そのシエスタの後方から、ガチャガチャと鎧をこすらせながら警備兵たちが集まってくる。

バルスはゆっくりとシエスタに背を向けると、蒼い龍と蒼い髪の少女の方へと歩みだした。

一歩、二歩とバルスが歩みを進めるが、その歩みは止まる。シエスタの持つ緑色の石が、強い光を放つことによって。

嫌。こんな運命、嫌！助けてほしいの！

シエスタの声が、バルスの心へと直接伝えられる。バルスは目を閉じたまま、シエスタの心の声を静かに聞いていた。

その立ち尽くすバルスへと向け、追いついた警備兵の槍が向けられる。

「貴様、何者だ！？」

バルスは警備兵の問いかけに応えず、微動だにせず、目を閉じ続けている。そのバルスの眼がゆっくりと開かれた時、それを最初に見たタバサは驚かずにいられなかった。何しろ、そのバルスの眼に

は明らかに怒りの色が見てとれたのであるから。
タバサはシルフィードから飛び降り、バルスへと駆け寄る。

「抜いてはダメ。相手は貴族」

タバサの忠告に、バルスは耳を傾けない。剣のつかに、バルスの手がかかる。警備兵たちには緊張が走り、各々が思い思いの体勢で身構えた。

「あなたの主人も、危ない」

剣のつかにかかったバルスの手が、一瞬震えた。
元々ルイズには召喚されただけで、契約をしていないのだからなんとでもなるとバルスは考えていた。何しろ、主人でも何でもない、希薄な関係なのである。だから、ルイズのことで躊躇する理由などバルスにはない。
バルスが躊躇したのは、目の前のタバサを巻き込むことについてである。バルスを連れてきたタバサは、バルスがここで何らかの罪を犯すことでその責任を問われる可能性が高い。

「タバサ、お前は逃げろ。これは俺の問題だ」

この状況下、自身の心配をせず、逆にタバサを気遣うバルスにタバサは好感を持ち始めていた。
タバサは昔から騎士に助けられるお姫様に憧れていたが、今のバルスとシエスタの関係がそれに酷似している。バルスが騎士役で、シエスタがお姫様役。その助けられるお姫様役のシエスタを少し羨ましくさえ思っていた。そして、騎士役のバルスは容姿もさることながらその心意気はタバサにとって完全に及第点。タバサのバルスに対する好感度は、上がるべくして上がっていた。

そんなタバサがバルスを見捨てるわけもなく、首を横に振る。

「私も戦う」

「駄目だ。絶対に手を出すな」

バルスのタバサに対する剣幕は尋常ではなかったが、タバサは中々首を縦に振らない。タバサを説得している間にも次々と警備兵が集まってバルスとタバサを包囲し、円を描くように並んで槍をつきつけていく。囲まれ、包囲されていくバルスとタバサのその姿をシエスタは緊張の面持ちで見つめていた。

バルスは首を左右に振って周囲の状況を確認、タバサを逃がすのを無理と判断し、タバサに耳打ちする。

「魔法は使うな、約束しろ」

タバサは首を縦に振るでも横に振るでもなく、目で訴える。バルスは中々納得しないタバサにもう一度耳打ちした。

「安心しろ。タバサには、指一本触れさせない」

タバサの胸、ドクンと高鳴る。耳元から離れていくバルスの顔から目を離せず、自然と目と目が合う。目を合わせ続けることのできなかったタバサは、思わず目を伏せる。少しの間を持って、タバサは小さくコクリとうなずいた。

タバサの同意を取り付けたバルスであったが、周囲の状況は少しずつ悪化していた。周囲を囲む十数人の警備兵もそうであるが、バルスの背後から複数人数の足音が迫る。

バルスが首だけを動かして後ろを見ると、３人の警備兵と１人の貴族らしき男の姿が見てとれた。

貴族らしき男は赤いマントを羽織っており、鼻の下に気取った髭を生やしている。紫色の髪をオールバックにした、中年貴族であった。

中年の貴族は警備兵に取り囲まれたトリステイン学院の生徒と思われる者たちをその眼に認めると、威厳をもって口を開く。

「何事だ？」

その貴族の声に、警備兵たちは一斉に振り返った。

「それが、この者が剣に手をかけましたので」

確かに警備兵の言うとおり、背中に身の丈ほどの剣をさした男の生徒が剣に手をかけている。だが、トリステイン学院の生徒は皆貴族であったので、この場で早々処刑するわけにもいかない。中年の貴族は、話し合いで解決した方が得策と考える。

「どうした？話を聞こうじゃないか」

その言葉に、バルスは背を向けたまま応じた。

「俺の要求はただ一つ。シエスタを学院に返してもらおう」

意外な要求に、貴族は面食らう。たかが平民を助けるために、この男は２０を超える人間相手に剣を抜こうというのだ。

貴族は、無性にバルスの申し出を断りたくなった。自分を含むこれだけの人数を相手に、この男がどれだけのことをできるのか見たくなったのである。そして、最後には自分に命乞いする男の姿を。

「断る」

カチリという音がして、銀の刃が黒い鞘から現れる。貴族はニヤリと笑い、警備兵は身構えた。

カチンという音がして、銀の刃が黒い鞘に収まる。貴族は呆気にとられたが、警備兵は構えを崩さない。

バチバチという音がして、バルスを包囲する警備兵の構えた槍が火花を散らす。すべての槍の刃先が地面に落ち、落とされた槍の先を見て警備兵は一同に顔を見合わせた。

「ま、魔法！？」

警備兵はそう呟き、貴族もシエスタもそう思ったが、それが大きな勘違いであることをタバサは知っていた。それはトーナメント戦の時戦慄を覚えたバルスの剣撃であったが、タバサは不思議なことに安心感に包まれている。まるでタバサを槍から護るように、バルスの剣は振られたのだから。

バルスはタバサに加えられかねない危害の懸念を切り落とすと、茫然と立ち尽くす警備兵を押しのける。貴族はバルスの姿にゾクリとするものを背中に感じたが、久しぶりに押し寄せてきた高揚感が殺気立つ笑顔をつくらせた。

「少しは使うようだな、小僧」

貴族は杖を構え、ゆっくりと不敵に歩む黒髪の小僧をにらみつけた。

その殺気立つ笑顔に貴族が何を考えているのか察知したシエスタは、その結果に身を震わせる。

バルスさんが、殺されてしまう！

シエスタは慌てて貴族の前にひざまずく。

「お願いでございます！この者の無礼をお許しください！」

だが、貴族の目にシエスタの姿は映らない。映っているのは、久々に面白そうな狩りの獲物である。

「私の二つ名は波濤のモット。トライアングルのメイジだ」

モットの言葉に応え、バルスは剣を引き抜いて構える。何事かを跪いて貴族に訴えるメイド、バルスを見守る青い髪の少女、杖をバルスに向ける悪役面の貴族。引き抜かれたムラマサは、何やら面白そうな展開に心を躍らせた。

「何々？騎士に鞍替え？」

「黙れ。来るぞ」

モットが杖を振るうと水が空中に集まり、まるで生きもののように踊り狂う。やがてそれらは形をなし、冷えて氷となることで４本の剣へと変化した。その剣を見て時間がないことをシエスタは悟り、モットにすがりつく。

「お願いです！やめてください」

「ええい、邪魔をするな！」

モットはシエスタの制止を振り切り、杖を思い切り振る。氷の剣は２本がバルス、２本がタバサめがけて打ち出された。

シエスタは、あぁと声を漏らして地面へと倒れこむ。タバサは迫

ってくる氷の剣に身構える。バルスは氷の剣へと向け、二度だけ剣を振るう。

氷の剣が消滅してサラサラと舞う氷の粒を見た後、タバサはバルスの背中を見て自分が身構える必要性などなかったことに気がついた。遠い昔になくした、自分を守ってくれる者への安心感が再びタバサの心を満たす。

タバサに安心感を与えたその背中は、前へと走り出す。バルスはムラマサを低く構え、驚愕から覚めないモットへ刃の切っ先を向けて走っていく。

ようやく我に返ったモットは杖を振るい、水をグネグネと操る。そのまま水を打ち出してバルスへと向けたが、水はムラマサによって切り裂かれて消えた。

「くたばれ…！」

「うひぃっ！！」

バルスがモットの首筋にムラマサの切っ先を充てると、モットはそれを避けようとして後ろにひっくり返る。モットは尻もちをついたがその痛みは気にならず、恐怖で顔を上げた。首のすぐ横にドスリとムラマサの刃が突き立つ。

「俺の要求は、一つだ」

バルスの睨み殺すような眼差しに、モットは声を上手く発することができない。パクパクと口だけが空回りする。

そのモットの様子を見て憐れんだムラマサは、少しだけ助け船を出すことにした。

「はいどうぞって、素直に言った方がいいと思うわ」

「は、はい、ど、どうぞ」

スッとムラマサを抜いて、バルスは鞘へと納める。地面に倒れこんだシエスタを抱きかかえると、タバサの元へと駆け寄った。

冷静になって、バルスは思った。やっちまったと。

「どうしてあの時逃げなかった」

帰路、シルフィードの背中の上で頬に心地よい風を受け、シエスタを抱きかかえながらバルスはタバサの背中に問いかけた。

「友達だから」

タバサは振り返り、バルスの顔を覗き込む。

「迷惑？」

バルスは首を横に振って応える。バルスの行いは、ほんの数時間でタバサに友達と言わしめるほど彼女の氷の心を溶かしていた。

一方で、バルスもタバサの本質を知ることでかなりの好感を持っていた。何しろ、トーナメント戦でのタバサはバルスよりも体力の弱ったルイズを目標にしてきたのだから、あまりいい印象を持っていなかったのだ。だが、今はバルスにも分かる。

「お前、いいやつだな」

バルスの笑顔に、タバサはパッと顔を前にそむけた。タバサの無表情が少し崩れた気がしたが、気のせいだろうとバルスは思う。

今度は、んっという漏れる声ともぞもぞと動く感触を腕に感じ、バルスは視線を落とした。ゆっくりとシエスタの目が開き、バルスと目が合う。

「こ、ここは？」

「空の上」

寝ぼけ眼をこすると、シエスタは周りの状況を把握し始める。遥か下に見える大地、がっしりとバルスに抱えられた自分の体。いわゆるお姫様だっこ状態の自分に、シエスタの鼓動は早くなる。

「えっ！？わ、私どうして！？」

「あ、暴れるな！」

慌てて手足をバタバタさせるシエスタであったが、少しずつ記憶がよみがえる。モット伯の屋敷にむかっていたこと。バルスが追いかけてきて、モット伯と戦いになってしまったこと。

シエスタは手足をバタバタさせるのをやめ、今度はバルスの体中を見始めた。

「け、怪我はないんですか！？」

「あ、ああ…」

確かに、バルスに全く怪我はなかった。貴族と戦ったにも関わらず。シエスタには、全然状況がつかめない。

「一体、何があったんですか!?」

「モット伯とのことか?あいつは脅していうことを聞かせたが」

問題ない、と言い切るバルスの笑顔に、シエスタは何があったのか少しだけ理解できた。安心感から全身の力が抜け、バルスに身をゆだねる。

シエスタはバルスの首に手を回し、口を耳元へと近付けて囁いた。

「ありがとうございます」

「い!?」

バルスの頬にシエスタの唇が当たり、二人の頬がほのかに赤くなる。そのキスは二人にとって、長く、長く、感じられたのだった。

第五話　嵐のち雪風、時々晴

「はあ…。バルス、本当に戻ってこないつもりかしら」

ルイズは、自室のベッドに座ってため息をついた。

バルスがルイズの部屋を出て行ってから、既に5日が経とうとしていた。事の発端は、モット伯の一件がルイズの耳に入った時に起こった。

その件を聞いたルイズは激怒し、調馬用の鞭を持ち出してバルスを殴りつけた。曰く、人として扱ったのは間違いだった。犬は犬らしく扱うべきと。

だが、それはバルスにとって禁句だった。一度大人しく殴られたバルスであったが、瞬間手が剣のつかにかかり、目は出会ったばかりの頃の敵意に満ち溢れていたのだ。余程我慢ならなかったのか、カチャカチャとバルスの剣が震えていたのをルイズは思い出す。

ルイズとバルスの関係は元のそれより悪くなり、バルスは何も言わずに出て行ってしまった。ルイズは引き止める術を知らず、ただその背中を茫然と見送ることしかできなかった。

「もうすぐ品評会なのに、どうすればいいのよ…」

もう一度ルイズはため息をつき、ベッドに寝転がった。

品評会とは、新しく召喚された使い魔の品評会でトリステイン学院では毎年の恒例行事のことだ。ルイズの学年である2年生は全員参加が義務付けられており、ルイズは棄権することもできなかった。

だが、ルイズにとって本当は品評会などそれほど重要ではなかった。いや、重要なのであるが、純粋にバルスのことが心配だったのである。この世界に来て間もないバルスは、住むところも、食べ物の確保でさえ難しいはずなのだから。

うかつだったわ。どうして、あんなことしちゃったんだろ…。

バルスが出て行ったあとで詳しくモット伯の一件を聞いてみたところ、一概に非がバルスだけにあるとは言い難いものだった。バルスが出て行った時に少しだった後悔が、詳しい話を聞いてからは大きなものになっている。自分の短慮さを、ルイズは恥じていた。

一方で、バルスはルイズの心配をよそに、新たな居場所であるタバサの部屋にいた。タバサの部屋はルイズの部屋と作りが同じで、一番奥に窓があり、白い壁に木の床も同じだった。違うのは部屋のレイアウトだが、タバサのベッドは簡素で天幕などは張られていない普通のベッド。簡素な木の机がそばに置かれているのはルイズの部屋と大差ないが、壁際に置かれた無数の本が詰め込まれている本棚は特徴的だった。

その部屋の簡素な木の机を前にバルスとタバサは椅子を並べて座り、二人で一冊の本を読んでいる。

事の発端は、ルイズとバルスが喧嘩した日の夜にさかのぼる。とりあえずマルトーの料理で腹を満たしたバルスは、今後の宿について悩んでいた。食事はマルトーのところに行けばなんとかなるが、寝る場所だけは何ともならない。

しばらく考えて学院内をうろうろとしていると、自分が普段外で寝ていたことに気がついてバルスは適当な場所を探そうと学院の門へと向かった。その時はち合わせたのが、本を読みながら歩くタバサだった。

タバサに相談するほどのことでもないのでバルスは素通りしようとしたが、何とタバサの方から話しかけてきたのだ。曰く、どうしたの、と。

別に隠すこともないので事の顛末をバルスが説明すると、タバサから更に驚愕の申し出があった。曰く、私の部屋に来る、と。特に断る理由が見当たらなかったバルスはタバサの申し出を受け、今こ

こに至るのである。
最初の夜などタバサが何の臆面もなくバルスの目の前で着替え始めたり、その日最高に驚愕の申し出であるベッドへのお誘いに合うなどバルスもタジタジであったが、今では慣れたもの。こうして二人で本を読んで文字を教えてもらうのが、バルスの日課となっていた。
ちなみにバルスの文字読解能力はタバサのおかげで非常に上がり、今日の本のお題は魔法の基礎である。
バルスは元々魔法に関してはかなり興味を持っており、元いた世界では自分で魔法の開発を行っていたほどであった。バルスの魔法に関する今のところの目標は、この世界の魔法を理解し、自分の世界の魔法と融合させてより強力な魔法を生み出すことである。世界を破滅させるほどの魔法をこれ以上強化しても仕方がない気がするが、バルスの魔法への探究心はだれにも止められない。

「これの読み方は？」

「コンデンセイション」

ここは、こういう意味、とタバサは懇切丁寧にバルスに教える。
時間を忘れるバルスとタバサを、ドンドンという部屋を大きくノックする音が引き戻した。
ガチャリと扉が開き、ノックの主である赤い燃えるような髪の女性が姿を現す。

「タバサ…、て、ええっ！？」

燃えるような赤い髪を持つ女性、キュルケは、そのあってはならない光景に全身を引かせて驚く。二人でとても仲よさそうに一冊の本を読む、バルスとタバサ。その黒い髪と青い髪が、今にも触れ合

いそうなほど異常に近い。近すぎる。

「あ、あなたたち、なにしてるのかしら…？」

キュルケの頬を、汗が伝う。バルスとタバサは距離をとることもなく、二人同時に口を開いた。

「勉強」

あまりの二人の一体感に、キュルケの頬をもう一度汗が伝う。再び一冊の本にかじりつくバルスとタバサを茫然と見ていたキュルケであったが、己の用件を思い出して我に返った。

「ねえ、タバサ！ちょっと協力してもらいたいんだけど～」

猫がなつくような声ですがりつくキュルケ。だが、タバサは首を横に振る。

「ダメ。今忙しい」

以前では考えられなかったタバサの言動に、キュルケは再び驚く。理由も聞いてもらえずに駄目と言われたことは、これまで一度もなかった。それが、今のタバサにはとりつく島もない。

原因は明らか。この、一緒に本を読んでいるバルスである。二人の間に何があったかも気になったがそれはさておき、キュルケはバルスに狙いを定めた。将を射んと欲すれば、の精神である。

「ねえ、バルス。ルイズがあなたのこと探してたわよ？」

「ん？ルイズが？」

うーん、とバルスは腕組みをしてあの鞭で打たれた時のことを思い出す。ルイズのバルスに対するその行為を許せはしないが、ルイズが困っているのなら放っておくのもかわいそうかとバルスは思案する。

「仕方ない、話だけでも聞きに行くか」

バルスが立ち上がると、タバサは少し寂しげな表情を見せた。それは旧来の親友であるキュルケにもやっとわかる程度のものであり、そんなタバサの表情をキュルケが目の当たりにしたのは初めてのことである。もちろん、バルスはタバサの表情に気づいてはいなかった。

「タバサ、ありがとな。またよろしく頼む」

「うん」

タバサがコクリとうなずくと、バルスは背を向けてゆっくりと部屋を出て行った。そのバルスの背中が消えるまでタバサは見送り、キュルケは恐らく喜ぶべきであろうタバサの変化を見守っていた。

バルスはルイズの部屋の扉の前に立つ。木製のその扉を開けると、五日ぶりの少し懐かしささえ感じられる部屋が出迎えた。部屋の中を見回すが、ルイズの姿はない。

バルスはとりあえず藁で作られた床にある自分のベッドに腰をお

ろし、寝転がる。五分もたつと時間の無駄のような気がしてきて、バルスは話し相手を作ることにした。愛刀ムラマサを抜き放つ。

引き抜かれたムラマサは、周りに誰もいない状況を確認して自分が話し相手として選ばれたと気がついた。

「あら、珍しいわね」

「まあな」

全くその通り、とバルスはうなずく。

「なあ、俺はルイズになんて言えばいい？謝っといた方が無難か？」

バルスが言うには、自分が狭量すぎたのではないかという。自由に固執するあまり、視野が狭まっていたのではないか、と。

バルスがルイズと契約をしていないとはいえ、ルイズが呼び出した使い魔であることに間違いはない。ルイズに迷惑はかからないと思って行動したモット伯の件であったが、よくよく考えればルイズに迷惑がかからないわけがない。ルイズは、ルイズの家族や大切な人を守ろうとして、二度と類似した行為をしないようにバルスを鞭で殴ったのではないか、とバルスは考えていた。

「まあ、２０億も殺したんだ。ケダモノもあながち間違いではないしな」

「らしくないわね。邪神とまで呼ばれたあなたが感傷的じゃない」

確かに、とバルスは笑いをもらす。

「でも、あの時のあなたの反応は正解だと思うわ」

「そうか」

バルスは寝返りをうつと、瞼を閉じる。

「ルイズが来たら起こしてくれ」

「あらひどいわ。目覚まし代わりに呼び出したの？」

邪魔してやるわ、と延々喋り続けるムラマサの声を聞きながら、バルスは眠りへと落ちて行った。

バルスは目を覚ますと、あたりが暗くなっているのに気がついた。蝋燭の炎がユラユラと揺れ、既に夜になっているのが分かる。

「起きたわよ」

背後からするムラマサの声と人の気配に、バルスは寝返って起き上る。ルイズは簡素な木のテーブルに手をついて椅子に座り、バルスの様子をうかがっていた。

バルスは目線を床へと落とし、ベッドの横に転がっているムラマサを見やる。

「何故起こさなかった？」

「起こさなくていいって、ルイズが」

納得いかなそうにバルスが首をひねると、ムラマサは続けた。

「起こしたらかわいそうだからって」

ルイズは思わず立ち上がり、ムラマサを睨みつける。ルイズの表情には、明らかに動揺に似た感情が浮かび上がっていた。

「よ、余計なこと言うんじゃないわよ！」

そのルイズの顔を見て、ムラマサは大喜びしている。いらないことをベラベラと喋る、ムラマサ節が始まった。

「大変だったのよ？バルスはどこで何をしていたのかって、根掘り葉掘り聞かれるし。私は寝てて知らないって言っても許してくれないし。あなたの身体に怪我はないか調べ始めるし。食事はちゃんととっていたのかってうるさいし」

ルイズの眉がピクピクと動き、ワナワナと震える手がムラマサを指さす。

「そ、その剣を早く黙らせなさいよ！」

「お、おお」

バルスがムラマサを鞘に納めると、その災いとしか呼べない口は封じられた。ルイズは大きなため息をついて息を整え、椅子に坐り直す。少しの沈黙の後、ルイズが口を開いた。

「鞭で叩いたのは、私が悪かったわ」

バルスの目が、点となる。高慢で高飛車、バルスをケダモノ程度にしか思っていないはずのルイズが、バルスに謝罪したのである。想像だにしていなかった展開に、バルスは反応に戸惑う。

しばしの沈黙にしびれを切らし、ルイズがまた口を開いた。

「何よ？」

「いや。意外でな」

ルイズは少しムッとしたが、せっかく謝罪したのだからと口をつぐむ。ルイズの顔が何となくむくれるのを見て、分かりやすいやつ、とバルスは口元をゆるめた。

「俺の方こそ悪かったな。色々と」

具体的に何をとまでは言わないバルスの謝罪だったが、ルイズの少し納得いかない心を救済するには十分だった。ルイズの口元が緩み、二人はお互いがお互いを許しあったことを目と目を合わせて確認する。

互いに質問したいことが溜まっていたルイズとバルスであったが、緊張がほぐれたことでそれに我慢がきかなくなったのはルイズが先であった。

「で、あんたずっとどこにいたのよ？」

素直に答えていいものかとバルスは一瞬思案したが、隠すほどのことでもないとの結論に至る。

「タバサの部屋で世話になった」

「え？タバサの？」

意外な人物の名前がバルスの口から飛び出し、ルイズは首をかしげる。

タバサと言えば、ほとんど他の生徒と話すこともない気難しい少女である。誰かが話しかけてもタバサは無視を決め込んでいたし、周りの生徒たちも距離を置いているほどだ。

にもかかわらず、バルスはこの世界に来た数日間でタバサの部屋に泊めてもらうほど仲良くなったというのである。

「ふーん。まあいいわ」

ここ数日タバサの部屋でバルスが何をしていたのか少し気になったルイズだったが、変に追求しても仕方がない。ルイズはほんの少しの聞きたい気持ちを簡単に押し殺した。

興味のなさそうなルイズにこれ以上話しても仕方がないと踏んだバルスが、今度は疑問をルイズにぶつける。

「で、お前はどこにいたんだ？」

ルイズが自分を探していると聞いてルイズの部屋に戻ってきたバルスであったが、ルイズは不在であった。その間、ルイズがどこに行っていたのかが気になっていたのだ。ルイズがバルスを探しに出ていた可能性を含めて。

「どこって、姫様の出迎えよ」

トリステイン王国の姫君、アンリエッタの出迎えに出ていたとルイズは話す。明日ある行事が執り行われるのだが、その行事に参加

するためにわざわざトリステイン学院までやってきたというのだ。
決して素直とはいえないルイズは、その前まで3日間にわたってバルスを探していたことを敢えて言わなかった。

「もしかして、その行事が俺への用か？」

「そうよ。使い魔の品評会があるの」

品評会の響きに、ルイズに物扱いされているような不快感をバルスは感じる。それをわざわざ見に来るトリステインの姫君に、だから王族はとバルスは心の中で蔑んだ。
バルスはバルスのいた世界でたくさんの王族にあってきたが、好感を抱くような人物はいなかった。もっとも、バルスが王族に出会ったのはそのほとんどが戦場だったこともその要因ではある。だが、偉ぶって人の自由を奪う王族という特権階級が、どうしようもなくバルスは嫌いだった。
バルスにとって自由とは昔とても羨ましかったものであり、今一番大切なものなのである。
バルスは思いを巡らせると更に不快感を感じたが、せっかく修復したルイズとの関係をこの一件でまた壊すのもくだらないと考えてルイズの話をきくことに腹を決めた。

「で、俺にどうしろと？」

「姫様の前であんたの剣技を披露してほしいの」

「見世物になれということか？」

品評会、剣技を披露ときて、見世物というバルスの切り返しにルイズはハッとする。ルイズは俯き、そのまま押し黙ってしまった。

その単語の組み合わせ、まるで芸を披露する犬のようだということにルイズはやっと気がついたのだ。

重く静かな沈黙がバルスとルイズを包み込む。どちらも口を開こうとはせず、互いに互いが口を開くのを待ちあっていた。

沈黙を破ったのはバルスでもルイズでもなく、コンコンとドアをノックする音だった。渡りに船とばかりに、ルイズがドアへと駆け寄る。

「誰よ、こんな時間に」

ルイズがドアの取っ手をつかんで少し引くと、勢いよく扉が開く。黒いマントを羽織った何者かがスルリとルイズの部屋へと入り、背中でパタリとドアを閉めた。

突然の来訪者にルイズは驚き、震える手をあげて不審者を指さす。

「あ、あなた、誰よ？」

顔を緊張でいっぱいにするルイズとは裏腹に、バルスは不審者に対して身構えることすらしなかった。殺気を全く感じなかったからである。

黒いマントを羽織った不審者は、その顔を隠す布へと手をやり静かに口を開く。

「久しぶりね」

顔を隠していた布の下から、紫色の髪がふわりと現れる。優しい黒い瞳に、綺麗な白のドレス。不審者は綺麗な少女へと変貌し、両手を広げてルイズに抱きついた。

「ルイズ＝フランソワーズ！」

力強くも儚く自分を抱きしめる腕、懐かしい顔、懐かしい匂い。ルイズは驚きと懐かしさに心を浸す。

「ひ、姫殿下！？」

桃色の髪の少女はその腕に抱かれ、紫色の髪の少女はその腕に抱いて昔を思い出す。幼いころにともに遊んだ懐かしく、美しく、楽しい記憶。泣きたくなるような悲しいことがあったなら抱きしめるという約束を、ルイズは忘れた日はない。

だが、一国の王女として成長した紫色の髪の少女に一国の貴族として成長した桃色の髪の少女は抱き返して応えることはできない。ルイズは抱きとめる手をほどき、跪いた。胸に手をあて、貴族としての忠誠を示す。

「いけません！このような下賤な場所に、お一人で…」

「そんな堅苦しい行儀はやめて、ルイズ＝フランソワーズ。私たちはお友達じゃないの」

少し寂しげな表情を見せる紫色の髪の少女に、それが心の奥底からくる言葉であることをルイズは悟る。嬉しくて、思わずルイズの口元が緩んだ。

「もったいないお言葉でございます、姫様」

この一連のやり取りを黙ってみていたバルスは、この紫色の髪の少女が何者で、ルイズとどんな関係であるのか大体の予測をつけていた。どうやら、この紫色の髪の少女がこの国の姫君であること。王族がお友達を作るのは殆どが幼少期のことであり、恐らくルイズ

と紫色の髪の少女は幼馴染のような関係であるということ。
このやり取りだけでは人格までの判断はつかないので、バルスはしばらく姫君の出方をうかがうことにした。

「ああ、ルイズ。ずっと会いたかった」

紫色の髪の少女は目に涙を浮かべ、再開の喜びに笑顔を浮かべる。

「姫様…！」

ルイズはその涙に驚き、立ち上がって顔を寄せる。昔と変わらず心配してくれるルイズの顔に、紫色の髪の少女は安心感を覚えた。

「ごめんなさいね。父上が亡くなって以来、ずっと心を開いて話せる相手もいなくて」

その言葉にルイズは手に手をとって、紫色の髪の少女を慰める。紫色の髪の少女は目の涙を人差し指で拭うと、その顔に笑顔だけを残した。
紫色の髪の少女は、笑顔のままルイズから目線をバルスへと移す。バルスは、無表情を崩さないまま心の中で身構えた。

「あなたにも会いたかったのよ。使い魔さん」

何の屈託もなく、純粋で可愛らしい笑顔を向ける紫色の髪の少女にバルスは戸惑った。思わず、この少女が王族であることを疑いたくなる。バルスが、人生で初めて王族の者に好感をもった瞬間だった。
だが、バルスは少女の一部分だけを否定しようと口を開く。

「使い魔じゃない。契約していないからな」

キョトンとする紫色の髪の少女に構わず、バルスはまた口を開く。自分は、だれにも属さない自由の身であることを主張するために。

「俺の名は、バルス＝タイラント。お前、誰だ？」

バルスの無礼な振る舞いに怒りの火をともしたのは、紫色の髪の少女ではなく桃色の髪の少女だった。

いくら姫様を知らないとはいえ、一連の流れから推測できないほどバルスが愚かではないことをルイズは知っている。なのに、バルスはひざまずこうとするどころかわざと悪態をついている。頭が高い。高すぎる。

「あんた、姫様に無礼じゃないの！」

ルイズはバルスの頭につかみかかり、取り押さえようとする。しかし、バルスの頭をつかんだまでは良かったものの、どんなに力を入れてもびくともしない。

んー、と頭を押すルイズとそれに反発するバルスを見て、紫色の髪の少女はクスッとほほ笑む。

「よいのです、ルイズ＝フランソワーズ。私が間違っていたのですから」

無礼者とでも言われると思っていたバルスは、その想定外の言葉に驚く。ルイズもその言葉には驚き、高すぎるバルスの頭を押すのをやめてしまっていた。

「アンリエッタ＝ド＝トリステインと申します。よろしくね、バル

スさん」

可愛らしいアンリエッタの笑顔に、さすがのバルスもぐうの音も出ない。それどころか、最初に持った好感が大きくなり、不信感が完全に拭い去られている。

バルスは今まで体感したことのない器量と優しさに覆われ、ただただうなずくことしかできなかった。

「ここ数年で、一番楽しいひと時でした」

ルイズの部屋の前で、アンリエッタはルイズを抱き寄せる。名残惜しそうに抱きしめてくる腕に、ルイズは抱きしめ返すことで応えた。

「私もですわ。姫様」

長く長く抱き合う二人を、バルスは複雑な心境で見守っていた。バルスは最初アンリエッタが現れた時、モット伯の件で何か言われるものと思っていた。だが、アンリエッタからそのようなことは一切触れられていない。

平民に敗れたことをモット伯が恥として露見することを恐れ、隠している可能性もある。だが同時に、事が露見しており、アンリエッタが取り成してくれたという可能性もあった。そして、前者が今の状態であったとしても、結果は後者に落ち着く可能性が高い。アンリエッタは、ルイズを友人と呼ぶのだから。

頭が高すぎたか、とバルスは猛省する。

その猛省するバルスの前で抱き合う二人は、やがてゆっくりと離れた。二人の顔からは、まだ名残惜しさが消えていないのがよくわかる。

アンリエッタは、ルイズとの時間を少しでも引き延ばそうと猛省中のバルスに声をかけた。

「バルスさん」

「何だ？」

「明日、頑張ってくださいね」

明日と聞いて、バルスはアンリエッタが来る前までルイズと話していたことを思い出す。明日と言えば、品評会。バルスは、首を横に振った。

「俺が剣を振る時は俺が決める。自由が好きなんでな」

アンリエッタの胸が、大きく高鳴った。そのバルスの言葉にルイズの見せた寂しそうな顔もそうだが、自由が好きという言葉に大きな共感を覚えたからだ。

ルイズには悪く思ったが、アンリエッタはうなずいた。

「自由は一番の宝ですものね」

アンリエッタは寂しげな表情を残して、ルイズとバルスに背を向けるのだった。

第六話　盗賊には邪神の罰を

コンコンコン、と扉を三度だけたたく音がする。目の前の木の扉をバルスはノックすると、ゆっくりと押しあけた。中は石造りの木の部屋で、部屋の奥に窓、壁に書棚、窓の手前に木製のデスクが見受けられる。そして木製の机の前にはコルベールが立ってこちらを見ており、木製のデスクの向こう側には黒いローブを羽織った老人が座っていた。髪は長く、髭も長く、その色は白に染まっている。

バルスはその二人の前に歩み寄り、警戒心を持って対峙した。

バルスから明らかに放たれるその敵意に、コルベールは場の空気を和らげようと試みる。

「やあ、よく来てくれたね。バルス君」

優しく微笑みかけるコルベールに、バルスは警戒の目を解くことはない。コルベールは、バルスが何者なのか知りたがっている者の一人なのだから。今日、ここに呼び出されたのもそれが理由かもしれないとバルスは考えていたのだった。

「で、そいつは誰だ？」

バルスは、デスクの向こう側に坐る老人を指さす。バルスの目から見て、この老人は少し厄介そうだった。ルイズほどではないものの、それなりの強大な魔力を感じる。少なくとも、タバサやキュルケよりは圧倒的に強い。戦えば、自分もただでは済まないとバルスは老人の評価を定める。

コルベールはバルスの不敵な態度に好感は持てなかったものの、これから彼に依頼することを考えて笑顔を崩すことはなかった。

「この方はトリステイン学院の学院長、オスマン氏だよ」

「学院長？」

その肩書きに、バルスは眉をひそめる。ついに学院長にまで呼び出され、本格的な詰問とバルスは想像したのだ。今度は、コルベールの時のように振り切って逃げるわけにもいきそうにない。自分の経歴最後の肩書、侯爵でも名乗っておくかとバルスは思案する。

だが、オスマンがバルスを呼び出したのは詰問のためではなかった。警戒するバルスの様子をうかがいながら、オスマンの勘がこの者ならやれると告げる。なぜなら、このバルスという男は部屋に入ってきてから一部の隙も見せてこないのだ。

オスマンはうんうんと、二度うなずく。その満足そうなオスマンの顔を見て、バルスは首をかしげた。

「俺に何の用だ？オスマン学院長」

「何、大したことではないのだが少し頼みごとがあってのう」

詰問が目的ではないことを知り、バルスはとりあえず胸をなでおろす。少し場の緊張感が和らぐのを見計らい、オスマンは続けた。

「近頃、フーケという盗賊が暴れておってのう。この学院にある宝物庫を狙っているというのじゃ。それで…」

バルスはその依頼の内容に大体のあたりを付けたバルスは、ああ、とオスマンの言葉をさえぎる。

バルスへの依頼は、要するにそのフーケから宝物庫を守ってあわよくば捕まえてくれというものだった。しかし、この依頼には裏がある。それは、バルスの心の内を探るというものだ。

この依頼をバルスが断れば、その理由如何によっては今後バルスが敵となることを想定して学院側は動くつもりだった。たとえば、その理由が無い、もしくはある特定人物、ルイズへの個人的な負の感情から来る理由であった場合などだ。

できれば快く引き受けてくれ、とコルベールは考え込むバルスを緊張の面持ちで見ていた。

「報酬は？」

応えを待つオスマンとコルベールに出されたバルスの回答は、とても俗人的なものだった。その答えはまるで平民のような考え方から来たものであり、オスマンとコルベールは顔を見合わせる。報酬、少し考えれば至極当然の要求だったが、あまりに当然過ぎて考えていなかったのである。

「アンリエッタ様もいらっしゃっておることじゃ。王室から何らかの報奨が与えられるであろう」

王室からの報奨。それは名誉と金を同時に併せ持つ報奨である。オスマンのとっさの機転に、コルベールは感心していた。

しかし、それらはバルスにとって全く興味のあるものではない事はオスマンとコルベールにとって想定外だった。

「いらないな」

ふう、とため息をついて首を横に振るバルスに、オスマンとコルベールに緊張が走る。少なくとも、このバルスという男はトリステインの王室をどうとも思っていない。敵に回る可能性がある。

その緊張をオスマンとコルベールは表に出さなかったが、バルスは何となく感づいていた。バルスとしては、このトリステインと敵

対するつもりはない。よって、何となくこの任務は受けておいた方がいい気がするとバルスは考えていた。

だが、いらない報奨のために動くバルスでもない。バルスは、報奨の変更を要求しようと考える。それも、学院が簡単に支払える報奨だ。

「報奨は、ここの図書館の利用権でどうだ？」

トリステイン学院の図書館の利用権。それこそが、バルスが今一番ほしいものであった。いや、正確に言うとその図書館にある魔法に関する書物を読みたかったのである。

今まではタバサに借りてもらってきていたりしたが、タバサには読みたい本の内容を大雑把にしか説明できず、本当に自分で読みたい本を読めない時もあった。また、貸し出しに制限があって読めない本も多い。

本は情報であるので少しためらったが、重要書類があるわけでもないのでオスマンもコルベールもすぐに首を縦に振った。

「見事宝物庫を守り通したら、図書館の本の閲覧を許可しよう」

オスマンとバルスが互いにうなずき、契約は成立した。それと同時に、部屋のドアをコンコンと叩く音がする。コルベールはドアへと駆け寄り、外にいる者に入るように促した。

「それで、今回は協力者を用意しておってのう」

オスマンの言う、協力者がドアの向こうから姿を現す。一人は青い髪の眼鏡をかけた小柄で大人しそうな少女。もう一人は、燃えるような赤い髪にグラマラスなボディが目を引く美女。言わずもがな、タバサとキュルケである。

「はぁい、バルス。また会ったわね」

キュルケはパタパタとバルスに駆け寄り、タバサは静かにゆっくりとバルスに歩み寄る。

「どういうことだ？」

バルスは、怪訝そうにキュルケを見やる。もはや戦友、親友と思っているタバサが協力してくれるのは分かるが、キュルケが協力してくれる理由がバルスには見当たらない。

そんな怪訝そうにするバルスの目に、キュルケは得意そうに笑顔を向けた。

「だって、王室から報奨が出るっていうじゃない？」

「ああ、なるほどな」

あまりに説得力のあるキュルケの理由に、バルスは微塵の迷いもなくうなずく。二人の様子をうかがっていたタバサであったが、一応自分も理由を言っておいた方がいいと考えて口を開いた。

「二人が心配」

タバサの言葉に、キュルケは目を潤ませて感動する。バルスは口元をゆるめて、タバサに応えた。

三人が互いに認め合うのを確認したオスマンは、椅子から立ち上がる。三人が互いの本当の実力を知らない可能性があることを考慮し、オスマンは簡単な経歴紹介をすることにした。

まず、オスマンはタバサを見る。

「ミス・タバサは、若くしてシュバリエの称号を持つナイトである」

そのシュバリエという称号に、キュルケは驚く。

「ほ、本当なの、タバサ！？」

タバサは、静かにコクリとうなずいた。別に隠していたわけではないのだが、タバサは自分のことを話すことがほとんどないので親友キュルケも知らなかったのである。

一方で、バルスが驚くことはなかった。バルスはシュバリエの称号を１０歳で受けており、最後の経歴を残した１５歳の時はマークウィス、侯爵である。

タバサに対するキュルケの反応を見て、バルスはあの時コルベールに名乗らなくてよかったと改めて再認識した。

そのまるで驚かないバルスをオスマンは少し怪しく思ったが、あまり気にしても変にわだかまりを残すだけなので紹介を続ける。オスマンは、キュルケへと視線を移した。

「ミス・ツェルプストーはゲルマニアの優秀な軍人の家系であり、彼女自身の火の魔法もかなり強力だと聞いておる」

キュルケは得意そうに胸を張る。よくある話なのでバルスは聞き流していたが、新たに出てきたゲルマニアという国の名前とキュルケが外国人であるということだけは胸に留め置いた。

オスマンは、最後にバルスを見た。

「そして、ミスター・バルスはその両名を剣一本で退けた優秀な剣士と聞いておる」

オスマンは、三人を順に見て告げた。

「魔法学院は、そなたらの努力と働きに期待する」

現トリステイン学院、風のメイジ最強、火のメイジ最強。そして、使い魔最強。宝物庫を守るため、トリステイン学院最強タッグが結成されたのだった。

「ただいまより、本年度の使い魔お披露目の儀を執り行います」

トリステイン学院、草原の緑が敷き詰められた中庭。コルベール司会の元、その行事は行われることを宣された。豪華な紫色の天幕の下にはアンリエッタと従者たちが控え、その先には見やすいように巨大なステージが築かれている。ステージの前には生徒たちが椅子に座って集まり、儀式開始の言葉に大盛り上がりを見せていた。

まずキュルケが壇上に上がり、フレイムとの息を合わせた炎の魔法で観客である生徒たちを盛り上げる。自由自在に踊り狂う炎が、生徒たちを虜にしていた。その後、次々と生徒たちが順番にステージに上がり、自慢の使い魔たちを披露していく。

品評会中の宝物庫を守る任務は、キュルケが実働、タバサが見張り役をやり、バルスがアンリエッタと生徒たちの護衛役という役割分担となった。というのも、品評会でステージに上がる順番がキュルケが一番で、タバサが真中らへん、ルイズとバルスがオオトリとなっていたのだから仕方がない。タバサの見張り役はシルフィードがいるのでともかく、キュルケとバルスの役割は逆転した方がベストだった。だが、バルスが品評会で最後まで動けなくなっているの

だ。どうしようもない。
そんな宝物庫警護任務の事情などお構いなしで、品評会は進んでいく。いよいよ、見張り役であるタバサの番である。
タバサのシルフィードが羽ばたき、風を切って空を飛ぶと生徒たちの盛り上がりはその日最高潮となった。感嘆の声が沸き起こり、アンリエッタもその美しさに惚れ惚れしている。
そんなタバサとシルフィードを、全く異なる目線で見る者があった。キュルケとバルスである。タバサから敵発見の合図が送られ、キュルケはタバサに指示された宝物庫の方角へと走っていった。
周囲にキュルケが一時的に席を離れるのを気に留める者はなく、もちろん咎める者もいない。コルベールなど、依頼者にもかかわらずのんきに司会を続けている。

「雪風のタバサでした」

パチパチと拍手がわきあがり、生徒たちが一斉にタバサを褒めたたえる。その後も生徒たちが使い魔を披露し、喧騒が晴れることはなかった。コルベールが、その者の名を発するまでは。

「続きまして、ミス・ルイズ＝ド＝ラ＝ヴァリエール」

シーン、という言葉を使うべき沈黙が起こった。誰もが息をのみ、声一つ発することなくその登場を待つ。
以前ルイズと言えばゼロのルイズと馬鹿にしたものであったが、今ルイズと言えば最強の使い魔の主人であった。それは他学年の生徒たちにも伝わっており、貴族を剣一本でねじ伏せたという使い魔をメインと思っている者も少なくない。その、貴族をねじ伏せるという剣さばきを。
一方で、生徒たちは他の期待も持っていた。今は最強の使い魔の主人とは言え、あのルイズである。使い魔の剣さばきを見せつける

ためにアンリエッタに使い魔をけしかけてみたりだとか、従者に喧嘩を売らせてみたりだとか、騎士との一騎打ちを使い魔に申し込ませたりだとか、そういうのを期待している者も多い。要するに、最強の使い魔が王家直属の騎士相手にどこまでやれるか見たいのであった。

その沈黙と変な期待の渦巻くステージに、ルイズとバルスは静かに上がる。ステージの中央に立つと、ルイズは観客の生徒たちへ顔を向ける。

「紹介いたします。私の使い魔、バルス＝タイラントです」

ルイズは、そこで口ごもった。次に続く言葉が、生徒たちの嘲笑を誘うような言葉だったからだ。ルイズは不安そうにちらりとアンリエッタの方を見る。アンリエッタは、笑顔をルイズに返した。

ルイズは勇気を振り絞り、口を開く。

「種類は、平民です！」

罵倒されることを覚悟し、ルイズは目をつぶる。しかし、起こるべき嘲笑の嵐は起こらなかった。誰もが次のルイズの使い魔への命令に目を見張る。最初馬鹿にされなかったことに驚いたルイズであったが、それがバルスのおかげであることに何となく気がつき、護られている安心感に心が温かくなった。

ルイズは聴衆の期待に反し、バルスと頭を一度だけ下げて壇上を降りていく。

ルイズは、品評会の始まる前に剣技を見せる必要はなく、一礼だけで壇上を降りることをバルスに伝えていた。バルスが嫌がることを無理やりさせることはないと、ルイズはこの品評会での優勝という栄誉を諦めたのである。

だが、ルイズは満足だった。自分の使い魔こそ、一番素晴らしい

使い魔だと思えるようになってきたのだから。
そんな満足そうなルイズの横で、バルスは焦っていた。宝物庫の守りに向かったキュルケがどうなったのか心配だったのである。最優秀使い魔の発表が控えていたが、バルスにとってはどうでもいい。

「悪いな、ルイズ。少し席を外す」

「え？ちょっと、どこ行くのよ！？」

バルスはルイズに背を向け、急いで宝物庫へと向かっていった。

はあ、はあ、はあ、とキュルケは息をあげ、唾を飲み込んで上がった息を整えようとする。息は整わず、またはあ、はあ、はあ、と口は言い始め、キュルケは息を整えることを諦めた。そのまま杖を構えなおし、顔を上げる。
緑色の草が地面を敷き詰める中、キュルケの目の前には異様なまでに巨大な土の人形が立ちはだかっていた。大きさは３０メイルほどもあり、二足歩行、手は地面に触れそうなほど伸び、野太い。人間に当たる顔の部分には目のようなものが土の塊が出っ張ることで表現されているが、口や鼻に当たるものは見当たらない。それは、土でできた巨大なゴーレムであった。
キュルケはゴーレムへと杖を向け、睨みつけた。

「イム・エクス・ヴィエット・フレイム・ファイアー！」

炎の渦がキュルケの杖の先端より発生し、ゴーレムの顔を直撃す

る。火が燃え上がり、ゴーレムは一歩、二歩と後ろへのけぞる。
しかし、ゴーレムは腕を振ってキュルケの炎をかき消す。焼けた土が再生し、ゴーレムは何事もなかったかのようにキュルケに向かって歩き始めた。

「やっぱり無理よ、こんなの！」

近づいてくるゴーレムに、キュルケは身構える。この日何回目か数え切れないほど放った炎の魔法に、キュルケは体力の限界を感じていた。呼吸を整えようとしても整わず、脚を動かそうとしてもうまく動かない。
ゴーレムの腕が振り上げられ、キュルケを狙う。キュルケはその場を離れようとしたが、脚がもつれてその場にガクリと崩れ落ちた。キュルケの倒れこんだ場所を影が多い、キュルケの目の前を土の拳が覆っていく。

「嘘！？私、まだやりたいことたくさんあったのに…！？」

ギュウッと目をつぶり、キュルケは目の前の恐怖から逃げ出す。本当ならこの後王室から報奨をもらって、好きなものを買って、いつものように男たちをかしずかせて、ゆくゆくは自領にハーレムでも、とやりたかったことが次々と浮かんだ。
タバサとの思い出、ゼロのルイズを馬鹿にした日々、バルスの剣術に恐怖したあの日。今度は今までの日々が走馬灯のようにキュルケの中を駆け巡る。ずいぶん思い出す暇のあることと、キュルケは覚悟を決めて再び目を開く。
キュルケの目に飛び込んできたのは、誰かの背中だった。その背中には深緑の光沢を放つ漆黒の鞘が担がれ、その向こう側には壁のように広がる土の拳が止まっている。
キュルケは意味のわからないその光景に、目を瞬かせた。

「ば、バルス…？」

キュルケはようやく状況を理解した。その背中の主はバルスであり、バルスは剣一本でゴーレムの拳を受け止めている。

バルスが剣をふるうと、ゴーレムの拳が砂となって消えていった。

バルスはちらりと振り返り、キュルケの安否を確認する。とりあえず五体満足、外傷もないことを確認するとバルスは再びゴーレムへと目を移した。

「キュルケ、あれはなんだ？」

茫然としていたキュルケは、バルスの声で我に返った。気がつくと、自分の身体が妙に熱くて心臓がドキドキと鼓動を刻んでいる。

バルスの背中を見ていると、キュルケは例えようのない安心感を覚えた。

キュルケはゆっくりと立ち上がり、バルスの肩を頼るようにつかんだ。

「ゴーレムよ、ダーリン」

「ゴーレムだと？」

猫なで声の甘えてくるような口調に変わったキュルケが少し気になったが、バルスはゴーレムという単語の方が気になったのでそれをあえて無視する。

「土製のゴーレムか。ずいぶん旧式だな」

バルスの世界のゴーレムと言えば、すべて鉄製である。おまけに

８８ｍｍ砲だのショットガンだのグレネードランチャーだの物騒なものを搭載しており、いわゆる歩行戦車のようなものだった。土製のゴーレムが主流だった時代もあったが、それはバルスにとって３００年以上前の昔話である。

「こいつはトリステインやゲルマニアで普通のゴーレムなのか？」

「大きさ以外はそうね」

キュルケは少し瞳をおびえさせ、バルスに顔を近付けて答える。バルスはその詰まっていくキュルケとの距離に違和感を覚えたが、また無視した。構えをとかず、ゴーレムを睨みつける。

ゴーレムは切られた腕の断面を土に向けると、土を吸収し始めた。見る見るうちに吸収された土がゴーレムの腕となり、再生していく。

その光景に、バルスの顔が明るくなった。

「お、おい。再生してるぞ！？」

「あたりまえじゃない。ゴーレムなんだから」

当たり前、というキュルケの反応にバルスは驚く。バルスの世界のゴーレムは、再生しない。修理すれば再利用は可能だが、自己再生能力を持ったものは今のところ存在しないのだ。

だから、バルスの世界のゴーレムは頑丈にする必要があり、鉄でつくられている。自己再生できるのなら、確かに土で十分とバルスは納得した。

「で、どこを吹き飛ばせば倒せるんだ？」

「大抵は頭の部分よ」

バルスはゴーレムの頭の部分に切っ先をむけ、脚を踏ん張る。再生したゴーレムの腕が振り上げられ、やがてバルスとキュルケに向けて振り下ろされた。

バルスは腕でキュルケの脚を掬いあげる。

「ちょっと失礼」

「あら、大胆」

バルスにふわりと持ち上げられたキュルケは、バルスの首に手をまわす。

バルスが片腕でキュルケの脚をささえ、キュルケが落ちないように抱きつくお姫様だっこ。キュルケのあまい香りと当たる大きな胸に普通の男は一撃撃沈の状況であるのだが、今そうなってはゴーレムの腕に撃沈されてしまう。バルスは、振り下ろされてくるゴーレムの腕に意識を集中する。

振り下ろされたゴーレムの腕が土ぼこりに覆われると、バルスはその土ぼこりを目くらましとして地に打ち込まれた腕に跳び移った。ゴーレムの腕を駆け上がり、バルスとキュルケはその頭を目指す。

上ってくるバルスを腕から振り落とそうともう片方の腕が伸びてきたが、その腕はバルスを捉える前に砂と化して落ちていった。ムラマサが日の光を返し、ゴーレムの頭部を一閃する。ゴーレムの身体がぐらりと傾き、バルスはキュルケをかばうようにその身体を抱え込むとゴーレムから飛び降りた。

バルスが地面に着地すると同時に、ゴーレムは大きな音を立てて崩れ去ったのだった。

バルスは身体を傾けてキュルケの脚から腕を外し、ゆっくりとキュルケを地に立たせる。キュルケの瞳は、まだ夢の中にいるような情熱を孕んでいた。

「あんな大きなゴーレムを剣で倒しちゃうなんて、あなたやっぱり素敵だわ」

ゆっくりと顔を近付けてくるキュルケに、バルスは剣を収めるのも忘れてギョッとした。キュルケに顔をなでられ、バルスは全身をこわばらせる。

抜かれたままの剣、ムラマサは、初めて女性に対して緊張を示す主の姿を見て思った。今ならいけるかもしれない、あおってやろうと。

「私の主人はマークゥィスよ？とうぜ…」

ムラマサはすべてを言い切る前に鞘におさめられた。キュルケはキョトンとし、バルスはキュルケから目をそらす。

「ダーリン、今の…」

「なんでもない」

目線をそらして誤魔化すバルスを見て、キュルケは彼が隙だらけになっていることに気がつく。

バルスは、かなり焦っていた。キュルケに迫られたからではなく、ムラマサが余計なことをもらしたからだ。もし自分がマークゥィスとばれれば、年齢の問題から考えても、キュルケのあの時のタバサに対する反応を考えても、学院に余計な警戒心を抱かせることになる可能性が高い。

そんなバルスの都合など知らないキュルケは、チャンスとばかりにバルスに迫る。

「ダーリン、油断してるあなたも素敵よ」

「お前、今日少し変…！？」

バルスの視界がぐらりと揺れ、青空へと変わる。そのあと、キュルケが覆いかぶさるのに時間はかからない。晴れ渡る青空の元、二人は草原に倒れこむのだった。

緑広がる中庭に用意されたステージの上、生徒たちの見守る中タバサはかしずいた。アンリエッタはタバサの前に立ち、用意した小さな王冠を青い髪の上に優しく載せる。

品評会の優勝は、タバサのシルフィードに輝いた。それは妥当な線であると、周りの者は納得する。

アンリエッタはタバサに優しく笑いかけ、その素晴らしい使い魔を祝福する。

「素晴らしい使い魔でした。よろしければ、今一度飛んで見せては下さいませんか？」

タバサは静かにコクリとうなずき、シルフィードにまたがる。翼をはばたかせて空へと飛び立つシルフィードに、アンリエッタも、その従者たちも、ルイズも、オスマンもコルベールも、感嘆のため息をついた。

その直後、ドンという巨大な爆発音が響き渡り学院の宝物庫の方角から土煙が上がった。その音に驚き、アンリエッタの従者たちがアンリエッタを囲む。

「姫様をお守りしろー！」

アンリエッタの身辺がにわかに騒がしくなり、ルイズもアンリエッタを守ろうと駆け寄る。その時、ルイズはバルスがいないことを思い出した。少し席をはずすと言っていたことを思い出し、戻ってきているのではとルイズはあたりを見回す。しかし、バルスの姿がルイズの目に写ることはない。

バルスの居所をいち早く察知したのは、空を飛んでいたタバサとシルフィードであった。状況確認とバルスに助力するために、急いで宝物庫へとシルフィードを向かわせる。

タバサがバルスとキュルケに近づいていくと、細部の状況がだんだんと見えてくる。草原に倒れこむバルスとキュルケ。事は急を要するかもしれないとタバサは判断し、シルフィードを地に降ろして二人の元へと駆け寄る。

しかし、別の意味で事は急を要していた。タバサがバルスとキュルケに近づくにつれ、離れろだの、いいじゃないだの、二人のじゃれあう声が聞こえてくる。

胸を押しつけ、バルスの顔をなでるキュルケの姿を認め、タバサはギュウッと胸が締め付けられる思いにとらわれた。

「何してるの？」

じゃれあう、いや、正確にはじゃれつかれるバルスとじゃれつくキュルケはようやくタバサに気がついて顔を上げた。キュルケはタバサに悪いと思ったが、狙った獲物は逃がさないのがキュルケの信条。たとえ親友であろうと、遠慮はしない。

キュルケはバルスにじゃれつくのを再開する。タバサはその光景にムッとし、再び口を開いた。

「フーケはどこ？」

そのタバサの言葉に、キュルケはバルスの頬に手を這わせるのをピタリと止めた。タバサは周囲を見回し、不審な人物がいないか警戒する。

やがてバタバタという足音が聞こえ、ルイズをはじめとしてオスマン、コルベールを含む生徒たちの集団もバルスとキュルケ、タバサに合流していく。

一番最初に合流したルイズは、あまりに近い距離のバルスとキュルケを見るなり肩を震わせて俯いた。

「あ、あんたたち、何やってんのよ…！」

ルイズは湧き上がってくるムカムカとした怒りを必死に押さえつけるが、どうにも我慢ならない。

トリステインのヴァリエール家とゲルマニアのツェルプストー家は、戦争でも恋でも昔からのライバル同士である。別に使い魔でもないバルスがどこの誰と付き合おうと勝手だが、そのツェルプストーのキュルケと仲良くしようというなら話は別だ。

だが、バルスはルイズが思っているほどキュルケと仲良くなろうとは微塵も思っていない。バルスはキュルケを指さす。

「何って、こいつがだな」

バルスがキュルケとヒョイと距離をとると、キュルケはヒョイとバルスとの距離を詰める。こういうことだ、とバルスは呆れたように首を横に振った。

ルイズは納得して肩を震わせるのをやめたが、やはりまだイライラが収まらない。あのキュルケがバルスの横にいるのが何故か面白くないのである。

そんなもめ続けるバルスたちをしり目に、タバサはフーケの姿を探し求めて首を左右に振っていた。草原が広がり、何の遮蔽物もなく身を隠す場所もない。元ゴーレムの巨大な土くれだけが、やけに目につく。

その土くれが風でにわかに砂塵を上げた。それに乗じて人影が飛び出したことにタバサは驚き、思わず杖を構える。周囲の者は気づいておらず、ルイズとバルス、キュルケがもめるのを誰もが面白そうに見ているだけだ。

土くれの中から姿を現したのは、黒いマントに身を包んだ何者か。顔は見えず、時折マントの下から緑色の髪とローブが覗く。その黒マントの人物は、タバサを迂回して注目を集めるルイズに飛びかかった。

「おっと、動くんじゃないよ！」

冷たい何かの感触を首筋に感じ、ルイズは息をのむ。銀色に輝くナイフがルイズの白い首に突き付けられるのを見て、周囲の者たちも息をのんだ。

黒いマントを羽織った何者かは、周囲が大人しくなるのを確認して口元をゆがませる。

「私の計画を随分と滅茶苦茶にしてくれたじゃないか」

黒いマントの何者かは、バルスへとそのゆがんだ笑みを向けた。

「フーケか？」

バルスの問いかけに、黒いマントを羽織った何者かはうなずく。その腕に捉えられたルイズは最初こそ恐怖にのみとりつかれていたが、我に返った。首に突き付けられたナイフへの恐怖でルイズの

足はすくむ。だが、そんな自分をルイズの貴族としての誇りが許さなかった。

「バルス！私に構わないでこの女を捕えなさい！」

「くっ、大人しくなさい！」

フーケがルイズの身体をグイッと引っ張ると、ルイズは小さく押し殺した悲鳴を上げる。バルスはムラマサに手をかけ、タバサ、キュルケ、オスマン、コルベールが次々と杖を構える。

ルイズはなおも気丈に振る舞おうと、フーケを睨みつける。しかし、バルスは見逃さなかった。身体を引っ張られた瞬間、一瞬だけ見せたルイズの恐怖に濁る瞳を。

あの、強がりめ…。

バルスは後頭部がチリチリと焼けるような感覚に襲われ、フーケを睨みつける。まるでそのまま睨み殺してしまいそうなほどに。

ルイズは、バルスのその目を二回だけ見たことがあった。一度目は、ルイズがバルスと使い魔の契約、コントラクト・サーバントを試みた時。二度目は、バルスを鞭で殴った時。バルスが、本気で怒った時に見せる目だ。

その尋常ならない殺気に、フーケは一瞬動揺する。自分と同類の中でもやばいやつの、更にやばいやつが放つようなその殺気に。

ルイズに突き付けられたナイフが首から少しだけ離れた瞬間、バルスは思い切り地面を蹴った。

「馬鹿、な」

フーケが目線を落とすと、バルスの剣のつかが自分の腹に食い込

んでいた。続いて激痛がフーケを襲い、視界がグラリとゆがんで意識が遠のいていく。フーケは腹を押さえて後ろにのけぞり、仰向けになって倒れて意識を失った。そのフーケの手に握られたナイフは、刃が粉々に砕けている。

ルイズは倒れこんだフーケを見て自分が助かったのだと知り、フッと全身の力が抜けてしまった。ストンと地面に膝を落とし、茫然とバルスを見上げる。

バルスは構えをとくと、ルイズに手を差し出した。

「ほぼ命令通りのはずだが？」

「え、ええ…」

半分上の空で、ルイズは返事をする。半分上の空で、差し出されたバルスの手をとった。その手にすがって立ち上がろうとするが、脚に力が入らず立ち上がることができない。

「どうした？」

怪訝そうにするバルスに、ルイズはそっぽを向いた。怖かったなどと、こんな大衆の面前でルイズが言えるわけがない。

「な、なんでもないわよ」

小刻みに震える手が、ルイズの心をバルスに伝える。ああ、とバルスは納得したようにうなずくと、ルイズの肩に腕をまわして抱き上げた。

バルスに支えられて立ち上がると、不思議なことにルイズは震えが止まっていた。ちゃんと脚の力も入り、一人で立つことができるようになっている。ルイズは今までにない穏やかな鼓動を自分の中

に感じながら、バルスの顔から目が離せないでいた。
しばらくすると、バタバタという足音がしてルイズの意識を引き戻す。足音の方を見ると、アンリエッタとその従者たちが走ってくるのが見てとれた。
アンリエッタは呼吸を整えるのも忘れ、ルイズに駆け寄る。ルイズもバルスの手から離れ、アンリエッタに駆け寄った。

「二人とも、よくぞ無事で」

ルイズはアンリエッタの前に手と膝をついてかしずき、バルスは突っ立ったままアンリエッタを出迎える。ルイズは突っ立ったままのバルスに気付かない様子で、何を咎めるでもなく口を開いた。

「姫様。ご安心ください、賊はバルス＝タイラントが捕えましてございます」

おお、と従者たちはルイズの使い魔に注目し、アンリエッタもバルスへと視線を移す。バルスは、首を横に振ってルイズを指さした。

「俺はこいつを手伝っただけだ」

ルイズは驚き、振り返ってバルスの顔を見あげる。アンリエッタがルイズの手を握ると、ルイズは驚いた顔のままアンリエッタへと視線を戻した。アンリエッタは優しく微笑む。

「ありがとう、ルイズ。」

褒められるべきは自分ではないのに、とルイズは何も言えずにただただ首を横に振った。そのルイズの心をくみ取るように、アンリエッタはうなずく。その優しい微笑みを、今度はバルスにも送った。

「ありがとう、バルスさん」

「あ、ああ」

何もかもお見通しか、とバルスは頭をかく。アンリエッタはルイズを見ると、名残惜しそうな表情を浮かべた。昨日の夜に見せたような、名残惜しそうな顔を。

「私は、このことを王宮に報告に行かなければなりません。また近いうちに会いましょう、ルイズ」

アンリエッタはルイズの手を離し、用意された馬車のほうへと足早に走っていく。そのアンリエッタの背中を見送りながら、ルイズは俯いて呟いた。

「最近、宮廷内のよくない噂を聞くのよ。私が心配しても仕方のないことだけど、この一件が姫様にとっていい方向に働いてくれればいいのだけれど…」

ルイズの本当に心配そうな顔を見て、バルスも神妙な面持ちとなる。

権力争い。それは、アンリエッタのような少女が乗り切るには厳しいものであることをバルスは知っている。バルスのいた世界で、バルスは若くしてシュバリエとなった時からそれを経験してきたのだから。

恨み、妬み、嫉み。それらをバルスは圧倒的な力でもってつき従えたが、アンリエッタにその力はない。

だが、バルスは敢えてそれを軽くフッと笑い飛ばした。

「いいんじゃないか？助けにいけば」

「え？」

馬鹿じゃないのとルイズはバルスに目を向けたが、バルスの強い眼差しを見てそれを本気だと悟る。

「その時は、俺も力を貸す」

バルスの力強い言葉に、ルイズは根拠のない安心感を覚えた。バルスといれば、どんなことでも成せる気がする。ルイズは再びバルスの強い眼差しに目を奪われ、目を離すことができずにいたのだった。

第七話　三国戦線異状アリ

誰もいない廊下、誰もいない教室、誰もいない宿舎。静寂に包まれたトリステイン学院の廊下を、バルスはルイズと歩いていた。

トリステイン学院は夏季休暇に入り、生徒たちは殆どが帰省して自分たちの国に帰って行った。残っているのは、ルイズとバルス、そして今向かっている部屋の主、タバサと親友のキュルケくらいのものである。他にもまばらに残っている生徒はいたが、ほとんどが帰り支度を進めていた。

バルスとルイズがなぜタバサの部屋に向かっているかというと、バルスがタバサに呼び出されたからである。別にルイズは呼び出されていなかったのだが、何となくバルスが呼び出された理由が気になったのでついてきたのだった。

バルスはタバサの部屋に着くと、ノックをする。

「入るぞ、タバサ」

バルスが扉を開けると、タバサのいつもの部屋とベットに寝転んで本を読むタバサ、机の前に坐っているキュルケの姿が目に飛び込んできた。タバサとキュルケは顔を向けてバルスを見た後、その後ろについてきたおまけに無表情と怪訝そうな表情を向ける。しかし、そのおまけであるルイズを追い出す理由もなく、タバサとキュルケは二人を招き入れた。

タバサとキュルケが二人いた状況を上手く飲み込めないバルスだったが、とりあえず疑問を解消しようと口を開く。

「で、用とは？」

タバサは何かを訴えたそうにバルスに顔を向けるが、言いにくそ

うにして俯く。モジモジを始めたタバサに代わって、キュルケはタバサの頼みを代弁することにした。

「これからタバサのご実家に遊びに行くのだけれど、ダーリンに護衛をお願いしたいのよ」

「護衛だと？」

必要なのかと、バルスはタバサとキュルケを交互に見る。オスマンの紹介文句を思い出しながら。

「だって、この前みたいにフーケみたいな盗賊が襲ってきたら怖いじゃない？」

キュルケはさも怖そうに自分の身体を抱きしめ、困ったような表情をバルスに見せる。キュルケの後ろで、タバサも静かにコクリとうなずいた。

キュルケだけならまだしも、タバサにまで同意されるとバルスは弱い。確かに、それなりに強いとはいえタバサもキュルケも女の子である。ルイズも強がりだけは一人前だが、結構普通の女の子並みに憶病な性格だった。怖いものは怖いのだろうと、バルスは納得する。

「分かった。同行しよう」

少し渋々といった感はあったが、バルスはうなずいた。タバサは無表情の裏側で心が喜びを表そうとするのを押さえ、キュルケは流石ダーリンとバルスに抱きつく。

後ろで見ていたルイズは、上手く言いくるめられてしまったバルスにイライラしていた。おまけにキュルケに抱きしめられて、バル

スはデレデレしている。正確にはバルスはデレデレするどころか抵抗して離れようとしているのだが、ルイズにはまるでイチャついているようにしか見えない。

「私も行くわ！」

ルイズのその宣言に、タバサとキュルケは驚いてルイズを見る。三人は互いが互いを睨みあい、突然蚊帳の外に放り出されたバルスはその三人の迫力に一歩後ずさった。

トリステイン対ガリア対ゲルマニア。三つ巴の戦いの火ぶたが、切って落とされた。

心地よい振動を伝える馬車の揺れに、窓から入るちょうどよいポカポカとした陽射し。その平和なムード漂うはずの四人乗り用の馬車の中は、切迫した空気に包まれていた。

隣り合って坐り、一冊の本を覗き込むバルスとタバサ。その対面に坐り、怒りを我慢してカリカリという音を今にも立てそうなルイズと余裕を見せて窓の外ののどかな景色を眺めるキュルケ。

この席割になったのは、至極自然なことだった。何しろ、図書館で本が借りられるようになったバルスは馬車にその本を持ち込んだのである。いつも本の内容を教える先生役のタバサが、バルスの隣の席を牛耳ることになるのは明白だった。

ルイズも最初は仕方のないことと諦めていた。それに、無理にバルスの隣に座る理由もない。しかし、ルイズはすぐに我慢ならなくなった。馬車の揺れで時々触れ合う、バルスの黒い髪とタバサの青い髪。二人で本を読むには距離が近い。近すぎる。

ルイズはついに堪忍袋の緒が切れ、ひくつかせながら笑顔を作った。

「ば、バルス。わわ、私が後でその本読んであげるから、い、いいい、今は読むのをやめなさい」

「ん？なぜだ？」

突然わけのわからない事を言って本を読むのを邪魔するルイズに、バルスは怪訝そうに本から顔を上げる。続いてタバサが本からルイズへと目を移し、ジト目を向けた。

「邪魔しちゃダメ」

「じゃ、じゃじゃじゃ、邪魔…！？」

ルイズの鳶色の目とタバサの青い目がぶつかり合い、互いに睨みあう。今にもバチバチという音を立てそうな視線のぶつかり合いで、第一次トリステイン・ガリア大戦は始まった。

当事者であるはずのバルスは、その二人の睨みあいを横目に本を読み続ける。キュルケはそんな三人の様子を見て、正攻法で挑んでもこの場でタバサからバルスをとり上げられないと考えた。キュルケは記憶を巡らせ、バルスが弱そうな一面を探す。

そういえば、マークゥィスがどうのこうので、随分動揺してたわね。

キュルケは、言葉を喋るバルスの剣、ムラマサが口走った言葉を思い出した。あの時、バルスはめったに見せない隙を見せるほどに動揺している。キュルケはバルスの気を引くのはこれだと思い、腹に抱えた姦計を実行に移した。

「ねえ、バルスってマークゥィスなの？」

バルスの本をめくる手が止まる。タバサとルイズの睨み合いも同時に収まり、驚いてバルスに注目する。第一次トリステイン・ガリア大戦はゲルマニアの姦計によって終結した。

バルスはチラリとキュルケの顔をうかがい、また本へと目を伏せる。

「何を馬鹿な。俺は平民だ」

バルスは呆れたように吐き捨てる。心の奥底で、ムラマサを火にくべて鍛え直すと決心して。

しかし、バルスへの追及がそれで終わるわけがない。キュルケは窓から手を伸ばし、その情報を発した張本人を鞘から少し引き抜く。

「ねえ、バルスってマークゥィスなんでしょ？」

「そうよ」

キュルケの問いにサラリと答えるムラマサ。バルスは表情にこそださないものの、内心激怒してムラマサを火にくべて溶かすことを誓った。

一方で、ルイズは驚いて瞳を揺らす。自分の呼び出した貧民だと思っていた使い魔が、マークゥィス、つまり侯爵だというのである。侯爵と言えば貴族の中の貴族、上級貴族であり、この若さでその爵位は殆ど考えられない大出世なのだ。

「ほ、本当なの、バルス！？」

「嘘に決まっているだろ」

バルスは取り合わず、動揺も見せずに本を読み続ける。その様子に、ルイズは期待に膨らませた目を残念そうに伏せた。バルスは何とか誤魔化せたと安堵し、本に再び集中力を向ける。

しかし、ムラマサには主の努力など関係ない。主の自慢がしたくて仕方ないのだ。

「嘘じゃないわよ、失礼ね！ラインハルト帝国、バルス＝タイラント侯爵。その魔力は泣く子も黙る陸軍少将よ！」

「貴様あ！？」

バルスが本を取り落してムラマサを鞘に押し込むと、ルイズ、タバサ、キュルケが茫然としてこちらを見ていることにバルスは気がついた。落とした本を拾い上げ、わざとらしく咳払いして坐り直す。ルイズたちの目が、もう誤魔化しのきかないことをバルスに告げた。

沈黙を最初に破ったのは、ルイズだった。

「どうして黙ってたのよ？」

バルスは何も答えない。黙って本を読み続ける。次に口を開いたのは、キュルケだった。

「ねえ、魔力ってどういうこと？あなた魔法が使えるの？」

バルスはまた何も答えることはなかった。まだ本を読み続けている。

「ねえってば！魔法使えるなら、二つ名とかあるんでしょ！？」

興味津々と言った様子のキュルケは、なおもバルスに詰め寄る。そのバルスとキュルケの間に割って入ったのは、タバサだった。バルスとキュルケの前に身を乗り出し、タバサは首を横に振る。

「誰にでも、知られたくないことはある」

タバサの迫力に少し気圧され、キュルケはそれもそうねとうなずく。ルイズもバルスに言いたいことがたくさんあったが、それは次の機会に回すことにした。

やがてバルスたちを乗せた馬車は森を抜け、湖の横を抜け、また森の中へと入っていく。バルスとタバサは元のように一冊の本を一緒に読み、キュルケは窓の外の風景を眺める。ルイズはというと、今度はタバサに気遅れを感じていた。

バルスの嫌がることを、バルスの心をくみ取るタバサ。バルスに嫌なことばかりしてしまうルイズ。ルイズはバルスとタバサの心の距離が今の二人の触れ合いそうな距離と同じような気がして、心に得も言われぬ切なさを内包する。バルスと自分の心の距離がとても遠いような気がして、ルイズは何も言えずにいたのだった。

ガリア王国、タバサの屋敷。それは、森に囲まれた美しく白い大きな屋敷だった。屋敷の玄関前には盾に杖をクロスさせた紋章が刻まれ、ルイズとキュルケは息をのんでそれを見上げていた。

「ガリア王家の、紋章…？」

キュルケは茫然と呟き、タバサを見る。ルイズもそれにつられてタバサを見た。バルスはと言うと、相変わらず本を読んでいる。

タバサの実家がここであるとして、その屋敷に王家の紋章が記されているということはタバサは王族ということになる。それを信じられずに確かめようとキュルケとルイズはタバサに駆け寄ろうとしたが、屋敷の扉が開いたことで脚を止めた。

キュルケとルイズが振り向くと、白髪の黄色い縁の眼鏡をかけたいかにもという老執事が立っていた。

老執事は頭を深く下げ、口を開く。

「おかえりなさいませ。お待ちしておりました、シャルロット様」

一礼した執事はタバサたちを屋敷へと招き入れ、客室へと案内する。案内された部屋はには大きな暖炉があり、全員が腰かけるのに十分な青いソファと立派な四角い木の光沢を放つ机が置かれている。壁には、優しくも凛々しい笑顔をたたえた、青い髪の若い男を描いた肖像画が飾られていた。

バルス、ルイズ、キュルケはソファに腰掛ける。執事は一度部屋を辞し、タバサだけが部屋に残った。

キュルケはタバサを見上げ、口を開いた。

「まずはお父様にご挨拶したいわ」

それは至極当然のことだったのであるが、タバサは首を横に振る。バルスとルイズは顔を見合わせた。

「ここで待ってて」

タバサはその言葉だけを残すと、部屋の扉をあけて出て行ってしまった。バルス、ルイズ、キュルケはまたも顔を見合わせる。そして三人ともがかけられた肖像画を見て、タバサの先ほどの反応について考えた。

恐らく、三人が三人とも失礼なことをしたわけではないはず。ならば、タバサが父親に友人を紹介できない理由は多くはない。どれにしても不幸な理由に、三人は俯く。

コン、という一度だけ短いノックの音がして、扉が再び開く。現れたのはタバサではなく、先ほどの老執事だった。手に鉄製の丸いトレーと白いティーカップを三つ持ち、バルスたちの元へと運んでくる。

「失礼いたします」

執事はカチャリとティーカップを三つ置き、バルス、ルイズ、キュルケに紅茶を勧める。ルイズとキュルケはティーカップに口を付け、バルスは香りを楽しむのみに留めた。

老執事は胸に手を当て、軽く頭を下げる。

「私はオルレアン家の執事、テルスランと申します」

バルス、ルイズ、キュルケはテルスランを見上げる。

「私は、ゲルマニアのフォン・ツェルプストー。お世話になるわ」

「トリステインのラ・ヴァリエールよ」

「バルス＝タイラント。平民だ。世話になる」

最後のバルスの自己紹介にかなりの違和感を覚えたテルスランだったが、主人の友人ということもあるのでそこは不問とすることにする。テルスランは歓迎の笑みを顔にたたえ、嬉しそうに話し始めた。

「シャルロット様がこんなにもお友達をお連れになるなど、思いもよりませんでした」

二度目に聞くシャルロットという名前に、三人ともが首をかしげる。キュルケは執事に向き直り、口を開いた。

「シャルロットが、あの子の本名なの？」

「は？」

執事は意外そうに驚き、三人も同様に驚く。今度はバルスが執事に対して口を開いた。

「あいつの本名は、タバサじゃないのか？」

「シャルロット様は、タバサと名乗っておいでなのですか」

ふう、と執事はため息をつく。詮索するのが好きではないバルスは、それ以上問い詰めることはやめて口をつぐんだ。タバサの本名がシャルロットと分かれば、それで充分だったのである。

しかし、それでは納得できない者もいる。キュルケは、続けて執事に疑問をぶつける。

「どうして偽名を使って留学してきたの？あの子、自分のこと何も話さないのよ」

「留学は、国王である伯父の命です。」

執事は、少しずつ語り始めた。タバサは王族であり、現国王の弟であるオルレアン公の娘だったこと。オルレアン公はすでに亡くなっており、故に挨拶することもできないこと。

「そうだったの。既にお父様はお亡くなりに」

「いえ、正確にいえば殺されたのです」

タバサとルイズは目を見開き、ソファから身を乗り出す。バルスは興味なさそうに、目を閉じて背を背もたれに預けていた。

「どういうことなの？」

ルイズの当然の問いかけに、テルスランは静かにうなずく。約1名だけそっぽを向いているが、タバサの話を聞いて心配そうにする友人たちを見てテルスランは信用することにした。主であるシャルロットの、友人を見る目を信じて。

「5年前、王が崩御された時、オルレアン公の兄君である現国王との王位継承権争いが始まりました」

執事は語る。オルレアン公は現国王よりも魔法の才に優れ、何より人望に優れていたと。そのために休廷内が真っ二つに分かれ、やがて争いに発展してしまったと。その醜い争いの中、オルレアン公は謀殺されてしまったのだと。

ルイズはその話に瞳を潤ませ、かわいそうと心の中で呟く。キュルケもそれと同様であったが、顔には出さず真剣な表情で話しに聞

き入っている。
バルスは眉一つ動かさず、瞳を閉じたままで昔の自分を思い出していた。何度も謀殺されそうになり、その度に返り討ちにした記憶を。その記憶は、爽快なものではない。何しろ、それだけバルスの周囲の目は敵意に満ちていたのだから。

「そして、ジョゼフ様を王位につけた連中は、将来の禍根を断とうとお嬢様を狙ったのです」

流石のキュルケも、その後のタバサの扱いを想像して顔に動揺を映し出してしまっていた。ルイズもそれが自分だったらと、耐えられない思いに息をのむ。バルスはピクリと眉を動かしたが、目を閉じた冷たい表情を変えることはなかった。

「ある晩のこと、奥さんとお嬢様は晩餐会に招かれました。そこで渡された飲み物には心を狂わせる水魔法の毒が盛られており、それにいち早く気がつかれた奥さまはお嬢様の代わりにその飲み物を飲まれたのです。」

執事はギュウッと拳を握り、悔しそうに俯く。

「事は公になり、その貴族は断罪されました。奥さまは、自らを犠牲にしてお嬢様をかばったのです」

以来、シャルロットの母親は心を失い、タバサという娘に買い与えた人形をシャルロットだと思い込んでいるのだと執事はいう。タバサという名は、その人形からとったものだと。

「その日から、快活で明るかったシャルロット様は別人のようにおなりになりました。まるで、言葉と表情を自ら封印されてしまった

かのように」

その後のシャルロット、タバサは、生還不可能と言われるような任務を一人で任され、こなしてきたのだという。それはあからさまに王宮がタバサの命を狙っているとしか思えない任務ばかりであったと。

だが、タバサはその任務をこなし続けた。自分と、母親の身を守るために。

目を潤ませるルイズとキュルケの横で、バルスはある大貴族の命令で２００名ばかりの兵を引き連れて３万の軍勢に突撃させられた事を思い出していた。バルスにとっては何ということはなく３万の軍勢を簡単に壊滅させているが、あれはそういう意味だったのかと今更ながらに思うのだった。

コン、という扉をたたく音が一度して、タバサが姿を現す。タバサはゆっくりと歩き、テルスランとバルスたちの前に立つ。テルスランは懐から紐で丸く止められた羊皮紙を取り出し、両手で丁寧にタバサへと差し出す。

「国王の命令書でございます」

え、とルイズとキュルケが色めき立ち、バルスはゆっくりと目を開く。タバサは羊皮紙を受け取って開き、静かにその内容を確認した。その生還の余地もない命令であろう勅命に、ルイズとキュルケは心配そうにタバサを見つめる。

それはテルスランも一緒の心境であったが、鉄の仮面の下に隠した。

「いつ頃とりかかられますか？」

「明日の晩」

タバサは目を閉じ、俯いて答える。ルイズもキュルケも、かける言葉が見つからずにただ俯くしかない。
しかし、テルスランの目から見て一番興味のなさそうにしていた男が立ち上がった。

「ならば、俺も行こう」

ルイズとキュルケは顔を見合わせて笑顔となり、バルスに続いて立ち上がる。

「私も行くわ」

「私もよ」

タバサはその申し出を嬉しく思ったが、首を横に振る。大切な友人たちを、自分の事情に巻き込みたくなかったのである。

「危険」

タバサが短く呟くと、バルスは首を横に振って応えた。

「それは俺のセリフだ。俺の方がタバサより強いんだからな」

タバサは少し考え込んでいるようなそぶりを見せたが、少しの間をおいてうなずく。ルイズとキュルケもタバサに応え、うなずいた。
タバサは初めて頼もしい仲間を得て、過酷な任務に向かうのだった。

任務の指定された場所は、ラグドリアン湖。目的は、水の精霊を制止もしくは排除すること。

ラグドリアン湖の水は精霊の力によって溢れだし、周囲の領地を侵食し続けている。要するに、今回タバサに与えられた任務はその水を食い止めることだ。

最初バルスはその危険性が分からず、どこが生還不可能な任務なのかとルイズに聞いてみた。帰ってきた返事は張り手と罵倒だったが、キュルケが詳細を説明してくれたのでバルスは納得することができている。

このハルケギニア大陸での水の精霊はオンディーヌと呼ばれているらしく、その力は普通のメイジが束になってもかなわないとか。先住魔法と呼ばれる強力な魔法を操るため、タバサ程の実力を持ってしても単独で渡り合うことは難しいという。

月だけが明りの道を抜け、バルス、ルイズ、タバサ、キュルケは草がうっすらと生い茂るラグドリアン湖の湖畔にたどりつく。４人が水辺に立つのを確認すると、タバサは杖を振り始めた。

任務完遂への作戦は、まずタバサが風の魔法で人一人を覆うことのできる気泡を作り、湖底に眠る水の精霊に直接会いに行くことから始まる。そこで水の精霊と話し合い、水を引いてもらうように頼む。駄目なら力づくでというものだった。

まずバルスが脚を水につけ、少しずつ湖の中へと進んでいく。足首まで水が浸かったところで、バルスは歩くのをやめた。バルスは脚に水の振動を感じ、ムラマサに手をかける。

来る…！

轟音を立てて立ち上がった水柱に、バルスの後ろにいた全員が驚

いて杖を向けた。バルスはムラマサを引き抜いて構え、水柱を睨みつける。
まだ何もしていないのにとルイズ、タバサ、キュルケは驚き、荒らぶる湖の水柱をただただ茫然と見ていた。
ほどなくして、水柱は女性の姿を水でかたどる。その姿と魔力に、バルスは懐かしさを感じていた。

「よく参られた、我が主よ」

意味のわからない精霊の言葉に、ルイズ、タバサ、キュルケは頭の上に疑問符を浮かべる。その意味を理解しているたった一人の男は、構えをといてムラマサを地に突き刺した。バルスは、ふう、と安堵のため息をつく。

「ウンディーネか」

バルスは水辺に腰をおろし、ウンディーネを見上げる。ウンディーネは胸に手を当ててバルスにかしずき、忠誠を示した。
ムラマサは、ずいぶん昔に出会った仲間との再会をなつかしむ。

「あら、久しぶりじゃない。元気だった?」

「ムラマサ殿も、壮健そうで何より」

ウンディーネも懐かしそうにうなずいて答える。
ルイズ、タバサ、キュルケは、バルスにかしずく精霊の幻想的な姿に見惚れ、茫然とその成り行きを見守っていた。月はあでやかに光り、魔性の光は少女たちの心を虜とする。
やがて我に返ると、三人は慌ててバルスの元へと駆け寄った。キュルケはウンディーネを指さし、バルスに疑問の目を向ける。

「ねえ、どういうことなの？」

「ああ。こいつはウンディーネ。俺が昔契約した水の精霊だ。」

バルスは、バルスの世界の水の精霊と１０歳の時に契約を交わしていた。バルスの世界の水の精霊はウンディーネと呼ばれており、契約者は一人のみ、つまり、バルスだけである。

バルスはハルケギニア大陸を全くの異世界と考えていたが、その考えは間違っていた。確かに異世界ではあるのだが、その根本をなす精霊や神は呼ばれ方が異なるのみで共通のものだったのである。

バルスもそのことにはウンディーネが現れた時点で気が付いており、魔力が戻れば火の精霊イフリートや風の精霊シルフを呼び出すことも可能であると胸を躍らせた。

「まあ、こっちで言う使い魔みたいなものだな」

精霊が使い魔だなんて凄いとキュルケはバルスに抱きつき、タバサは憧れと尊敬を瞳に秘めてバルスを見つめる。ルイズはというと、強力無比な精霊を使い魔と言ってのけたバルスをとても遠くのような存在に感じ、心にぽっかりと空洞が開いたかのような空虚感にとらわれていた。

水の精霊が、使い魔…。

ルイズは不安になり、唇に手をあてる。バルスと使い魔の契約を結ぶという目的が、ルイズにはとても手の届かないような難問に思える。むしろ、それほどの力を持った使い魔を呼び出してしまったことに、ルイズは後悔の念さえ覚え始めていた。バルスのあまりの遠さに、ルイズは胸が締め付けられる思いでバルスの後姿を見つめ

る。
バルスは月の明かりの下、静かに立ち上がった。
「ウンディーネ、水を増やすのはやめろ。元の水位まで戻せ」
「承知した」
ウンディーネは二つ返事でうなずく。バルスがタバサに静かに笑いかけると、タバサは目を合わせられずに顔を俯かせた。
「で、少し聞きたいことがあってな」
「何だ、主よ」
他に目的はなかったはず、とルイズもタバサもキュルケも思考を巡らせる。なにも思いつかず、三人はバルスに注目した。
「人の心を狂わせる水魔法の薬を知っているか？」
タバサは驚いて目を見開き、バルスの顔を見る。
「エルフの薬のことか？」
そのウンディーネの回答に判断を付けかねたバルスは、振り返ってタバサをちらりと見た。タバサは目を見開いたままコクコクとうなずき、それが正解であることをバルスに告げる。
バルスは再び水の精霊を見上げる。
「治療薬を調合してくれ」

タバサの胸が、ドキリと高鳴る。期待に胸が満たされ、鼓動が速くなる。ルイズとキュルケも息をのみ、水の精霊を見上げていた。

「それは無理だ。主よ」

タバサの胸がもう一度高鳴り、絶望感に襲われた。水の精霊の魔法をもってしても、消すことのできない狂気の薬。もう母を元に戻すことはできないと知り、タバサの目から涙が伝う。キュルケは目を閉じてさめざめと泣くタバサに駆け寄り、両肩を抱いて慰めた。ルイズもタバサに駆け寄り、初めて見るタバサの涙を手で拭う。とめどなくあふれる涙が、ルイズの手を濡らし続ける。

「何故我に頼む？主の緑色マナなら、簡単に治せるはずだが？」

水の精霊の言葉にタバサは三度目の鼓動の高鳴りを感じ、期待と希望が胸に満ち溢れる。俯いていた顔を上げ、ルイズとキュルケを押しのける。瞳に涙をそのままに、タバサはバルスに駆け寄っていく。

バルスは首を横に振り、ウンディーネに応えた。

「駄目だ。魔法が使えない」

首を横に振るバルスの前にタバサが現れ、タバサはバルスの両肩をつかむ。涙をためた目で、バルスに訴えるように見つめた。

「どうすれば使えるようになるの？」

口調はいつもの大人しいタバサだが、泣きはらしたその顔にバルスはギョッとする。

バルスは魔力の戻し方に心当たりがあったが、それをタバサに伝

えることはしなかった。バルスは首を横に振る。

「分からん」

バルスから手を離し、悲しそうに俯くタバサ。バルスはタバサに悪いと思ったが、バルスはどうしてもその方法で魔力を戻すわけにはいかなかった。

その方法とは、ルイズとの使い魔の契約。何よりも大切な自由を失ってまで、バルスは人助けをするほどお人よしではない。だが、バルスはタバサの母親が狂わせたままでいいと思っているわけでもない。他の方法を見つけ、魔力を取り戻そうとバルスは考えていたのだ。

キュルケはバルスとタバサの様子を見守っていたが、今にも泣きだしそうなタバサの顔にいたたまれなくなり、駆け寄る。後ろからそっとタバサの肩に手を置き、キュルケはバルスの顔を見上げた。

「ねえ、バルス。もし魔力が戻ったとして、治療にどれくらいかかるの？一年？二年？」

その希望の持てる話しにタバサも顔を上げる。バルスは指を折って数え始め、五本まで折ったところで数えるのをやめた。ふう、とキュルケはため息をつき、タバサと目を合わせる。

「五年かあ。少し長いけど、十分待てるわよね」

タバサは少し元気を取り戻し、キュルケを見上げてコクリとうなずく。

「何言ってる？五分だ」

「へ！？」

「いや、だから五分」

精霊ですら治せない狂気を、五分とバルスは言い切る。タバサの瞳がまた潤んで、胸に希望を大きく膨らませた。

もう一人、バルスの言葉に希望を膨らませる者がいた。ルイズである。ルイズには病弱な姉がおり、その姉は生まれた時からほとんど屋敷を出たことがない。その姉の病気を、バルスなら治せるかもしれないと。

最後の一人、キュルケは驚きを隠せず、それを素直に顔に表している。

「どんな魔力持ってたのよ、ダーリン…」

あきれた、という表情をバルスに向けた後、キュルケはタバサを見て嬉しそうにほほ笑む。何かいいたそうなタバサに気がつき、キュルケはタバサと静かに歩んでバルスに近づく。

タバサはバルスの目の前に立つと、その腕をつかんだ。

「あなたの二つ名、教えて」

「あ、それ私もぜひ聞きたいわ」

ウッとバルスは弱った顔をし、ルイズを見る。ルイズはそっぽを向いたが、やがてゆっくりと歩きだしてバルスに近づいていく。

「わ、私も聞いてあげなくもないわよ？」

期待した言葉とは全く逆の言葉に、バルスは観念した。

「戦慄」

バルスはポソリと呟く。

「今夜のことは、誰にも言うなよ」

ニッとバルスは笑顔を作る。ラインハルト帝国、バルス＝タイラント侯爵。陸軍少将、二つ名は戦慄。それは三年前の、人々の英雄だった頃のバルス＝タイラント。

邪神は笑顔で嘘をつき、少女たちはその姿に似つかわしくない二つ名を笑うのだった。

第八話　惚れ薬は苦い味

ぐつぐつという音が試験管から沸き起こり、時折煙を噴させる。青い目で透明な桃色の液体を覗き込み、金髪を縦ロールに結った少女はにんまりと笑った。

彼女の名前はモンモランシー＝マルガリタ＝ラ＝フェール＝ド＝モンモランシ。トリステイン魔法学院の生徒で水系統の魔法を得意とするメイジであり、ルイズの級友でもあった。

モンモランシーが今作っているのは、人の心を操ることのできる惚れ薬である。トリステインではその危険な秘薬を精製することを禁止しており、その材料も効果で中々手に入るものではない。だが、モンモランシーはある人物から多額の報酬で精製を依頼され、その報酬に目がくらんだモンモランシーは依頼を引き受けてしまったのだ。

コンコンというドアをノックする音に、モンモランシーは振り返る。木の床、木の壁に囲まれた狭い実験室の扉が開き、惚れ薬の精製依頼をした人物が姿を現した。

桃色のブロンド髪に、鳶色の瞳。ルイズである。

「約束のもの、受け取りに来たわ」

「少し待って。もうすぐ完成だから」

ルイズはうなずき、モンモランシーの横まで歩く。ボコボコと音を立てる試験管を鳶色の目で覗き込み、顔を上げた。

モンモランシーがもう一つ試験管を持ってきて、それに入っている透明の液体を桃色の液体に流し込んでいく。紫色の煙が上がり、モンモランシーは怪しげな笑いを浮かべる。

「ふふ、できたわ」

モンモランシーは四角い透明なガラス製の小瓶を取り出すと、桃色の液体を注いでいく。小瓶は液体で満たされ、ガラス製の蓋で閉じられた。

その小瓶をとり上げ、モンモランシーはルイズに渡す。ルイズは受け取ろうとする手を一度躊躇させるように留めたが、また手を伸ばしてその小瓶を受け取った。

「確かに受け取ったわ。ありがとう」

「あんなにもらったんだもの。おつりがくるわ」

満面の笑みを浮かべるモンモランシーに頑張ってとからかわれ、ルイズは目を閉じて踵を返す。バタンと乱暴にドアを閉め、ルイズは自分の部屋に向かった。

ルイズは自室のベットに坐り、小瓶の中の薬とテーブルの上に置いた泡立つシャンパンを交互に見ていた。ルイズの心を代弁しているかのように、テーブルの上の蝋燭が時々揺れる。

この惚れ薬を作ってくれと頼んだ時、モンモランシーは非常に驚いていた。あの高飛車でプライドの塊のようなルイズがどうしたの、とでも言いたげに。ルイズ自身、今でもそう思っている。

私、何してるんだろう。

ルイズは立ち上がり、シャンパンの中に桃色の液体を落とす。ポチャリと音がして、桃色の液体はシャンパンの中に溶け込んだ。

ルイズは、あのウンディーネの一件以来不安で仕方がなかった。自分はバルスと使い魔の契約を果たせるのだろうかと。バルスはいつもタバサの部屋に本を読みに行っており、今日もそれは変わらない。こうして日が暮れるまで、ルイズとバルスは会うことがなかった。

時たまにバルスが暇そうにしている時でも、あのツェルプストーが来てバルスにじゃれつき、どこかへ連れて行ってしまう。おまけに、タバサやキュルケとバルスが一緒にいると、どうしようもなくイラつき、胸が苦しい。寂しい。

バルスは、ルイズにとって初めて心を組んでくれた人だった。初めて存在を肯定してくれて、初めてルイズをゼロじゃないと言ってくれたのもバルスだった。初めて会ったころの方が、今より余程心が近かったとルイズは思う。それは自分が遠ざけてしまった、心の距離。

ならいっそのこと、とルイズは禁断の薬に手を出した。使い魔との契約は、唇を重ね合わせることで成り立つ。それさえしてしまえば、使い魔の契約は消えることはない。惚れ薬が切れてバルスに嫌われても、その契約は切れることはないのだ。

ルイズは小瓶の蓋を閉じ、自分のベットの中に隠す。ベットに坐り、罪悪感と期待感に心を乱し、俯いて茫然としながらバルスの帰りを待った。

やがてトタトタという足音が扉の外から聞こえ、ルイズは顔を上げた。

バルスだ。

ルイズの部屋の前で足音が止まり、ゆっくりと扉が開く。扉の向

こう側から現れたのは、ルイズの予想通りバルスだった。ルイズは慌てて立ち上がり、テーブルに置いてあるシャンパンのグラスを手に取る。

「お、お帰りなさい」

「あ、ああ」

目を伏せ、瞳をそらすルイズ。いつになく元気のなさそうなルイズを見て、バルスは少し心配になって歩み寄る。

「どうしたんだ？」

その問いかけにルイズは声も出せず、思わずシャンパンのグラスを差し出した。バルスは突然差し出されたそのグラスに意味が分からず、グラスを指さす。

「こいつは？」

ルイズは意を決し、恐る恐る顔を上げた。バルスに感づかれないように、不安を顔から払拭して考えられるだけの笑顔を作る。

「そ、その、ご褒美よご褒美！」

「褒美？」

「そ、そう！今まで、色々助けてもらったお礼よ！」

ルイズは何度もシミュレーションしてきたほど自然に言えなかったが、大体大筋に沿って出たセリフに胸をなでおろす。

バルスはルイズのご褒美宣言に違和感を覚えたが、この世界で信じられる数少ない友人の言葉を疑うのもどうかと思い、考え直した。

「そうか。ありがたくいただこう」

バルスは何の疑いもなく、渡されたグラスに口を運ぶ。ルイズは罪悪感にとらわれたが、これでいいんだと自分に言い聞かせる。バルスはグラスに口を付け、ルイズはグラスの中のシャンパンがなくなっていくのを見つめる。

バルスはシャンパンを飲み干すとグラスを口から離し、ふう、とため息をついた。

ルイズは胸を高鳴らせ、バルスの様子をうかがう。

「ど、どう？」

「どうって…！？」

バルスの動きが止まり、手からグラスが滑り落ちる。グラスは床に落ちてわれ、バルスは首元を押さえて地面に倒れこんだ。

モンモランシーは、自室でほくそ笑んでいた。大金を得て、次はどんな秘薬の材料を買い、どんな秘薬を作り、どんなものに試そうかと胸躍らせる。

しかし、ドタバタという足音とドンドンという扉をたたく大きな

音にそれは邪魔されることになる。

「誰よ、こんな時間に」

モンモランシーは縦ロールの金髪を揺らし、歩み寄って扉を開ける。そこには、憔悴しきったルイズの姿があった。

「急いで一緒に来て！！」

「ど、どうしたの！？」

「いいから早く！！」

ルイズはモンモランシーの手をつかみ、部屋から引きずり出す。モンモランシーの手を掴んだまま、ルイズは廊下を走りぬけて自室へとたどり着いた。

急いで扉を開け放ち、ルイズの部屋へモンモランシーを引きずりこむ。ルイズはベットを指さし、大声を張り上げた。

「どういうことよ！？ただの惚れ薬じゃなかったの！？」

モンモランシーは状況をよく飲み込めず、ルイズの指さすベットを見る。そこには、苦しそうにうめく黒髪の青年が横たわっていた。首元を押さえ、まるで毒に苦しんでいるように見える。

ルイズは黒髪の青年に駆け寄り、苦しそうにもがく青年の手をとる。

「大丈夫！？バルス、バルス…！！」

ルイズはモンモランシーの方へゆっくりと振りかえる。振り返っ

た瞳からは、ボロボロと涙があふれていた。ボロボロと涙を流したまま、ルイズはモンモランシーを睨みつける。

「あなたが作った薬でしょ！？なんとかなさいよ！！」

ルイズの剣幕に押され、モンモランシーは慌てて青年に駆け寄った。モンモランシーは青年の目を開いて瞳孔を確認したり、顔色を確認したりと青年が何に苦しんでいるかを探索する。

モンモランシーは、自分の作った惚れ薬に絶対の自信があった。だから、青年が他の原因で苦しんでいると考えたのである。

ルイズはバルスの体調を見るモンモランシーの横で、バルスに話しかけ続けていた。

「こんなつもりじゃなかったのに！ごめんなさい、ごめんなさい…！！」

ルイズからは、もう涙とごめんなさいという言葉しか出なかった。ごめんなさい、死なないでと青年の手を握り続けるルイズ。

ルイズのその姿に驚いていたモンモランシーであったが、バルスの苦しんでいる理由に気がついてもっと驚くことになる。

「凄い、戦ってるんだわ！」

バルスが苦しんでいた理由、それは心を支配しようとする惚れ薬の魔力と戦い続けていたことだった。バルスの自由に対する異常なまでの執着と元々併せ持っていた精神力が惚れ薬を拒絶し、拒絶反応が苦しみとしてバルスを襲っているのだ。

モンモランシーは青年の精神力の強大さに息をのんだが、感心してもいられない。このままでは遠くない将来自我が崩壊し、死にはしなくとも抜け殻のようになってしまう。

泣き崩れるルイズの両肩を抱き起こし、モンモランシーはその身体をゆする。

「しっかりして！彼は助かるわ！」

「え！？」

「惚れ薬の解毒薬を作れば、助かるのよ！」

ルイズが落ち着きを取り戻すと、モンモランシーは何故バルスが苦しんでいるのかを説明する。そして、あまり時間がなく、解毒薬を飲ませなければどうなるのかという結果も。

「解毒薬の材料はラグドリアン湖の水の精霊が持ってるわ。急ぎましょう！」

「分かったわ」

ルイズは力強くうなずき、立ち上がる。杖を持って急いで身支度を整え、出発の準備をする。

部屋を出る間際、ルイズはもう一度だけバルスに駆け寄ってその手を握った。

「すぐ治すから。ごめんなさい…」

ルイズはバルスに背を向け、部屋を飛び出していった。

うっすらと草の生える地面、心地よいさざ波の音、綺麗な月の光。ラグドリアン湖のほとりに、ルイズ、モンモランシー、タバサ、キュルケはシルフィードに乗って降り立った。

事は急を要し、背に腹は代えられないとルイズはタバサとキュルケに助力を要請した。タバサもキュルケもバルスの命が危ないと聞き、二つ返事で助力を了承している。

湖のほとりに四人は横一列に並ぶ。モンモランシーが指を針で傷つけ、その使い魔のカエル、ロビンに血を預けた。その様子を横目で見ながら、キュルケは不安そうに湖を眺める。

「私たちの言うこと、聞いてくれるといいんだけど」

その場にいる全員に、その不安はあった。前回は水の精霊の主であるバルスがいたので交渉も上手くいったが、今回はそのバルスがいない。解毒薬の材料を水の精霊が分けてくれる保障など、どこにもなかった。

ルイズは不安に心をむしばまれながら、バルスの苦しむ顔を思い浮かべる。

「絶対、何があっても貰うんだから！！」

水柱が湖にそそり立ち、ルイズはそれを見据える。タバサとキュルケはルイズの強い眼差しを見て、コクリとうなずいた。

水柱が女性の姿に変わり、水の精霊が姿を現す。

「久しぶりだな、単なる者よ。よく来た、我が主の友よ」

ルイズ、タバサ、キュルケはホッと胸をなでおろし、モンモラン

シーは首をかしげる。ルイズは首をかしげるモンモランシーに構わず、両手を広げて水の精霊に訴える。

「あなたの身体の一部を分けてちょうだい！」

水の精霊は身体を震わせ、考え込む。水の精霊は、昔バルスの頼みを断ってみた時の事を思い出していた。水の精霊を祭っている村を洪水で滅ぼせという内容だったので断ったのだが、その時は圧力なべの中に魔法で閉じ込められた挙句、火に掛けられた。極悪非道である。

またある時はアンドバリの指輪を研究するから貸せと言われてそれを拒否したら、タッパーの中に魔法で詰められた挙句、氷の中に閉じ込められた。トラウマである。

主の友人の頼みを断れば、今度はどんな目にあわされるか分からない。この程度の頼みなら素直に聞いた方がいいとウンディーネは思う。

「よかろう」

身体の一部を入れた小瓶を宙に浮かせ、ルイズの手へと運ぶ。ルイズは意外そうな顔をしたが、それをしっかりと受け取った。

「ただし、我からも頼みがある」

四人が四人、水の精霊を見上げてその頼みごとに身構える。

水の精霊は本当は主であるバルスにそれを頼みたかったが、昔頼みごとをしたら実験と称してゴーレムの冷却水にされたのでそれができなかった。仕方がないので、その友人たちに頼むことにしたのである。

「我が護りし秘宝を、貴様らの仲間が奪ったのだ。それを取り戻してほしい」

四人は、不思議そうに顔を見合わせる。ルイズは顔を上げ、水の精霊に問いかけた。

「それはどんな秘宝なの？」

「アンドバリの指輪。我とともに、我と同じ時を過ごした指輪」

モンモランシーは、その名に深刻そうに顔を俯かせた。アンドバリの指輪は人に偽りの魂を与える強力なマジックアイテム。その効果のほどまでは分からないが、噂によると死者をも蘇らせるという。

モンモランシーがそのことを説明すると、キュルケは水の精霊を見上げた。

「とってったのは、どんな奴なの？」

「個体の一人がこう呼ばれていた。クロムウェル。それしかわからん」

四人は顔を見合わせてうなずく。それぞれの顔に、決心の火をともして。

ルイズは訴えるように大きく両手を広げ、再び水の精霊を見上げた。

「分かったわ。あなたの指輪は必ず取り戻すと誓うわ」

水の精霊はコクリとうなずき、湖の中へと消えていく。ルイズは解毒薬の材料を手に入れ、ひとまず胸をなでおろすのだった。

ルイズは、自分のベットで穏やかな表情で眠るバルスをそのベットに腰掛けて見つめていた。
モンモランシーの言った通り、解毒薬を飲ませるとバルスの苦悶の表情はとけ、今は何事もなかったかのように眠っている。タバサとキュルケはバルスの表情が穏やかになるのを確認するとそれぞれの自室に戻っていった。

起きたら、あなたはまたあの目を私に向けるの？バルス。

ルイズは出会った頃のバルスを、鞭で叩いた時のバルスを思い出す。
ルイズは、バルスを見ながら考えていた。自分はなんてバカなことをしたのだろうと。よくよく思い返してみれば、バルスの心はまだ遠くにはいなかった。夜になると、バルスは使い魔でもないのにちゃんと律儀にルイズの部屋に戻ってきていた。使い魔ではないのだから、タバサの部屋に泊まればいいのにもかかわらず。
それをしなかったのは、バルスが何だかんだで一番ルイズを信用していたからである。一番隙のできる睡眠という時間をとる夜に、バルスは一番信用のおけるルイズのところに帰ってきていたのだ。
先ほどもルイズがバレバレの怪しい演技をしたにもかかわらず、バルスは何の疑いもなく惚れ薬入りのシャンパンを飲んだ。それも、ルイズに褒美だと言われて喜んで。
バルスは、もう自分を信じることはないだろう。この部屋に帰っ

てくることもなく、恐らくタバサの部屋に泊まることになる。そう思うと、ルイズは胸が張り裂けそうになる。

あまりに遠くしてしまった心の距離に、ルイズは寂しさと寒さで話し相手がほしくなった。この気持ちを聞いてくれる誰かが、例え罵倒されたとしても聞いてくれる誰かがほしかった。

ルイズはそっとムラマサを引き抜く。

「あら？何か用かしら？」

「全部見てたんでしょ？」

「ええ。見てたわ」

ルイズは押し黙り、静寂があたりを包む。ルイズは目を伏せ、ムラマサの言葉を待った。ムラマサはルイズの落ち込みようを気の毒に思ったが、ここは言っておくべきところと腹をくくる。

「あなた、少しひどすぎるんじゃない？私のご主人様も大概だけど」

ルイズは目を伏せたまま、ムラマサの言葉に黙って聞き入る。心がザクリと音を立て、抉られるのに耐えて。

「まあ、私のご主人様は見返りを求めない人だから、何か報いる必要はないと思うわ。でもあなた、ご主事様の事何も知ろうとしないし。だから平気で鞭で殴ったり毒盛ったりしちゃうのよ」

ルイズはハッとする。確かに、ルイズはバルスの事を一度も聞いたことがなかった。どこから来たのか、どんなことをしていたのか。見た目だけで判断して、貧民と決めつけていた。

バルスにも、家族はいたかもしれない。友人がいたかもしれない。

愛する人がいたかもしれないというのに。ついこの間も、バルスが侯爵であると聞いて驚いたばかりである。

私、最低だ…！

それが自分であったらと、すべて引裂かれたらと、ルイズは出そうになる涙をこらえて顔を上げる。

「バルスに家族はいるの？恋人は？」

「家族はいたわね。恋人はいなかったけど、友人はそれなりに」

耐えられない胸の苦しさに、ルイズは瞳を潤ませる。ルイズは、バルスから地位も、愛する者も、その全てをとり上げてしまったのだ。

「バルスは、どんな人だったの？」

ルイズは震える声を押し殺し、涙がこぼれそうなのを俯いて隠す。

一方で、ムラマサはどこまで喋ろうかと思案していた。最後の１５万人の中に家族や友人が含まれていたのは本当であるが、それまでの２０億人殲滅物語は話すと主人が怒りそうである。

ムラマサは、とりあえず少将で侯爵だった頃のバルスについて話すことにした。

「バルスはね、英雄だったわ」

「英雄？」

「ええ。弱体化した国を立て直して、戦争では不敗の名将。平民出

身だったんだけど、皇帝陛下の信頼はとてもあつかったわ」

町娘にも貴族の令嬢にも人気は高く、バルスの力を誰しもが当てにしていたとムラマサは語る。

「どうして…」

ムラマサは、ルイズからポソリと漏れた言葉に主の自慢話をやめた。ルイズの瞳からはポロリポロリと涙が落ち始め、ムラマサはギョッとする。

ルイズは溢れだした感情を抑えられず、声を震わせる。

「どうして平気でいられるの？どうして何も言わないの？」

「ル、ルイズ、さん？」

「どうして、私なんかを助けるのよ…！？」

ルイズのポロポロとこぼれていた涙は、いつしか頬を伝う一筋の涙となって溢れていた。止められない涙、止められない後悔の念。ルイズはいつ果てるともしれない涙を流し続けるのだった。

窓からこぼれる朝の日の光に、バルスは眩しそうに顔をそむけた。やがて眩しさに慣れたバルスは目を開け、上半身を起こして目をこする。何故だかあまい香りのするベットをよく見ると、それがいつも自分が寝ていたベットではないことに気がついた。

ボーっとする頭を抱え、何故自分がルイズのベットに寝ていたのかをバルスは腕組みをして考える。少しずつ意識が覚醒し、やがてバルスは思い出した。ルイズに何かを盛られたことを。

バルスは部屋全体を見回して椅子に座って顔を俯かせているルイズの姿を認めると、敵意に満ちたあの目を向けた。ムラマサに手をかけようと、バルスの手が上がる。

あれ？ない！？

バルスの手は空をきり、ムラマサを掴むことはなかった。よくよく考えてみればそれは当然のことであり、バルスはルイズの様子をうかがいながら警戒しつつベットを降りる。

ルイズは顔を俯かせたまま、ポソリと呟いた。

「バルス」

バルスはルイズの声にピクリと反応し、動きを止める。ルイズの疲れきった力のない声に違和感を覚え、ルイズの俯く顔を覗き込もうと身をかがめる。

ルイズの顔が少しずつ上がり、バルスはその様子に息をのむ。そのルイズのうつろな目、疲れきった顔、涙の後に。

「私、あなたを使い魔にするのを諦めるわ」

バルスは、ルイズが一晩かけてどれほど後悔したのかを知った。そしてそれを踏まえても、今度という今度はルイズを許すことができなかった。

バルスはルイズの横に置かれたムラマサをひっつかみ、背を向ける。

「そうか」

その無感情な言葉だけを残し、バルスはルイズの部屋を去って行った。ルイズは一人になってしまった自分の部屋を見回し、再び顔を俯かせる。一晩泣き、後悔し、枯れ果てたはずの涙。その涙が、ルイズの頬をもう一度だけ伝うのだった。

第九話　さよならの婚約

トリステイン王国、王都トリスタニア。それは王城をはじめ白い石造りの建物が殆どを占める美しい街で、町の中には王城と貴族の屋敷、下町を区切るように大きな川が流れている。

そのトリステインの王城の一室に、バルスとルイズは呼び出されていた。呼び出したのは、トリステインの姫君アンリエッタ王女である。

床は大理石でまばゆく輝き、天井は蝋燭のシャンデリア。美しい彫刻があちこちにおかれたその部屋で、ルイズはアンリエッタの前にかしずき、バルスは無愛想な無表情を顔に浮かべて突っ立っていた。

アンリエッタは一段、二段と高い位置に置かれた椅子に坐っている。その顔に、憂いを込めた笑顔を浮かべて。

「よく来てくれました。ルイズ＝フランソワーズ、バルスさん」

ルイズはかしずいたまま沈黙で応え、バルスは軽くうなずいて応える。アンリエッタは椅子から立ち上がると、一段、二段と階段を下った。

「今日お呼び立てしたのは他でもありません。あなたたちに、極秘裏にお願いしたいことがあるのです」

極秘裏と聞き、ルイズはそのただならぬ言葉に顔を上げる。アンリエッタの浮かない顔に初めて気がつくと、ルイズは慌てて立ち上がった。そして、すぐにアンリエッタの様子に気がつかなかった自分を恥じる。

ルイズがすぐに顔を上げられなかったのは、バルスとのいさかい

が原因である。落ち込んだ自分の顔を見られまいと、余計な心配をかけまいと、ルイズは必死に下を向いていたのだ。だが、アンリエッタが自分よりも苦しい決断を迫られていたことを知り、ルイズは一瞬でも昔の幼馴染との約束を忘れていたことを恥じたのだった。

「いかがなさったのですか？」

「私は、ゲルマニアに嫁ぐことにいたしました」

「なんですって！？」

ルイズは大きく目を見開き、驚く。ゲルマニアと言えば、金さえあれば平民でも貴族になりあがることのできる野蛮な国である。皇帝は始祖ブリミルの血をひかず、トリステインからすれば隠したの国であった。

「よりによって、あんな野蛮な成り上り者の国に！？」

アンリエッタは顔を曇らせ、そむける。

「仕方がありません。小国である我がトリステインを守るためには、ゲルマニアと強固な同盟関係が必要なのです」

顔を曇らせる幼馴染に何もすることもできず、ルイズは無力な自分に歯噛みする。バルスは昔バルスの世界でよく聞いた話に今更感慨がわくこともなく、無表情を崩すことはない。

ルイズは顔を伏せると、首を小さく横に振った。

「お国のためとはいえ、あまりにおいたわしい…」

「私はトリステインの王女。国のためにこの身を投げ出すことなど厭いはしません」

アンリエッタはルイズとバルスに背を向け、今にも泣き出しそうな自分の顔を隠す。目は潤み、声は震えそうになるが、幼馴染に心配をかけまいと押し殺した。

「ですが、その前にどうしてもしておかなければならないことが…」

背を向けたアンリエッタの心情を思い、ルイズはたまらず心から訴える。

「姫様、私にできることでしたら何なりとお申し付けください！」

「ありがとう、ルイズ＝フランソワーズ。あるものを回収してきてほしいのです」

アンリエッタは背を向けたまま、窓のそばへと歩み寄る。窓のガラスに手を添えると、アンリエッタは外を眺めて気を落ち着けた。

「私が、アルビオン王国のウェールズ皇太子に宛てた、一通の手紙です」

「あ、アルビオン…！」

ルイズは何度となく驚き、バルスは新しく出てきた国名を無表情に記憶する。そして、バルスはアンリエッタの頼みというのも大体のあたりを付けていた。

そしてそれは間違っていないということを、アンリエッタの言葉が裏付けていく。

「その手紙のことが世間に知られれば、この縁談は破談になってしまう」

「姫様…」

回収しなければ破談になってしまう内容の手紙。それは、アンリエッタ王女がウェールズという皇太子に宛てた恋文に違いなかった。バルスはその厄介そうな姫君の依頼を、断ろうかと思案する。

もしそのウェールズ皇太子に会えたとして、嫉妬に狂った皇太子がその手紙を渡すことを拒んだ時など厄介きわまりないのだから。

「アルビオンは今、政情不安定で危険な状態にあります」

「貴族たちが反乱をおこし、今にも王室が倒れそうだとか」

アンリエッタとルイズから漏れ出す厄介きわまりない状況に、バルスはますます辟易していた。訳してみれば、この依頼、王女の恋文を回収してくるだけのバルスにとって一番くだらない部類に入る任務である。その内容のくだらなさにもかかわらず、こうした類の任務は死者が出やすい。

バルスも何度か同じような任務をこなしたことがあったが、身の危険はともかく面白さも達成感もなかった。つまらないことはやらない。それも自由であるとバルスは結論づく。

「ごめんなさい。親友のあなたにこんなことを頼もうとするなんて、私は…」

アンリエッタの肩が震えだし、アンリエッタはその押し殺していた感情を抑えきれなくなっていた。声は震え、手は震え、瞳からは

涙があふれ出す。

「でも今、こんなことを頼めるのは、あなたたち以外には…」

ルイズは思わず口に手を当て、アンリエッタに駆け寄る。そのまま床に跪き、貴族の礼をとる。

「ありがとうございます、姫様」

「ルイズ＝フランソワーズ…」

「そのような重要な任務を、この私めに命じてくださるなんて。この上なき幸せにございますわ！」

ルイズのアンリエッタを思いやる言葉に、アンリエッタの顔は少し明るくなる。その少しでも明るくなったアンリエッタの顔に安堵すると、ルイズはバルスを恐る恐る見やった。

バルスはもはやルイズの言うことは絶対に耳をかさないはずである。むしろ、ルイズが任務を受けたことでバルスが任務を受けないことさえ考えられた。ルイズと一緒にいることを嫌い、引き受けない可能性があったのだ。

だが、それは杞憂。肩を震わせるアンリエッタを見て、バルスは初めてあった時のアンリエッタの言葉を思い出していた。自由は宝。そう言ってくれたのは、アンリエッタだけだった。その言葉は、バルスの結論を逆転させるのに十分だった。

「事情は分かった。俺も行こう」

思いやりの言葉と、頼もしい言葉。二人の心許せる者の言葉に、アンリエッタはしばし明るい笑顔を取り戻すのだった。

トリステイン学院、草原の広がるトリステイン学院の門。門からは土がむき出しになった一筋の道が延び、草原を地平線まで横断している。

その場所で、ルイズは一人ある人物の到着を待っていた。それは少なくとも、バルスではないことだけははっきりしている。その人物は、アンリエッタがこの任務に際して派遣してくれる護衛役の人間なのだから。

バルスはというと、ルイズを置いて一足先にアルビオンに向かっていってしまった。あのタバサと一緒に。

バルスは敵地を先に下見に行くと理由を付けていたが、ルイズにはわかっていた。本当の理由は、自分と一緒にいたくないからだと。

それを告げられた時、ルイズの心は深く傷ついた。道中、少しだけでも話をして、少しだけでも笑いあえる関係に戻れるチャンスがあるのではないかと期待していたのである。ルイズも、さすがに同じ空気を吸う事さえもというほどバルスに嫌われているとは思っていなかった。自分のしたことへの認識の甘さに嫌悪し、自分でまた自分の心を傷つける。誰もいない朝の静けさが、それを加速させていく。

ルイズは寂しさで泣きそうになるのを必死でこらえながら、護衛役が現れるのを、話し相手が現れるのをひたすら心待ちにしていた。

ジャリ、ジャリと学院の中から歩いてくる何者かの足音を聞き、ルイズは顔を上げる。ようやく寂しさから解放されると喜んだ顔は、すぐにゆがんだ。

その足音の主は、サラリとした金髪に端整な顔立ちをした青年。

その印象は、誰が見てもこういうだろう。ナルシスト、キザ野郎と。

「やあ、ルイズじゃないか。奇遇だね」

「ギーシュ！？」

ルイズの前に現れたのは、ギーシュ＝ド＝グラモンだった。ギーシュは気障な笑みを浮かべながらも、数時間前にあった恐ろしい出来事を思い出していた。

数時間前、ギーシュはある男に会っていた。ある男とは、バルス＝タイラントというルイズが呼び出した現トリステイン学院最強の使い魔である。その最強の使い魔は、ギーシュの部屋に上がり込んでギーシュをたたき起し、朝トリステイン学院の門の前に来るように要求してきたのだった。

そのあまりに無礼で意味不明な要求にギーシュも首を横に振ったが、バルス＝タイラントという男は悪魔だった。どこから聞きつけたのか、ギーシュのガールフレンド、モンモランシーが惚れ薬という禁製品を作ったことを、言うことを聞かなければ公表するというのである。トリステイン王国では惚れ薬の精製が法律に違反することは周知の事実であり、ギーシュはモンモランシーを守るためにその要求をのまざるを得なかった。そして今、ここに至るのである。

それにしても、彼も素直じゃないな。

ギーシュがそう思ったのは、その脅迫の後に聞いた詳しい要求の内容であった。その内容は多岐に渡ったが、要約すればルイズの護衛役である。バルス曰く、味方の味方が味方とは限らないと。その点、ギーシュはバルスやルイズと深い親交はなかったものの、普段のことから少なくとも敵ではないと分かっている。

命をかけて護る必要はない。ただ、危ない時は知らせてくれれば

いいとバルスは語っていた。

「こんな朝早くに君は何をしているんだい？」

その自分のセリフに白々しさを感じつつも、あくまで偶然を装うギーシュ。ルイズはその気障な笑みを浮かべるギーシュから顔をそむけた。

「あなたには関係ないわ。あなたこそこんなところで何してるのよ？」

ルイズは一瞬まさかギーシュが護衛かと思ったが、ギーシュの口ぶりからそれは考えられない。とはいえ、こんな朝早くに門で出くわすなど偶然では考えにくい。ルイズはギーシュに疑問の目を向ける。

一方で、ギーシュはその返答に詰まっていた。まさかバルスに頼まれたとばらすわけにもいかず、上手い言い訳を考えながら目をそむける。

そのギーシュの危機を救おうと、ルイズの背後から迫る者がいた。ルイズの背後で土が盛り上がり、ボコボコと音を立てる。その音に気がつき、ルイズは後ろに振り返った。

「ビッグモール？」

「ヴェルダンデ！」

盛り上がった土の中から姿を現したのは、ギーシュの使い魔ヴェルダンデだった。ヴェルダンデはフンフンと鼻を鳴らし、穴から這い出てルイズに近付いていく。最初はルイズに問い詰められるギーシュを助けるために現れたヴェルダンデであったが、どうにもルイ

ズの手からいい匂いがする。
　ベルダンデは珍しい宝石を好む習性があったが、その珍しい宝石の匂いがルイズの手からするのだ。ヴェルダンデはたまらずその匂いに飛びついた。
　ルイズはヴェルダンデに押し倒され、驚いてバタバタともがく。
「いや！ちょっと、どこ触ってんのよ！！」
　ヴェルダンデはルイズの腕をつかみ、フンフンと鼻を鳴らす。そのルイズの指には、蒼い宝石のついた指輪が輝いていた。
　その指輪を見て、ギーシュは納得したようにうなずく。
「なるほど、指輪か。ヴェルダンデは宝石が大好きなんだ」
「冗談でしょ！？」
　ルイズの付けている指輪は、水のルビーと呼ばれる指輪だった。それは、報いる物がないからとアンリエッタが大切にしていた指輪をルイズに少しでも報いるために渡したものだ。そんな大切なものを手放せるはずもなく、ルイズは激しく抵抗する。
「姫様にいただいた貴重な指輪を、モグラなんかに食べられてたまるもんですか！」
　フンフンしているヴェルダンデとワタワタしているルイズを交互に見て、これは危険に類するものなのかとギーシュはバラの花を口元にあてて考える。ギーシュの冷静で人ごとな目を見て、ルイズの感情メーターは大きく動いた。
「見てないで、助けなさいよ！」

そのルイズの叫びに呼応するように、草原のかなたで砂塵が沸き立つ。砂塵は蛇のようにうねりながら、ルイズの上に乗っているヴェルダンデに襲いかかった。ヴェルダンデの巨体が宙を舞い、地面にたたきつけられる。

ヴェルダンデは目を回し、その場に倒れ込んだ。

「ヴェルダンデ!?誰だ!?」

ギーシュは驚いてあたりを見回し、大切な己の使い魔を吹き飛ばした者の姿を探す。ルイズも起き上り、首を左右に振ってあたりの様子を窺った。

バサリ、バサリと空から羽ばたく音がして、ルイズとギーシュは空を見上げる。朝もやの中、靄を切るようにして鷹の頭と立派な翼をもち、下半身はライオンの身体を持つそれは現れた。

「グリフォン!?」

ギーシュは驚いて目を見開き、ルイズはその幻想的な光景に息をのむ。グリフォンはその鷹特有の鋭い目で二人を認めると、二人の目の前に降り立った。グリフォンの背中で人影が動き、ギーシュは人影にバラの花を向けた。

「き、貴様、何者だ!?」

ギーシュの問いに応えるように、人影はグリフォンから地に降り立った。白い羽つきの洒落た紺色の帽子に、紺色のマント。姿を現したのは、口髭が凛々しい長髪の美男子だった。

「アンリエッタ様から君たちの同行を命じられたグリフォン隊隊長、

ワルドだ」

ルイズはその男を見るなり、驚いて手を口にあてる。ギーシュもその男の名を聞き、肩書きとうわさを思い出して頭がしびれるほどに驚いていた。

「あ、あなたは！」

「あの有名な、魔法衛士隊の！？」

ワルドはにこりと優しい笑顔を浮かべ、ルイズとギーシュに近づいていく。

「久しぶりだね、ルイズ」

ワルドはルイズの手をとり、ルイズは口元をゆるめる。

ルイズは、冷え切った心が少しずつ温まるのを感じていた。ルイズがまだ幼いころ、魔法を使えずにいじけていた時に支えてくれたのがワルドだった。ルイズにとって理想の王子様であり、数少ない無条件の強い味方。そして、かけがえのない人。

「驚かせてすまない。僕の許嫁が襲われているのかと思ってね」

ギーシュはその言葉に驚き、端整な顔を大きく崩す。ワルドはルイズを足元から掬いあげると、お姫様を抱くように抱えて笑う。

「相変わらず軽いな、君は。まるで羽根のようだ」

「お、お久しぶりですわ。ワルド様」

頬を赤らめ、ルイズはワルドの笑顔から目をそらす。二人の中睦まじい姿、ワルドの持つ肩書き、美しい容姿、強力な魔法。どれをとっても、非の打ちどころのない騎士の姿。ギーシュは思った。

こ、これは、彼に報告すべき危険というものかな…。

岩で作られた町並みが並ぶ、ラ・ロシェール。山間に作られたこの街は、巨大な古代の世界樹を台座として作られた港をいただく、浮遊船の港町である。この港町の一角、小さな服屋にバルスの姿はあった。

木でできた床、岩でできた壁、飾られた数々の色とりどりの服。そして、試着をするための青いカーテンがひかれた個室。バルスはその個室の前に用意された木の椅子に坐り、ぼんやりと木の床を眺めていた。

バルスがぼんやりと考えているのは、ルイズのことだった。

ルイズの部屋を出た後、落ち着いたバルスはあまり状況をよく理解できていない自分に気がついた。何しろ、ルイズに何かを盛られてひどい目にあったことしか思い出せないのである。

そこでムラマサに事の顛末を説明させたのだが、あのルイズがバルスに盛ったのは惚れ薬だったとムラマサは語った。それだけでもとんでもない愛の告白を受けたようで気恥ずかしいのだが、おまけにムラマサは侯爵だった頃のバルスの話までしたと言う。それで、ルイズはバルスを喚び出したことを深く後悔していたと。にもかかわらず、バルスは一晩泣き明かしたルイズに対して辛辣な態度をと

ってしまっていた。
　これでは、気恥ずかしいやら気まずいやらでルイズにどんな顔をして会えばいいのか分からない。謝罪をするのは筋違いであろうし、かといって普段通りにおはようともいかない。
あのアホ刀め…。余計なことをルイズに吹き込んでくれたな。
　出てくるのは、その結論ばかりだった。バルスの侯爵時代の話をされれば、友人や家族の話がたくさん出てきてルイズの心を抉るのは当然だったのだから。
　バルスは、木の床を眺めながら似たようなことを考えながら、また似たような結論に達していく。何度目か同じ結論に達したころ、試着用の個室のドアがサッとひかれた。
　青いカーテンが揺れ、誰かの綺麗な白い脚とおしゃれな茶色のサンダルがバルスの視界に入る。バルスがゆっくりと顔を上げるにつれ、膝あたりのところまで伸びた白いスカートの裾が目に入り、やがてその服が白い長そでのワンピースであることが分かっていく。青い髪の少女、タバサは、椅子に坐るバルスを無表情のまま見下ろしていた。
「どう？」
　その問いかけに、バルスはすぐに応えることが出来なかった。目が点となり、普段と違った雰囲気のタバサから目が離せない。
　そもそもバルスとタバサがこの店に入ることになったきっかけは、この街でのアルビオンの情報収集に際してのタバサの提案だった。それは恋人同時に見せた方が町の中での行動に不自由しないというものであったが、バルスも町の人々の中に溶け込むにはその方がいいかもしれないと思って賛成した。
　だが、目の前のタバサを見てバルスは思った。別の意味で目立ち

すぎると。

「そんなに見られると、恥ずかしい」

タバサは頬のあたりを少し赤らめると、バルスから目をそらした。その流し目と仕草が、異常なまでに可愛らしい。今のタバサと歩いていたら、確実に周囲の目線はバルスたちへ集中するに違いない。

しかし時間のかねあいもあり、バルスはそれを言うことはできなかった。

「い、いいんじゃないか？」

バルスは、店の勘定を済ませるとタバサの手を引いて足早に店を出る。通りに出てしばらく歩くと、バルスの予感は現実のものとなっていた。

すれ違う男どもが、振り返る、また振り返る。おまけに、バルスの手を掴んでいたタバサの手が、いつの間にか腕を掴んでいる。身体がぴったりとくっつき、まるで恋人同士のようだ。

周囲からは羨ましそうな目線が送られ、バルスはより前途多難となってしまった任務にため息をつくのだった。

ルイズは、ワルドの腕の中で抱きかかえられながらグリフォンの心地いい揺れに身を任せていた。

「驚きましたわ。ワルド様がいらっしゃるだなんて、聞いておりませんでしたから」

「お忍びの任務にグリフォン隊を動かすわけにはいかないからね。姫殿下から手紙の件で相談を受けた時に、僕が護衛を志願したんだ」

「自ら志願なさったのですか？」

「当然だ。君の名を聞いて、僕が黙っているわけにはいかない」

「ワルド様…！」

ルイズは頬を赤らめ、笑顔をこぼす。ワルドも優しい笑顔でルイズに笑いかけ、二人はいわゆる二人だけの世界というものを作り出していた。

その後ろから馬でついていくギーシュは、仲睦まじい二人を見ながらため息をつく。

ますます、バルスに勝ち目はなさそうだな…。

片や貧民で粗暴、片や貴族で紳士。前者であるバルスに、後者のワルドに優るステータスはギーシュから見て思い当たらない。おまけに、この道中ルイズとワルドはずっとあの調子である。

「疲れたかい？」

「いいえ、全然」

「今まで会えなかった分を取り戻す、いい機会だ」

「え？あ、はい…」

ルイズは頬を赤らめ、気恥ずかしくなってワルドから視線をそらす。作りだされたルイズとワルドの二人だけの世界は、一人の金髪の従者を伴っていつの間にかラ・ロシェールの街並みに入っていた。

岩で作られた住居がルイズとワルド、ギーシュを出迎え、人々の視線が馬二頭にも達しようかという巨大なグリフォンの雄姿に集まる。

人々の中を堂々と進む一行であったが、ギーシュは通り行く人々の中に身の丈を超える大刀を背にする男を見て馬をとめた。男の隣には、白いワンピースを着た見慣れない少女が腕を組んで歩いている。

リンゴなどの食材を売る出店の前で歩みをとめた男と白いワンピースの少女は、店の主であろう男と何かを話し始めた。その男の横顔からバルスであることをギーシュは認め、馬を走らせて駆け寄った。

「やあ、誰かと思えばバルスじゃないか」

「ん？ギーシュか」

ギーシュは馬から降り、バルスと腕を組む少女を見る。背は低く、身体のラインからもプロポーションはあまり良くなさそうだが、人形のような可愛らしさという魅力と印象をギーシュは少女から受けた。

ギーシュはバルスの腕をひっ捕まえ、こそこそと耳打ちする。

「中々やるじゃないか、君も」

「何の話だ？」

「何も照れることはないだろう？」

ギーシュはバルスにぐいぐいと肘をおしつけ、腕を組む少女を指さす。バルスはギーシュの大きな勘違いに納得すると、少女の顔が見えるように一歩、二歩と身体を動かした。

ギーシュはその見慣れた顔の少女の見慣れない雰囲気に、身体全体を引かせて驚く。

「き、ききき、君は、タバサじゃないか！？」

度肝を抜かれて真っ白になるギーシュを挟んで、バルスはその後ろから近づいてくるグリフォンに気がついた。その背には見慣れない男がまたがり、その腕には見慣れた少女が抱かれている。

その見慣れないグリフォンに乗る男が護衛役である事は明白であり、バルスは男の持つ魔力を図り始める。タバサかキュルケ、それ以上の魔力と見定めると、バルスはひとまず胸をなでおろした。

バルスにとって戦闘力及第点となった見慣れない男が、ルイズを抱いてグリフォンから飛び降りる。そのルイズと親しそうな間柄に、バルスは何となく男の素性が気になった。

「何者だ？」

隣で白く固まっていたギーシュはハッとし、バルスの言葉で我に返る。咳払いをして心を落ち着かせると、改めてバルスに耳打ちする。

「栄えある魔法衛士隊の隊長、ワルド殿だ」

ギーシュはヒソヒソとした小さい声を更に落とす。

「ルイズの許婚だそうだ。どうする、君に勝ち目はないぞ？」

「おお」

ギーシュの予測とは裏腹に、満足そうにバルスはうなずいた。許婚の言葉に顔をゆがませるかと思いきや、バルスは晴れ晴れとした表情を見せている。

バルスにとって重要なのは、この任務に際してルイズの護衛役が信頼に足るかであった。その護衛役が実力のあるメイジで、ルイズの許婚という素性明るいものであるのだから、それはバルスにとって歓迎すべきところである。

バルスは自信に満ち溢れた眼差しを持つワルドに、笑顔を持って歩み寄っていく。ジャリジャリと一歩一歩バルスが近付くにつれ、ワルドの腕に抱かれたルイズはバルスから顔をそむけた。ルイズは罪悪感に胸を変に高鳴らせ、ワルドに縋るように縮こまる。

ルイズは、バルスに今の自分の姿をより一層疎まれると思って気が気ではなかった。バルスに惚れ薬を盛ったことを忘れ、家族を、愛するものを引き裂いたことを忘れ、一瞬でもワルドと楽しく過ごしていたのだ。バルスの足音が背後で止まり、ルイズはバルスから投げかけられるであろう侮蔑の言葉への恐怖にギュウッと目をつぶる。

目の前に立った黒髪、黒い瞳の男にただならない何かを感じたワルドは、その男と親しそうにしていたギーシュへと目を向けた。

「彼は何者だい？」

「俺の名はバルス。ただの平民だ」

ギーシュに投げかけられた疑問の言葉に、余計なことを言われま

いとバルスは応える。
しかし、ワルドにはその名に聞きおぼえがあった。並みいる貴族を剣一本でねじ伏せ、盗賊フーケを捕えた平民。そして、ルイズの使い魔として。

「そうか。君がルイズと任務を受けたもう一人か」

名と身分を示しただけでそれを悟られた事をいぶかしんだバルスであったが、その疑念をのみ込んでうなずく。

「ここで情報を集めていたが、アルビオンの状況はかなりまずい。俺は一足先に乗り込んで安全を確保しておく」

バルスがタバサと町で手に入れた情報によると、アルビオンは既にその国土の大半を反乱軍によって占領され、滅亡は時間の問題との事だった。これから会いに行くウェールズ皇太子の身辺も危うく、ルイズが到着するころには戦死していてもおかしくはない。
そこで、バルスは先遣隊としてウェールズ皇太子の護衛に当たることにした。魔法が使えないとはいえ、バルスの剣技と兵法をもってすれば2，3日の時間稼ぎは十分に可能である。

「もう船の時間だ。俺は行く。悪いな、挨拶もそこそこで」

「いや、仕方のないことだ。こちらのことは僕に任せておいてくれ」

バルスは伝えるべきことだけを要約して伝えると、ワルドとルイズに背を向ける。振り返りざまにルイズをチラリと見たが、最後までルイズがバルスに顔を向けることはなかった。

ずいぶん、嫌われてしまったな。

バルスはタバサの手をとり、通りの喧騒へと消えていく。ギーシュは危険なアルビオンに臆面もなく飛び込んでいくバルスの豪胆さと自信に驚き、その背を唖然として見送る。

ワルドもバルスを黙って見送っていたが、その腕に抱えられたルイズは瞳を震わせて動揺していた。

ルイズにとって、バルスに罵倒された方がまだマシだった。それが、バルスはルイズに一言もなく背を向けてしまったのである。ルイズがたまらずに振り返り、バルスの姿を探す。

ようやく見つけたバルスは、白いワンピースを着た青い髪の少女と仲よさそうに腕を組んで歩いていた。ルイズは動揺に震わせた瞳を更に震わせ、ぐっと歯を食いしばる。

どうして？どうしてこんなに悲しいの？ただの使い魔じゃない…！

その夜、ラ・ロシェールでとった宿の一室で、ルイズとワルドはグラスを酌み交わしていた。石の壁と木でできた床、豪華なソファが蝋燭で照らされ、ロマンチックな夜を演出する。

しかし、そのロマンチックな状況にもかかわらず、ルイズの顔は自然と暗くなっていた。タバサと仲のよさそうにしているバルスの後姿が脳裏にちらつき、離れない。

元気のなさそうに俯くルイズを心配し、ワルドは優しい笑顔でルイズの顔を覗き込む。

「そんなに不安がらなくても大丈夫だよ。君は僕が護る」

ルイズは頬を赤らめ、気恥ずかしさで視線をそらす。冷え切った心がワルドの言葉で少しずつ温められ、失った安心感を取り戻していく。

「この任務が終わったら、結婚しよう。ルイズ」

「え！？」

突然の申し出に、ルイズは目を見開いて驚いた。頭の中の整理がつかなくなり、返答に困ってルイズは俯いた。

「でも、そんな急に結婚だなんて」

ルイズはとりあえず出た言葉を吐き出し、指を口にあてて頭の中の整理を始める。

ワルドは紳士的で優しく、理想の王子様。それは今もルイズにとって変わらず、結婚することに何も迷うことはない。だが、何故かルイズはその返答に迷った。

どうして？

ルイズは、原因の主の顔を思い浮かべて驚く。バルスの顔が、何の迷いもなく浮かびあがったのだ。

でも、バルスはもう…。

ルイズは、嫌われてしまった。初めて自分のために戦ってくれた人に。初めて認めてくれた人に。会ったばかりで、すぐに自分を理解してくれた人だったのに。

もうあの安心感は与えてくれない。心の温かさも与えてくれない。恐らく、もうあの頃には戻れない。これから与えてくれるのは、寂しさと悲しさだけ。

ワルド様なら…。

ワルドは、今も昔も変わらずに自分の味方でいてくれる。一緒にいるときは、バルスの事を忘れていられる。

この人となら、忘れられる。

ルイズはゆっくりと顔を上げ、ワルドの顔をじっと見つめた。

「私、ワルド様の求婚をお受けします」

さよなら、バルス…。

第十話　侯爵様の御成り

地上３０００メイルの高さに位置する浮遊大陸。それは大陸の下に白い雲を従えた白の国、アルビオン王国を抱く大陸である。そのアルビオン王国に向かう空飛ぶ船。四本のマストに帆をいただき、木造船の本体はガレオン船のようであるが船の横に木でできた翼を取り付けてある。

その船の甲板上、手すりにつかまりバルスはタバサとともに船の見物をしていた。

「ずいぶん古風な作りだな。この世界では木でできた船が当り前なのか？」

興味津々の子供のようにはしゃぐバルスに、タバサは少し口元をゆるめてうなずいた。

バルスの世界では、船が空を飛ぶのは当たり前のことでさほど驚くことではなかった。ただ、バルスの世界の船はすべて鉄製。戦艦、巡洋艦、駆逐艦といった概念が存在し、技術レベルは我々の概念で言う第二次世界大戦の兵器と同等である。ただし空母や航空機といった概念は存在せず、主な戦闘方法は砲撃戦だった。

それはハルケギニアの戦闘方法も同様であるのだが、木でできた船で砲撃戦をしてよく怖くないものだとバルスは感心する。何しろ、空中で船に火が付いたら風にあおられて消火はほぼ望めないのだ。砲撃どころか、火矢や焙烙だけで撃沈しそうである。

そうした燃えやすいという理由からバルスの世界で何百年も前に姿を消した木造船を、バルスは精力的に見て回る。その行動は先人たちの知恵から何か学ぶことはないかと、温故知新の精神からでたものだった。

そんな精力的に動くバルスを見て、タバサは胸をなでおろす。

よかった。元気になったみたい。

昨日の夜、バルスは明らかに元気がなく少し上の空でさえあった。二人で恋人の真似ごとをして情報収集している間はそうでもなかったが、ワルドとルイズ、ギーシュと会ってからは顕著であった。

あれ、また…。

キョロキョロ、うろうろしているバルスを見て、いつの間にかまた口元が緩んでいることにタバサは気がつく。何とかして元のポーカーフェイスに戻そうと、無理に無表情を作り直した。

タバサは最近、自分の大きな変化に戸惑っていた。その変化とは、バルスの前にいると無表情を保てなくなることである。つい昨日も白いワンピースに着替えた時など、バルスがじっと見つめてくるので気恥ずかしさが顔に出てしまった。おまけに、口にまで出してしまっている。

そもそも、情報収集の人物設定自体があり得なかった。恋人同士でなくとも、兄妹とか貴族と従者とかもう少しマシな設定がいくらでもあったのだ。それをわざわざ恋人を選択して、バルスを困らせてしまっていた。

もう一つ、決定的な変化があった。それは、バルスがいる時は必ず悪夢を見ないこと。母が薬を飲まされてしまった時のことや、恐ろしい化け物に殺されそうになった時の夢を見ないのだ。むしろ、温かい陽射しの中でバルスとティータイムくらいの穏やかな夢が相場である。

私、もしかして、バルスのことが好…！

そこまで考えて、タバサは無理に思考を止める。恐らくそれを認

めてしまえば何かが加速して、自分を抑えられなくなる。そうしたらルイズのようにバルスに何かしてしまって、今まで築いてきた信頼さえも失うかもしれない。

そんなこと、できない。

ただでさえ、現状でも恋人同士などという不可解な設定を持ち出してバルスを困惑させているのだ。これ以上、バルスの友としての信頼を裏切るような真似は出来ない。

違うの。この気持ちは尊敬よ。勘違いしちゃダメ。

水の精霊をつき従え、何の報酬もなしに母までも治癒してくれるという偉大な魔法使い。ただそれだけと、タバサは自分に言い聞かせる。

違うの。バルスが私と一緒にいるのは、私が信頼できる友達だから。好きだからじゃない。勘違いしちゃダメ。

タバサは波立つ心を凍らせて、何とかいつもの自分を取り戻した。近づいてくる浮遊大陸の大地も、綺麗な街並みも、いつものように冷静に見ることができる。ただのものとして、綺麗や美しいなどの感情を挟むことはない。

「おお、本当に大陸が空を飛んでやがる！凄いな、タバサ！」

心底嬉しそうに笑うバルスを見て、タバサはドキリと胸を高鳴らせる。バルスが、尊敬すべき人が、大きな声で自分の名前を呼んでいる。

「うん、凄い」

その返事をいつの間にかとびきりの笑顔で返していることに、タバサは気がついていないのだった。

町はずれの森の中、木々の中に開けた道をバルスとタバサはゆっくりと歩いていた。木々の葉の間から木漏れ日が差し込み、風がサワサワと音を立てる。

タバサは船を降りる間際に着替えたため、いつもの学院の制服を着ている。バルスは変わらずムラマサを背負い、学院の制服をマント無しで着ている。そこまではいつも通りだったが、横並びに歩くバルスとタバサには少しずつ異変が起き始めた。

一体何におびえているんだ、タバサは。

先ほどまでは普通に歩いていたのだが、急にタバサがソワソワし始めて不安そうにバルスの手に触れてくるのだ。おまけに触れてはピクリと手を止めて離れ、またソワソワしてバルスの手に触れる。

何かよくわからないが、恐らく敵地での行動から来る不安が作用したものと判断してバルスはタバサを安心させるために手を握り返した。ピクリとタバサの手が反応し、ソワソワが収まる。

シルフィードに乗っていけばタバサの不安も幾分かは和らぐのだろうが、そのバルスの提案はタバサに猛反対された。敵地で空を飛ぶなどという目立つ行為は、絶対に避けるべきと。目的地は徒歩で行ける距離なのだから、目立たないように歩いていくべきと。

それは至極当然の理由で、バルスにも反対する理由は見当たらなかった。それだけなら何の違和感も感じないのだが、タバサは何故か主張を無理やりにでも押し通そうという意志をちらつかせていた。

違和感はそれだけではない。船の上などでは普段の無愛想な表情をずっと浮かべていたにもかかわらず、最後には４６センチ主砲もびっくりの破壊力抜群な笑顔を見せている。事実、大陸を眺めるふりをして顔を上手くそらしたバルスであったが、その笑顔に一撃轟沈させられるところだった。手と額に変な汗をかいていたことを思い出す。

弱弱しく、小さな力で握り返してくるタバサの手を感じていると、何となくタバサの顔が見たくなる。

何を考えているんだ、俺は。

バルスは、タバサのあの笑顔をもう一度見たいと思っている自分に気がつく。よくよく考えれば、今日の自分も少しおかしい。こうしてタバサと手を握りあって歩いていると、不思議と胸がほんの少し高揚する。

駄目だ。戦闘に先立っては精神を研ぎ澄まさねば。

とか思いつつ、バルスは何となくタバサの顔をチラリと見る。タバサもバルスの顔をチラリとみて、互いに合ってしまった目線に驚いて顔をそむけた。

そうこうしているうちに、二人の目の前には森の中に開いたぽっかりとした空間が広がっていた。木々に囲まれた広場には白い石造りの教会が建っており、バルスとタバサはここが目的地であることに気がつく。

アンリエッタからバルスが得た情報によると、この教会でウェールズ皇太子は王党派の指揮を執っている。警備、警戒態勢は厳重で、

ただ飛び込んでも敵とみなされて殺される恐れすらあった。

「タバサ、ここで待っていてくれ」

「嫌。私も行く」

片手で握っていたバルスの手を両手でつかみ、タバサはその手を離すまいと食い下がる。バルスはタバサの必死な様子を見て諦め、片手をがっちりと握られたまま教会の木でできた戸に手をかけた。

ギィと音を立てて扉が開き、何列にも並べられた誰も坐っていない木製の長椅子と誰も立っていない教壇が出迎える。物音ひとつなく静かで、天窓から入る日の光が妙に神々しい。

バルスが一歩二歩と歩みを進めて慎重に中に入り、タバサもバルスの手を強く握りながらそれに続く。タバサはキョロキョロと教会の中を見回すと、培われた勘が危険を感知した。

「誰かいる」

「ああ。それも大勢な」

タバサは懐から小さい杖を取り出し、バルスはムラマサに手をかけて身構える。柱の奥で人影が揺れ、影から十数名程の重そうな鎧を着た者たちが現れた。各々が兜まで着こんでいるため、顔は全くわからない。

バルスとタバサは互いに背中合わせに身構えて、鎧を着た者たちの包囲に対応する。鎧を着た者たちは剣に似せた杖を抜き放ち、バルスとタバサに突き付けた。その鎧を着た者たちから指揮官らしき男が一人歩み出て、剣に似せた杖をバルスに突き付ける。

「君たちは何者だ？何故この場所を知っている？」

バルスの動きがピタリと止まり、表情が驚きに支配される。この指揮官の若い男の声、どこかで聞きおぼえがあった。バルスがいた、バルスの世界で。

バルスは真相を確かめるため、ムラマサを少し抜く。カチリという音に反応して鎧を着た者たちに緊張が走り、タバサも息をのんで鎧を着た者たちに杖を向ける。ひき抜かれたムラマサは周りの状況を確認すると、兵士に囲まれた楽しそうな状況に大いに喜んだ。

「あら、なにこの状況？盗賊に鞍替え？」

「アホ言え」

喋る魔剣、ムラマサの声に、周囲の鎧を着た者たちは顔を見合わせる。それは指揮官も同様の様子で、バルスが何をしたいのか計りかねているようだった。

「もう一度だけ言う。君たちは何者だ？」

ムラマサは昔よくきいたその声に驚く。その声は、昔のバルスの親友の声にそっくりだったのだ。

親友の名は、ウェールズ＝ド＝パイヤン。ラインハルト帝国内有数の剣の使い手で、騎士団の団長を務めていた男だった。彼の姿を最後に見たのは、ラインハルト帝国をバルスが滅亡させた時。バルスがフレイム・オブ・フレイムの魔法で皇帝もろとも吹き飛ばしたはずだった。

「あら、ウェールズじゃない。そんな恰好して何やってるの？」

指揮官は驚いて剣を納め、顔を覆っていた兜を脱いだ。

「な、何故私がウェールズだと知っている？」

兜の下から現れたその顔は、金髪、青い瞳を持った端整な顔立ちの美青年だった。そしてその顔は、バルスの親友そっくりである。

だが、唯一決定的に違う点があった。バルスの親友が魔法の才能ゼロであったのに対し、目の前のウェールズはそれなりの魔力を持っていた。

見事にウェールズを言い当てたバルスに、タバサは構えをとかずに顔だけを向ける。

「知り合い？」

「恐らく違うが、そういうことにしておこう」

背中あわせにヒソヒソと話し、バルスはタバサに杖をしまうように促す。タバサは杖を懐にしまって構えをとき、バルスもムラマサをしまって構えをといた。鎧を着た者たちも次々に杖を納め、場の緊張感が溶けていく。

バルスはわざとらしく咳払いすると、ウェールズの前にかしずく。その様子を見て、タバサもそれに続いた。

「私はバルス＝タイラントと申します。アンリエッタ姫殿下お付きの従者で、ウェールズ様とは一度パーティーにてお会いしております」

普段のバルスの態度からは考えられないような威厳と物言いに、タバサはバルスが本当に貴族だったことを再認識する。ウェールズもバルスの演技には騙されたようで、顔は笑顔に変わっていた。ウェールズはしゃがみ込んでバルスの肩に手を当てる。

「これは失礼した。火急の時故、先ほどの無礼はご容赦願いたい」

「いえ。一従者のことなど、覚えておらずとも当然のことでございます」

ウェールズは嬉しそうにうなずくと、バルスとタバサに立ち上がるように促した。バルスとタバサを交互に見やり、ウェールズは改めて二人のいでたちを確認する。バルスは身の丈を超える不思議な剣を持つ男、もう一人は冷たい目をした幼く見えるメイジ。二人の任務が何なのか、それだけで判断するのは難しい。

「して、どのような用件で参られたのだ？」

「アンリエッタ姫殿下の特命大使がこちらに向かっております。その先遣隊としてウェールズ様をお守りするように仰せつかって参りました」

「分かった。ではよろしく頼む」

ウェールズはなるほどと納得し、満足してうなずく。とはいえ、戦況が絶望的といってもこの教会の近辺に敵が出没するほど追いつめられている状況ではない。恐らくこの二人に出番はないだろうとウェールズは考える。

しかし、二人に宿泊してもらおうにもその部屋が一つしか開いていないことにウェールズは思い至った。年頃の男と娘、一緒の部屋にしてもいいものかと紳士たるウェールズは気を配る。

「ところで、宿泊して貰いたいのだが部屋が一つしかないのだ。それでも問題ないだろうか」

「はい。問題ございません」

普段からして二人同じ部屋で寝ているので、バルスは即答する。タバサは改めてそれを尋ねられて急に気恥ずかしくなったが、少し目を泳がせた後コクリとうなずいた。

最初何かを訴えたそうにするタバサを見てウェールズも違和感を感じたが、冷めきった目がバルスの一言で生き生きと動き出すのを見て二人の関係がいい意味で親密であるものと結論付ける。その二人の関係に自分とアンリエッタの関係を重ね合わせ、ウェールズはバルスとタバサに好感を持つのだった。

薄暗く、枯れ木ばかりの気味の悪い森。その中を、タバサは彎曲した独特の杖を持って歩いていく。しばらく歩むと、目の前に７０メイルはあろうかという巨大な龍が現れた。真黒な身体に深紅の瞳を光らせ、タバサに牙を剥く。タバサは驚き、杖を構えた。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース」

氷の槍が出現し、黒龍に向かって打ち出される。しかしそれは、黒龍の強靭なうろこにいとも簡単にはじかれてしまった。

タバサはもう一度渾身の力をこめ、杖を振る。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース！」

またも氷の槍ははじかれ、黒龍は何事もなかったかのようにタバサに迫る。目の前に黒龍の口が迫り、思わずタバサは身を縮こまらせた。恐怖で目の前が真っ暗になり、息苦しい。

「うあ、うぅぅ…、はあっ！」

タバサが目を開いて身体を跳ね起こすと、そこは薄暗く見慣れない部屋だった。なれないシーツの感触が手に触り、今見ていたのが夢だったことにタバサは気がつく。荒くなった息を整えながら、タバサは久々に見た悪夢に身を震わせた。

彼がいるのに、どうしてこんな夢…。

タバサはベットの近くに置いた眼鏡を手探りで探し、それを掴んでかける。部屋全体を見回して、ある異変に気がついた。

部屋の隅にある衣服を入れる棚、部屋の真ん中にある簡素な机、そして一人用であるこのベットの位置に変わりはない。だが、床でムラマサを抱えて寝ていたバルスの姿がないのだ。

タバサは一気に不安に駆られ、靴をはくのも忘れてペタペタと部屋のドアへと駆け寄る。目の前に立ってドアの取っ手に手をかけようとした時、ドアはひとりでに開いた。

ドアを開けた張本人、バルスは、汗だくで裸足のまま突然現れたタバサの姿に驚く。タバサは安心してため息をつくと、汗ぐっしょりの自分の状態に気がついて前髪の汗をぬぐった。

「どこ行ってたの？」

「偵察だ。どうしたんだ、その汗は」

「何でもない」

タバサはフルフルと首を横に振ると、蹄を返してゆっくりとベットに向かって歩いていく。バルスはまるで運動した後であるかのような汗が何でもないはずはないと思ったが、タバサが何も話したがらない以上追及しても仕方がないのでそのまま部屋へと入る。自分の寝床である床に腰を落ち着けると、バルスはムラマサを抱えて寝息を立て始めた。

一方、ベットに戻ったタバサだったが、先ほどの夢が気になって全く寝つけずにいた。

また、偵察に行くのかしら?

とすれば、またあの悪夢を見るのではないかとタバサは不安に支配されていく。タバサはベットの掛け布団をはぎ取ると、自分の身体に巻きつけるように被ってバルスの横に坐り込んだ。寝息を立てるバルスは起きる様子もなく、タバサはバルスの肩に頭を預けて目を閉じた。

こうしておけば、バルスが偵察に行く時でもすぐに気がついて起きることができる。タバサは安心して、深い眠りに落ちていく。

タバサの目の前には、あの黒龍がいた。目の前に黒龍の牙が迫り、恐怖で目の前が真っ黒に塗りつぶされていく。

どうして!?

タバサは身を縮こまらせ、ギュウッと目をつぶる。ドスリという音がして目を開けると、目の前には彼の背中があって黒龍は地に伏せていた。身の丈もある刀が背負われた漆黒の鞘に納められ、彼は笑顔で振りむく。

「さて、任務は終わりだ。ティータイムといくか」

彼の優しい笑顔に安心感を覚え、タバサも笑顔になってそれに応える。

「ここでなの？」

クスクスとタバサは笑い、彼は周りの景色を確認するようにキョロキョロとあたりを見回す。あたりの寂しく不気味な光景に彼は頭をかくと、二人はいつまでも笑いあうのだった。

小汚い石造りの壁に、石造りの床。質素な棚が壁際に配置され、部屋の中央には簡素な木製の四角い机と向かい合う二つの椅子。狭い密室の中で机の上の蝋燭が揺らめき、机を挟んで対峙する二人の顔が映し出される。

ピンク色のブロンドの髪と、豪奢な金髪。ルイズとウェールズである。

あらかじめバルスが特命大使の人相となり、人数をウェールズに伝えていたため、ルイズはバルスの時のような剣での歓待を受けることなく容易にウェールズに会うことができていた。しかし、任務の内容は極秘となっているためワルドとギーシュは外で待つことになっている。

ルイズは一通の手紙を懐から取り出すと、ウェールズの前に差し出した。

「アンリエッタ姫殿下からの密書です」

ウェールズは頷いて受け取り、手紙の封を切って中から三枚の紙を取りだす。その中身に目を通すと、ため息をついた。続いて懐から手紙を取り出し、ルイズの前に差し出す。

「ではこれを」

ルイズはウェールズから手紙を受け取ると、それを懐にしまいこむ。それとは別に、胸にしまいこんでいたものをルイズは抑えきれなくなった。

「あの、皇太子様」

「何だ？」

「アンリエッタ様は、亡命をお勧めになったのではないのですか？」

ウェールズは目を閉じ、ルイズに背を向ける。

「密書の内容を知ろうとするのは、越権行為がすぎるな」

「ですが！」

「これは、単なる王侯と貴族の闘争ではない」

驚きの声を上げるルイズを背に、ウェールズは語る。レコン・キスタという集団がこの内乱で糸を引いており、大半の貴族はそれに踊らされているにすぎないこと。自分の国がその集団に侵されよう

としているのなら、それは王子たるウェールズ自身が解決すべき問題なのだと。

「たとえ、その代償がわが命であろうとも」

ルイズは返す言葉を失い、目に涙をためて俯く。ウェールズは悲しみを自分の事のように掬いあげるルイズを見て、元気づけるように笑った。

「そう悲観したものでもない。バルスのおかげで、あと半年は持たせることができるだろう」

「えっ！？」

予想もしなかったその名がウェールズから出され、ルイズは困惑する。

「あの男、大したものだ。我が軍の編成を少し見ただけで問題点を見つけ、その対処方法を示してくれた。我が軍にあのような者がいれば、この国土を好きにさせなかったものを」

信頼溢れる瞳で語るウェールズを見て、ルイズはムラマサが話してくれた異世界にいた頃のバルスを思い出す。戦争にあっては、常勝不敗の名将。その言葉に嘘はなかったと、ルイズは再度認識を改める。

バルスはバルスの世界の人々に、本当に必要とされていたのだと。

「アンリエッタに伝えてくれ。心配することはないと」

「皇太子様…」

ルイズは頷き、己の目に溢れた涙をぬぐう。ウェールズのために流した涙と、バルスへの罪悪感から流した涙を。

ルイズはいたたまれなくなり、ウェールズを一人部屋に残して外へと歩み出る。そっと扉を閉めて、扉の取っ手に縋るように俯いた。

「それが例の手紙だね？」

ルイズがハッと我に返って振り向くと、声の主、ワルドの姿があった。教会の白い柱を背もたれにして立ち、その柱から離れてゆっくりとルイズに歩み寄っていく。

「これで任務は終了だな」

「はい」

ルイズは元気のなさそうに俯く。ワルドは浮かない顔をするルイズの肩に手を置き、顔を上げるように促した。

「僕はウェールズ皇太子に結婚の媒酌人をお願いしようと思う」

「それって、ここで結婚式をするってこと！？」

ルイズは驚き、ワルドの手を突き放す。柱へと駆け寄り、気持ちの整理をつけようと縋りついた。

「そんな、無理よ急に。だって、まだトリステインにも戻っていないのに」

ルイズは頭が混乱し、自分からでも分かるほど支離滅裂な理由を

並べたてる。断る理由などないのに、何故かルイズの心はそれを拒絶した。ルイズはその理由が分からず、頭を抱える。

柱に縋りつくルイズを、ワルドは後ろから優しく抱きしめた。

「駄目だ。君は僕に、いや、レコン・キスタに必要なんだ」

「レコン・キスタ!?ワルド、あなた…!!」

ワルドの腕が強く締まり、ルイズは離れようと全身を動かす。

「僕のルイズ。君はただ、何も考えずに従えばいい」

「冗談じゃないわ!結婚なんか、するもんですか!!」

ルイズはやっとのことでワルドの腕を振りほどき、前を見ずに走り出す。何かにぶつかって尻もちをつき、ルイズは痛みを忘れてぶつかった何かを見上げた。

そこには緑色の司祭服に身を包んだ高い鷲鼻に理知的な碧眼、カールした金髪の痩せ男が立っており、指にはめた紫色の指輪をルイズに向ける。

「逃げられはせん。虚無の末裔」

紫色の指輪が輝き、ルイズの瞳から意志と力が失われていく。視界は真っ暗になり、ルイズは気を失って地面に倒れ込むのだった。

カチリとして、カチンとす。バルスはタバサと泊まっている部屋で坐り込み、ムラマサを鞘から抜いては鞘に納めるを繰り返していた。

「あんた」

カチン。

「一体」

カチリ。

「何」

カチン。

「考えてんのよ！」

カチリ。

抜き差しされまくるムラマサは、迷惑そうに声を荒げる。普段見られない落ち着きのなさに、ベットに坐ったタバサは複雑な気持ちでバルスを見つめていた。

バルスはムラマサの言葉に耳を貸さず、カチリカチンとやり続ける。

「あんた」

カチン。

「やめなさいよ！！」

ピタリとバルスの手が止まり、ムラマサの安堵のため息が漏れる。バルスがこうなったのは、ルイズの結婚の話をウェールズから聞いた時からだった。

ウェールズは同席者としてバルスとタバサを招待した方がよいだろうと考えて誘ったのだが、バルスは首を縦に振らなかった。それはタバサも同様で、ウェールズは不思議そうに首をひねったが追及することはしなかった。

ムラマサもタバサもその時からバルスの様子がおかしいことには気が付いており、バルス自身もそれには気が付いている。ただ、バルスはその気持ちを上手く理解しきれないでいた。ルイズが結婚する、ただそれだけのはずなのだ。

分からん。何故集中できない…。

魔法の書物を読もうにも、何故だか納得いかないモヤモヤが襲ってくるのでバルスは集中できないでいた。今度は本をひっつかみ、パタンパタリとやり始める。

何度目かにパタンと本を閉じると、バルスは本を取り落した。主の不可解な行動を見て、ムラマサは憐れむ。

「重症ね」

しかし、バルスが本を取り落したのはそれが原因ではなかった。懐かしく、強力で危険な魔力を感じ取ったからである。

「アンドバリの指輪か！？」

バルスはムラマサを鞘に押し込み、ひっつかんで部屋を飛び出す。タバサもそれに続き、部屋を飛び出した。

そのままバルスとタバサは宿舎を飛び出し、建物に囲まれた広場に出てあたりを見回す。バルスはアンドバリの魔力を見つけると、それが教会の方から発されていることに驚いた。ルイズが今結婚式を挙げようとしているであろう教会から。

「タバサ、教会だ！」

「教会？」

二の句を告げず、バルスは教会へと走り出す。タバサはバルスの行動を信じ、続いて走り出すのだった。

鎧を着た者たちは教会の中で壁を伝うように並び、二人を祝福するように刀を上げた。二人は教壇の前に立ち、ウェールズは教壇を挟んで二人の新郎新婦を交互に見る。窓から差し込む金色の光と鳴り響く鐘が二人の門出を祝い、ウェールズは新郎に笑顔を向ける。

「新郎、子爵、ジャン＝ジャック＝フランシス＝ド＝ワルド。汝は始祖ブリミルの名において、この者を敬い、愛し、そして妻とする

ことを誓いますか？」

「誓います」

ウェールズは笑顔を新婦に移す。

「新婦、ラ＝ヴァリエール公爵三女、ルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエール。この者を敬い、愛し、夫とすることを誓いますか？」

「ち、誓い…」

新婦はしどろもどろに中々はっきりせず、誓いの言葉を述べようとしない。

ルイズは上手く体を動かせず、全く言うことを聞かない自分の口に抵抗を続けていた。アンドバリの魔力に抵抗するルイズの精神が、誓いの言葉を押し込める。

どうなってるの？誰かが勝手に私の身体を操ってる…！

「新婦？」

アンドバリの魔力に操られていることを知るはずもなく、ウェールズはルイズの様子に違和感を感じて声をかける。ルイズの異常さを隠すため、すかさずワルドが口を開いた。

「申し訳ありません。新婦は少し緊張しているようでありまして」

「さもあろう。では、今一度問う。この者を敬い、愛し、夫とすることを誓いますか？」

ルイズは勝手に動く口を止めようと、必死で精神を集中する。

「ち、誓い、誓いま…」

しかし、それはアンドバリの魔力の前では無駄な抵抗だった。魔力はルイズの精神を押しのけ、口を突き動かす。

誰か、助けて…！

ルイズは今まで自分を守ってくれた人を思い浮かべる。父も、母も、二人の姉も、ここアルビオンは遠すぎて助けてはくれない。ギーシュは多分、命をかけてまで自分を助けてくれることはない。第一、命をかける理由もない。

タバサも、恐らく助けてはくれない。タバサはルイズと親しくて繋がりがあったのではなく、バルスが親しかったから会う機会が多かっただけ。

じゃあ、バルスは？

以前のバルスなら、きっと助けてくれた。でも、今はもう助けてくれない。同じ空気を吸うのも嫌というほどに嫌われてしまったから。会っても、何も話しかけてくれないほどに嫌われてしまったから。

もう、誰も助けてくれない。唯一の味方だと思っていたワルドに裏切られ、本当の味方だったバルスを裏切った。忘れようとした。もう、ルイズの周りには誰もいない。

ゼロのルイズ。もう、いいわ…。

ルイズは諦め、口は諦めとともに誓いを紡ぐ。

「誓いま…」

バタリと大きな音がして、教会の扉があけ放たれた。その無礼にも式の途中で扉を開け放った人物を見て、ウェールズは驚く。

「バルス殿！いきなり入ってくるとは無礼であろう！」

バルス！？

ウェールズが呼んだその名に、ルイズの鼓動が高鳴る。絶対に助けに来てくれない、自分が裏切ってしまった人が来てくれたというのだ。

ルイズはすぐにでも振り向いてその名前を呼びたかったが、アンドバリの魔力がそれをさせない。

「バルス殿、聞いているのか！？」

バルスはウェールズの言葉を無視し、首を左右に振って教会の中を見回す。教壇の向こう側にウェールズ、教壇の前に新郎新婦、身構える鎧を着た者たち。バルスはアンドバリの強大な魔力がルイズに向けられているのを察知し、ムラマサを引き抜いた。

ムラマサは結婚式場で己を構えるバルスを見て、大喜びしている。

「何々？花嫁略奪？流石私のご主人様、盗賊になっても盗むものが違うわ！」

「黙れ」

引き抜かれたバルスの剣を見て、鎧を着た者たち十数名も剣に似せた杖を抜く。ウェールズは悔しそうに教壇をたたくと、腕を振った。何しろ、自分が買っていた男がこんなことをしでかしたのだから。

「その者を捕えよ！」

その言葉に、ルイズの心はビクリと震える。

違う、違うの！バルスを殺さないで！

いくらバルスとはいえ、相手はウェールズ直属の衛士たちである。全員が戦闘経験豊富なメイジばかりであり、下手をすればバルスは殺されてしまう。ルイズは真実を伝えようと、必死にあがく。

「ば、るす」

ワルドはルイズから呟かれた一言を聞き逃さず、驚いてルイズを見る。ルイズは白いブーケを頭から外し、投げ捨てて振り返った。

「バルス！」

「馬鹿な、呪縛が！？」

ワルドは腰にさしていた己の剣に似せた杖に手をかけ、ルイズは慌ててワルドを指さしてウェールズに訴えかける。

「皇太子様、この男が！」

「ええい、どけ！」

ワルドはルイズの身体を押しのけ、ウェールズの懐に飛び込む。そのまま杖を引き抜き、後ろ手にウェールズの胸を貫いた。ウェールズは瞳を揺らし、残った力でワルドの顔を見る。そこには、不敵に笑う裏切り者の顔があった。

「貴様、レコン、キスタ…」

ウェールズはガクリと崩れ落ち、冷たい石の床に身を預ける。ルイズは口に手を当ててウェールズの元へと駆け寄り、バルスは鎧を着た者たち、衛士たちを押しのけて駆け寄った。

「皇太子様！」

「ウェールズ！」

ルイズがウェールズの手をとると、ウェールズは朦朧とする意識の中最後の力を振り絞って自らの指にはめた指輪をはずした。風のルビーと呼ばれるその指輪をルイズの手に託し、ウェールズは笑顔を作る。

ウェールズの手から力が抜け、閉じられた目が二度と開かないことをルイズに伝える。

「いやあああああ！！」

ルイズの目から涙があふれ、縋りつくように叫ぶ。バルスはルイズの後ろでその死を悼み、顔を俯かせた。

「許さん…」

バルスの腕が震え、ムラマサがカチカチと音を立てる。
親友の面影を持つウェールズを殺され、バルスは生まれて初めて腸が煮えくりかえるほどの怒りというものを体感していた。まるで親友を殺された気分になり、どうにも気が収まらない。
バルスと泣き続けるルイズを見下すように、ワルドは剣をバルスへと向けた。

「ふむ。どう許さんというのか」

ワルドが杖を一振りすると、一陣の風が吹いてバルスを襲う。バルスがムラマサを片手で下から上へと振り上げると風は消え、今度はバルスがワルドにムラマサを向けた。
俯かせた顔をゆっくりと上げ、バルスはワルドを睨みつける。

「ウェールズを殺した分、ルイズを悲しませた分。ただで死ねると思うな…」

ワルドはため息をつき、帽子に手を当てて顔を俯かせる。口元にゆがんだ笑みだけを残して。

「かなわぬ恋か。平民の貴様が貴族の娘に恋とは、愚かな」

バルスの脳裏に疑問符が浮かんだが、それをどす黒い怒りが塗りつぶしていく。代わりに反応したのは、バルスとともに感情が高ぶっていたムラマサだった。

「誰が平民よ誰が！この方を誰だと思っているのよ！？」

「すまないね。平民としか聞いていないよ」

ワルドは不敵な笑みを崩さず、逆にムラマサの物言いを笑う。

「この方はね、ラインハルト帝国、戦慄の陸軍少将バルス＝タイラント侯爵様よ！そん所そこらの貴族の娘じゃ釣り合わないのよ！」

違う方面で戦い始めたムラマサの雑音も、もはやバルスの耳には届いていなかった。むしろ、ワルドの言葉の挑発よりも隙だらけの構えの方がバルスを苛立たせる。

「いいのか、そんなに隙だらけで？」

「ああ。こんな場所で、そんな大刀は振り切れないだろうからね」

確かに、ワルドの言うとおりこの教会の中では長椅子が邪魔でムラマサを振り切ることは難しかった。しかしそれは、バルスが並みの剣士で、ムラマサが並みの剣であればの話である。

バルスはムラマサを持ちかえ、刃を己の後ろへと向けた。ムラマサの切っ先が長椅子に当たり、コンコンと音を立てる。

「そうか。なら思い知れ」

バルスは思い切り脚を踏み切り、地を這うように低く身体を打ち出す。ムラマサをわざと低く構え、不敵に笑うワルドめがけてムラマサを振り上げた。

ワルドはゾクリとする危険を察知し、杖を切り上げてくるムラマサの軌道に合わせる。教会の長椅子を何もないかのようにムラマサの刃が通り抜け、ワルドの剣へと打ち込まれた。そのままワルドの魔力を通した剣を両断し、ムラマサの刃がワルドの肩口を切り裂く。

「馬鹿な！？」

ワルドはガクリと膝を崩し、片膝をついた。出血した肩口をおさえ、その背後でバルスがムラマサをカチリと鞘に納める。切断された椅子がガタガタと音を立てて崩れ、ワルドは息をのんで振り返った。

バルスはムラマサに手をかけたまま、ワルドを見下すように睨みつける。

「言っただろう？隙だらけだと」

ワルドはその威圧感に逃げるように後ずさり、折れた杖の先を地面へと向ける。

「まあよい。これで三つのうち、二つの目的は果たせた」

「目的だと？」

「一つは潜伏中のウェールズを亡き者にすること。いま一つは、これの入手」

ワルドは懐から手紙を取り出し、バルスとルイズに見せつける。その手紙を見て、ルイズは思わず立ち上がって目を疑った。それはあのウェールズから預かった大切な手紙だったのだから。

「いつの間に！？」

ワルドは手紙を懐にしまいこみ、折れた杖を地面に突き立てる。

「最後の目的は、ルイズ。君だったのだがな！」

カツンと音がして地面にひびが入り、それは広がって教会全体が大きく揺れる。蝋燭が倒れて炎が起こり、柱は倒れ始めた。バルスはルイズを守るため、ルイズに駆け寄っていく。

ワルドはルイズとバルスに背を向け、外へ向かって歩き始めた。

「奪えぬのなら仕方ない。ここで消えてもらおう」

「待って！」

ルイズの叫びに、かつての無条件の味方は応えることはなかった。かつてのかけがえのない人は、もう応えることはない。代わりに応えたのは、裏切ったにもかかわらず助けに来てくれた人。忘れようとした人。

バルスはルイズを抱き寄せ、ムラマサを引き抜く。上から落ちてきた岩を一振りで砕くと、バルスはルイズを抱いたままガラスの窓へと駆けた。ムラマサをまた一振りしてガラスを打ち砕き、崩れていく教会の外へと飛び出すのだった。

ルイズがゆっくりと目を開けると、そこは空の上だった。冷たい風が頬にあたり、シルフィードの青い身体がほんのりと温かい。前にはシルフィードを操るタバサの背中があって、隣には胡坐をかいて腕組みをして俯いているバルスがいた。

ルイズの脳裏に先ほどまでの出来事が鮮明に蘇り、裏切られた悲しみに心を浸す。そして、バルスも同様の気持ちだったろう事を思い、激しい後悔の念に襲われた。すぐにでもバルスに謝罪してすぐにでも泣きつきたい衝動に駆られたが、その罪悪感からルイズはただ顔を俯かせることしかできない。

隣に坐っていたバルスはチラリとルイズを見ると、そのあまりの落ち込みように何と言葉をかければよいのか分からずにいた。許婚に裏切られて哀しみのどん底にいると思われるが、嫌われている自分が何かいっても仕方のない気がする。掛ける言葉が見つからないとは、この状況かとバルスは心の中でため息をつく。

しかしただ一つ、バルスは伝えるべき言葉を見出していた。それは今言うべき事なのか分からなかったし、恐らく後でも全然問題ない。だが、伝えるタイミングは今のような気がして、バルスは目を閉じて意を決した。

「ルイズ」

バルスの声にルイズの身体がビクリと反応したが、ルイズは顔を俯かせたまま瞳を潤ませていた。別れの言葉を告げられるのか、それともももっと残酷な何かを告げられるのか、ルイズは恐怖でバルスの顔を見ることができない。

「俺はもう気にしてない。怒っていないぞ」

ルイズが驚いて顔を上げると、照れ臭そうに鼻の頭をかくバルスの姿があった。ルイズの目から堰をきったように涙があふれ出す。

「う、うう…」

「え、な、何だ?」

「うえぇぇぇん！」

ルイズはバルスの胸に縋りつき、全ての思いをぶつけるように大声で泣いた。バルスは最初こそ戸惑ったものの、ルイズの心を落ち着けるように髪をなでる。

あふれ出る感情の奔流の中、ルイズはバルスの胸の中で安心していつまでも涙を流し続けるのだった。

第十一話　開戦の序曲はデュエット

王都トリスタニアの王城の一室で、ルイズはアンリエッタの前にかしずいていた。ルイズの瞳には涙が潤み、顔を上げてアンリエッタを見ることができていない。

アンリエッタは、先ほどルイズから渡された紫色の宝石のはめられた風のルビーを茫然と見つめている。その意味を信じられずとも受け入れ、アンリエッタは風のルビーを握りしめた。

「これは、ウェールズ様の…」

「手紙を奪われ、目の前で皇太子さまの御命まで…」

ルイズは悔しさと恋人を失ったアンリエッタの心中を思い、地に着いた片手を震わせる。

「この私に、一番の責任があるのです。あのワルドを見抜けなかった」

アンリエッタの思いやりのある言葉に、ルイズは肩を震わせて嗚咽を漏らす。目から涙があふれ出し、同時に後悔の念も溢れだした。ワルドを信じず、バルスを信じていればウェールズの死も避けられたかもしれないと。

アンリエッタはしゃがみ込み、顔を伏せて泣くルイズの肩に優しく両手を置いた。

「さあ、顔を上げてちょうだい。ルイズ＝フランソワーズ」

ルイズが涙を流す顔をあげると、そこには同様に涙をあふれさせ

るアンリエッタの顔があった。アンリエッタはルイズを優しく抱き寄せ、ルイズもいたたまれずにアンリエッタを抱きしめる。

「あの人の形見と遺言をありがとう。ありがとう、ルイズ…」

二人は服を涙で濡らすのも厭わず、その死の痛みを分かち合う。

その部屋の外、扉の横でバルスは石の壁に寄りかかってルイズが謁見を終えるのを待っていた。顔を俯かせ、茫然と石畳を見つめている。

バルスは悔しかった。バルスは今まで任務を失敗したことはなく、つまり、この任務で初めての失敗を経験したのだ。おまけに、親友の面影を見たウェールズを目の前で殺されている。それがバルスの敗北感に拍車をかけていた。

その悔しそうに歯噛みするバルスの背に背負われた魔剣が、主人の今までにない表情を鞘から少し抜きだされた刃に写しだした。

「ねえ、そんなに悔しがることないじゃない。らしくないわね」

バルスは俯いたまま黙り込み、腕組みをしたまま微動だにしない。眉一つ動かさず、口すらも動く様子はなかった。

「そんなに悔しいなら、アンドバリの秘法を使えばいいじゃない」

バルスの顔がゆっくりと上がり、瞳が魔剣を睨みつける。

「あれは禁法だ」

「あら、あなたが勝手にそう決めただけでしょ」

「まあ、そうだがな」

バルスはふうとため息をつき、余計なことを言う魔剣を鞘の中に押し込めた。

アンドバリの秘法とは、バルスがアンドバリの指輪を研究した過程で開発した死者蘇生の魔法である。アンドバリの指輪は完全な蘇生ではなく、偽りの魂を死体に与えるマジックアイテムで言わばゾンビ精製アイテムでしかなかった。そこでバルスは精霊の力と己の膨大な魔力で生きた肉体を再構築し、魂をアンドバリの指輪と同様の過程であの世から召喚、肉体に定着させる魔法を開発したのだ。

それはバルスにとって中級程度の魔法であり、さほど難しいものでもない。だがそれゆえに、バルスはアンドバリの秘法を禁法とした。死者を無闇に生き返らせては、人口増加や殺人の横行などいくら数えてもきりがないほどの問題が発生するからである。

「どうしたのよ、ボーッとして」

バルスが驚いて隣の扉の方を見ると、いつの間にかルイズが立っていた。目が少し赤くなっており、頬に涙の跡が残っている。

バルスは首を横に振ると、そのまま顔をルイズからそむけた。

「何でもない」

「そう。ならいいんだけど」

ルイズはバルスがぼんやりとしている理由に大体のあたりを付けていたが、それを打ち明けてくれないことに少し寂しさを感じていた。こんな誰にでもわかるような状況でも、バルスは打ち明けてくれない。

しかしそれを表に出せるはずもなく、言葉にできるはずもなく、ルイズはバルスを避けて廊下を歩きだす。

「さあ、学院に戻るわよ」

日は高々と昇り、草原の中にそびえる白い塔を美しく照らし出す。その温かい陽射しの中、バルスはトリステイン学院の廊下をキョロキョロしながら走っていた。トリステイン学院の生徒たちが集う、教室を探して。いや、正確にいえば、今教室で授業を受けているであろうルイズをバルスは探していた。

バルスはルイズの強大な魔力を頼りに、それと思われる木の扉を探し出す。ちょうど授業が終わったところなのか次々と生徒たちが扉から現れ、その中にピンク色のブロンドの髪も揺れている。バルスはピンク色のブロンドの髪が生徒たちの集団から抜けだすのを見計らって駆け寄った。

「ルイズ！」

「バルスじゃない。どうしたの？」

はあ、はあ、と膝に手をついて息を切らせるバルスの姿に、ルイズの胸が期待に膨らむ。

今までに、バルスが息を切らせてまでルイズを探していたことなどあったためしがない。そもそも、ルイズが話しかけなければバルスと話すことなど殆どなかった。その追いかけてばかりだったバルスが、今息を切らせて自分に用があるというのである。ルイズは心の中でガッツポーズし、追いかけられる気持ちよさに浸る。

バルスは息を整えると、満面の笑顔をルイズの前に作った。

「明日、虚無の日だっただろう？悪いが、コモンマジックを教えてくれ」

分厚い本を取り出して指さすバルスの無邪気な笑顔に、ルイズは再び心の中で大きくガッツポーズをした。おまけにその笑顔に母性本能をくすぐられて、幸せ気分が高まっていく。

虚無の日とは、つまり休日のこと。そして、今までタバサに牛耳られていた読書という領域を一日二人で過ごそうというのである。

何故バルスがこんなことを突然言い出したかと言えば、それはコルベールの一言が原因だった。曰く、ミス・ヴァリエールは優秀な生徒ですよと。ルイズは実践魔法以外の座学ではほぼトップ、タバサよりも成績がいい。

バルスは今まで読んだハルケギニアの書物によって、この世界の魔法が血縁に大きく左右されることを知っていた。よってバルスはこの世界の魔法を行使することはできない。であれば、この世界の魔法を教わるのに魔法を行使できる者、例えばタバサを限定して先生とする理由がない。むしろ、成績のいい者に教わるのが効率的というものだ。

そんな事情を知らないルイズは、いい気分になりすぎて少しいじわるがしてみたくなった。

「ええ～、明日？困ったわね、先約があるのよ。どうしようかしら…」

わざと困ったような顔を作り、ルイズは小首をかしげて見せる。目を閉じて考え込むふりをしながら、時々薄眼を開けてはバルスの顔色を確認する。そのひと時が妙に楽しくて、思わず顔がにやけそうになるのをルイズは必死で我慢する。

バルスは一度ガックリと項垂れると、ゆっくりと顔を上げた。

「そうか、悪かったな急で…」

「え？」

割とあっさりと引き下がられたことで、ルイズは拍子抜けしてしまった。バルスはルイズに背を向け、本を懐にしまいこむ。

「タバサに教えてもらうか」

「えっ！？」

バルスはポツリとつぶやくと、再びキョロキョロとし始める。ルイズは予想外の展開に焦りまくり、手をワタワタさせた。

「ちょ、ちょっと待って！よく考えたら、バルスに用があるんだったわ！」

「ん？でもお前、先約があるんだろ？」

「そ、それは、言葉のあやよ！」

全力、身体全体のジェスチャーでもって引き留めようとするルイズを怪しんだバルスだったが、コモンマジックを教えてもらえるのならそれに越したことはない。バルスはまたニコリと笑い、無邪気な笑顔を作りだす。

「じゃあ、明日教えてくれ！」

どこまでも純粋なバルスの笑顔に、ルイズは気恥ずかしくなって目線をそらす。

「し、仕方ないわね。そうまで頼むなら教えてあげなくもないわよ」

ｙｅｓの返事をもらって子供のように喜ぶバルスの前で、ルイズは今までにない充足感を味わう。あの事あるごとにタバサタバサと言っていたバルスが、ルイズにお願い事。おまけに本を読むお誘いとくれば、距離がおのずと近づくのは必然。あのカリカリというほどに羨ましかった触れ合うほどの距離が、バルスからの御願い事で実現されるかもしれない。そう考えると、ルイズはウキウキして仕方がなかった。

そんな素直に喜びを表現するバルスと喜びを表に出さないように努力しているルイズに、駆け寄る者がいた。生徒たちの中から一際目立つ赤い燃えるような髪が抜けだし、バルスの背後から近づいていく。

「もう、酷いじゃないダーリン！」

褐色の肌を持つ腕がバルスを背後からとらえ、思い切り抱き締める。背中に当たるやわらかいものと抱きしめられたことに驚き、バルスは思わず振り返った。

「キュルケ！？」

キュルケの言葉の意味が分からず、バルスの脳裏に疑問符が浮かび上がりまくる。更にキュルケの顔がバルスの肩のあたりまで近づき、キュルケの手がバルスの顔をなでたことでバルスの脳裏に感嘆符が浮かび上がりまくる。挙句、疑問符と合体した。

「何の話だ!?」

「この前、私の事を置いてアルビオンまで行ったでしょ?」

頬をもう一度なでようとするキュルケの腕をつかみ、バルスはキュルケの両腕からするりと抜けた。

バルスの脳裏には更に疑問符が浮かび、腕組みをしてそれのどこがいけなかったのか考えてみる。この前アルビオンに行ったときと言えば、それはアンリエッタからの極秘任務でアルビオンに行った時のことに違いない。だがそれは遊びに行っていたわけではなく、むしろ命にかかわる危険に巻き込まれる可能性が高かった。おいてけぼり呼ばわりは心外である。

「あれは危険だったからな。それがどうした?」

「じゃあ、どうしてタバサは連れて行ったのよ?」

ポンと手をたたき、バルスは驚く。確かに移動にタバサのシルフィードが必要で力を借りたが、タバサもそんな理由で危険に巻き込んだことには違いない。自分がその時どのような考えでタバサの力を躊躇なく借りようと思ったのか、バルスは己で己を計りかねた。

頭を悩ませるように腕組みしながら口元に手を当てるバルスの姿を見て、キュルケは作戦成功とほくそ笑む。

「これは埋め合わせして貰わなきゃいけないわ」

「どうしろと?」

「明日、虚無の日じゃない?一緒に街に出かけましょう」

キュルケの言葉に、ルイズはドキリとする。このキュルケの殺し文句でバルスから誘ってくれた約束が不意になったらと思い、ルイズは不安そうにバルスを見た。それも、キュルケとデートという約束で不意になりそうなのだ。

もしそんなことになったら、ルイズは耐えられる自信がなかった。バルスやキュルケ達の前では見せなくとも、いつものように影で悔し涙を流すことになる。今までで最低の虚無の日になるに違いない。

しかし、ルイズの不安が的中することはなかった。バルスは首を横に振り、ルイズの心がいくらか晴れ渡る。

「いや、明日はルイズと先約があってな。その次の虚無の日では駄目か？」

そのバルスの提案もルイズにとっては許容しがたいものだったが、バルスが微塵の迷いもなくルイズとの約束を持ち出してくれたので何も言えずに押し黙る。一方で、ルイズとの約束と聞いてキュルケは心の中で心底驚いていた。

何しろ、タバサとの約束で頼みごとを断られたことは多々あったが、ルイズを理由に断られるのは初めてのことである。バルスの心境の変化と新たな敵の出現を、キュルケは敏感に察知した。

とはいえ、バルスは無理強いしても約束を破らないタイプであることをキュルケはよく知っている。ここは潮時と、バルスと街へ行く約束だけを取り付けて満足することにする。

その三人のやり取りを、一部始終静かに見守っている者がいた。生徒たちをかき分けて青い髪が現れ、三人にゆっくりと近づいていく。

その青い髪に気づかず、キュルケは計画通りに少し不満そうな表情を作った。

「んもう、仕方な…」

「私も街に行きたい」

ポソリと呟くような、生徒たちの喧騒にかき消されそうな静かな声がキュルケの言葉を断ち切る。キュルケはそのある意味タイミングのいい声にドキリとし、ルイズはその声とともに現れた最強の敵にギョッとし、バルスはその内容に驚いて声のした方へと振りむいた。

「タバサ！？」

タバサはトタトタとバルスに近づき、袖を引っ張る。

「ダメ？」

訴えかけるようなタバサの瞳に、バルスはあー、うー、とか言いながら頬をポリポリと掻く。

実際、タバサは心の抑えが利かなくなるほどに必死だった。

バルスが教室の前にたどり着いてキョロキョロを始めた時、タバサは次々と教室から出ていく生徒たちの集団の向こう側にバルスがいることにルイズよりも早く気付いていた。いつものように自分のことを探しに来たのだと思ってバルスに声を掛けようとしたタバサだったが、バルスが声をかけたのはルイズ。

何となく気になって、悪いとは思いつつもバルスとルイズの話を立ち聞きしていたら、バルスがルイズと一緒に本を読む約束をしていた。それも、バルスの方から。

あのアルビオンでの一件以来バルスとルイズの仲は改善して、バルスはまたルイズの部屋で寝るようになった。そして、タバサはまた悪夢にうなされるようになっている。

それだけなら、いつもどおりに戻っただけと自分に言い聞かせる

ことで我慢できた。だが、ルイズは今まで絶対領域だったバルスとの読書の時間まで奪おうとしてくる。

そんなこと、させない。

更には、キュルケの殺し文句によるデートの約束の取り付け。バルスにデートのつもりがなくとも、事実そうであればバルスの意志は問題にならない。

親友だからこそわかる、キュルケの男の扱いのうまさ。怖さ。いかにバルスとはいえ、男であることに変わりはない。デートがただのデートで終わらない可能性もある。

そんなこと、我慢できない。

タバサは無表情を維持しているつもりではあったが、抑えきれない感情が顔ににじみ出てしまっている。バルスはそんなタバサの瞳から逃げるように目をそらす。

「じゃ、じゃあ、その次の虚無の日に、だな…」

「でも、どうしても明日がいい」

普段では考えられないほどに食い下がるタバサに、バルスは困惑することしかできなかった。それも、もう一度首を横に振ろうものなら涙があふれ出しそうなタバサの瞳に全ての自由を奪われて。

一方、バルスの後ろでルイズは困った顔をするバルスをただ見ていることしかできなかった。タバサの邪魔をして、バルスに嫌われるのが怖かったからだ。あの惚れ薬の一件から、ルイズはバルスに嫌われることに耐えられなくなりつつあった。

でも、このままじゃバルスがかわいそうね…。

タバサに詰め寄られ、頭をポリポリと掻くしかできないバルス。ルイズは勇気を振り絞り、バルスとタバサの間に割って入った。

「やめなさいよ、バルスが困ってるじゃないの」

タバサの青い瞳とルイズの鳶色の目がぶつかり合う。二人の間に飛び散る火花が、第二次トリステイン・ガリア大戦の幕開けを告げた。ンーッと睨み合う二人にバルスは一歩後ずさり、キュルケは冷静な目で三人の様子をうかがう。

キュルケの目から見て、第二次トリステイン・ガリア大戦は立場が全く逆だった。タバサがバルスを困らせ、ルイズがバルスをかばう構図である。

あの子、自分で気づいてるのかしら？

ルイズとにらみ合うタバサの顔は、感情豊かなルイズほどではないもののその必死に何かを守ろうとする感情をちらつかせている。以前の睨み合いとは比べ物にならないほどの感情のぶつかり合いである。

これは千載一遇のチャンスね。タバサには悪いけれど、この機会を逃す手はないわ。

キュルケが一度は諦めた、明日の虚無の日のデート。その活路が、タバサの無理矢理な介入によってキュルケの前に切り開かれた。キュルケはごく自然に、かついい立場でルイズからバルスをとり上げる方法を思いつく。キュルケは優しげな笑顔を浮かべると、その裏に隠した姦計を実行に移すことにした。

「まあまあ、二人とも落ち着きなさいよ。」

キュルケの優しい笑顔に、ルイズとタバサのジト目が向けられる。あんたもやるの、とでも言いたそうに。しかし、二人の反応を見通していたキュルケはそれを受け流すように話を進める。

「このままじゃ埒があかないわ。私にいい考えがあるのよ」

「いい考えって何よ？」

ルイズは疑いの眼差しをキュルケに向け、タバサも無言でキュルケをいぶかしむ。

「三人で勝負して、勝った一人がバルスと一日自由に過ごすの。負けた二人は文句なし」

得意げに人差し指を立てて提案するキュルケに対する二人の反応は、全く対照的なものだった。タバサはキュルケに示された光明に素早くうなずき、ルイズは口をへの字に曲げて瞳を怒らせる。

タバサはどんな勝負をしようとも勝つ自信があった。魔法の勝負だろうと、簡単なゲームだろうと数々の死地に底上げされた実力がタバサにはある。一方で、ルイズにはそもそも勝負を行うこと自体のメリットすらなかった。このままいけば、自動的にルイズはバルスと過ごすことができるのだから。

「嫌よ！私が一番最初にバルスと約束したんだから、私が優先に決まってるじゃない！」

「あら、勝負して負けるのが怖いのかしら？」

キュルケの挑発的な笑みが、ルイズの心を逆撫でする。キュルケはルイズの顔が今までとは質の違う怒りに染められるのを敏感に察知すると、更にあおりたてた。

「そうよね。バルスがいなければ今でもゼロのルイズだものね」

「な、ななな、何ですってぇ～！？」

ルイズの激情メーターが二周り以上も振り切り、歯噛みする口からは今にもギリギリと悔しそうな音が出そうになっている。

「いいわよ！その勝負受けて立つわ！！」

ルイズの怒鳴り声が、中庭に響き渡る。

ゲルマニアの姦計によってトリステインが高らかに宣戦布告。元々敵対関係にあったガリアもゲルマニアの姦計に便乗し、第二次トリステイン・ガリア大戦は世界大戦に発展するのだった。

男は、その長髪をたなびかせて薄暗い廊下を進む。真新しい斬られた傷に焼けるような痛みを感じ、男は肩口を手で抑えた。その男、ジャン＝ジャック＝フランシス＝ド＝ワルドは目的の扉の前に立つと、脂汗をぬぐう。怪我を気取られないように肩から手を離すと、表情を平静の時のものに変えて扉の取っ手を掴んだ。

扉を静かに開き、部屋の中へと身体を滑り込ませる。部屋の中は窓から日の光が入ってきているのだが、その光量が足りずに薄暗く

感じる。人の背丈を超える物々しい背もたれを持つ椅子や会議用の巨大なテーブルが、その薄暗さに重い空気を加算していた。

その物々しい椅子に坐る男、緑色の司祭服に身を包んだ高い鷲鼻に理知的な碧眼、カールした金髪の痩せ男を認めるとワルドは口を開いた。

「お呼びですか、クロムウェル閣下」

クロムウェルは指輪を眺めながらニヤつくのをやめ、その碧眼をワルドへと向ける。

「うむ。トリステインを落とす準備が整ったのだ」

「トリステインを？」

ワルドは眉をひそめる。目の前にいるレコン・キスタの指導者であるクロムウェルは、頭こそキレたが軍事作戦においては門外漢である。だが、ワルドの助言も、誰の助言をうけることなくこのクロムウェルという男はアルビオンを制圧して見せた。それも、またたく間に。

そして、クロムウェルはもうトリステイン王国を滅ぼす作戦を開始するという。いささか性急すぎるような気もしたが、アルビオンの覇者クロムウェルの言うことでもある。見解と作戦を聞いてからでも反対するのは遅くはないとワルドは判断した。

「どのような作戦をとられるおつもりですか？」

「ふむ。その前に、そろそろ紹介しておきたい人物がおってな」

「紹介したい人物、と申しますと？」

クロムウェルが立ち上がり、腰にさされた短剣が揺れる。クロムウェルが手招きすると、椅子と壁の影の間から一人の男が姿を現した。

青い髪に、紫色の瞳。青いアルビオンの軍服の上に黒いマントを羽織り、年齢は17～20程度であるように見受けられる。その端整な顔立ちと冷え切った瞳が、ワルドを戦慄させた。何故かはわからないが、本能的な何かがこの男は危険だとワルドに告げている。

クロムウェルはワルドの様子に怪訝そうな顔をしたが、その青髪の男の前に手を差し出して怪しい笑みを浮かべなおした。

「彼の名はバルス＝タイラント。我がレコン・キスタの作戦参謀をやってもらっている」

紹介された青髪の男は、頭を下げて一礼する。

「バルス＝タイラントと申します。以後、お見知り置きを」

ワルドはごくりと唾を飲み込む。その名を持つ人物と先のウェールズ暗殺の折に会ったことがあったが、ワルドはそれを口にする必要性を覚えなかった。目の前にいる人物が、そのバルスではないことが明らかだったからだ。目の前の人物は、ただ恐ろしい。何をされているでもないのに、その紫色の瞳が放つ虫けらを見るような目が恐ろしくて仕方がない。

バルスはワルドの肩に手を伸ばすと、ガシリと掴む。激痛が走り、ワルドは痛みで我に返った。

「うぐっ！」

「やはり…」

バルスが手を離すと、ワルドは片膝をついて息を荒げる。クロムウェルは驚いてワルドと同じ目線にしゃがみ込んだ。

「どうしたのだ!?」

「この男、肩に傷を負っているようです」

バルスは冷たい目でワルドの肩を見やると、立ったままワルドの肩へと掌をかざす。緑色の何かが掌から空気中に溶けだし、ワルドの肩にまとわりついた。

ワルドの肩の痛みがすうっと引いていき、血は止まり、やがて傷口は何もなかったかのようにふさがった。ワルドは驚き、立ち上がって肩をまわしてみる。痛みはなく、むしろ怪我を負う前より調子がいい。

「な、何をしたのだ!?」

「見ての通り。治癒したまで」

スクウェアクラスでもかなりの魔力を消費する難しい治療をしたにも関わらず、バルスという男は全くつかれた様子を見せていない。ワルドは恐怖を振り払い、バルスに詰め寄る。

「どうして私の怪我に気づいた?」

「…我が目を誤魔化せるなどと思わぬことだ。我が目には全てのマナの流れが写るのだからな」

二人の間にクロムウェルが腕を入れ、詰め寄るワルドを引き離す。

「やめるのだ、二人とも。」

バルスは一歩退き、クロムウェルに一礼して謝罪する。ワルドはバルスの言葉を理解できず、茫然と立ち尽くしていた。マナが見える目など、そんな話は聞いたことがない。かといって、このバルスという男が嘘を言っているようにワルドはどうしても思えなかった。

そんな茫然と立ち尽くすワルドに、クロムウェルは怒りを表す。

「子爵よ、そなたはバルスに謝罪すべきであろう。」

ワルドはクロムウェルの言葉に我で返り、胸に手を当てて一礼した。

「失礼した、バルス殿。怪我を治癒して貰いながら…」

「いえ、気にしてなどおりません。私に初めてお会いした方は、大抵の場合似たようなものです」

ワルドは瞳を震わせ、顔を俯かせたまま背のみを直立に戻す。確かに、バルスという男は気にしていない。しかしそれは、あらゆる人間を虫けら程度にしか思っていないからだとワルドは確信していた。バルスにとって、ワルドも、クロムウェルも、虫けらにすぎないと。

そうとは知らず、顔を伏せるワルドの横でクロムウェルは二人が仲直りしたことを喜ぶ。そのままバルスの紹介を再開した。

「実は、今までの作戦は全てバルスの作戦だったのだ。信じられるかね、子爵?」

「いえ、私のような凡人には及びもつかぬことでございました」

ウェールズの暗殺も、アルビオン制圧の電撃作戦も、全てはバルスの立案だとクロムウェルは語る。

その話も、ワルドは途中で聞き飛ばしてしまっていた。そんな男が元は一司祭にすぎないクロムウェルに付き従っていること自体が信じられない。

このバルスという男が敵に回れば、レコン・キスタの存在など蝋燭の火のようなものだ。アンドバリの指輪がクロムウェルの手に握られていることだけが、せめてもの救いだった。

「さて、そろそろお時間になります。陛下」

バルスは踵を返してワルドに背を向け、窓の明かりへと歩いていく。窓の前に立つと、バルスはマントを翻して振り返った。

「軍議のお時間ですよ」

逆光となった黒い影を落とすバルスの顔に、紫色の瞳が爛々と輝く。口元に薄い笑いを浮かべる悪魔が、ワルドを戦慄させるのだった。

第十二話　恋がペンタゴン

どうしてこうなったんだ…。

バルスは、トリステイン学院の石でできた廊下に坐っていた。空からは暖かな日差しが降り注ぎ、バルスは穏やかに流れる雲を見上げる。これほど穏やかな情景にもかかわらず、目線を落とせばそこは修羅場だ。中庭の草原で、桃色の髪と青色の髪と赤色の髪が睨み合っている。

バルスは、ただルイズにコモンマジックを教えてもらいたかっただけだ。それだけだったのに。

日ごろの行いか？日ごろの行いなのか！？

しかし、それはないとバルスは確信する。日ごろの行いが祟るのなら、２０億人を殲滅したバルスは一日何回死んでいるか分からない。

バルスは頬杖をつき、遠いジト目を睨み合う三人に向けた。三人の争いの種は、明日誰が自分と街で過ごすか。戦う理由が虚しい。虚しすぎる。

「どうかされたんですか？」

聞き覚えのある声に、バルスは頬杖からゆっくりと頭を上げる。そこには、笑顔でたたずむボブカットの少女がいた。メイド服を着ており、両手には洗濯物のかごを持っている。

「シエスタか。まあ、聞いてくれ」

バルスは我が身の不幸を呪うかのように、淡々といきさつを話し始める。初めはルイズへの頼みごとだったのに、いつの間にかタバサとキュルケが介入して街へいく話になっているだの、それが明日だの、何故か勝負が始まっただの、色々な事をしゃべくった。

シエスタはうんうんと頷き、いつの間にかバルスの隣に坐り込んで話に聞き入っている。バルスは一通り言いたいことを言うと、ため息をつく。そんなバルスにシエスタは笑顔で応えた。

「それ、誰でも参加してよろしいのでしょうか？」

「ん？いいんじゃないか？」

「じゃあ、私ちょっと行ってきます」

「な、何だと！？」

バルスの隣に洗濯物のかごを置き、シエスタは草原で対峙する三人の元へと駆けだす。バルスはシエスタの後姿を唖然として見送ることしかできない。

「シエスタ、お前もか…！」

バルスは昔の権力者が吐いた名台詞を迷台詞と変え、ガックリと項垂れる。バルスに優しいのは、もはや日の光のみだった。

一方バルスが頭を抱えている頃、世界大戦を始めた三ヶ国の戦況はトリステイン平民反乱軍の介入によって混迷の度合いを深めていた。ただでさえ決まらない勝負の方法が、魔法を使えない平民の手によって余計に決まらなくなっていたのである。

イライラの収まらなくなったトリステインが、イライライラとして反乱軍にかみつく。

「第一、何であなたまで出てくるのよ！平民のくせに！」

「あら、バルスさんはいいって仰ってくださいましたよ？それに、バルスさんも平民じゃないですか」

「うぐぐ…」

ルイズはバルスが侯爵であることを告げ、このメイドがいかに身の程知らずな事を言っているのか思い知らせてやりたくなる。しかし、それはバルスが確実に怒るのでできない。ルイズは悔しさでぐの音を出し続ける。

一向にこう着状態を打破できない戦線を鑑み、トリステインの両軍めがけて今度はガリアが口火を切った。

「そもそも、魔法が使えない時点で問題外。バルスに魔法を教えるなんて、無理」

「何言ってるのよ！？バルスができるったら、できるのよ！第一、この勝負はバルスと誰が街に行くかの勝負になったはずだわ！」

「そうですよ！何の話か分かりませんけど、街に行くのに魔法なんか関係ないじゃないですか！」

ガリアの砲撃をトリステインの両軍が協力して撃退し、また対峙して睨み合う。

いつまでも続く対峙の間に、ゲルマニアは新たな計略を立てていた。何か打開策はないかと、キュルケは思案する。

「そうだ、バルスに決めてもらいましょう！」

おお、と各国がどよめきたち、頷いて和解する。四人は項垂れるバルスに駆け寄った。

「バルス」

「バルス…」

「ダーリン」

「バルスさん」

バルスは四人の声色を聞き、恐る恐る顔を上げる。そこには、先ほどまで遠くで争っていたルイズ、タバサ、キュルケ、シエスタの姿がすぐ近くにあった。

四人は物凄い一体感で同時にバルスに詰め寄る。

「勝負の方法、決めなさい」

「決めて」

「決めてくれないかしら？」

「決めてください」

バルスが見上げる逆光に落とされたルイズ、タバサ、キュルケ、シエスタの暗い顔が、そのそれぞれの心情を物語る。

私に不利な勝負を選んでみなさい。絶対に許さないわよ。

バルスが私に不利な勝負を選ぶはずない。

もちろん、私に有利な勝負を選ぶのよね？

優しいバルスさんのことだから、きっと不利な私に有利な勝負を選んでくれるはずだわ。

四人の形相に、思わずバルスは援軍を呼ぶことにした。こういう時のミニゲーム的な勝負にめっぽう強いやつである。カチリと引き抜かれた刀はしかし、四人の落とす影によって日の光を返すことはなかった。

「何この状況…。修羅場？」

「そうとも言う…」

引き抜かれたムラマサは、主人の言葉にごくりと唾を飲み込む。修羅場、それはムラマサが生きてきた幾歳、何人もの主人が体験した恐怖の瞬間である。ムラマサは主人とこそこそと話す。

「1、2、3、4…。うわあ、ご愁傷さまね」

「馬鹿を言うな…」

「だって、四股でしょ？五角関係でしょ？」

「何だそれは？」

「そのままの意味よ。クラス、ペンタゴンね」

「笑えん。何とかしろ」

「自業自得よ、自業自得。四人も同時に手出すからよ。来世では反省を生かしなさい」

「待て、誰一人として手を出した覚えはないぞ」

これほどの剣幕で迫られているにも関わらず、バルスは手を出していないと容疑を否認する。コソコソと話すバルスとムラマサに限界を迎えたのか、四人の少女は同時に地面を踏んでバルスに更に詰め寄る。

「愛されすぎじゃない？ご主人様」

「いいから、早く勝負のやり方を決めろ」

「勝負？」

ムラマサは主人から事の概要を聞くと、なるほどと納得した。この修羅場は、要はバルスの責任追及の場ではなく、バルスの争奪戦であると。となれば、ムラマサは血が騒ぐ。

野球拳がいいか、脱衣ナントカがいいかとムラマサの真黒な心が躍り狂う。しかしそれらはあまりにも上級者向けすぎるので、とりあえず普通のゲームから始めさせることにした。

「じゃあ、サイコロの数当てでどうかしら？」

サイコロと聞いて、タバサの目が輝く。タバサの隠れた特技は、サイコロばくち。

この勝負、貰った。

心の中で笑うタバサを横に、他の三人は意味が分からず首をひねる。ムラマサは四人のために淡々と説明を始めた。

「まず1~6の中から数字を一人一つ選ぶのよ。それから六面サイコロを一つ振って、選んだ数字と出た目が同じ人の勝ち。簡単でしょ？」

そのルールに違和感を覚え、キュルケが頬に人差し指を置く。

「ちょっと待って。四人しかいないわよ？私たちが選んだ以外の他の目が出たら、どうするのよ？」

「大丈夫よ。残りの目は、私とご主人様でいただくわ」

バルスは物凄く嫌な予感がして、ムラマサの設定するルールに聞き入る。

「ご主人様の目が出たら、ご主人様に勝者を決めてもらうの。そして私の目が出たら、やっぱり私のご主人様が選ぶのよ」

「おい！？」

修羅場に面白みというスパイシーを加え、ムラマサは大変満足である。バルスは身の危険を感じたが、ルールは設定された。もはや後の祭りでしかない。

タバサが氷で六面サイコロと四角い四本足の机を精製し、四人が机を囲んで対峙する。その時、ムラマサの刀身がキラリと光った。

あの娘、やるじゃない。

ギャンブルの基本は、公平。しかし、そのタバサによって精製されたその舞台は必ずしも公平とは言えなかった。なぜなら、舞台の創作者たるタバサがいくらでもイカサマの罠を張ることができるからである。

そしてその事実に、ギャンブルのド素人である他の三人は気づいていない。真剣そのもので自分の選ぶべき数を考えている。

ムラマサは試合を開始すべく、もとい修羅場をもっと楽しむべく数字を決める順番を発表する。

「ルイズ、キュルケ、タバサ、シエスタの順番ね」

それはバルスの前に押し掛けた順番であり、その旨を告げられると一番最後のシエスタは押し黙る。とはいえ、結局はサイコロの目に決められる運だめしの勝負である。順番など関係ない。イカサマさえなければ。

タバサはあらかじめ、五の目が出やすいようにサイコロの表面を加工した。おまけに、反対面である二の目の面が氷の机にくっつきやすいように細工してある。見た目では分からない程度に、だ。

故に、タバサの狙いは五。三番目に選ぶタバサは緊張を押し隠し、無表情でルイズを見つめる。ルイズは迷っているようで、中々数字を選ぼうとしない。

そんなルイズの様子にキュルケがしびれを切らす。

「あら、困ったわね。あなたの数字がないなんて」

「何よ、それ？」

「ゼロ」

カチンという音がルイズの頭から聞こえ、ギラリとキュルケを睨みつける。感情メーターが一気に振り切ったルイズは、感情の赴くままに言い放つ。

「六よ！六！」

ルイズは突発的にゼロよりも一番遠い数字を選んだ。分かりやすい答えに、キュルケはクスクスと笑う。

「じゃあ、私は一を貰うわね」

自分が一番といわんばかりのキュルケの顔に、ルイズは悔しそうに拳を握る。見てなさいよ、と心の声が今にも聞こえてきそうなほどに。

「私は五」

タバサは無表情で数字を選び、その裏側で安堵する。もう一度イカサマを仕掛け直すとなると、魔力を感じることのできるバルスがいる手前、気づかれずに行うのは非常に難しい。

シエスタは残った数字を見て、四だけは何となく嫌と思う。

「私は三です」

その数字だと、二と四がバルスで、バルスの数字の間にシエスタの数字が挟まれていいことが起こりそうな気がした。根拠のないゲン担ぎである。

ムラマサは四人が選んだ数字を覚え、今度はサイコロの振り手を指名する。

「じゃあ、ご主人様。よろしく」

「俺か？」

渋々と言った様子でバルスは立ち上がり、氷の机の前に立つ。氷のサイコロを手に持つと、掌で転がすようにサイコロを放った。カラカラと音を立てるサイコロに、四人の目はくぎ付けになる。

案の定、二の目の面がひっつきそうになり、五の目の面が表で止まろうとする。その目を見て、タバサは心が痛むのを抑えながら、己の騎士団の信条を反芻する。

勝つためなら、何をやってもいいの。

その考えに大賛成の者がいた。親友キュルケである。恋のためなら、何をやってもいいんだとキュルケは杖を振るった。

ガタリと音がして、氷の机が揺れる。残る三人が机の下を見ると、机の脚が一つ溶けてなくなっていた。サイコロはカラカラと音を立てて転がり、タバサの眉はへの字に曲がる。

悲しそうに睨みつけるタバサに、満足そうな笑顔を浮かべるキュルケは全く気付いていない。今にも一の目の面で止まりそうなサイコロに目を輝かせている。

「このっ…！！」

唐突に発せられたルイズの小さい声とともに、ガンッと机が大きく揺れる。他の三人が下を覗き込むと、ルイズの脚によって机の脚がへし折られていた。机がグラリと傾き、サイコロが地面に投げ出される。

あまりにも陰湿な戦いに、バルスは恐怖を覚えて後ずさった。

こ、これが、女の戦い…！

ドン引きのバルスを尻目に、四人は転がったサイコロを追いかける。出た目の勝者が、高らかにサイコロを持ち上げた。

「やりました！三です！」

キラキラと綺麗な笑顔で、シエスタはバルスに駆け寄っていく。

「バルスさん、見てください！三ですよ、三！」

「あ、ああ」

「それでですね、明日なんですけど…」

楽しそうに明日の話を始めるバルスとシエスタを、三人は遠目に見つめる。

キュルケとタバサは別段悔しがることもない。ルイズとバルスの仲を早めに阻止することができたキュルケと、本という絶対領域を守ったタバサ。とりあえずの目的を達成し、二人は胸をなでおろす。メイドなど、眼中にないといった様子である。

一方、ルイズは負けたことが悔しくて仕方がなかった。おまけに、バルスはシエスタと楽しそうに明日のデートの話をしているのである。正確に言うとバルスはシエスタにタジタジだったのだが、ルイズには楽しそうにおしゃべりしているようにしか見えない。

だって、本当だったらあそこで喋ってるのは私で。だって、バルスから誘ってくれて…。

ルイズは確定した灰色の虚無の日に、激しく後悔した。キュルケの簡単な挑発にのって、挙句勝負に負けて。馬鹿な自分が許せなかった。

そんなもう勝負が終わったように振る舞う四人を前に、怪訝そうにする者がいた。ムラマサである。

「何やってんのよ、小娘たち。次よ」

ルイズは審判の言葉に顔をあげ、キュルケとタバサは驚く。勝負に勝ったつもりでいたシエスタは、笑顔をかたくしながら振り向いた。

「ミニゲームは三本勝負が基本なのよ」

敗者三人に再び闘志の光が宿り、シエスタはぬか喜びに落胆する。そう、ムラマサがこんな面白いシチュエーションをすぐに終わらせる訳がない。世界大戦は一時の間を置き、更に混迷の度合いを深めていく。

その渦中にあるバルスは、睨み合う四人の背中を見つめる。

まだやらせるのか、ムラマサ…。

男の碧眼の瞳に、頼もしい男たちの姿が写った。十一人の頼もしい男たちは円卓を囲むようにして木の椅子に坐り、碧眼の男、クロ

ムウェルに注目する。そして、クロムウェルの隣に空いた席にも。
やがてコツコツという石畳を歩く足音とともに、青い軍服と黒いマントを羽織った男が姿を現す。紫色の瞳で円卓の周りを囲む男たちを見回すと、クロムウェルの隣の席に坐った。
クロムウェルはこの場に招集した将軍が全て揃ったことを確認し、咳払いをしてみせる。

「では、これより軍議を行う」

クロムウェルはバルスの紫色の瞳と目を合わせ、作戦を説明するように促す。バルスは頷いて立ち上がり、円卓に広げられたトリステインの地図へと指を差し出す。

「本作戦は、トリステイン攻略の第一歩だ。具体的には、この場所を攻略する」

バルスの指が、地図上でピタリと止まる。そこには、タルブの文字が書かれていた。
タルブと言えば、付近には小さな村しかない。重要な軍事拠点があるわけでもなく、将軍たちはなぜそこを攻略すべきなのか計りかねた。とはいえ、アルビオン攻略の指揮を執ってきた青髪の参謀長にはこれまで幾度も同じ疑問を抱き、いつも驚かされてきた。その真意を確かめようと、将軍たちの中から一人が席を立つ。白髪と白髭がまばゆい、幾度もの修羅場を乗り越えてきた事を想像させる将軍である。

「何故タルブの村を？私、凡人なる故、閣下の意図が計りかねます」

バルスは黙って頷き、地図へと手をかざす。地図から紫色の光が漏れると、トリステインの地図が消え、タルブの詳細な地図へと変

化していく。
　杖も使わず、系統不明の魔法を使うバルスに驚く者はこの場にいなかった。この場にいる者全てがこれまで幾度も目にした光景であり、慣れたものだからである。バルスの威圧感も相まって、初めの内は皆がバルスに杖を向けた事もあったのだが。

「ホーキンス将軍、タルブには何がある？」

「は、小さな農村だけです」

「そうだな。大体正解だ」

　将軍たちは、まだ何かがあるような口ぶりの言葉に首をかしげる。他に、何があったのかと。それはホーキンスも同様であり、首をかしげる。

「他に何かありましたかな？」

「豊かな田畑、それに見晴らしのいい平原だ」

　歴戦の将軍ホーキンスは、その二つの答えで納得する。他の将軍たちの中には納得いかない者もいるらしく、首をかしげている者がまだ大半を占めていた。バルスはその様子を見て、説明を続ける。

「国を攻めるには軍がいる。軍は数が多ければ多いほどいい。そして大軍を動かすに必要なのが、兵糧だ」

　トリステインを攻略するに当たり、いくら小国とはいえアルビオンは大軍を送り込む必要がある。ところが、その軍の食糧輸送能力はアルビオンが浮遊大陸であることによって大きく低下する。陸続

きではないので、馬車などによる輸送に頼ることができないのだ。
アルビオンからトリステインまで食料を輸送するとなると、その手段は空飛ぶ船に限られる。船への積載量には限界があり、その数にも限界がある。更に兵員の輸送と武器の輸送を考えると、いくら船があっても足りない。
そこでバルスは、食料をトリステインで調達することを考えた。タルブは現在田畑の実りの時期を迎えており、食料は大量にある。それは大軍を数カ月に渡って養うことのできる量であり、それだけ軍費の軽減にもつながる。輸送負担の軽減にもつながる。一石二鳥の戦略である。

「そして平原。我が軍の主力は空軍だが、その真価を発揮できるのは遮蔽物のない平原だ」

空軍の視点は、勿論空から大地を見下ろしたものである。そして、空から遮蔽物も何もない平原の中の敵を見下ろせば、その動きは手に取るようなもの。おまけに竜のブレスや船の砲撃の邪魔をするものもなく、照準を付けやすい。
一方、森の中に隠れられると空軍の力は半減してしまう。どこに隠れているのか、空からでは特定が難しくなってしまうからだ。

「よって制圧しやすく、食料が豊富、地の利を得ることのできるタルブを奪る。質問は？」

ホーキンスは席に着き、他の将軍たちも納得したようにうなずく。バルスは将軍たちを見やり、全員が納得した事を確認した。

「よし、では詳細の説明に入る」

バルスは円卓の周りを囲む一人、口髭が凛々しい長髪の男に視線

を向ける。

「ワルド子爵」

「はい」

「三千の竜騎士を預ける。敵が平原に現れればこれを討ち、森の中へ逃げれば追うな」

ワルドは一礼し、席に着く。続いて、バルスは次々と将軍たちに支持を出していく。

「将軍。あなたには三千の兵を預ける。タルブの村を速やかに制圧し、三日間できるだけ食料を集めろ。四日目はよく兵を休養させろ」

「はっ！」

「最後にジョンストン将軍、あなたに全軍の指揮を任せる。戦場においては期を計って全軍を指揮し、タルブを見事占領して見せよ。占領したのちは、その治安の維持に当たれ」

「はい！お任せください！」

九人の将軍が礼をすると、バルスの支持が終わった。そこで支持を出されなかった将軍の一人、ホーキンスは首をかしげる。それは、自分が指名されなかったことに対しての不満からではなかった。

「参謀長。敵が現れなかった時はいかがいたしましょうか？」

ホーキンスの疑問に、その場の将軍たちも頷く。バルスの作戦は、

タルブの村にトリステイン軍が現れることを想定してのこと。もし現れなければ戦わずに無血占領だが、今までのバルスの作戦を思えばそれだけでは将軍たちにとって物足りなかったのだった。

バルスはそれに対する答えも持っている様子で、静かにうなずく。

「ホーキンス将軍。あなたはアルビオンにトリステイン軍が上陸してきたらどうする？」

「無論、速やかに迎え撃つでしょう」

「何故？」

「敵に我が皇帝の領土を侵されたままとあっては、面目が立ちませぬ」

「ならば、それはトリステインの者たちも同じことだろう？」

確かに筋は通っているが、まだそれだけでは押しが足りない。何かふに落ちないホーキンスの様子に、バルスは説明を続ける。

「では将軍。タルブの村に更なる大軍が向かっていると知ったらどうする？それも、自軍全軍とほぼ同等の数と知ったら？」

「しかし、それはいくら我が国が大国であろうとも無理でございましょう。先ほどのご指示通りなら、タルブの村へ既に二万以上の軍を動員しております」

「浅慮だな、将軍。その情報は何も本当である必要はないのだ」

ハッとしてホーキンスは息をのむ。確かに、その情報は本当であ

る必要はない。要は、トリステインにそれが本当の情報であると信じさせればいいのだ。

「しかし、どうするおつもりですか？」

「ホーキンス将軍、あなたに二千の兵を預ける。ロサイスに無数の旗とテントを立て、軍が野営しているように見せかけろ。更には空の積荷を用意し、船に積み下ろしをさせるのだ」

「しかし、それではスパイが近付けばすぐに気付かれてしまうのでは？」

うんうんと他の将軍たちも頷く。ハルケギニアの各国は諜報組織を有しており、その中には優秀なメイジをスパイとして多数抱えている国も少なくない。そんなスパイを確実に防ぐことなどできるはずもなく、いくらかの情報は外に漏れ出す。ましてや、街全体の大雑把な偽装など漏えいして当然のことである。

「偽装作戦には私も参加する。私が幻の兵を用意しよう」

堂々たるバルスの態度に、ホーキンスは押し黙る。確かに、バルスの使う不思議な魔法をもってすればそれは可能なのであろうとホーキンスは自分を納得させる。他の将軍たちも、アルビオン攻略の作戦を尽く成功に導いたバルスの言うことならと納得した様子を見せていた。

しかし、バルスのトリステイン軍誘き出しの作戦はこれだけにとどまらなかった。

「さて今回の戦では、恐れ多いことではあるが皇帝陛下には陣頭に立っていただく」

「何！？」

円卓を囲む将軍たちが、一斉に立ち上がる。その顔に、怒りの色を浮かべて。

「参謀長、皇帝陛下を囮にするつもりか！」

「無礼な！」

円卓の間を、バルスへ向けての怒号が飛び交う。しかしそれは、クロムウェルが立ち上がることで沈黙へと変わった。クロムウェルは将軍たちをなだめようと、席に着くように促した。

「諸君の気持ち、嬉しく思う。だが、この作戦は余が既に承認しておる。余は聖地を奪還するためなら、この命など惜しまない」

おお、と将軍たちは皇帝の決意に感銘を受けている。バルスも一礼し、皇帝の決意への敬意を示した。クロムウェルは量手を大きく広げ、高々と突き上げる。

「このハルケギニアを尽く制し、聖地を奪還する聖戦を始めるのだ！トリステインに宣戦布告せよ！！」

将軍たちも片手を大きく上げ、握りこぶしを天へと突き上げる。皇帝の檄に、全身全霊をもって応えた。

「神聖アルビオン共和国万歳！皇帝陛下万歳！聖地を奪還せよ！」

そんな中、ただ一人皇帝の檄に応えない者がいた。その者は檄に

応えていないにもかかわらず、他の者たちにはその者が拳を突き上げている姿が見えていた。その者の、檄に応える幻影が。
その者の冷ややかな紫色の瞳が、虫けらを見るようにクロムウェルを映す。その後に熱狂する将軍たちを見やると、バルスは禍々しい薄ら笑いを浮かべた。
これで勝てなければ、貴様らはただの馬鹿だ…。

暖かな日差しの降り注ぐ、平和なトリステイン学院の中庭。そこはしかし、ごく一部の者たちにとっては戦場と化していた。ルイズ、タバサ、キュルケ、シエスタの四人が地面に書かれた四本の線をしゃがみ込んで睨みつけ、バルスは四人から少し離れて対面に坐っていた。
四本の線は平行に描かれており、その間には何本か線が引かれているように見受けられる。その線の先端にはムラマサが置かれており、その下に書かれている当たりと外れの文字を隠していた。
そう、世界大戦の第二幕はあみだくじである。審判者たるムラマサが刀身を光らせ、戦闘開始の号令をかける。

「次選ぶのはシエスタからね」

シエスタはどれが当たりにつながる線かと、四本の線の間で人差し指を行ったり来たりさせている。やがてしびれを切らした三人が、同時に口を開いた。

「後十秒」

十、九、と三国連合に数えられて煽られたシエスタは、慌てて左端の線を選ぶ。続いてキュルケが迷うことなく右端の線を選び、タバサがキュルケの隣を選ぶ。最後に迷う権利すら与えられなかったルイズが左から二番目の線を選んだ。

全員が線を選んだことを確認し、バルスはムラマサを当たりと外れの上から動かす。イカサマ無しの完全な運だめし。まずは左端のシエスタである。

「ああ…」

シエスタの線をなぞる人差し指は、外れの中に吸い込まれていく。ここで当たりを引いていればシエスタの勝ちが確定していたので、他の三人は胸をなでおろした。続いて、ルイズの番である。

「よーし、見てなさいよ！」

ルイズは緊張の面持ちで線を人差し指でなぞる。やがてその顔は悲しみへと変わり、次いで怒りへと変わっていく。外れを引いたルイズは、顔を下へと俯かせた。続いて、タバサの番である。

タバサは淡々と人差し指を滑らせ、己の道を切り開く。

「外れ…」

ポソリと呟いてタバサが隣を見ると、キュルケが満足そうな笑顔を浮かべて立ち上がる。キュルケはそのままバルスに駆け寄り、抱擁して嬉しさを表現する。

「後一勝したら忘れられない虚無の曜日にしてあげるわ、ダーリン」

「お前な…」

イチャつくキュルケとバルスを見て、ルイズの激情メーターが振り切る。顔を俯かせたままあみだくじを睨みつけ、脚を持ち上げた。

「何なのよ、たかがくじの分際でしかない癖に！このあみだくじが！あみだくじがっ！」

ドスドスと、あみだくじの書かれた地面がルイズの脚によって均されていく。その様子を見たタバサも触発されたのか、手に持った身の丈もある杖をあみだくじへと向けた。タバサの瞳には氷のような怒りが宿り、無表情がその迫力に拍車をかけている。

「くじの癖に、生意気」

杖に風を纏わせ、タバサもあみだくじをポコポコとたたく。貴族二人の本気の怒りを目の当たりにして、シエスタはオロオロとすることしかできない。

あみだくじが地上から消え去っても復讐の宴は続き、地面が掘り返される。あみだくじのオーバーキルに満足したのか、やがてルイズとタバサは地面への攻撃をやめた。

肩で息をハアハアと切らせているが、表情は晴れ晴れとしている。

「次よ」

「次」

二人のすがすがしいまでのすっきりとした顔を見て、バルスはキュルケに抱きつかれていることすら忘れていた。

怖…。

キュルケのなすがままになっているバルスの代わりに、ムラマサが反応する。もう後がないトリステインとガリア、後一勝で勝利が確定するゲルマニアと反乱軍。世界大戦終盤に選ばれた戦いの舞台を、ムラマサは高らかに告げる。

「最後は、ご主人様へのデートのお誘いよ！」

ムラマサの言葉に、バルスを含めた五人の脳裏に疑問符が浮かぶ。今までの具体的なミニゲームと違い、言っている意味がわからない。それも当然と、ムラマサは得意げに話を進める。

「ルールは簡単。ご主人様を小娘たちがデートにお誘いして、ご主人様が一番魅力的に思えるデートの誘い方をした小娘の勝ちよ！！」

そのルールに、バルスは顔を俯かせる。完全実力主義、運など介す余地もないその舞台に、各国は己の持てる戦力を確認し始めた。

ルイズは己の胸を両手で触り、あまりにも平らなことにため息をつく。キュルケの身体全体をチラリとみて、その戦力差に再度ため息をついた。仕方なく、バルスが自分に対してトキめいていそうな時を記憶から探ってみる。

今まで泣きついたり抱き締められたりと色々あったが、バルスは困った顔をしたり平気な顔でどこ吹く風といった様子でしかなかった。攻め方が全く分からない。

どうすればいいのよ…。

落胆するルイズの横で、タバサも同様に己の胸を触る。全く平らであることにルイズ同様ため息をつき、キュルケとシエスタを見や

った。圧倒的な戦力差に、何か策はないかと思案する。
今まで疑似デートしてみたり一緒に本を読んでみたりしてきたが、バルスは困った顔をしたり真剣な顔つきをするばかりだった。唯一普段と違う反応を見せたのは、自分が白いワンピースに着替えた時のみである。
タバサには対バルス用４６センチ主砲級笑顔があるのだが、タバサ自身が空飛ぶ船の上でその笑顔を見せたことにすら気が付いていない。おまけにバルスも上手く誤魔化しているので、それが弱点となっていることにタバサが気がつくことはなかった。

あの時のワンピースなら、いけるかも…。

策の決まったタバサの横で、キュルケは策を思案する。戦力の懸念など、爪の先ほどもない。要は、それをどう生かすかである。
いつもバルスに抱きついて自慢の胸をおしつけてみるが、効果はいま一つである。顔をなでてみても、その反応は変わらない。他の男と違い、デレデレしないのだ。
ならば、とるべき道は一つ。他の事を試してみればいい。

そうね、乙女の恥じらいでいこうかしら…。

あーでもない、こーでもないとしているキュルケの横で、シエスタは自分の胸を見る。戦力はキュルケほどではないが、ルイズやタバサよりは圧倒的に上と確信する。
更には、バルスとは厨房でよく会っているのだが、自分が笑顔を見せるとバルスは和んでいる様子だった。これに普段とのギャップを加えれば、なんとかなるかもしれない。

ちょっと大胆な私服に、止めは笑顔で…。

その後のバルスの返事を妄想して、シエスタはニコニコと笑顔を浮かべる。そんな中、バルスは顔を俯かせたままフラフラとムラマサに歩み寄っていく。そのままつかをガチリと掴むと、しゃがみ込んでポツリと呟く。

「ククク…。貴様、そんなに俺を修羅場に放り込みたいのか？」

ムラマサのつかがギリギリと音を立て、バルスの手に力が入っていく。ムラマサが己の主人を見上げると、そこには泣く子も殺して黙らせる邪神の歪んだ笑顔があった。

「溶鉱炉で溶かされたいようだな…！」

「ひいいいいいいい！」

ムラマサが気絶して黙ったのを確認すると、バルスはゆっくりと立ち上がる。ソワソワしてその気になっている四人組を見やると、全力で笑顔を向けた。

「次の勝負、じゃんけんな」

バルスの無邪気な笑顔が、四人のハートを射ぬく。ルイズ、タバサ、キュルケ、シエスタはそれぞれ咳払いし、気を取り直した。

「し、仕方ないわね」

「あなたがそう言うのなら」

「ダーリンがそう言うなら、仕方ないわ」

「分かりました。バルスさんがそう仰るのなら」

四人は対峙し、再び火花を散らしあう。勝てば街であの笑顔を独占、おまけに思い出を作り放題。世界大戦はじゃんけんに舞台を移し、よりその苛烈さを増していく。三ヶ国と反乱軍が、同時に戦いののろしを上げた。

「じゃーんけーん、ポン！」

互いに譲らない結果、あいこである。四人は互いを睨み合い、第二次攻撃に移る。

「あいこでしょ！」

互いに譲らない結果、またしてもあいこである。

「あいこでしょ！あいこでしょ！」

四回あいこが続き、四人は互いにジト目で睨み合う。全員が全員、しつこいと言いたげに。

次こそは、と四人は片腕に全身全霊の力を込める。

「あいこでしょ！！」

勝敗は、たった一カ国にたった一度で決された。パーの中に並ぶ、一つのチョキ。勝者はチョキを顔の前まで持っていき、鋏のようにチョキチョキと動かす。

「私の勝ち」

チョキチョキと顔の前でチョキを動かすタバサを前にして、一勝もしていないゼロのルイズが崩れ落ちる。ガリア一勝、ゲルマニア一勝、トリステイン平民反乱軍一勝。この時点で、トリステインは戦闘継続能力を失ってしまったのである。

ルイズはフラフラと立ち上がると、顔を俯かせたままヨロヨロとその場を立ち去っていく。ルイズがかなりの精神的ダメージを負ったのは、火を見るより明らかである。バルスはすぐにルイズを追いかけた。

「待てよ、ルイズ」

「何よ？」

ルイズはバルスの呼びかけに立ち止まらず、ザクザクと足早に歩き始める。バルスは小走りになってルイズを追いかけ、その肩を掴んだ。

「だから、待てと言っている」

肩を掴まれたルイズは初めて足を止め、バルスの方へと振りむく。バルスの心配そうな顔を認めると、ルイズは余計に悲しくなった。

「私、楽しみにしてたのよ…？」

ルイズはグッと歯を食いしばり、泣きそうになるのを堪える。

「あんたはそうじゃなかったかもしれないけど、私は楽しみにしてたのに！」

「お、おい？」

「私、負けちゃったのに！どうしてそんな顔しかしてくれないの！？もっと悲しそうにしてくれたっていいじゃない！！」

言い終えて、ルイズはヒゥッと息を詰まらせる。何と恥ずかしいことを言っているかに気が付き、頭が大混乱に陥る。

「あ、あああ、あんたなんか大っっ嫌い！あんたなんか、あんたなんか、大っっっ嫌いよ！バカ！！」

大嫌い大嫌いと続けられて、流石のバルスも妙に悲しくなってきた。しかしそうなりつつも、バルスは懸命にルイズをなだめる。遠くから蹄の音が近づいてきて、学院内が騒然としていることも全然気にならない。

「皆、大変なことになったぞ！」

ドカドカと近くで馬の蹄が止まり、バルスは迷惑そうに声の主を見上げる。馬にまたがるギーシュは、しかし、いつもの気障な笑みを浮かべていなかった。その表情は必死ささえ感じさせられる。

だが、バルスにとってはそんなことはどうでもよかった。目の前が大変なことになっているのである。

「見ればわかるだろ？大変なことになっているんだ」

バルスがルイズといつもの痴話げんかをやっているが、ギーシュにはそんなことはどうでもいい。無視して話を続ける。

「アルビオンが神聖アルビオン共和国と名前を変えて、トリステインに宣戦布告した！」

バタバタと暴れていたルイズの手足が止まり、バルスもその宣戦布告の報に息をのむ。

白の国に暗雲立ち込め、戦乱の時代へと誘っていることを誰も知る由もなかった。

第十三話　ついたウソは虚無のウソ

寝間着姿のルイズは、蝋燭を灯した薄暗い自分の部屋でクローゼットの中をあさっていた。バルスに気がつかれないようにと一番奥にしまいこんでいた白い布を取り出す。それは綺麗に洗われている白い布であったが、所々に破けた跡がある。そしてその破けた跡は、不格好な白い当て布で補修されていた。

ルイズは白い布を大切そうに抱え込むと、机に置かれた裁縫セットの前にゆっくりと歩いていく。裁縫セットの中から針を取り出して白い糸を通すと、白い布の破れた個所に白い小さな布を当てて縫っていく。

これが最後、急がないと。

ルイズが縫って補修をしているのは、バルスがこの世界に来た時に纏っていた白いローブだった。バルスが親睦会でルイズを助けてからというもの、ルイズがコツコツと補修してきたものだ。

ルイズの趣味は編み物だったが、それなら裁縫も似たようなものとバルスのローブ補修にとりかかったのがその始まり。そもそも編み物も上手くはないルイズは、裁縫にも四苦八苦することになった。だが、ルイズは諦めなかった。バルスに何かお返しをしたかったからである。

その補修は笑った日も、泣いた日も続けられた。バルスに知られると恥ずかしいので、バルスのいない間に。そしてそれは今日、虚無の日を前にして完成しようとしている。

「痛っ！」

ルイズはチクリと自分の指を針でさし、思わず声を漏らす。プク

リと指の上で血が膨らみ、ルイズは口に指を咥える。痛みが治まるとルイズは気を取り直し、白い小さな布を縫いつけ終えた。
裁縫箱をクローゼットの中にしまいこみ、白いローブを抱えたままバルスの帰りを待つ。ルイズは時々身体が震えるのを押し殺し、白いローブを抱きしめる。
大丈夫よ、ルイズ。ちゃんと笑顔で出迎えるのよ。

ルイズが身体を震わせるのは、バルスにこの贈り物を渡すのに緊張しているからだけではない。ルイズは先ほど、今回の戦争で兵役に志願することをオスマン学院長に伝えたばかりだった。ルイズはこれから参加する戦争自体におびえていたのだ。
そして、この戦争にバルスを参加させるつもりはなかった。バルスは使い魔でもなく、トリステインの人間でもない。参加させる理由もなく、強制的に連れてこられたこの国で戦争に巻き込まれるなど不憫すぎる。
あれこれとルイズが思考を巡らせている間に、トタトタと足音がしてルイズの部屋の前で止まる。その聞きなれた足音にルイズは緊張したが、扉の向こうの人間がルイズの事情を知るわけもなく扉を開いた。

「ただいま」

「お、おおお、お帰りなさい」

ルイズは思わず白いローブを後ろ手に隠し、強張った笑顔を作る。以前に多様な状況を経験したバルスは、ルイズが後ろ手に隠したものをいぶかしんだ。

「どうした？」

「あ、あの、明日渡したかったんだけど、こんな状況じゃない？だから、今渡しておくわ」

差し出されたルイズの手の上には、懐かしいバルスの世界のローブが抱えられていた。バルスは手を差し出して白いローブを受け取る。そこには、不格好ではあるものの努力した修繕の跡がいくつも見受けられた。

あまりに簡単に見つけられる修繕の後に、ルイズは己の不器用さを呪い、恥ずかしそうに目を伏せる。バルスも口元を緩め、その不格好な修繕の跡を笑っているように見える。

「ありがとな、ルイズ」

「え？」

バルスはバサリと白いローブを羽織り、ルイズの努力に満面の笑顔で応える。

「大変だっただろ？穴だらけだったからな」

「あ、うん…」

ルイズは俯きそうになる顔を無理に上げ、笑顔を無理矢理に作る。これからつく重大な嘘に向けて、揺れる心を押さえつける。

「それで私、実家に帰ることにしたんだけど」

「そうか。まあ、戦争だから仕方ないな」

ルイズが実家に帰ると聞き、バルスは内心安堵していた。ルイズはトリステインのアンリエッタ王女と幼馴染なのだから、戦争に参加すると言いだすものと思っていたのである。

戦争とは、ルイズが思っているほど生易しいものではない。焼ける肉、血の匂い、阿鼻叫喚の世界がどこまでも広がり、英雄と呼ばれる者は普通の精神でいられない。

そんなバルスの心配も知らず、ルイズはバルスに嘘をつく。

「けどほら、あんたをいきなり連れて行ったら皆驚くじゃない？だから、私が先に言って説明しておく必要があると思うのよ」

「そうか？」

「そうなのよ！」

ルイズは立ち上がってバルスに詰め寄り、バルスはその剣幕に押されてコクコクと頷く。

「それで、私の実家まで往復五日間位かかるわ。だから、あんたは五日間の間ここでジッとしてなさい」

「わ、分かった」

バルスの了承を取り付け、ルイズは安堵のため息をつく。バルスは約束をとても重要視している節があり、約束を取り付けたからには五日間バルスがトリステイン学院を動くことはない。五日後にルイズが戦場にいても、バルスは間に合わない。巻き込まれることは、ない。

「分かったらもう寝なさい。明日、私も早いんだから」

ルイズはベットの中に身体を滑り込ませ、バルスに背を向けて寝転がる。バルスも藁のベットに腰を落ち着け、ムラマサを抱えて寝息を立て始めた。

その日の朝早く、ルイズは自分で起きだして制服へと着替える。しかし正確にいえば、ルイズはずっと寝つけずに朝を迎えたのだった。

ルイズは坐ったまま幸せそうに眠るバルスの寝顔の前にしゃがみ込み、覗き込む。

「大丈夫。あなたをこれ以上巻き込んだりしないわ」

ルイズは、そっとバルスの頭をなでる。以前のバルスにそんなことをしようものなら、ムラマサがルイズの腕を斬り裂いていてもおかしくはなかった。だが、今は違う。油断しまくりである。

「さよなら、バルス」

ルイズが告げた、別れの言葉。しかしそれは、以前紡いだ哀しみの言葉ではなかった。ルイズの鳶色の瞳は決意に彩られ、力に満ちている。

ルイズは扉を力強く静かに開き、己を待つ戦場へ、幼馴染の元へと向かった。

トリステイン王国、王城。そこにある軍議の開かれている一室では、毎日のように激論が交わされていた。将軍たちが間に挟んだ机

へと身を乗り出し、広げられた地図をたたいて怒鳴りあう。それをアンリエッタとその母マリアンヌが見守るのが最近の日課であった。マリアンヌはアンリエッタの実母であり、アンリエッタに紫色の髪を与えたのも、黒い瞳を与えたのも彼女である。

鎮痛の面持ちで会議を見守る二人の前で、一人の将軍が立ち上がった。

「まずは、使者を遣わせて話し合いを！」

「それが何になる！相手は軍艦を擁する大国じゃぞ！」

机をたたいてもう一人の将軍が立ち上がり、異論を唱える。他の将軍たちは困ったような顔をしたり、腕組みをして考え込む者など様々だ。

「降伏か、蹂躙された後に全滅か」

「とるべき道は、二つに一つだ！」

将軍たちの中から、勝利という言葉は一向に聞こえてこない。頭を抱える者、机をたたく者にアンリエッタは不安を覚える。その時会議室の扉が開かれ、一人の兵士が駆けこんできた。

「申し上げます！敵艦隊の中に、戦艦レキシントンを確認！皇帝クロムウェルの座乗も確認とのことです！」

「何だと！？」

会議場は大きく沸き立ち、切り開かれた一縷の望みに議論が集中する。

「では、最初に来襲する艦隊をたたけば勝機があるのだな！」

「だが、相手は二万の軍勢じゃぞ？対する我が軍は、まだ千も集まってはおらんではないか！」

紛糾する会議の中、もう一人の兵士が駆け込む。矢継ぎ早に来る情報により、議場は沈黙に包まれた。

「敵軍、更に増援を計画しているとのことです！その数、十万！到着は十日後と予想されます！」

「じゅ、十万だと！？」

「馬鹿な、これがアルビオンの実力か…」

将軍たちは狼狽し、また頭を抱え込んで悩み始める。更に兵士が駆け込み、将軍たちは今度こそ吉報であることを信じて沈黙した。

「敵軍、タルブへ進出！降下を開始した模様です！」

「もうか！？」

「早い、早すぎるではないか！」

予定よりも二日ほど早く現れたアルビオン軍に、将軍たちはより一層頭を抱えることとなった。トリステインは、未だ千の兵しか集まっていない。対して、相手は二万の大軍である。その絶望的な戦力差は、何度会議しても埋めることのできない差であった。

先の見えない会議に、アンリエッタは目を伏せる。その手の指に

はめられた風のルビーを見つめ、亡くした人のことを思った。

ウェールズ様、私に力をお貸しください。

アンリエッタは意を決して立ち上がる。その凛とした姿に、将軍たちは息を飲んで注目した。

「降伏はありません。貴族としての誇りを失うことは、死も同然！三日間軍を集め、タルブのアルビオン軍を叩きます！」

アンリエッタは口元を緩め、マリアンヌへと向ける。マリアンヌも口元を緩めて頷き、娘の成長を喜ぶ。将軍たちもアンリエッタの言葉に触発され、片手を振り上げた。

「決戦は、三日後だ！」

「戦え！貴族の誇りのために！」

「トリステイン王国万歳！アルビオンを叩け！」

アンリエッタの命令により、トリステイン軍は一縷の望みをかけてアルビオン軍をタルブで迎え撃つ。会議場は熱狂し、戦況を覆さんばかりに士気は高まった。

しかし、その会議場で誰一人気がつく者はいなかった。アルビオン軍随一の智将の掌の上で、自分たちが踊らされていることを。

熱狂した会議の三日後、ルイズはトリステインの王城でアンリエッタと轡を並べていた。まだ日は高くなく、むしろ夜と言っていい早朝である。アンリエッタのとルイズの後ろにはグリフォン隊が並び、その後ろに間に合った貴族たちの軍が続いていた。

その数、二千。半数はここ三日でたどり着いた者達ばかりであり、疲労の色もうかがえる。しかしそれを押してでも、トリステイン軍はこの日にタルブへと出立しなければならなかった。十万とも言われる軍勢が、いつタルブまで押し寄せてくるか分からなかったからだ。

アンリエッタは角を頭に戴く白馬、ユニコーンにまたがり、茶毛の馬にまたがるルイズの横を並走する。ガチャガチャという鎧のこすれあう音と地鳴りのような足音の中、アンリエッタは嬉しそうにルイズへと笑顔を向けた。

「あなたが一緒にいてくれるだけで心強いわ、ルイズ＝フランソワーズ」

ルイズはアンリエッタに笑顔でもって応える。タルブまでの道程、残り一日。それはアルビオンのバルスが計算した通りの日であり、待ち受けているのは補給と休養を完了したアルビオン軍。方や向かうのは、疲弊したトリステイン軍。兵力差、士気、兵の体力、補給、地の利。全ての面でアルビオン軍が上回っているこの状況下、トリステイン軍はその事実に気がつかず、死地へと向かっていたのだった。

トリステイン学院、中庭。バルスは呑気に欠伸をすると起き上り、陽気な日差しに当てられてもう一度欠伸をした。

バルスはルイズに言われたとおりに学園を一歩も出ず、ここ数日は戦争と聞いて帰っていく生徒たちの背中を見送っている。殆ど学院の中に生徒たちは残っておらず、バルスはあまりに余った時間をあることに割いていた。それは、この世界で失われたとされる伝説の系統、虚無の研究である。

虚無の魔法に関しては殆どが資料に残されておらず、バルスの研究は難航した。しかし、少しだけ上がった成果がある。それは、アルビオンの宣戦布告を告げられた日にアンリエッタから強奪してきた始祖の祈祷書と呼ばれるものだ。始祖の祈祷書とは、遥か昔に虚無の魔法を操った魔法使いの残した書物である。

最初、それを見た時は何の変哲もない白紙のメモ帳だった。しかし、バルスはここ数日持っていて気がついたことがある。始祖の祈祷書からは微弱な魔力を感じるのだ。それは、どことなくルイズの魔力に似たものを感じさせた。

そこで、バルスはある仮説をたてた。ルイズが魔法を使えないのは虚無の魔法使いだから、という仮説だ。それは、莫大な魔力を有している事からも考えられない話ではない。

ならば、とバルスは考える。ルイズが帰ってきたら、虚無の魔法を訓練させてみようと。この戦争に勝つには、ルイズの強力な魔力が必要不可欠。自分の魔力はいつ戻るのか分からないのだから。

バルスはその始祖の祈祷書をパラパラとめくり、どうすれば読めるのか思案する。しかし、それは空腹によって妨げられていた。集中できず、バルスの脚は自然とマルトーの厨房へと向いていく。

マルトーの厨房が見えてくると、その前で言い争う二人の人の姿が見受けられた。近づいていくと、マルトーがシエスタの腕を掴んで怒鳴っている。

「離してください！私、どうしても帰らなきゃいけないんです！」

「馬鹿言っちゃいけねえ！死んじまうぞ！」

ただならぬ雰囲気に、バルスは二人の元へ駆け寄る。

「おい、どうしたんだ？」

バルスへと振りむいたシエスタの瞳からは、ボロボロと涙があふれていた。シエスタは涙を流したままバルスに飛びつき、縋りつく。

「私、帰らないといけないんです！だって、父と母、弟たちに妹たちも…！」

何のことやらさっぱり分からず、泣き縋るシエスタをバルスはとりあえずなだめる。そのまま困惑した顔をマルトーへと向けると、マルトーは悲しそうにため息をついた。

「シエスタの故郷はタルブなんだが、アルビオン軍が来て占領したそうでな。それでシエスタが帰るって聞かないもんで、必死に止めてたってわけよ。気の毒だが、そんなところに行ったらいくつ命があっても足りるもんじゃねえ…」

シエスタの格好を見ると、確かに普段の服装とは違う。白いブラウスに、茶色のロングスカート。手には旅行用の鞄を持ち、まさしく今旅立とうといういでたちだ。どうやら、戦場となった故郷へ本気で帰るつもりのようである。

しかしそれは、マルトーの言うとおり自殺行為。むしろ、シエスタが戦場と化した故郷に戻って喜びそうなのは敵の兵の方だろう。色々な意味で。

「落ち着くんだ、シエスタ。お前が戻っても何も変わらない」

「バルスさんまでそんなこと！見損ないました！」

シエスタはドンとバルスを突き放し、走り出そうとする。しかしバルスに腕を掴まれて引き留められ、シエスタはバルスの腕から逃れようと手を振り回した。そこにマルトーも引き留めに加わり、やいのやいのと騒ぎが始まる。

その三人の騒ぎを聞きつけたのは、バルスと似たような理由で食堂へと向かっていた赤い燃える髪のような美女と、本を読む青い髪の少女。キュルケとタバサである。キュルケは騒ぎの中の三人のうち、一人がバルスであることに気がついてタバサの肩をゆする。

「ねえ、タバサ。あれダーリンじゃない？」

タバサが本から顔を上げると、確かにバルスが他二名と遠くで何やら騒いでいる。キュルケは騒ぐ三人の元へと駆け寄り、タバサは後ろに続いてゆっくりと歩み寄る。

シエスタはバルスの腕を振り切ったが、今度はバルスが目の前に回り込んだ。

「どうしても行きたければ、俺を倒していくがいい！」

「わかりましたっ！！」

「おい、ちょっと待てっ！？」

シエスタは旅行鞄を振り上げ、バルスの頭めがけて振り下ろす。バルスはシエスタの鞄を真剣白刃取りのごとくがっちり押さえ、顔の目の前で留めて見せた。

「何してるのよ、ダーリン…」

「ん？キュルケか？」

ギリギリと旅行鞄を振り切ろうとするシエスタと、余裕綽綽で受け止め続けるバルス。あまりにシュールな光景に、キュルケはあきれ顔をバルスに向ける。

続いて後ろから現れたタバサは、その無表情をシエスタとバルスへ交互に向けた。

「揉め事？」

「まあ、そんなところだ」

ビクともしないバルスを見てついに諦めたのか、シエスタは旅行鞄から手を離す。そのままシエスタは地面へとしゃがみ込み、さめざめと泣き始めた。シエスタのただならない様子を見て、キュルケは小声で耳打ちする。

「この子、どうかしたの？」

「実はだな…」

バルスは、シエスタの故郷がアルビオン軍の侵攻を受けたことを話す。そのため、シエスタは家族が心配で帰りたがっていると。その話を聞いてタバサは無表情を崩さず、キュルケは怪訝そうに眉をひそめた。

「あなたらしくないわ、ダーリン。いつものあなたなら、迷わずタ

ルブに乗り込んでるはずよ」

「そうしたいのは山々だが、俺一人ではどうにもならない」

バルスは難しい顔をして腕を組む。敵軍は二万。千程度までなら引き受けるバルスだったが、その二十倍はさすがに引き受けかねる。その無理はマルトーも承知しているようで、うんうんとうなずいている。

しかし、キュルケは食い下がる。バルスの両肩に両手を置き、説得するようにバルスの身体を揺さぶった。

「そうじゃなくて、あなたはもっと心で動く人だと思っていたわ！ルイズのことだって放ったらかしだし…」

唐突にもたらされたその名に、バルスは驚いて目を見開く。

「ルイズが、何だと？」

「何を言ってるの？ルイズは学院の集会で戦争に参加するって…」

バルスが顔を俯かせ、肩を震わせているのに気がついてキュルケはハッとする。

「あなた、もしかして知らなかったの？」

バルスは顔を俯かせたまま、黙ってコクリとうなずく。バルスには分からなかった。何故、ルイズが嘘をついてまで戦場に向かったのか。何故、自分の力を利用しようと思わなかったのか。

それはキュルケも同じであり、首をかしげる。

「でも、なんでルイズはあなたに黙っていたのかしら？」

その答えを知る者が、正確には予測しうる者が、その五人の中にはいた。その人が本当に大切なら、護りたいと思うなら、それは当然の選択肢。タバサは顔を俯かせるバルスの頭を、優しくなでた。

「あなたを巻き込みたくなかったから。これ以上、あなたを危険な目にあわせたくなかったから」

バルスが顔を上げると、そこには悲しみを秘めたルイズの笑顔があった。タバサの青い瞳はルイズの鳶色の瞳と重なり、深い悲しみをたたえている。あなたにだけは、生きていてほしい。幾年も昔に忘れた心を、バルスは思い出す。

「そうか…」

ふう、とバルスはため息をつく。バルスは、何となくルイズの気持ちを理解できた。だから、これから自分がとる行動に文句は言わせない。

「あいつは、ルイズは、このままだと必ず死ぬことになる」

その場にいる全員が、バルスの言葉にごくりと息をのむ。二万対二千。その結果は容易に想像できることかもしれないが、まだトリステイン軍が負けたわけではない。にもかかわらず、バルスははっきりと断言する。トリステイン軍は負け、ルイズは死ぬと。

キュルケはその真意が分からず、思わず疑問をバルスにぶつける。

「どうしてそう思うの？」

「キュルケ。お前は完全に有利な状況にある十倍の敵に、わざわざ攻撃を仕掛けるか？」

当然、とキュルケは首を横に振る。

「今度の戦争は、それをさせることのできる奴が相手だ。稀代の名将って奴がな」

「え？でも、トリステイン軍は勝算あって動いているんでしょう？」

「そう思わされているだけだ。もし勝機があるとするなら、この作戦を立てた奴が戦場に出てきてない場合だけだな」

バルスが始祖の祈祷書を強奪した日、もののついでとアンリエッタにアルビオン軍の動向を聞いてみた。アルビオン軍がタルブに向かっていると言うのでその地図を見せてもらったところ、バルスはその狙いと抜かりのない戦略に驚かされている。

勿論これから戦うことになる当事者の前で顔に出すことはしなかったが、その時、バルスは既に確信していた。トリステインは確実に負けると。そして、その負けを覆せるのは何者をも滅ぼす強大な力だけであると。

バルスとルイズの任務失敗により、ゲルマニアの援軍は期待できない。ルイズの魔法が、戦争に勝つ最後の望みなのだ。バルスは最後の望みを、そしてかけがえのない者を護るために立ち上がる。

「タバサ。悪いが、力を貸してくれ」

タバサは黙ってコクリとうなずく。口笛を鳴らし、トリステイン学院で最速の風竜、シルフィードを呼ぶ。降り立った青い龍の背中にタバサが飛び乗り、次いでキュルケが飛び乗った。

バルスは驚き、シルフィードに乗ったキュルケを見上げる。

「お前、協力してくれるのか？」

「当然よ。私のダーリンを放っておけるわけないじゃない？」

物好きなもんだとバルスは失笑し、キュルケは失礼な物言いにわざとらしくそっぽを向く。

「キュルケ」

「何かしら？」

「ありがとな」

バルスの嬉しそうな顔に、キュルケも笑顔で応える。その背後からシエスタも駆け寄り、バルスの肩を引っ張った。

「私も連れて行ってください。そんな怖い人がアルビオン軍の指揮官と聞いては、じっとしていられません！」

家族の元に行きたいと必死に懇願するシエスタに、しかしバルスは首を横に振った。

「大丈夫だ。名将だからこそ平民には手を出さない。シエスタはここで待っていろ」

しばらくシエスタも抵抗していたが、やがて諦めてバルスの肩を離す。確かに、自分が行っても足手まといとシエスタは納得する。シエスタはバルスの言葉を信じ、家族の無事を、そしてバルスたち

の無事の帰還を信じることにしたのだ。
バルスは風竜シルフィードに飛び乗り、シルフィードは空へと羽ばたく。

「時間がない。始まってしまったら、全てが手遅れになる！」

「了解。できるだけ急ぐ」

「フフフ、やっぱり情熱的なダーリンの方が素敵ね」

シルフィードは大きく羽ばたき、一路戦場となるであろうタルブを目指して飛び立っていった。

第十四話　ファーストキス

全長二百メイルにも上る巨大な船体、両舷あわせて百八門の堂々たる大砲。竜騎士隊さえも搭載可能な巨大戦艦レキシントンは、タルブののどかな田畑と草原、その周りを囲む森を見下ろしていた。後ろには十数隻の戦列艦がつき従い、その姿は空の覇者にふさわしい。

そのレキシントンのマストの一番高い場所で、見張りの兵が叫ぶ。

「敵軍確認！十二時の方向、グリフォン約五百、騎馬約千五百を認む！」

見張りの兵の報告は、速やかに甲板上の総司令官ジョンストン将軍の元へと伝わっていく。ジョンストン将軍はそれを速やかにクロムウェルに報告した。

「まずは参謀長の思い通りの展開となったぞ。見よ、ここからでも敵軍の動きが手に取るようではないか」

「誠に。バルス殿のような人材を得られたのも、一重に皇帝陛下の仁徳の賜物かと」

ジョンストンのご機嫌取りに、クロムウェルは満足そうにして笑う。ジョンストンは、将軍とはいえども一度も実戦を指揮したことのない人物である。おまけに、筋金入りの政治家であった。作戦の指揮よりも先に、クロムウェルのご機嫌をうかがう方が大切なことというほどである。

ジョンストンはクロムウェルの機嫌がいいことに安堵し、ようやく指揮をとり始める。

「ワルド殿に伝令を出せ。全て参謀長の計らい次第にと、な」

全ての将軍たちに全く同じ内容の伝令を出し、ジョンストンは満足する。そしてすぐにクロムウェルの元へと赴き、またおべっかを使い始めた。

「作戦は滞りなく進んでおります。トリステイン軍が壊滅する様をお楽しみください」

うんうんとクロムウェルは満足そうにうなずく。そのクロムウェルの瞳に映るトリステイン軍は、自分たちの上げる砂塵の中で戦艦レキシントンを遠くに見ていた。

レキシントンの周りには無数の竜が舞い、その雄姿がトリステイン軍の兵の心を恐怖で震えさせる。その恐怖が相手を確認しておきたいという願望となって現れ、トリステイン軍は小高い丘の上へと陣取っていた。

どこまでも広がる平原の中、アンリエッタは親友ルイズの隣で空を見上げる。その瞳に敵の姿を写すと、震える身体を奮い立たせた。

ウェールズ様、私に力をお貸しください。

アンリエッタは凛として、自分の後ろへと続く兵士たちへと振り返る。

「グリフォン隊は、敵竜騎士隊の陽動を。魔法騎士団は、その隙に戦艦に突撃！」

「おおーっ！！」

兵たちはアンリエッタ命令に応え、馬の蹄を前へと進め始める。グリフォンの翼が翻り、レキシントンを目指して空を舞った。馬は嘶いて平原を疾駆し、グリフォンは空を駆ける。トリステイン軍二千の兵は、陸空一丸となって皇帝クロムウェルの乗るレキシントンを目指す。

アンリエッタの命令は、この戦場でできる限りのものだった。だが、アンリエッタは知らない。戦争は、勢いや運で勝てるものではないことを。戦いは、始まる前から既に決していることを。

三千の竜騎士を預かるワルドは、森の中でひたすらに時を待っていた。バルスの命令は、平原の半ば、レキシントンの大砲射程の手前で敵軍を攻撃。ジョンストン将軍からの命令はそれに従え。ワルドは総司令の命令を笑ったが、バルスの命令に逆らうつもりもない。トリステイン軍二千の先頭が平原の半ばを駆けるのを待つと、剣に似せた杖を腰から抜き放つ。

「全軍、突撃せよ！目標、トリステイン軍グリフォン隊！」

森がざわめき立ち、火竜の巨体が空を覆う。風竜にまたがったワルドの杖が振られると、紅き火竜にまたがる竜騎士たちはグリフォン隊へと襲いかかった。

側面を突かれたグリフォン隊は慌てて向きを変えるが、時既に遅し。火竜のブレスが次々と空を飛び、グリフォンを次々と撃ち落とす。グリフォン隊五百は混乱して足が止まり、陽動どころではなくなっていた。

「ひるむな、進め！船底までたどり着けば反撃はできる！」

トリステイン軍残り千五百は、グリフォン隊を犠牲に平原を疾駆する。その姿は大砲の射程内に入り、レキシントンがチカチカと輝く。ドンドンという音と黒煙が噴き上がり、それはレキシントンに

続く戦列艦からも起こり始める。
　無数の黒く丸いものがヒュルヒュルと音を立て、トリステインの頭上へと降り注ぐ。

「うわあああ！」

「うぎゃあああ！」

　地面は無数にえぐれ、土ぼこりは沸き立ち、馬は嘶いて倒れ、人が吹き飛ぶ。トリステイン軍の中、金髪の青年はその様を恐怖して見ていた。ギーシュは金髪を伏せて、馬にしがみつく。

「ぼ、僕らに勝ち目はなさそうだな…」

　砲撃音と炸裂音が止み、ギーシュは顔を上げる。砲撃の雨をかいくぐった者は、僅かに五百ほど。残った者たちも鎧は血と泥にまみれ、怪我をしていない者を見つける方が難しい。
　しかし、それでも残った者たちは喜びを口元に表す。ようやく、反撃ができる船底付近までたどり着いたのだ。兵たちは勇んで平原の中の小高い丘へと駆けあがる。

「なんだ、これは…」

　全く燃えていない、荒らされた様子もない、無傷の農家、村。人がいない事と、この時期田畑を埋め尽くしているであろう作物が全くないのが異様。そして、その田畑に建てられた木製の柵と、翻る無数のアルビオン旗もまた然り。日常と戦場が混ざったその光景に、トリステイン軍は進軍を止めた。
　アルビオンの旗を見るに、数は三千程度。トリステイン軍は身を奮い立たせ、最後の力を振り絞る。

「あの陣を落とさねば、我らに勝利はない！全軍突撃せよ！」

トリステイン軍は砂埃を立ち上げ、アルビオン軍の待ち受けるであろう陣の柵へと突撃する。ギーシュはいつしか軍の先頭に立ち、敵陣へと乗り込む。懐から杖を抜き放ち、敵をキョロキョロと探した。

「誰もいない？何で…」

ギーシュの後ろから、大声を張り上げたトリステインの兵士たちが続く。そして、ギーシュと同様に首を左右に振って敵の姿を探し求めていた。

「どういうことだ、敵がいないではないか」

「まさか、我らに恐れをなしたわけでもあるまい」

兵士たちも、ギーシュも、馬を歩かせて陣内を探る。ギーシュは自分のいる場所が少し暗くなるのを感じ、空を見上げた。

「火竜？一頭だけみたいだな…」

陣の上の空に、一頭だけ火竜が旋回して飛んでいる。先ほど竜騎士隊の奇襲を受けていたので、また襲撃されるのかとギーシュは不安になる。しかし、火竜に誰も乗っていないことを確認し、主を失った竜が迷い込んだものと胸を撫で下ろした。

ところが、ギーシュの表情は一転して驚きに変わる。火竜がにわかに口を開き、炎を噴きだしたからである。

「うわあっ！」

ギーシュは目をつぶって身構えたが、炎のブレスはギーシュを通り越して地面へと消えいった。その光景を見て、トリステインの兵士たちは首をかしげる。

一頭の火竜はすぐさま高度を上げると、レキシントンの船底へと吸い込まれていった。

「な、何だったんだ？」

茫然として、ギーシュは火竜の後姿を見送る。突如として陣内からドンドンという激しい爆発音が起こり、あたりは土ぼこりに包まれた。

土ぼこりは炎へと変わってトリステイン軍を覆い、爆発は陣を覆っていく。陣内に踏み込んだトリステイン軍は、そこに仕掛けられた火薬庫の罠の前に全滅したのだった。

時系列は少しさかのぼり、トリステイン軍が砲弾の雨の中を走っている頃。森の中で、アルビオン軍三千名の陸軍歩兵は活躍の出番を待っていた。つい昨日休養を取ったばかりの彼らは、士気は天を衝き、今か今かと身体を震わせる。

将軍に下されたバルスの命令は、森の中に伏せ、砲撃音が止み次第トリステイン軍の本陣を襲えというものである。将軍は砲撃音が止み、静かになるのを確認するとその腰にさした杖を振り上げた。

「全軍我に続け！我らの前にトリステインをかしずかせよ！」

「おおーっ！！」

兵士たちは、待ってましたと言わんばかりに平原へと飛び出す。将軍の騎馬がいの一番に平原を疾駆し、歩兵はその後ろに続く。

突如として現れたアルビオン軍とその雄叫びを前に、アンリエッタは自分の目を疑った。その場にいるのは、アンリエッタとルイズ、白衣の近衛兵十騎のみである。現れたアルビオン軍の向こう側では、レキシントンの真下あたりで砂塵が大きく上がっている。

響き渡る遠くの爆発音と迫ってくる地鳴りを前に、ルイズは茫然とするアンリエッタの肩をゆすった。

「姫様、お逃げください！」

アンリエッタは己の騎乗するユニコーンの手綱を握り締める。

ウェールズ様。あなたが勇敢に戦い、散って行ったというのなら私も…。

アンリエッタは、ゆっくりとルイズに顔を向ける。力ない笑顔で首を横に振り、ルイズに応えた。

「いいのです、ルイズ＝フランソワーズ。私はトリステインの誇りに掛けて、背を向けるつもりはありません」

「姫様…」

ルイズの掴んだアンリエッタの肩から、恐怖が震えとなって伝わる。ルイズはアンリエッタの気持ちが少しでも安らげばと、笑顔を

作った。

「姫様、私もお供いたします」

「ルイズ…」

近衛兵の乗った馬がアンリエッタとルイズの横を駆け抜け、三千の地鳴へと飛び込んで行く。ルイズとアンリエッタは馬から降りると、鞭で叩いて戦場とは逆へと走らせた。巻き込む命を、一つでも多く減らすために。

「ごめんなさい、ルイズ。あなたを巻き込んでしまって」

「いいえ。貴族として身に余る栄誉の場を与えていただき、ありがとうございます」

互いの身をいつくしむように、二人は互いを抱き寄せる。近衛兵十騎の堰を難なく突破したアルビオン軍の兵士は、身を震わせる二人の少女へと斬りかかった。殺気立つ十二の瞳と六本の剣が、ルイズとアンリエッタの前に振り上げられる。

ルイズは、最後の瞬間に自分の護りたかった大切なものを思い浮かべる。父、母、二人の姉、目の前のアンリエッタ、学院の友人たち。そして、まだ契約に至っていない、自分の使い魔。

ごめんね、みんな。私、みんなを護れなかった…。

ルイズは瞳が熱くなり、涙を流す。

もっと、みんなと一緒にいたかったな。私、キスもしないで死んじゃうのね。

ルイズの中で、少しずつ心残りが浮かんでいく。
あいつに本当の気持ちを伝えておけばよかった。どうせ、困った顔をするんでしょ？
ルイズは、静かに口を開いた。小さく、呟いた。
「さよなら、バルス」
剣が風を斬り、六本の剣が空を舞う。斬りかかったトリステイン軍の兵士六人は、消え去った己の剣と己の手を見て目を疑った。その向こう側には、空から落ちてくる人影。
人影は地に降り立つと、銀色の巨大な刃を振り放つ。六人の身体が剣によって斬り裂かれ、吹き飛んで宙を舞った。
更に後ろから続いていた八人のアルビオン兵士が、剣を一斉に振り上げる。しかし、その八人も同様に胴から上を斬り離された。一度に十数人を斬り殺される光景を見て、アルビオン軍の進軍が止まる。
「な、何だあいつは！？」
「何だあのでかい剣は！？」
黒髪に黒い瞳、たった一人の青年が身の丈ほどもある剣を背負い、アルビオン軍の前に立ちはだかる。
青年の手に掴まれた剣は、日の光を照り返して赤く輝いた。
「一、二、三、四、めんどくさいから約三千ね。魔法使えないのに、馬鹿じゃない？」

「同感だ」

青年が振り返ると、そこには二人の身を震わせて抱き合う少女と広大な平原しかない。それは、青年にトリステイン軍の壊滅を告げている。

「間に合わなかったか…」

「あーあ、今度のご主人様はかなり長持ちすると思ってたんだけど。短命だったわね」

「長持ち言うか」

やいのやいのという声と、いつまでも襲ってこない痛みに二人の少女は恐る恐る目を開ける。そこには、己の剣と喧嘩をしている、置いてきたはずの者の背中があった。

「バルスさん!?」

「バルス!?どうして!?」

ルイズは思わず立ち上がり、思い切り声を張り上げる。

「どうして来ちゃうのよ、バカー!」

ルイズの言い草に、バルスは再び振り返る。戦場で後ろを振り返るバルスに、アルビオン軍の兵士たちは顔を見合わせた。この十数人を殺した化け物を殺すのは、今がチャンスと。

アルビオン軍兵士が八人ほど前に出て、バルスに斬りかかる。

「アイス・ストーム！」

「フレイム・ボール！」

斬りかかったアルビオン軍の兵士を氷の竜巻と巨大な炎が襲い、吹き飛ばす。空から青い髪の少女と燃えるような赤い髪の美女が舞い降り、バルスの横にスタッと着地した。

二人は背中あわせになり、それぞれの杖をアルビオン軍の兵士に向ける。

「ガリア花壇騎士、タバサ参上。諸事情により、助太刀」

「ダーリンに手を出すというなら、この微熱のキュルケがお相手するわ」

風竜シルフィードが空を舞い、遠くへ飛び去っていく。新たに現れた二人に、ルイズは己の目を疑った。護りたかった者たちが、次々と戦場に飛び込んでくる。

驚いたのはバルスも同様で、ルイズと同時に口を開く。

「お前ら、ここからは逃げろと言っただろう！」

「あんたたち、何考えてんのよ！トリステインの戦争なんだから、あんたたちには関係ないのよ！？」

二人のどなり声を涼しい顔して聞き流し、キュルケはバルスに耳打ちする。

「ダーリンたら、シルフィードから飛び降りちゃうんだもの。そん

な無茶する人、放っておけないじゃない？」

「お前な…」

「ただでなんて言わないわ。貸し一つね」

貸しと聞きつけ、タバサもそれに迎合しようと口をバルスの耳に近付けた。

「フライの分も合わせて、私は貸し二つ」

ふう、とバルスは諦めのため息をつく。これ以上、二人を説得している時間はない。そもそも、戦場の真っただ中に飛び込んできたのだ。逃がすこともはや不可能である。

「悪いな。恩に着る」

三人はアルビオン軍の前に立ち、対峙する。未だ納得できていないルイズは、更に大声を張り上げた。

「何考えてんのよ！みんな、みんな死ぬだけじゃないの！」

アンリエッタもようやく立ち上がり、戦場に現れた三人を制止する。

「ルイズの言うとおりです！武器を納め、早くこの場所より立ち去りなさい！」

ルイズの叫びも、アンリエッタの叫びも、三人には届かない。バルスは懐に手を突っ込むと、最後の希望に手をかけた。古びた、中

身の真っ白い本がバルスの手に掴まれる。
バルスは掴んだ希望を、ルイズへと投げ渡す。ルイズは最後の希望となった本を手にすると、意味を分からずキョトンとしていた。
バルスはルイズに横顔を見せ、笑って見せる。

「ルイズ。お前はこの世界で最強の魔法使いだ」

「え？どういうこと？」

「俺が時間を稼ぐ。後はお前次第だ、虚無の行使者」

白紙の本を見て、ルイズの頭はグルグルと混乱する。何も書いていない、何の変哲もない本。

私が、虚無？そんなわけない。そんな、だって、私…。

ロクに魔法も使えない、二つ名もないゼロのルイズ。それを、バルスは虚無の担い手だという。いかにバルスの言うことといえど、そんなことを突然言われて信じることは容易でない。
さらに言えば、ルイズが虚無の担い手だとしてもその行使の方法が分からない。ルイズは頭を抱え、悩ませる。
一方で、アルビオン軍の将軍はなかなか進まない自軍に不満を募らせていた。将軍は馬を走らせ、自軍の前面に出る。すると、兵士たちがたったの三名の前に足を止めている姿が目に入ってきた。

「何をしておるか！」

将軍の叱咤に、兵士たちは我に返る。目の前にいるのは確かに手練かもしれないが、子供が三人。対するアルビオン軍三千が足を止めるような相手ではない。アルビオン軍が目を覚まし、兵士がガチ

ヤガチャと鎧を鳴らす。
アルビオン軍の将軍は立ちはだかる三人の向こう側に最終目標を見定めると、目を輝かせた。

「あれはアンリエッタ王女ではないか！皆の者、見事討ち取った者は貴族にもなれるぞ！」

アルビオン軍兵士たちの目の色が代わり、タバサとキュルケは怖気の走るその瞳に嫌悪した。

「貴族？貴族だって？」

「こいつはいいや！こいつらを殺すなんて訳はないんだ」

「早い者勝ちだ！」

アルビオン軍は一斉に進軍を開始する。十数人の組をいくつも作り、一斉にバルス、タバサ、キュルケに襲いかかる。バルスは先頭で剣を振り、タバサとキュルケはバルスの横を通り抜けた兵士を氷の槍と炎の玉で撃退する。
バルスの目の前の死体が五十を数えても、兵士たちの欲望は止まらない。次々と突撃を繰り返し、バルスも、タバサも、キュルケもじりじりと押され始める。
その様子を見て、ルイズの焦りは加速度的に増していく。

どうすればいいの！？みんなを護りたい、みんなを護りたいのよ！

ルイズは血しぶきが遠く噴き上がるたび、それがバルスのものではないかと不安で仕方がない。タバサとキュルケの息も上がり始め、時間がないことを告げてくる。このままでは、待つのは全滅だけで

ある。

本当に、本当にその力があるのなら、今応えなさい！私の、虚無――――！

ルイズの心の叫びに応えるように、白紙の本は風を受けてパラパラとめくれる。ルイズの指に嵌められた水のルビーが輝き、白紙のはずのページに光り輝く文字が浮かび上がった。

ルイズは心底驚き、一心不乱に浮き出した文字を読む。

これより我が知りし真理をこの書に記す。

本の冒頭はこの文句で始まっていた。この世界の呪文は、火、水、風、土の四系統。世界の物質を構成する小さな粒に干渉し、影響を与え、かつ変化させる呪文であることをルイズに告げる。

神は我にさらなる力を与えられた。

本の著者、始祖に与えられた力はそれではない。四系統に属さない、さらなる小さい粒に干渉し、影響を与え、かつ変化させる呪文。

四にあらざれば零。零すなわちこれ、虚無。我は神が我に与えし零を、虚無の系統と名づけん。

ルイズは、息を飲んでページをめくる。バルスの言っていた事の真実味が増し、鼓動が高鳴っていく。

これを読みし者は、我の行いと理想と目標を受け継ぐものなり。

始祖の言葉は続き、虚無の担い手は志半ばで倒れた自分に変わっ

て聖地を奪還するように訴える。更に詠唱者に対しての注意書きが続く。虚無の魔法は精神力を多大に削り、場合によっては命を削ると。そして、だからこそこの本を読む者は選ばれた者だけにすると。

ルイズは喉に渇きを覚え、ぺろりと唇を舐める。恐らく、次にめくられるページにルイズの今一番ほしいものが書かれているのだから。

我が扱いし、虚無の呪文を記す。初歩の初歩の初歩、エクスプロージョン。

光り輝くルーン文字が続き、ルイズはそれを読み上げる。ふう、とため息をつき、興奮から冷めない心を落ち着けた。

本当だった。私、選ばれちゃったかもしれない。

自分を、みんなを護るために剣をふるう背中を見つめる。

「ホント、どんな魔法使いだったのよ。本人の分からないことまで分かっちゃうなんて」

ルイズは杖を振り上げ、アルビオン軍へと向ける。

「今度は私が、バルスを護ってみせるわ！」

ルイズの力のこもった声に、キュルケとタバサは驚いて振り向く。バルスは背中越しにその声を聞き、ニヤリと笑った。ルイズは杖を振るい、虚無を唱える。

「エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ…」

始祖の調べをルイズの口が奏で、解放されようとする莫大な魔力が暴れ狂う。バルスは息を上げながら、飛びかかってくる兵士たちを斬り続けた。バルスの前の死体は九十を数え、数を頼みとしていた流石の兵士たちもひるむ。

ルイズの詠唱は、なおも続く。

「オス・スーヌ・ウリュ・ル・ラド・ベオーズス・ユル・スヴュエル・カノ…」

たった一人の男に動揺する兵士たちを見て、将軍はしびれを切らす。確かに、あの男は強い。だが、無理に斬りかかることもない。体力を削り、折を見て斬りかかるべきなのだ。

「ええい、何をしておる！弓で射殺せ！」

おお、と兵士たちは将軍の案に飛びつき、突撃を止めて距離をとる。弓を番え始めたアルビオン軍の兵士たちを見て、バルスは舌打ちするしかなかった。

「気が付きやがったか」

遠距離戦で迎え撃とうにも、タバサとキュルケの魔力には限界がある。二人とも息を切らせている当たり、長くは持たない。頼みのルイズは、未だに詠唱を続けている。

「オシェラ・ジェラ・イサ・ウンジュー・ハガル…」

アルビオン軍の兵士たちは矢を番えるのを終え、空へと弓を向ける。バルスは剣を背へと納めると、踵を返して走り始めた。

「射て！」

「くっ、間に合わん！」

二千近い矢が空へと放たれ、四人を襲う。タバサとキュルケは恐怖で目を閉じ、バルスはルイズめがけて走っていく。

「ベオークン・イル！」

音もなく、真っ白な光があたりを包み、全ての者を飲み込んでいく。倒すべき者、倒されざるべき者、全てが選別されて前者は消えていく。光りはやがてアルビオン軍三千を飲み込み、更に平原を飲み込み始めた。

光は平原の半ばで待機していた竜騎士隊にまで届き、その半数を飲み込んでとどまった。光は収束し、あたりは何事もなかったかのように静まりかえる。

キュルケとタバサがゆっくりと目を開けると、そこには何の変哲もない平原が広がっているだけだった。遠くにはレキシントンがその雄姿を浮かべているが、自分たちが戦っていた無数の歩兵がいない。死体さえも、ない。

「何がどうなってるの？」

「分からない」

キョロキョロとあたりを見回すキュルケとタバサの後ろで、ルイズはゆっくりと目を開ける。何故か身体が重いと思ったら、バルスがルイズの身体を抱きしめていた。ルイズは顔が赤くなり、鼓動が早鐘を打つ。

「い、いいい、幾ら私の魔法が成功したのが嬉しいからって！その、私、疲れてるの！は、離れなさいよ！」

「ほらな、間に合ってない」

「え？」

ルイズが恥ずかしさで身体をゆすると、バルスは力なく地に崩れ落ちた。ガチャリと音がして、ムラマサが大地へ投げ出される。倒れ込んだバルスの背中にはちょうど肺のあたりに矢が刺さり、その周りから血が服を通して浮き出ていた。

ルイズは慌ててしゃがみ込み、自分の口元に手を当てる。

「嫌あっ！バルス、どうして！？」

ルイズの悲鳴を聞きつけ、タバサとキュルケも異変に気がつく。アンリエッタも駆け寄り、ルイズの隣にしゃがみ込んだ。

「バルスさん！駄目、早く何とかしないと！」

「そ、そうだわ！早く矢を抜かないと！」

混乱の極地の中、ルイズは矢を手に掛ける。刺さったものは抜かないと、と安易な考えが連鎖していく。その手を見て、ムラマサはルイズを怒鳴りつける。

「小娘！それ、抜いたらだめよ！！」

「え！？」

ルイズは手に引き抜いてしまった矢を持ち、手を震わせる。バルスの傷口から鮮血が吹き出し、ムラマサはため息をついた。

「あら、抜いちゃったのね。駄目よ、下手に引き抜くと自分の血で溺れ死んじゃうから」

「ええっ！？」

ルイズが必死に傷口を押さえつける中、タバサとキュルケが追い付いてきてその対面にしゃがみ込む。タバサは冷静な瞳で傷口を見て、心を落ち着けて次の行動を考える。

「水メイジは？」

ルイズはハッとして、アンリエッタを見る。アンリエッタもハッとして、震える手で王笏に似た杖を振りかざした。杖の水晶が光り、その力を行使する。

「イル・ウォータル・デル！」

震える手先で杖も震え、中々焦点が定まらない。秘薬があれば、とアンリエッタは悔しがるが、そんな都合のいいものはない。おまけに次々と噴き出す血のせいで、怪我の場所もよくわからない。いくらトライアングルクラスの水メイジであるアンリエッタでも、極限の状況下でこの重傷を治癒することは難しかった。

「何か、血を拭き取る布を！」

タバサがコクリとうなずき、ピィーッと口笛を吹く。風竜シルフィードが空をかけ、地面へと降り立つ。タバサはシルフィードの背

中からロープでまとめられた白い布を取ると、ロープをほどきながらバルスへと駆け寄る。所々不格好に繕いされた布で、タバサはバルスの傷口をぬぐった。

ぐっと漏れるバルスの嗚咽と苦痛の表情に、キュルケはバルスの汗をハンカチでぬぐうことしかできない。

アンリエッタは傷口があらわになると、震える手で呪文を再開した。一向に止まる気配のない血に、ルイズがしびれを切らす。

「姫様、バルスは助かるのでしょう！？」

タバサがルイズとアンリエッタの間に手を入れ、ルイズの唇に人差し指を当てる。

「邪魔しちゃ、ダメ」

「魔法は集中力が必要なのよ。ルイズ、あなたも分かってるでしょ？」

タバサとキュルケの制止に、ルイズはグッと押し黙る。しかし居ても立ってもいられず、移動してバルスの顔を覗き込んだ。バルスが苦しそうにうめいたかと思うと、口から大量の血を吐き出す。

ルイズが驚いて顔を上げると、アンリエッタが悲しそうに首を横に振っていた。

「そんな…！？」

ルイズは嫌々と首を横に振り、キュルケは持っていたハンカチを取り落す。タバサはバルスの傷口に杖を向けると、凍らせた。

それを見て、ルイズがタバサに喰ってかかる。

「何してんのよ！そんなことしたら、死んじゃうじゃない！」

「そうしないと血が止まらない」

「だから、そんな止め方したら死んじゃうって言ってるのよ！」

「だって、そうしないと血が止まらない！！」

タバサの初めて聞く怒鳴り声に、ルイズ、アンリエッタ、キュルケはビクリと身を震わせて驚く。突き付けられた現実とやりどころのない怒りが、沈黙を呼び込んだ。

ルイズは、死んでいく者をただ見ていることしかできない自分への怒りに身を震わせる。

「何が、伝説の系統よ。何にもできない、虚無じゃない！」

ルイズの叫びだけが空へと消え、タバサも、キュルケも、アンリエッタも顔を俯かせる。その瞳に涙を浮かべていない者はいない。

「私、虚無なんていらなかったわ！水メイジの方がよかったのに！！」

ルイズの叫び声をバックに、バルスは目を開いた。苦痛と息苦しさに、顔を歪める。

「いや。中々虚無も捨てたものじゃない」

バルスは感覚のない身体を無理矢理持ち上げ、仰向けに寝転がる。力を振り絞って首だけを上げると、空にはレキシントンが浮かんでいた。

「威力は足りなかったみたいだな…」

ゴン、とバルスは頭を大地に投げ出す。あれだけのルイズの魔力が、これっぽっちの破壊力。ルイズにはかなりの修業が必要と、バルスは踏んだ。魔力の変換効率が悪すぎる。

ルイズはバルスの手を握り、涙を流して覗き込む。

「無茶したら駄目じゃない！」

うつろに映るルイズの顔が変に歪むのを見て、バルスは自分が長くないことを悟る。バルスはゆっくりと目を閉じ、ルイズの顔を思い浮かべた。

「ルイズ、お前には感謝してるんだ」

「え？」

「お前は、俺に自由を与えてくれた。短い間だったが、中々楽しい人生にしてもらった」

ルイズはブンブンと首を横に振る。その動きがバルスの手を伝い、バルスの瞼に写ったルイズも首を横に振った。

「そんな、終わりみたいなこと言わないで！」

バルスは静かに首を横に振り、次はタバサを思い浮かべる。

「タバサ、悪いな。お前の母親の病気、治す約束だったのにな。守れそうにない」

タバサは沈黙したまま、顔を俯かせたまま、首を横に振る。続いて、バルスはキュルケをその瞼に写した。

「キュルケ、悪いな。街に行く約束、守れそうにない。おまけに貸しも返せそうにないしな」

「何言ってるのよ!?そう思うなら、これから生きて返しなさいよ!」

無茶言うな、とバルスは笑う。更に、バルスはアンリエッタを脳裏に思い浮かべた。

「姫さん、悪いが俺の命に免じて今回だけは退いてくれないか?ルイズの魔力も解放されたことだ。次は十分勝機があるだろう?」

「分かりました。誓いましょう…」

アンリエッタは涙をぬぐい、頷く。言い残すことはまだたくさんあったが、バルスはため息をついて諦めた。浮かんでくることなど、きりがない。

弱まっていくバルスの呼吸を前に、ルイズは最後まで何かバルスを引き留める方法がないかを考える。脳内から自分の長くない人生の経験を全て引き出し、今まで教わった全ての魔法の知識をあさる。

その中で、ルイズは閃いた。

コントラクト・サーヴァント…。

それは、呼び出した使い魔を真の使い魔となす儀式。行った使い魔はルーンを刻まれ、同時に特殊能力を得ることがある。ましてや、

虚無の使い魔。
ルイズは最後の希望に全てを託し、バルスに唇を近付ける。
「やめとけ」
「ヒウッ！？」
かなり恥ずかしいことをしている自覚はあり、ルイズはバルスの突然の制止に息を詰まらせる。しかし、ここで退けないとルイズは言葉で抵抗する。
「どうして！？こうでもしないと、死んじゃうじゃない！」
「お前、キスしたことは？」
「そのくらい、私だって…」
その短い人生を振り返るが、ルイズは思い当たる節が全くなかった。
「ないけど、それが何だっていうのよ！？」
「これからの人生、お前は長いんだ。好きな奴相手にしておけ。その契約で助かるか分からない、俺よりな」
「バルス、あなた気づいてたの！？」
そのルイズの気づいた可能性に、バルスはとっくのとうに気が付いていた。恐らく、ルイズと使い魔の契約を果たせばバルスは生き残れる。ルイズの、虚無の使い魔として。

「まあ、手遅れだけどな」

バルスは安らかな笑顔を浮かべる。スッと全身の力が抜け、ルイズの手からバルスの手が滑り落ちた。

「えっ！？ウソでしょ！？だって今、喋って…！」

ルイズは瞳を震わせ、取り落したバルスの手を再び握る。いつまでも握り返してこないその手に憔悴し、ルイズは慌てて唇を近付けた。

ルイズの唇が、バルスの唇と重なる。ルイズは唇が血でぬめるのも気にせず、キスし続けた。

バルスの左手に輝く文字が現れ、ルイズはその輝きを瞼に写して唇を離した。希望のようなその輝きに、ルイズは心を高鳴らせる。

お願い、間に合って！

ルーンは強く輝くが、やがてその光を失い始める。神の左手は輝きを完全に失い、役割を一度も果たすことはなかった。ルイズは魂の失われたバルスの身体に縋りつく。

「目を開けなさいよ！ちゃんと契約したんだから、ご主人様の命令なのよ！」

ルイズの悲鳴は空へと消え入り、いつしか太陽は双月と重なり始める。世界には暗闇が落ち始め、大地の全てが喪に服していた。

第十五話　戦慄の戦場

「あ、あの光はなんだったのだ…」

レキシントンの甲板上で、クロムウェルは呟いた。遠くで蠢いていた自軍の砂塵が消え、光りに飲み込まれた竜騎士もその数を減らしているように見える。側に控えているジョンストンも、その光景に息をのみ込んだ。

「わ、分かりません。報告を待たないことには…」

やがて、平原の中から一組の竜騎士が現れた。レキシントンの甲板に火竜が降り立ち、翼を広げる。火竜から飛び降りた竜騎士は、息を切らせながらクロムウェルの元へと走る。

クロムウェルの前までたどり着いた竜騎士は、かしずいて頭を垂れた。

「申し上げます！先ほどの光により、歩兵三千が、しょ、消滅いたしました！」

全滅ではなく、消滅という言葉にジョンストンは首をかしげる。

「消滅だと？どういうことだ？」

「そ、それが、死体が見受けられず、その、完全に消え去ってしまったものですから…」

ジョンストンとクロムウェルは、驚いて顔を見合わせる。そんな

話は、古今東西聞いたことがない。トリステインの新兵器、という考えが二人の頭をよぎる。

竜騎士は、深刻そうな面持ちとなった二人の前で報告を続ける。

「更に、竜騎士隊も千人ほどが飲み込まれて消滅！」

クロムウェルは驚き、しゃがみ込んで竜騎士の両肩を掴んでゆすった。

「何！？ワルド子爵は！？」

「無事でございます！現在、トリステイン軍のアンリエッタ王女を確認し、追跡しております！」

「そ、そうか」

ふう、とクロムウェルは安堵のため息をつき、竜騎士の肩から手を離す。振り返ると、クロムウェルはジョンストンを見やる。

トリステインの攻略は、政治家であるこの男でも十分にこなすことができるとクロムウェルは踏んでいた。だが、トリステインがこれほどの新兵器を持っているとすれば話は別だ。戦場において門外漢のジョンストンでは、心もとない。

「至急、本国に伝令を飛ばせ。バルスをここに召還せよ」

おお、とジョンストンが頷く。

「すぐに召還いたしましょう！参謀長来たれば、どんな敵も敵にならないでしょうからな！」

意味不明な光と軍の消滅に不安そうな顔色をしていた兵士たちも、参謀長が来ると聞いて安堵の表情へと変わる。士気は再び天を衝き、不安は払拭されていく。

その時、レキシントンに暗い影が落ちた。甲板が陰り、クロムウェルは何事かと空を見上げる。

「日食か。不吉な…」

双月と太陽が重なり始め、日が陰る。レキシントンの甲板にいる者たち、戦列艦の甲板にいる者たち、竜騎士隊。全ての者が、空を見上げて不吉と思う。

風を切り、銀色の長髪をたなびかせながらワルドも空を見上げていた。またがった風竜の後ろには無数の火竜が続き、竜騎士も空を見上げている。

「日食か」

「ワルド隊長、不吉ですね」

「馬鹿な。勝利は目の前だ」

ワルドは暗がりの中で目を細め、平原の中に数人の人影を認める。風竜の手綱に力を込めると、数人の人影が五人の人影と鮮明に分かるようになっていく。

バサバサという竜の羽ばたきを遠くに聞き、タバサは顔を上げた。青い瞳は更に深い青となり、氷のような怒りが渦巻いている。その瞳が無数の仇を捕えると、タバサは己の杖を構えた。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース…！」

周囲の空気は凍りつき、タバサの心の氷が全てを凍てつかせていく。感情の奔流が魔力を高め、再び味わうことになった愛する者を失う悲しみがタバサの限界を押し上げる。

まるでスクウェアクラスが纏うようなその力は、三本の巨大な氷の槍を作り上げた。タバサは怒りにまかせて杖を振り、氷の槍を打ち出す。打ち出された氷の槍は竜を貫いてそれにまたがる騎士をも串刺しにし、三組の竜騎士を撃墜した。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ!!」

空気は更に凍てつき、とどまることを知らない。氷の槍が五十を数え、タバサの瞳から一筋の涙がこぼれる。氷の槍は増え続け、七十を超えたところでタバサは杖を振るった。

今度は竜騎士隊もその攻撃を予測していたのか、氷の槍を回避する。それでも、落ちた竜の数は二十を数えた。

はあ、はあ、とタバサは片足を地面につき、精神力の欠乏に苦しむ。その間にも竜騎士隊は近付き、その姿は大きくなる。

またがった風竜の上で、髪の色さえも判別できるような距離で、ワルドは息をのんだ。

馬鹿な、少女ばかりが四名だけだと!?

先ほどから火竜を撃墜するほどの氷の槍が飛んでくるので、どれほどの手練がアンリエッタを護衛しているのかとワルドは胸を躍らせていた。そして、あの光を放った謎の新兵器をその目で確かめられると期待していたのに、現れたのはアンリエッタを含む四人の少女。

一人は片膝をついて、もはや魔法を使える状態ではない。残る三人は、何かを囲んで俯いているだけだ。

「無駄な抵抗はやめて、降伏せよ！」

ワルドの降伏勧告に、何かを囲んで俯いていた少女の一人が動いた。燃えるような赤い髪が揺れ、ワルドを見上げる。その赤い髪の少女の手を握り、紫色の髪の少女は首を横に振る。

「いけません、戦っては…！」

赤い髪の少女は、笑顔で首を横に振る。

「お心遣い、感謝いたします。お気持ちだけ受け取っておきますわ」

キュルケは立ち上がる。その瞳に、微熱をも、情熱をも超えた憎しみの業火をたたえて。それに続き、ピンク色のブロンドが揺れ、ゆっくりと立ち上がった。

上空で飛ぶ、裏切り者、全てを奪った仇、ワルドを鳶色の瞳で睨みつける。憎しみで濁った鳶色の瞳は、もはや純粋さのかけらも持たなかった。

「タバサ、キュルケ。もう一度虚無を使うわ。あいつらを滅ぼすまで。力、貸して」

キュルケは杖を引き抜き、構える。その先を、ワルドに向けて。

「当然よ。あいつらは、奪ってはいけない人を奪った。火傷じゃ済まなくてよ！」

キュルケの目の前に、巨大な火の玉、フレイムボールがその姿を現す。炎が発する風がバサバサとキュルケの髪を、ルイズの髪を、タバサの髪を躍らせる。

タバサはふらつく足を据え直すと、杖に渾身の力を込めた。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース！」

絶対零度の一本槍が現出し、たった一本のそれはみるみる大きくなっていく。その後ろで、ルイズは憎しみとともに始祖の調べを奏で始める。

「エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ…」

尋常ならない魔力渦巻く小さい戦場を前に、竜騎士たちはうろたえる。一向に下されない攻撃命令に、竜騎士たちはワルドを見てそれを待つ。

「隊長、奴らはやる気です！攻撃許可を！」

ワルドは、とらわれていた。巨大な炎でもなく、巨大な氷の槍でもなく、一心不乱に呪文を唱えるルイズの姿に。その口から流れ出る言葉は、明らかに古代語。失われし魔法。

ルイズ！まさか、虚無に目覚めたのか！？

「隊長！！」

ハッとしてワルドは我に返り、杖を振るう。ルイズが虚無に目覚めたとすれば、今唱えている呪文は先ほどと同様の呪文。不思議な光が、全てを飲み込む。絶対に止めなくてはならない。

「全軍、攻撃を許可する！ただし殺すことは許さん！」

「了解です！」

三人に飛びかかる竜騎士に、キュルケがフレイムボールを解き放つ。火竜にそれが通用することはなかったが、それにまたがる騎士を焼く。竜騎士は悲鳴を上げて竜の上から落ち、主を失った火竜は翼を翻してどこかへ飛んでいく。

更に飛びかかる竜騎士に、氷の槍が向けられる。タバサが放った氷の槍は、騎士と竜を貫いた。騎士と竜がドタリと地に落ちる。なおも襲いかかる竜騎士を見据えて、タバサは呪文を唱える。

「ラグーズ・ウォータル・イス…」

ビクリとタバサの身体が跳ね、そのまま地面に倒れ伏す。魔法が精神の限界を超え、タバサは苦痛の中で意識を失った。その横で、キュルケがフレイムボールの魔法を再び完成させる。

目の前にまで迫った火竜にそれを向けたが、またがっていた竜騎士は竜から飛び降りることでそれを避ける。サッと地面に着地した竜騎士は、キュルケを地面へと押し倒す。

「離しなさいよ！」

「ええい、抵抗するな！」

竜騎士は剣に似せた杖に魔力を通し、ブレイドと為す。ブレイドを突き付けられたキュルケは、悔しそうに歯噛みした。ルイズは最後まで諦めず、詠唱を急ぐ。

「ス・スーヌ・ウリュ・ル・ラド…」

ビクンと身体を跳ねあげ、ルイズも地面に身体を投げ出した。虚

無の魔法は、たったの一度だけで多大な魔力を消費する。ルイズの精神力は魔法に耐えきれず、意識を失う。
最後に残った一人、アンリエッタの前に、次々と竜が飛来した。翼を収めた竜騎士の中から、その隊長が姿を現す。

「ワルド子爵。お久しぶりね」

「アンリエッタ様」

ワルドはアンリエッタの前にかしずき、それ相応の礼をとる。ワルドは顔を上げ、アンリエッタの瞳を覗き込んだ。

「アンリエッタ様。これ以上の戦いは無意味です。願わくば降伏されますよう、私は愚考するしだいでございます」

「それはできません。トリステインの王女の誇りとして」

予想していた回答に、ワルドは頷いて立ち上がる。では、と言いかけたワルドだったが、背後でドスッという鈍い音とアンリエッタの瞳が震えるのを見て言葉を断ち切った。
アンリエッタは両手で杖を強く握りしめ、ワルドを押しのける。

「おやめなさい！あなたたちには貴族の誇りがないのですか！？」

ワルドが振り返ると、そこでは一人の竜騎士が意識を失った青い髪の少女を容赦なく蹴っていた。キュルケは後ろ手にロープで縛られているが、タバサを助けようとなおも抵抗している。
ワルドはその光景に憤慨し、杖を振るう。

「お前たち、何をやっているか！」

ワルドの風が、青い髪の少女を蹴っていた竜騎士を吹き飛ばす。吹き飛ばされた竜騎士は、嗚咽のような声を振り絞った。

「こいつは、こいつは俺の親友を…！」

「馬鹿者！捕虜に手を出した者は死罪という参謀長の下知を忘れたか！！」

連れて行け、の一言で、竜騎士は仲間に取り押さえられる。ワルドの怒りはまだおさまらず、矛先は残った竜騎士へと向いた。

「メイジは杖をとり上げればそれでよい！何故縛る必要があるか！」

「も、申し訳ありません！」

竜騎士は慌ててキュルケの縄を解く。キュルケはパラリと縄が解けた瞬間、地面に飛びのいた。落ちていた己の杖を拾い上げ、ワルドに向ける。

「ウル・カーノ！」

キュルケ渾身の炎が、ワルドに食らいつく。ワルドは杖を振るって空気の盾を作り、涼しい顔でその炎を断ち切った。

キュルケは悔しそうにワルドを睨みつけると、そのまま地面へ倒れ込む。キュルケももはや限界を迎えており、気を失っていた。

壮絶なまでの抵抗に、ワルドは息をのむ。

「一体、何が…」

そのワルドの疑問に応えるべく、アンリエッタは後ろを向く。ワルドがアンリエッタの後ろを見ると、そこには一人の青年が横たえられていた。その黒髪、投げ出された大刀を見て、ワルドは教会で自分に手傷を与えた青年を思い出す。

「愛ゆえに、か…」

愛は時に、狂気を生み出す。それは今の冷酷なワルドを作り上げた原因と同様であり、ワルドは同じ境遇におかれた少女たちに同情する。

しかし、ワルドはまだ新しい憎しみを作らなければいけない。

「では、アンリエッタ様。お覚悟はよろしいですか？」

アンリエッタはコクリと頷き、地面へと跪く。己の杖を抱きしめ、己の身を抱きしめた。ワルドは竜騎士を呼びつけ、アンリエッタの横に立たせる。

ワルドはしゃがみ込み、アンリエッタの顔を覗き込んだ。

「何か言い残すことは？」

「三人に、手を出さないと誓ってください」

ワルドは静かにうなずく。

「我が軍は、トリステイン貴族をできるだけ殺さないように命令されております。戦場以外で殺すのを許されているのは、あなた方王族のみです」

アンリエッタは、安心して吐息を吐く。やがてガタガタと身体が

震えだし、アンリエッタは恐怖にとりつかれながら静かに目を閉じた。

「母に、先立つ不孝をお許しくださいと」

「分かりました」

アンリエッタは顔を伏せ、ポロポロと涙を流す。恐怖、ウェールズの仇を討てなかった悔しさ。失ってしまった沢山の人々の命。感情が流れ出て、止まらない。

アンリエッタに振り上げられたブレイドの先で、双月は太陽と完全に重なっていた。

「む、う…」

バルスが目を覚ますと、そこは深淵だった。光りすら届かない何かの底で、バルスは身体を起こす。

あー、死んだ。よく死んだ。

バルスは大きく伸びをして、あたりの状況を確認する。とは言っても、何も見えない。光りもないあたり、天国でない事は確かだ。

バルスは立ち上がると、目をこすりながら歩き始めた。途中で欠伸までしているバルスは、きっと死者の自覚が足りていない。

「何をしているんだい、バルス？」

バルスが驚いて振り返ると、そこにはナルシストでキザ野郎な男が立っていた。男の周りは淡く光っていて、暗闇でもその姿を見ることができる。

「ギーシュか。いや、迷子になってな」

「何だ、君もか」

ははは、と馬鹿みたいに笑った二人は、はあ、とため息をつく。とりあえず、二人はここで死んでいても仕方がないのであの世の入口を探すことにした。カツカツと二人の足音だけが闇へと吸い込まれていく。

闇の中にいるのが居た堪れなくなり、ギーシュはバルスに話しかける。

「しかし、君は何故死んでしまったんだい？」

「ああ、タルブで色々あってな。最後はルイズを守って名誉の討ち死に」

「へえ、女の子を守って討ち死にか。出会ったばかりの頃の君からは、想像できないな」

「まあ、俺も驚いているよ。お前は何で？」

「僕もタルブでね。家柄上仕方なく、だったんだけど、まさか死んじゃうとは思わなかったなあ」

「お前、運悪いな」

思っていた以上に、二人の会話は弾む。会話は続き、深淵に響き渡る。二人ともそれほど親しかったわけではなく、互いの事をあまり知らない。バルスはギーシュについて聞いてみた。

「お前、元帥の息子なんだろ？」

「まあね。といっても、四男だから何れは家を出ることになるけど」

「どっちにしろ、運悪いな」

「そ、そういう君はどうなんだい？」

「俺か？」

うーん、とバルスは考え込む。もう死んだのだから、別に正体を明かしても問題ない。

「俺はお前らの住んでる世界とは全く別世界から来たんだけどな」

「そ、そうなのかい！？異世界から！？」

ギーシュは、全身を使って思い切り驚く。異世界があるという事実自体に、ギーシュは驚いているようだった。

「そっちの世界で、邪神とか呼ばれていた」

「随分酷い言われようだね」

「まあ、二十億人殺したしなあ。国も八つほど滅ぼしたし…」

「へえ、二十億人ねえ。て、ええっ！？」

全身を引かせて、ギーシュは驚く。

「な、何サラッと恐ろしいこと言ってるんだ君は！？」

「やっちまったもんは仕方ないだろ？」

「で、何で君はそんなことをしたんだい？」

バルスは回答に詰まり、顎に手を当てて考え込む。何故かと言われれば、その運命に従わなければいけない気がしたからだ。バルスは、結論に至る。

「何となく？」

「疑問形すらつく何となくで殺したのかい！？」

「ああ」

「君は一回地獄に落ちるべきだな…」

ポン、とバルスは手を叩く。そもそも、バルスが天国行きでない事は間違いない。そして、隣で歩いているギーシュもしかり。

「でもお前、俺と同じところに行くなら地獄行きだな」

ギーシュはハッとして肩をガックリと落とす。

「全く、僕はつくづく運のない男だなあ。異世界の戦争に巻き込まれて死ぬ君も、大概だけど」

ハッハッハ、と二人の自棄になった笑い声が響き渡る。二人の話題は、その年ごろに漏れることなく浮ついたものへと変化していく。

「ところで、君はタバサとどの辺までいったんだ？」

「ん？遠出ならアルビオンくらいだが？」

「天然なのか君は！？ワザとなのかい！？キスくらいしたかという事だよ！？」

「おいおい、タバサは親友だぞ。何を期待しているんだ？」

ギーシュは、かなり意外な発言に絶句する。親友と、バルスはあそこまでイチャついているというのだ。ラ・ロシェールでのイチャつきっぷりなど、世の男子が聞いたら万死に値する。

「じゃあ、ルイズは？」

「親友」

「キュルケは？」

「親友」

「あのメイドは！？」

「シエスタか？親友」

全員親友、とバルスは言い切る。親友はあんなにイチャついたりしないとギーシュは言ってやりたかったが、そこは本人の価値観もあるだろうと割り切った。

続いて、バルスが反撃を開始する。

「そう言うお前は、モンモランシーと上手くいっているのか？」

「はは、死ぬ前にキスくらいしておきたかったかな…」

チーンというような音が暗闇から聞こえた気がして、二人はため息をつく。あまり花のない、二人の短い人生だった。

何の利益もない、しょうもない話をしつつ二人は歩き続ける。その頭上に、突如、唐突に光が注がれた。正確には、バルスの頭上からだが。

「お、天国からお迎えらしい」

「君、地獄がどうのと言ってなかったかい？」

ギーシュはジト目を向けて、バルスを羨ましがる。バルスは光りを見上げ、それに吸い込まれるのを待つ。だが、それは杞憂。

バルスの足元でガパッと音がして、穴が開いた。

「マジか？」

ギーシュはコクリと頷き、続いて唾をごくりと飲み込む。バルスは穴の中に落ち込み、真っ暗な闇へと吸い込まれていく。バルスは、その思いの丈を大声で思い切りぶちまけた。

「フェイントかあああああああっ！！」

どこまでも続くタルブの平原。日食皆既し、金環戴く時、すなわち金環皆既日食の時、作りだされた闇の中でそれは起こった。いずこからか紫色の光が漂い、平原へと流れ出す。草木は大いなる意志の言葉で悲鳴を上げ、悲鳴は不気味に平原を覆う。

紫色の光が漂う中で、ワルドは首を左右に振っていた。

「なんだ、これは…」

紫色の光を放つ、得体のしれない霧状の何か。そして、人間のものとは思えない不気味な悲鳴。アンリエッタの処刑を目の前にして、この不気味な出来事。

竜騎士たちもうろたえ、あたりを見回している。

「し、始祖がお怒りなのだ。正当に血統を継ぐ方を、斬ろうなどとするから…」

アンリエッタにブレイドを振り上げていた竜騎士は、杖を放り出して腰を抜かす。アンリエッタも周りの異常性に気がついたのか、瞳をゆっくりと開いた。

目の前には紫色の光が揺らめき、悲鳴が耳にこだまする。その突然に現れた幻想的な光景と地獄のような音を前に、アンリエッタはあらゆる感情を覚えなかった。茫然自失として、顔を上げる。

平原を覆う、紫色の光。それは地面からユラユラと立ち上り、平

原では飽き足らず森へも深く侵入していく。悲鳴はより大きくなり、まるで世界を飲み込んでいくかのようだった。

日食が金環を辞し、双月の間から光りがもれだす。同時に悲鳴は消え、スウッと紫色の光も消え去った。

アンリエッタが、ワルドが、竜騎士たちが、息をのむ。目の前の悪夢か幻想かという光景が、全くの日常へと戻っていた。こぼれ出した日の光は戦場を明るく照らし、沈黙の中サッと風が平原を駆けていく。

急に現実に引き戻されたワルドと竜騎士たちは、互いに顔を見合わせる。あれは、何だったのかと。

「む、う…」

アンリエッタの背後から漏れた声に、ワルドは目を見開く。そして、心底驚いた。確かに死んでいたはずの男が、起き上ったのだから。

バルスは目をこすり、次いで眩しそうに細める。

「何だ?地獄ってのは太陽があるのか?」

その眩しさに目も慣れないうちに、バルスはキョロキョロとあたりを見回す。見覚えのある光景と茫然と見つめてくる顔に、バルスは確信した。

「またフェイントか!?」

「寝ぼけてんじゃないわよ!!」

背後から聞こえる、少し懐かしさすら感じる声にバルスはビクリと身体を震わせる。振り返ると、ムラマサが地面に投げ出されてい

た。バルスは、ようやくここが現世であることに気がつく。

「あーあ、気持ちよく死んでたんだがな。死んでたせいか、上手く頭も働かない」

「んなこと言ってる場合じゃないわよ。また死にたいのなら話は別だけど」

やいのやいのと始める声に、アンリエッタは期待に胸を膨らませて振り返る。そこには、変わらず剣と喧嘩するバルスの姿があった。

「バルスさん！」

「え？姫、さん？」

アンリエッタは、幼馴染の愛の勝利に瞳を潤ませる。口を手で押さえ、よかった、とひたすらに呟いた。

一方で、バルスの瞳に映るのは鎧を着た屈強な者達の前に引き出されたアンリエッタの姿。そして、草原で風になびくピンク色の髪。

「ルイズ！？」

バルスは慌ててルイズの元へと駆けだす。ワルドの横を駆け抜けても、そのワルドを含めた誰しもがバルスを目で追うことしかしていない。

バルスはルイズの元に駆け寄ると、しゃがみ込んで抱き上げる。

「おい、しっかりしろ！」

すう、すう、という静かな呼吸音が、ルイズの生存を告げる。ホ

ッとバルスはため息をつき、ルイズの顔をなでた。特段外傷はないようだが、頬には涙の跡がたくさんついている。寝顔は寝苦しそうで、決して安らぎのものではない。

バルスは、優しく大切そうにルイズの身体を横たえる。草原の中に赤い髪がなびくのを見ると、バルスは駆けだした。

「キュルケ！？」

バルスがキュルケを抱き起こすと、キュルケはう、ん、と吐息を漏らした。意識が覚醒するまでには至らないが、命に別条はないらしい。気丈なキュルケらしく、涙の跡は残っていない。

バルスはその身体を一度だけ強く抱きしめ、優しく横たえる。次いで青い髪が草原になびき、バルスは駆け寄る。

「タバサ！？」

タバサを抱き上げると、他の二人よりもひどい状態だった。魔力は枯渇しきり、顔にさえあざが残っている。余程抵抗したのか、精神力の使い過ぎで息は上がり、額に脂汗をかいていた。

バルスはタバサの額に手を当てて汗をぬぐっていると、バルスはその手に握られている血塗られた白い布に気がつく。所々繕われた不格好な布をタバサの手から受け取り、バルスはそのまま優しくタバサの身体を草原へと横たえた。バルスは静かに立ち上がり、空を見上げる。

「何故、逃げなかったんだ？」

バルスの問いに、アンリエッタは顔を俯かせる。

「戦うって。止められなかったのです」

「そうか。仕方ないな」

バルスはゆっくりと俯き、瞳からあふれたそれを風に流す。そして、ゆっくりと竜騎士たちの方に向いた。

「だが、貴様らは許さん…！」

ドンッという音がして、まず空を泳いでいた雲が逃げた。次いで風が逆流し、ワルドも、アンリエッタも、竜騎士たちもその強風に踏ん張って耐え抜く。やがて風は止まり、平原は無風に支配される。

バルスの身体からは紫色の光がにじみ出て、その身体を覆っていく。黒い髪は少しずつ鮮やかな青へと染まり、瞳は紫色に輝いた。

バルスが繕われた不格好な白い布を纏うと、それに付いた大量の血の跡は消え、繕いの跡も消えていく。

青い髪に紫色の瞳、白いローブを纏った青年。かつて八つの国を滅ぼした魔法使いは、再度その力を持って敵に対峙する。

竜騎士たちは逃げなければいけない義務感にも似た意志に押され、一歩、また一歩と後ずさる。

「こ、殺される！」

わあっと竜騎士たちは竜に飛び乗り、一斉に空へと逃げる。バルスは逃げる竜騎士の背へと、その腕を高らかに掲げた。

「フレイム・オブ・フレイム」

スウッとバルスの腕が空気をなでると、アルビオン軍約二千の竜騎士たちの灰がサラサラと降り注いだ。その光景は、敵であるワルドも、味方であるアンリエッタすら戦慄させる。

「ば、馬鹿な、こんなことが！？」

「こ、こんな、こんな簡単に人の命を奪えるなんて…！？」

二人の戦慄をバックに、バルスは紫色の瞳で戦場を見回す。バルスの瞳は、全てのマナの流れを見通す神の瞳。戦場の敵味方を一瞬で識別し、味方の状態を読み取っていく。

トリステイン軍はほぼ壊滅し、死にかかっているものがほとんど。バルスの身体から緑色の光を持つ魔力が溢れだし、あたりに漂う。

バルスの緑色魔力は、全てを治癒する神の御手。それは例え死にかけていても、細胞一個さえ生きていれば完全に復活させるほどの治癒力である。現に、バルスが生き返ったのもこの魔力が起因していた。

「開け、デモンズゲート」

平原全体に緑色魔力が四散し、平原全体を包むようにペンタゴンが描かれていく。緑色に輝くペンタゴンの中で、大砲に吹き飛ばされたトリステイン軍の兵士が、竜に焼かれた兵士が、レキシントンの下で爆発に巻き込まれた兵士たちが、次々と立ち上がっていく。

「あれ？いったい僕は、何をして…？」

ギーシュも立ちあがり、爆発に巻き込まれたはずの自分の体を見回す。しかし、ギーシュの身体にはかすり傷の跡さえ残っていない。

バルスのデモンズゲートは、その中にいれば首を斬られても死なないことに由来する。バルスの所属する軍勢と対した軍勢は、首を斬っても斬っても向かってくる兵士たちを見て、バルスの開いたゲートを悪魔の扉と呼んだのである。

敵味方の識別が可能で、バルスの意図した者のみをデモンズゲートの対象者とすることができた。
それはワルドとアンリエッタの前でも起こり、二人は絶句する。倒れていたトリステインの近衛兵十騎が、おもむろに起き上ったのだ。

「一体、何が…」

近衛兵たちは顔を見合わせ、己の全身を見直す。その後ろで、奇跡は起こり続けた。
赤い燃えるような髪が揺れ、褐色の美女が頭を押さえて立ち上がる。

「あれ、私、一体…？」

ボーッとしていた頭が一気に冴えわたり、キュルケは自分が何をしていたのかを思い出す。

「そうよ。ダーリンが、殺されて…」

キュルケは、ポカンとしてその男を見つめた。青い髪に紫色の瞳。知っているようで、知らない顔立ち。足元には、緑色の光が揺れている。
草原に寝ていたピンク色の髪と青色の髪が揺れ、起き上る。鳶色の瞳は憎しみで濁ったまま、更に絶望を孕んでいる。青い瞳は、透き通るように凍てつかせたその心を称え、雪の嵐が吹き荒れている。
二人は遠くに見えるレキシントンを見据えると、ルイズは杖を向け、タバサは走り出した。

「お前ら落ち着け」

ポンっと音がして、紫色の玉がルイズとタバサの手元ではじける。ルイズとタバサは驚いて杖をとり落し、振り返った。するはずのない声が、もう聞けるはずのない声が、二人の後ろから聞こえたのだ。

「バルス！？」

二人は必死になってその姿を探す。しかし、いるのは見知らぬ青髪の男だけ。

「俺だ、俺」

青髪の男が、バルスの声で自分を指さす。ルイズは自分の耳を疑ったが、青髪の男が来ている白いローブがそれを本当だと告げる。それは、ルイズがバルスを召喚した日にバルスが着ていたローブ。あまりに綺麗になりすぎて、それがそれだと気がつくのに少し時間がかかった。

ルイズの顔から険がとれ、濁った瞳が輝く。風のメイジであるタバサも声の振動からバルス本人であると気がつき、瞳を輝かせた。

「バルス！」

二人は駆け寄り、その身体を抱きしめる。更にポカンとしていたキュルケも瞳に涙を潤ませ、バルスの元へと駆け寄ってその身体を抱きしめた。

「こんなに、こーんなに心配したんだから！」

「私、凄く心配した」

「心配で心配で！一時はどうなることかと思ったわ！」

グイグイ、サラサラ、ムニムニされていつもなら逃げ出すバルスだが、今回だけは三人の思いを受け止める。バルスよりも背の低いルイズは、顔を見上げて首をかしげた。

「でも、その髪と目、どうしたのよ？」

タバサもバルスの瞳を覗き込み、キュルケも不思議そうにして顔を近付ける。

「黒い方が好きだった」

「そう？これはこれで結構イケてるじゃない」

マジマジと見てくる三人を、バルスは両の掌を向けてなだめる。

「今はそれどころじゃない。説明は後回しだ」

バルスは、遠くに浮かぶレキシントンをその瞳に写す。その眼差しの向かう先へと三人の少女は振りかえり、ルイズは杖を向けた。

「そうだったわね。あいつらを追い返さないと」

自信満々といった様子のルイズ。虚無の力を携えて、その口を動かす。しかし、ルイズの頭をバルスがポンっと優しく叩いた。

「お前の魔法じゃ届かないだろ？」

振り向いたルイズの顔はむくれ、タバサとキュルケの顔は疑問を

浮かべている。なら、どうするの、と。そんな三人に、バルスは笑顔で応える。

「しっかりと見ておけ。お前が何を呼び出したのか」

バルスの顔がにわかに真剣さを孕み、ルイズも、タバサも、キュルケもその大人びた眼差しに胸を高鳴らせる。足元に流れる緑色の光が紫色へと変わり、バルスは腕を高く持ち上げた。

「立て、ゴーレム」

地面が沸き立ち、地鳴りが平原を包んでいく。少女たちは、一変して張りつめた空気から逃げるように身を寄せ合った。

バルスが戦慄の二つ名を得たのは、対峙した敵がそれを覚えたからではない。肩を並べた味方がそれを覚えたからでもない。草が、木が、大気が、大地が、それに震えるからである。

バルスが腕を振り下ろし、掌をレキシントンへと向ける。

「殲滅せよ！」

無数の黒いそれは地面から這い出し、大地はその恐怖に戦慄する。草原は盛り上がり、いくつもの穴から這い出るそれをバルスはゴーレムと呼んだ。

ルイズ、タバサ、キュルケが、突然現れた黒い怪物に驚いて杖を向ける。

「きゃあっ！な、何なのよこいつら！」

「分からない。見たことない」

「い、いったい、何が起こってるの？」

ドンドンと音を立て、物凄いスピードで走っていく何か。その中から一体が足を止め、四角い胴体に付いた二つのライトをルイズに向けた。

ルイズは、五メイルあるであろう不気味な何かに光りを放つ丸い何かを向けられ、身を縮こまらせた。

な、何よこれ。鳥の足みたいだし。手に変な筒がたくさんついてるし。なんか、変な音してるし！

チュインチュインと機械的な音を出し、ゴーレムはルイズを観察する。とりあえず敵ではないことが分かると、次はタバサにライトを向けた。

チュインチュイン言っている何かを、タバサも興味深そうに見返す。ゴーレムが首を捻るかの如く胴体を揺らすと、タバサも合わせるように首をひねる。明らかに敵ではない行動にゴーレムは目線を外し、今度はキュルケへとライトを当てた。

「あら、どこ見てるのかしら？」

不気味な何かを計りかねていたキュルケだったが、敢えて余裕の笑顔を作る。自慢の胸をワザと揺らすと、ゴーレムは興味なさそうにライトをそらした。そのままレキシントンへライトを向け、ドンドンと地面を掘り返しながら走っていく。

「失礼しちゃうわ」

とかいいつつ、キュルケは胸をなでおろす。内心は、得体のしれない何かが怖かったのだ。

三人の少女がゴーレムとの初対面を果たしている間にも、平原に溢れたゴーレムはその数を増やしていく。なお増え続ける無数の黒い点を、クロムウェルはレキシントンから瞳を揺らして眺めていた。

「何なのだ、一体どうしたというのだ！」

始まりは、日食からだった。紫色の幻想的な光が流れ、不気味な悲鳴が響いた。それは、すぐに消え去った。だが、それはまた起こった。紫色の光が流れ出て、大砲を撃ったような音がした。自軍の竜騎士たちが遠くで飛び立ったと思ったら、瞬きした次の瞬間に消えていた。

今度は、紫色の光が緑色に変わった。しばらくすると、レキシントンの周りを飛んでいた竜騎士から、トリステイン軍の兵士が突如として生き返ったという報が入った。そして今、目の前には、無数の黒い何かがこちらを目指してやってくる。信じられない。理解できない。

「ジョンストンよ、レキシントンの砲であの不気味なものを蹴散らせ！」

「はっ！全艦砲撃用意！」

レキシントンの大砲がせり出し、眼下の迫りくる黒い何かに照準が合わされる。戦列艦も同様に大砲の照準を合わせ、兵士たちは砲撃の合図を待つ。

湧き出した黒い何かに、恐怖を覚えていない兵士などいない。全員が全員、砲撃の合図を心待ちといった様子で各々の指揮官を見ている。

「砲撃、開始！」

空を斬り裂くような轟音とともに、レキシントンの、戦列艦の大砲が火を噴く。何百という黒い玉が平原へと降り注ぎ、土柱を上げる。二回、三回と轟音がとどろき、黒い玉の雨は降り続け、平原は土ぼこりに覆われていく。

兵たちはその様子を見て、安堵するとともに勝ち誇った。

「見たか！戦艦レキシントンの力を！」

「敵はほとんど全滅だ！」

土ぼこりの下から姿を現すものは何もなく、それは全滅したと兵たちは確信する。だが、代わりに土ぼこりの中から燃える小さな何かがレキシントンめがけて無数に飛び出した。

燃える小さな何かはレキシントンの周りを護衛する竜騎士に襲いかかる。

「うぎゃあああ！」

レキシントンの周りを飛ぶ竜騎士が穴だらけになって吹き飛ばされ、次々と地面へと落ちていく。ババババ、という聞きなれない音が地上から放たれ、燃える小さい無数の何かは火線を空に引く。いくつもの火線が空へと延び、なおも増え続けていく。

火線に触れた竜騎士が次々と穴だらけになって落ちていく光景を見て、クロムウェルも、ジョンストンも、その場の兵たち全ても、己の目を疑った。全ての出来事が唐突過ぎて、理解できない。信じられない。

クロムウェルは手を振り上げ、生物の本能でもって大声を張り上げた。

「全艦反転、撤退するのだ！」

レキシントンが巨体を震わせ、向きを変え始める。それに続いて戦列艦が次々と反転を開始し、それは遠くでゴーレムを操るバルスの瞳にも写っていた。

あいつら、逃げるつもりか…。

バルスは一歩、二歩と歩み出て、空に浮かぶレキシントンを見据える。その光景に鳶色の瞳を輝かせ、ルイズはアンリエッタの元へと駆け寄った。

「ご覧ください姫様！アルビオン軍が引き返していきます！」

「ええ、ええ！」

ルイズとアンリエッタは手に手をとって、互いに喜び合う。一時は死を覚悟するほどに追いつめられたにもかかわらず、今敵は敗走している。守りたいものを守ることのできることを、そして生きていることを二人喜ぶ。

タバサは反転するレキシントンを眺めていたが、やがて隣に立つバルスへと視線を移した。

「あれ、何？」

遠くに見える黒い無数の何かを指さし、タバサはバルスを見つめる。タバサと目を合わせることなく、レキシントンを見据えたままバルスは応えた。

「ゴーレムだ」

キュルケがバルスの答えを聞き、目を丸くして驚く。キュルケもタバサ同様黒い無数のゴーレムを指さした。

「ご、ゴーレムって、ダーリンが一人で出したの!?凄い数よ!?」

「ああ。五千くらいか」

「ご、五千って…!?」

いつの間に、どうやって、という疑問がタバサとキュルケの脳内を駆け巡る。しかし、タバサとキュルケの驚愕もどこ吹く風といった様子でバルスが意に介する様子はない。バルスは更に一歩、二歩と歩み出て、タバサとキュルケとの距離をとる。

「お姫さん、トリステインの軍艦は?」

「え?」

「トリステインの軍艦の数は?」

「戦列艦が、二、三隻と他数隻程度ですが…」

「そうか」

バルスはアンリエッタの返事を背で受け、その瞳に映るレキシントンの未来を決めた。バルスの魔法をもってすれば、あの艦を撃沈するのは容易い。そして、鹵獲することもまた同様。

アンリエッタの言った艦の数からすると、トリステインの艦隊はアルビオンの艦隊よりも大分劣る。レキシントンを鹵獲し、少しで

も戦力を補強しておきたい。この戦争が、この戦いだけで終わるとは限らないのだから。

魔砲を使うか。

バルスの前に直径一メイルほどのヘキサゴンを内包した魔法陣が現れ、紫色に輝く。ヘキサゴンの輝きの中に遠くに浮かぶレキシントンを写すと、バルスは腕をゆっくりと上げた。

ビリビリと空気が震え、ムラマサは久々に見るその魔法に刀身を震わせる。

「赤と青の小娘！もう少し離れといた方がいいわよ！」

ムラマサの助言に従い、タバサとキュルケは走ってバルスとの距離をとる。バルスの腕に六枚の紫色に輝く板からなる腕輪が現出し、バルスはその腕輪とともに右腕を魔法陣へと衝きいれた。

腕輪の板が二メイルほどに巨大化し、魔法陣の周りをクルクルと回り始める。クルクルと回る板の描きだした円の中心には、紫色の光の塊が収束し始めた。

光りの塊は輝きを増し、やがて巨大な錘状の砲弾のような形状に変わっていく。その幻想的な光景に、ルイズは息をのんだ。

「ちょっとムラマサ、バルスは何をしてるのよ？」

「何って、魔法使ってるだけじゃない」

「あ、あれが魔法！？」

呪文も唱えていない、杖も使っていない。しかし、先住魔法とも少し違う。

「これが、バルスの魔法なのね…」

少し怖いけれど、美しくて幻想的な魔法。感慨深そうに、ルイズは呟く。紫色に輝くその魔法を、タバサも、キュルケも、アンリエッタさえもうっとりとして見つめていた。

紫色に輝く砲弾が臨界点を迎え、回転する板の周りに稲妻が走る。

魔砲とは、魔力の塊を打ち出して目標物にぶつける魔法である。威力はヘキサゴンの魔法陣の大きさと腕輪の板の枚数に比例し、腕輪の板を一舞と数える。バルスの作りだした砲は六舞型百サント魔砲。バルスとしては、かなり手加減をしている方である。どれほど手加減しているのかというと、四十六センチ砲で卵をつぶさないようにするほどだ。

この魔法も敵味方の識別が可能で、破壊するべきものと破壊してはならないものを選択できる。ただし、あまりにも威力が強すぎると破壊してはならないものも破壊してしまうため、バルスは威力を抑える必要があったのだった。

ちなみにバルスの世界の魔法使いもこの魔砲を使えるのだが、熟練の魔法使いで四舞型五十一サント魔砲一発が限界である。

バルスはその強大な魔砲を、レキシントンへと向けた。

「小娘たち、耳ふさいどいた方がいいわよ」

ルイズとアンリエッタは顔を見合わせ、タバサとキュルケが顔を見合わせる。そして互いに頷くと、耳に手を当てて目をつぶった。

ドォンッと空気が歪み、キィィンという甲高い音を立てて直径一メイルの光輝く柱がレキシントンへと延びていく。紫色の光がレキシントンを飲み込み、帆を、そして動力の根源たる風石を吹き飛ばした。続いてその直線上にあった戦列艦が二隻光りに巻き込まれ、帆と動力を失う。

空を飛ぶ力を失ったレキシントンと戦列艦二隻は、ゆっくりと地上へと落ちていった。

ルイズが目を開けると、全ては終わっていた。レキシントンが落ちていき、それを背にバルスがゆっくりと歩いてくる。バタバタと、白いローブを風になびかせて。

バルスはルイズの前に立つと、左手を振り上げた。

「お前、やってくれたな」

ルイズは突き付けられた左手の甲を見て、口元に手を当てる。アンリエッタが、タバサが、キュルケが横から覗き込んで、その意味に瞳を震わせた。

バルスの左手の甲には、しっかりとルーン文字が輝いている。それは、ルイズの、ゼロの使い魔の証。まるでそれは所有権を主張するかのようで、タバサとキュルケは肩を落とす。その横で、ルイズは全身に喜びをはじけさせてピョンと跳ねた。

「やったわ！ついにやったわ！使い魔の契約、やっとできのね！！」

はち切れんばかりに笑顔を爆発させ、くうぅとルイズは嬉しそうに声を漏らす。何せ、ルイズが契約した使い魔はアルビオン軍をたった一人で撃退してしまうほどの力を持つ使い魔である。恐らく、これほどの使い魔はハルケギニア中を探しても見つからない。

「だが、こんなものはな…」

「へ？」

グッとバルスが左手を握りこぶしに変えると、輝くルーン文字が空中へと浮き出す。輝きを放つルーン文字は、しかし、空中でバラ

バラに砕け散った。ルイズは目を点にして、肩を震わせる。

「うそ…」

「俺を使い魔にしようなど、百年早い」

プルプルしているルイズの横で、タバサとキュルケがパァッと笑顔へと変わる。

「よかった」

「さっすがダーリン！誰にも縛られない、そんなあなたが素敵だわ！」

ギュウッとキュルケに腕を抱きしめられ、バルスはいつものごとく離れようとばたつく。しかしそれはもはや無駄な抵抗と諦め、バルスは己の腕をキュルケに預けたままタバサへと笑顔を向ける。

「タバサ、緑色魔力が戻った。約束だからな、母親の病気を治しに行くぞ」

「本当に？魔力、戻ったの？」

コクリとバルスが頷くと、タバサが瞳を潤ませる。タバサは涙を隠すように、バルスの白いローブに顔をうずめた。

まあ、一割程度だけどな。

バルスに戻った魔力は、紫色魔力と緑色魔力。バルスは他に八色の魔力を持っているが、その魔力を全く感じない。今の魔力は、ち

ょうど戦慄の二つ名を持っていたころ。邪神の力には程遠い。
バルスは、自分の魔力をせき止める何かの意志を感じていた。それは、恐らく、大いなる意志と呼ばれる類のものであるとバルスは考える。この世界が、バルスの魔力が戻るのを拒んでいるのだ。

まあ、未来が見えないのには感謝、だな。

あれが見えると、急激に人生というやつがつまらなくなる。何が起こるか分からないから、この世界は楽しいのだ。
満足そうに笑みを浮かべるバルスの顔を見て、その心中を知らないルイズはギリギリと歯噛みする。何しろ、目の前のバルスはキュルケにムニムニされてタバサに抱きつかれ、ニヤけているようにしか見えないのだから。
しかし、ふうっとルイズはため息をつく。これまで通り闇雲に怒りをぶつけていても、バルスは振り向かない。ルイズはビシッとバルスを指さす。

「いつか絶対、あんたを私のものにしてやるんだから！」

ひゅうっと風が吹いて、沈黙が流れる。ルイズは言い間違えた。ものではなく、使い魔と言うつもりだったのに。ルイズの顔が真っ赤になり、顔から湯気が立ち始める。

「ち、ちちちち、ちが、ちが」

ポシュンポシュンと湯気を立てるルイズに、キュルケとタバサが対抗心の炎を宿らせた瞳を向ける。キュルケはバルスの腕をグイッと引きよせ、軽く顔をなでた。

「あら、駄目よ。ダーリンは私が貰うんだから」

「お前な」

顔を引くつかせて応えるバルスと色気たっぷりで誘うキュルケの間に、タバサが身体を入れて割って入る。そのままジト目をキュルケに向けた後、ルイズへもジト目を向けた。

「バルスはものじゃない」

核心を射抜くような指摘に、ルイズとキュルケはウッと気圧される。

「そ、そそ、そんなの、言葉のあやじゃない！」

「参ったわ。私も熱に浮かされ過ぎたみたい」

苦しく言い訳をするルイズと、ごめんなさい、ダーリンと上手く受け流すキュルケ。きゃあきゃあ、とやり始めた三人に巻き込まれ、バルスは苦笑いしている。

アンリエッタは楽しそうにはしゃいでいる四人を見て、悲しそうにため息をついた。

「私たちはこうして生きているのに。死んでいった者達に、何と詫びればよいのか…」

顔を俯かせるアンリエッタを前に、ルイズ、タバサ、キュルケの争いは止まる。戦場で散って逝ったであろう、トリステイン軍二千の兵士たち。アンリエッタは己の蛮行に涙し、ルイズも、タバサも、キュルケも悲しそうに顔を伏せた。

遠くから地鳴りのようなドドドドという音が聞こえ、アンリエッ

タは顔を上げる。

「おお、神よ！」

ぱあっとアンリエッタの顔が明るくなり、見知った者たちを笑顔で出迎える。アルビオン軍の死者、約七千。捕虜、約四千。トリステイン軍の死者、ゼロ。

後にタルブ平原の会戦と呼ばれるこの戦いは、トリステイン軍の大勝利で終わったのだった。

「な、何が、何が起こったというのだ…」

森の中、碧眼を持つ男は、そのカールした金髪に手を置く。よろよろとしながら立ち上がると、地面を見たまま今までに起こった出来事を整理し始めた。

最初は優勢だった。何もかもが順調だった。あと一歩でトリステインを滅ぼすことができるはずだった。それが、不思議な光が自軍の兵を飲み込んでから全てが変わった。日食が始まり、不気味な声が聞こえた。収まったと思ったら、黒い何かが平原を覆った。たくさんの火の玉が飛んできて、竜が穴だらけになって散っていった。そして最後に、光りの柱がレキシントンを地上へと落とした。

理解はできないが、現実として何が起こったかは分かっている。

「まだ、本国に戻れば、戦力は十分。あの男もいる…」

男が碧眼を上げると、その瞳を驚きで揺らす。そこには、青い髪

と紫色の瞳を持つ男が立っていた。碧眼の男はよろめきながらも立ちあがり、笑顔を浮かべる。

「おお、バルスではないか！余を助けに来てくれたのか？」

ニヤリとバルスは禍々しい薄笑いを浮かべ、失笑する。

「冗談はそれくらいにしておけ、クロムウェル。いや、地下水」

バルスはクロムウェルへと歩み寄り、アンドバリの指輪とともにクロムウェルの腰にぶら下がっている短剣を引き抜いた。

「やれやれ、あんたはよっぽど冗談が嫌いなんだな」

引き抜かれた短剣、地下水は、バルスと初めて出会った時のことを思い出す。地下水は、人の身体を乗っ取ることのできる意志を持ったインテリジェンスナイフである。有名な暗殺者であり、地下水として名が通っている。

持つ者を自由自在に操ることのできる能力を持っているのだが、それをいつものように利用してバルス暗殺を行おうとしたのが運の尽き。

バルスは地下水の乗っ取りをはじき返しただけでなく、水に沈めた後三日間土に埋め、忠誠を誓うまで一日中火であぶったのだ。おかげで、今ではすっかりバルスの三下扱いである。

その地下水の呪縛から解き放たれたクロムウェルは、バルスを見て腰を抜かした。

「お、お前は…！？」

キョロキョロとあたりを見回し、クロムウェルはおびえた瞳でバ

ルスを見上げる。まるで虫けらを見るような瞳が、クロムウェルを見下していた。

「ここはどこだ!?よ、余をどうするつもりだ!?」

「貴様はただの馬鹿だったが、十分役に立った。最後にもう一仕事くれてやろう」

バルスの後ろから、一人の女性が姿を現す。見た目は二十歳前後で、ロングストレートの金髪が美しい。だが、その瞳は完全に冷え切っている。まるで、復讐のためだけに生きているようだ。

バルスはシスターの服に身を包んだその女性を見やると、口を開いた。

「リュシー、クロムウェルにギアスを使え。トリステイン王女戴冠の時、自害するようにな」

「はい。仰せのままに」

ひいっと情けない声をあげ、クロムウェルは這うように後ずさる。しかしそんな動きで逃げられるはずもなく、クロムウェルはギアスの制約を受けることとなった。

「こ、これはどういうことだ!?」

リュシーが驚いて声のした方へと振り向くと、そこには息を上げているワルドの姿があった。バルスはワルドの接近に気が付いており、全く驚くそぶりを見せていない。

ワルドは涼しい顔をしているバルスに歩みより、掴みかかる。

「貴様、敵に味方しただけでは飽き足らず、皇帝を害そうとするか！」

ワルドの怒りが、バルスへの恐怖心を忘れさせる。タルブの戦いで、バルスは敵に味方していた。それを目の当たりにしたワルドは、アルビオン軍が崩壊する混乱の中、バルスやルイズたちがレキシントンに気をとられているうちにやっと逃げ出してきたのだ。

怒りに我を忘れているワルドの手を振りほどき、バルスは冷たい目を向ける。

「あれは俺だが、俺ではない」

バルスはワルドに背を向け、リュシーはバルスの後に続く。クロムウェルは茫然としてそれを見送り、ワルドは不可解な答えに頭を悩ませた。

バルスが立ち止まり、首だけを動かしてワルドに横顔を見せる。

「どうした子爵？ついてこないのか？」

ワルドは心の整理を付けかねていたが、このままここに留まるわけにはいかないのでバルスの後へと続く。ワルドが歩きだすのを見て、バルスも再び歩を進め始めた。

まさか、奴がこの世界に来ているとはな。面白くなりそうだ。

バルスは心の中で笑うと、森の奥へと消えていった。

魔皇と魔王の章

【オリジナル登場人物紹介】

バルス＝タイラント

本作の主人公。年齢は十八歳で、身長は百七十五サント。非常に強力な魔法を使い、紫色、緑色の魔力を操っているのが確認されている。剣の使い手でもあり、その腕は達人級。魔力も剣もない状態は無能らしい。

冷酷な性格だったが、未来が見えなくなったために性格が変わった。非常に自由奔放な性格で、約束と自由を重視している。束縛されることを非常に嫌がり、使い魔の契約を拒否した。

二つ名は「戦慄」を名乗っている。最近の弱点は、ルイズの我がままとタバサの笑顔、キュルケのお願い、シエスタの素直な優しさらしい。

ムラマサ

バルスの愛刀。バルスの身の丈を超える日本刀のような大刀で、意志を持つ魔剣。

性格は主人と同じく自由奔放で、感情的に言葉を口にすることが多い。それが故、主人の逆鱗に触れることもしばしば。

最近の楽しみは、主人と四人の小娘を煽ることらしい。

バルス＝タイラント（神聖アルビオン共和国）

アルビオンに現れたもう一人のバルス＝タイラント。正体不明だが、バルスと同等の魔力と頭脳を持っている様子。
卓越した軍事指揮能力を持ち、またたく間にアルビオン王国を制した。タルブ会戦においては直接指揮をとらなかったが、トリステイン軍を壊滅に追いやっている。
性格は冷酷らしい。

【用語】

紫色の魔力（シショクノマナ）

バルスの持つ、バルスの世界で一般的な魔力。あらゆる系統の魔力が混ざり合っており、ほぼ全ての系統の魔法が行使可能。ただし、行使したい系統以外の魔力が不純物となって邪魔をするため、強力な魔法には向かない。
今のところ確認された魔法は、「フレイムオブフレイム」「ゴーレム」「魔砲」。

緑色の魔力（リョクショクノマナ）

バルスの持つ、紫色の魔力から抽出された純粋な魔力の一つ。治癒を司っており、その力は細胞一つでも生きていれば回復させるほど。
今のところ確認された魔法は、「デモンズゲート」。

第一話　名前を呼んで

黒髪、黒い瞳に戻ったバルスは、頬に心地よい風を受けながら眼下に広がる森を見ていた。ポカポカとした陽射しがまた気持ちよく、田舎風景は素晴らしい。

目線を上げれば、ショートカットの青い髪を風に煽られる少女と、自分を運んでいる青い竜の姿が目に入る。青い竜、シルフィードは、自分を乗せてラグドリアン湖方面に飛び始めた時からずっと楽しそうだった。

「シルフィード、随分楽しそうだな」

「それはそうなのね。もうすぐお姉様のお母様が元気になるのね、きゅいきゅい！」

チーンという音がふさわしい。シルフィードの御仕置きが確定。空気が固まり、シルフィードの羽ばたきもぎこちなくなる。

「し、シルフィードはガーゴイルなのね！」

普通の人々にならそれで誤魔化せたかもしれないが、何分付き合いの長いバルスが相手だ。シルフィードはタバサの使い魔だということも先刻承知。白々しくバレバレな嘘など通用しない。

スウッとタバサは杖を振り上げ、御仕置き敢行体勢に入る。しかし、パシッと振り上げた杖を掴まれ、タバサは振り返った。

「どうして？」

「いや、分かってて話しかけたんだ。それは勘弁してやってくれな

いか」

タバサは驚いたが、それを表情に出すことはしない。前へと向き直り、振り上げた杖を納める。

「いつから？」

「魔力が戻った日だ。タルブで」

全てのマナの流れを見通すバルスの瞳は、紫色に輝いている時だけにその効果を発揮する。その瞳を使用していたのはタルブの時だけだったが、シルフィードが遠くで飛んでいる姿を見て喋ることができると確信したのである。それで、敢えて自然に話しかけてみたのだ。

結果は大成功。見事にシルフィードははまり、普通に喋ってしまった。はめられたシルフィードは眉をひそめる。シルフィードは主人にもバルスにも聞こえないよう、大いなる意思の言葉に切り替えて愚痴をこぼす。

『偉大な韻竜の私をはめるなんて、いい度胸してるのね。いつか仕返ししてやるのね…』

チラリとバルスの顔を見ると、目と目が合ってビクリとしてシルフィードは目をそらす。バルスはふうとため息をつき、頭をかいた。

韻竜とは、人間の言語を解するほどの知能を持つ、古代の眷属である。肉体的にはただの竜と大差ないが、高度な先住魔法を操ることもできる優秀な竜の眷属だ。

『悪気はなかったんだ。仕返しはやめてくれ』

ギョッとして、シルフィードはバルスの顔を見る。何と、ただの人間だと思っていたバルスが大いなる意思の言語を操ったのである。しかしそこには、苦笑いを浮かべている、一見普通の男がいるだけだった。

シルフィードは目線を戻すと、今度こそ誰にも聞きとられないように心の中で呟く。

この人一体、何なのね…。

バサバサとシルフィードは翼を羽ばたかせ、森に囲まれた白い屋敷の前に降り立つ。そこは、以前バルスが訪れたことのあるタバサの実家の屋敷である。

バルスがヒョイとシルフィードから飛び降り、次いでタバサがスタッと地面に着地する。外がにわかに騒がしくなったのに気がついたのか、不意に屋敷の扉が開く。そして、テルスランがその奥から姿を見せた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。帰省されるのでしたら、一報いただければお迎えの準備ができたのでございますが…」

「いいの。急用」

テルスランがタバサの横を見ると、いつしかの一番違和感を感じた友人が立っている。以前と違い、トリステイン魔法学院の制服の上に白いローブを纏っていた。

他にタバサが友人を連れている様子もなく、更に急用とくればテルスランの思い当たる節はない。テルスランは、手持ちの情報でタバサが帰省してきた理由を計りかねた。

しかし、臣下が主の私事に口をさしはさむなど、差し出口もはなはだしい。テルスランはタバサを屋敷へと入るように促し、タバサはそれに従う。バルスはというと、それに反して歩を止めた。

「夫人は、この屋敷の中か？」

タバサは黙ってコクリと頷く。

「ちょっと待ってくれ。魔力を解放しておかないとな」

タバサは再びコクリと頷くと、テルスランの手を引いて一歩後ずさる。テルスランは魔力の解放という言葉に、首をかしげていた。この変わった友人は、確か魔法など使えなかったはずと。

バルスが外で魔力を解放するのは、屋敷の中でそれをすると解放時の爆風で窓ガラスが割れたり色々なものが吹き飛ぶからである。あのタルブでの戦いから試験的に一、二度魔力を解放してみたバルスだったが、爆風を完全に抑えることはできていない。とはいえ、この世界で初めて魔力を解放した時よりはかなりマシになっている。

バルスは体内で押さえつけている魔力の殻を破り、解放する。ビュウッと一陣の風が吹き出し、タバサとテルスランはその強風に両腕を前に出して己の身体をかばった。

風はすぐに収まり、タバサとテルスランはゆっくりと顔を上げる。そこには、青い髪と紫色の瞳へと変わったバルスが立っていた。

「さて、行くか」

タバサは何事もなかったかのように、コクリと頷く。テルスラン

は目の前の出来事が理解できず、目を瞬かせていた。

「こ、これは一体…！？」

テルスランの疑問に答えることなく、バルスは屋敷の扉へと向かっていく。閉じられた屋敷の扉は、誰が触れているわけでもないのに独りでに開いてバルスを迎え入れた。タバサはその後ろにトコトコとついていき、テルスランもその後を追いかける。

三人は、それぞれの歩みで屋敷の奥へと入っていった。

タバサは扉の前に立ち、コンコンとノックする。この扉を開くとき、幾度想像しただろうか。もしかしたら、母が元に戻っているのではないかと。

だが、いつも迎えてくれるのは無情な現実。タバサは返事のないドアを押しあけ、中へと入る。

いつものように、部屋の一番奥で母は坐っている。光り溢れる窓際で、綺麗な庭を眺めている。白いテーブル、柔らかそうなソファ。娘と思い込んだ小さい人形を抱えて、母はソファに坐っている。

いつもと違うのは、タバサの後ろに続く男がいること。バルスはキョロキョロと部屋を見回し、本棚に収まった本のタイトルなどを見ている。タバサは気にせず、いつものように母の元へと赴きかしずいた。

「只今戻りました、母様」

タバサの声に反応し、母はゆっくりと振りかえる。振り返った顔

はガリガリにやせ細り、瞳は収縮して狂気をはらんでいた。母は身を引き、大きく口を開く。

「下がりなさい！無礼者！」

返ってきたのは、いつもの反応。いつもの言葉。タバサは顔を俯かせたまま、無表情を崩さない。

「恐ろしや、この子が何れ王家を狙うなどと。私たちは静かに暮したいだけなのです」

母はテーブルから紅茶のカップについていたスプーンをとり上げ、タバサに投げつける。

「下がりなさい！」

母は人形をいとおしそうに抱きしめ、ほおずりする。

「この子は、シャルロットは大切な娘です」

タバサは寂しそうな顔して、立ち上がる。いつもなら、これで終わり。また会いに来ますと、何もできずに届かない言葉を口にするだけ。しかし、今日は違う。

後ろからバルスが歩み寄って、タバサの隣に並んだ。バルスは紫色の瞳で、タバサの母を見つめる。

脳のマナの流れがおかしい。まるで乱気流だな。

一見して、それは魔力の乱気流のように見える。だがよくよく見ると、それはだれかが作ったものらしく規則性を持って暴れていた。

しかし、あのアホ剣を持ってこなかったのは正解だった。こんなタバサの母親を見たら、イッちゃってるとかいいかねないからな。

とか無駄なことも考えつつ、バルスはタバサを見る。いつも通りの、魔法学院の制服だ。

「いいのか？めかし込まなくて」

「この方がいい」

確かに、学生服の方が成長を伝えるにはインパクトがある。バルスは瞳を母へと移し、再び乱気流の分析に入った。

ジッとバルスはタバサの母を見つめ、様子をうかがっている。ただただ沈黙が流れ、いたずらに時だけが過ぎていく。タバサはチラリ、チラリと心配そうにバルスの顔を見上げていた。

もしかして、ダメなの？もう、治らないの？

タバサは顔を俯かせ、地面へと目線を落とした。

疑っちゃダメ。バルスは、やると言ったらやる人だもの。

タバサの心をすくい取るかのように、バルスの左腕が静かに上がった。緑色の光が掌から湧き出し、バチバチと音を立てて丸い光の玉へと凝縮されていく。光りの玉がその輝きを失うと、バルスの掌の上で握り拳くらいの水玉が宙に浮かんでいた。

バルスはタバサの母に、一歩、ジリッと近づく。タバサの母はその動きにビクッと反応し、大きく口を開いた。

その気を見計らい、バルスはポイッと水玉を大きく開けられた口

へと放り込む。タバサの母は、思わずそれをゴクリと飲み込んだ。狂気に満たされた瞳が輝きを取り戻し、バルスはフイッと背を向ける。

バルスが紫色の瞳にその姿を写して約五分。それは、タバサにとって母を失った日からの年月よりも遥かに長く感じられる時間だった。

「ここは、一体…」

ゆっくりと首を左右に振って、タバサの母は己の両手を見る。タバサは肩を震わせて、小さくつぶやいた。

「母様…」

タバサは、母に抱きつきたくなるのを必死でこらえる。ガリガリにやせ細った母に飛びつけば、ガラスのように壊れてしまいそうだから。瞳を潤ませて、精一杯の笑顔を作ることしかできない。

そのタバサの後ろで、バルスは何かを思い出したように歩みをとめた。クルッと振りかえり、緑色の魔力でタバサの母を包み込む。タバサの母は、狂気の薬を飲む前の健康的な姿を取り戻していた。聡明にして壮麗なその姿を。

バルスはまた背を向けて、扉へと歩いていく。タバサは、涙をポロポロとこぼしながら今度こそ自分の感情に身を任せた。杖を投げ出して、氷の仮面を投げ出して、タバサは母の胸に飛び込んでいく。

「母様っ！」

「シャルロット！？」

タバサは母の胸に縋りつき、冷え切った心を温める。

「母様、よかった、よかった…！」

「シャルロット…」

母はタバサを、いや、シャルロットを優しく愛おしそうに抱きしめる。窓から差し込む光の中で、親子は失った年月を取り戻すかのように抱き締め合うのだった。

バルスはいつぞやに案内された客間で、ティーカップを持ち上げた。その香りをかいで、コトリと皿へと戻す。側に立つテルスランを見上げると、バルスはスッと目を細めた。

「紅茶、変えたんだな」

バルスが目を細めるのに合わせて、テルスランもスッと目を細める。

「よくお気づきで」

バルスはフイッと顔をそむけると、無礼にも無遠慮に言い放つ。

「前の方が好きだったんだが」

背けられたバルスの横顔を見ながら、テルスランは首をかしげた。

確かに、前回来訪した時バルスは紅茶に手を付けなかったはず。だから、テルスランは紅茶の種類を変えて出したのだ。バルスの反応は、甚だ心外である。その旨を伝えると、バルスは納得したように頷いた。

「あの時は魔法が使えなかったからな。毒を盛られるとどうしようもなかったんだ」

バルスが言うには、知らない土地で知らない者に出されたものを口に入れるほど勇敢ではないらしい。それはバルスの侯爵時代の習慣であり、事実、このハルケギニアでもルイズかタバサ、もしくはシエスタかマルトーを介して出された食事しか手を付けていない。

その理由にテルスランも納得し、互いに互いを一流と認め合う。テルスランは一度退室してわざわざ紅茶を入れ直し、バルスはその紅茶を時間をかけて味わった。

日も傾き始めた頃、バルスとテルスランはすっかり打ち解けていた。今二人は対面に坐りあい、白と黒の駒を対峙させてチェスの真っ最中である。バルスがスッと黒のナイトを持ち上げ、トンっと盤上に置く。

「チェック、メイトだ」

「く、中々お強いですな」

テルスランはふう、とため息をつき、バルスはニヤリと笑う。

「さて、もうひと勝負と行くか」

「いいでしょう。次はこう簡単にいきませんぞ」

「何してるの？」

ビクッとして二人が顔を上げると、そこにはいつもの無表情を浮かべたタバサが立っていた。そして、その横には見慣れない貴婦人。タバサと同じ青い髪は艶やかなロングで、青い瞳は底知れない優しさを称えている。

テルスランはその姿を見て大きく瞳を見開き、慌てて立ち上がった。

「お、奥様！」

ガタッとチェスが倒れるのも気にせず、テルスランは頭を下げて一礼する。再度上げられた老執事の瞳には、うっすらと涙が浮かんでいた。

「奥様、よく、よくお元気になられました」

「テルスランこそ、よくこの家を守ってくれました」

さめざめと泣き始めたテルスランは、タバサの母の回復を素直に喜ぶ。テルスランの男泣きが収まるまでなだめると、タバサの母はその後ろで腰掛けるバルスをチラリと見た。そして、テルスランに目を合わせる。

「あの方と少しお話があります。悪いのですが、あなたは少し外してください」

「は、かしこまりました」

テルスランが部屋の扉を開けて消え入り、タバサとその母はバル

スの対面に立つ。バルスは立ち上がると、一礼して頭を垂れた。

「私、バルス＝タイラントと申します」

「話は娘から伺っております」

タバサの母はにこやかに笑い、バルスはキョトンとして顔を上げる。

「心優しく、礼儀正しく、威厳に満ちた偉大なメイジだそうですね？」

「か、母様！」

タバサが頬を染め、ワタワタと母を止めにかかる。ふふっとタバサの母は悪戯っぽく笑い、バルスは唖然としてタバサの行動を見ていた。あのタバサが、感情的だ。いや、感情的すぎる。

タバサの母は娘をなだめると、バルスに腰を下ろすように促す。バルスは勧めに従ってソファに腰をおろし、次いで母と娘は対面のソファに腰を下ろした。

タバサの母はバルスの髪をまじまじと見て、首をかしげている。

「あなたの髪は、我が王家との関係に由来するものなのですか？」

「この髪ですか？こうすればよろしいですか？」

バルスは己の魔力を抑え込む。髪は青から黒へと変わり、紫色の瞳も黒へと変わっていく。驚きの表情を浮かべるタバサの母に己の魔力が起因していることを説明すると、母は更に驚いていた。

シャルロットから聞いた話によると、バルスは異国の侯爵で、強

力な力を持つメイジ。今の現象からすると、少なくとも後者は間違いなく本当である。

タバサの母が何かをポソッと呟き、タバサは目を丸くして驚く。バルスはその言葉を聞き取れなかったが、タバサの表情から尋常ならないことであるのは分かった。バルスは息をのみ、タバサの母親を見つめる。

「実は、あなたに折り入って頼みがあるのです」

空気がピンッと張りつめ、バルスとタバサの母は真剣そのものの眼差しで見つめ合う。バルスは緊張を抑えようと、ペロッと唇をなめた。ゆっくりとタバサの母の口が開く。

「娘の、シャルロットのフィアンセになってください」

「なんだ、フィアンセですか…」

ふう、とバルスはため息をついて、ティーカップに手を伸ばす。どんな無理難題を吹っ掛けられるかと思っていたバルスは、心底安心した。ガリアの王を討てなどと言われずに済んで、よかったと。

「そうですか、なんだフィアンセですか。フィアンセ…！？」

ハタと、バルスの手が止まる。ティーカップが制止する。フィアンセとは、婚約者。婚約者とはフィアンセで、フィアンセとは婚約者でフィアンセである。グルグルっと天地が二回ほど回って、やっとバルスはその言葉の意味を理解した。

ちょっと待て。婚約者とはイコール無理難題であって。要するに俺はどうすればいいんだ！？

バルスは平静を装い、紅茶で唇を濡らす。スッとティーカップを皿に置くと、心を落ち着かせた。

「何故です？もっといいお相手がいるはずですが？たとえば、他国の王とか」

タバサの母は、静かに首を横に振る。その姿さえ気品を感じさせるが、バルスはそれどころではない。己の兵法を総動員して、タバサの母の考えを引き出す事で頭がいっぱいだ。

「私たちは、王の座を奪おうとは思っていません。あくまで静かに暮したいだけなのです。」

タバサの母の顔が、物悲しげに変わる。その表情は芸術的な美しささえ感じさせるのだが、バルスはそれどころではない。背中の冷や汗を止めようと、精神統一中である。

「ですが、これからも娘の命を狙う者は後を絶たないでしょう。ですから、あなたのような方が娘には必要なのです」

タバサの母が訴えるような瞳でバルスを見ると、そこには両手で頭を抱えるバルスの姿があった。バルスはそれどころではない。何とか上手くこの場を切り抜けるのに必死である。

「バルス・マークゥィス？」

ハッとして、バルスは顔を上げる。ゴホンとわざとらしく咳払いすると、顔を俯かせた。

「お嬢様を守ることに関しては引き受けましょう。しかし、フィアンセのことはお嬢様の意向も御有りのはず。お引き受け致しかねる」

何とか取り繕ったバルスは、心の中でため息をつく。我ながら中々にいい締めくくりである。タバサの母は納得したように頷き、顔の前で掌を合わせて笑顔に変わっていく。

「何と慎み深い方でしょう。それも、娘の気持ちまで考えてのことは。あなたの事が益々気に入りました」

「は、え?」

予想外の展開に、バルスは歯切れの悪い言葉を絞り出すことしかできなかった。タバサの母はニコニコと笑顔を浮かべながら、話を進めていく。

「バルス・マークゥィス。あなたのご両親は?」

「は?国におりますが…」

「あなたは結婚について何か言われておりますか?」

「いえ。強いて言うのであれば、自分で自分の事を決めろと」

「そうですか。なら、決まりですね」

何が、今何が決まった、とバルスは心の中で叫ぶ。ご満悦な笑顔を向けるタバサの母。ひくつきながらはにかむバルス。タバサの母は、笑顔を娘へと向ける。

「シャルロット。今日より、バルス・マークゥィスとの結婚を許可します」

タバサは頬を真っ赤に染め、チラッとバルスの顔を見る。バルスは混乱最高潮の中、疑問符の津波に飲み込まれた。

何が言いたい！貴様、何が言いたいのだ！？

バルスの目線は、タバサの母親にくぎづけである。タバサの母はスッと笑顔をバルスへと戻すと、その意図したところを告げた。

「これで、今日から二人とも許婚よ。娘をよろしくね、バルス君」

バルスは開いた口がふさがらなかった。目から鱗、鱗、また鱗。鱗の枚数が足りないくらいである。許婚とは、親が結婚を許した間柄の事。確かに、バルスは誰とでも結婚する許可を両親から得ている。そして、タバサはバルスと結婚する許可を得た。許婚成立である。回避不可能である。

バルスは息も絶え絶えに、やっと声を振り絞った。

「し、しかし、オルレアン公夫人…」

「まあ、堅苦しい。せめて母様か、お母さんでもいいのよ？」

か、かか、と息をもらし、バルスは唖然として固まる。完全敗北。恐るべし、オルレアン公夫人。バルスのライフはゼロになったが、オーバーキルは続く。

「此処をあなたの家だと思っていつでもいらしてね。バルス君」

「あ、はい…」

「ほら、シャルロットもご挨拶して」

タバサが静かに立ち上がって、上目づかいでバルスを見る。バルスもつられる様に立ち上がって、同じ上目づかいで応えた。二人とも、頭を下げて麗しく一礼した。

「よ、よろしくお願いします」

オルレアン邸、タバサの実家からの帰路、シルフィードの背中の上でバルスは茫然とタバサの背中を見つめていた。いつもと変わらない、小さくて華奢な背中。タバサの変わらない態度に、バルスは心底安心感を覚える。きっと、前を向いている顔も無表情なのだろう。

タバサは、時折前かがみになってはシルフィードと何かをコソコソと話している。何とも仲のいいことだ。

「うお！？」

バルスは思わず声を漏らす。いきなりシルフィードが背をのけぞらせたのだ。タバサもよろめいて、タバサの背中がポスッとバルスの胸板に抱きとめられる。

「大丈夫か、タバサ？」

コクリとタバサが頷くと、ホッとバルスは安堵のため息をつく。
タバサは少し頬を染めると、目を泳がせた。

「あ、あの、二人きりの時は」

「何だ？」

「…シャルロットって呼んでほしい…」

ドスッという音がバルスの脳内で怒ると、ドカーンと理性の壁が爆発した。モジモジとして恥ずかしそうに口元に手を当てるタバサ。目をそらして俯くと、その仕草の攻撃力でチュドン、ドカンと壁が爆破されていく。

「後、こういう時は…」

「な、何だ!?」

「…ギュッてして…」

止めに更に止めを刺され、バルスの脳はボンと火を噴く。許容の限界を超え、オーバーヒートである。バルスは思う。

これは夢だ！夢なのだ！だからとりあえず、本人の要望だし、そうしなければいけない気がする！

バルスはタバサを後ろから包み込んで、優しくギュウッと抱き締める。タバサもそれに応えるように、手をバルスの手に重ねるのだ

った。

第二話　絶対命令

バルスはガチャリとルイズの部屋の扉を開けると、疲れきった顔でその中へと入った。あたりは既に暗くなっており、机の上で蝋燭の炎が揺らめいている。その向こう側では、寝間着に着替えたルイズが悲しそうな顔をして立っていた。

「その様子だと、あまりいい結果は出なかったみたいね」

「いや、上手くいった。疲れてるだけだ」

バルスはスタスタと歩き、トスッと藁のベットへと腰を下ろす。そう、全ては上手くいった。タバサの母は正気を取り戻した。だが、バルスの魔力はその治療で疲労感を覚えてしまうほど弱まってはいない。というよりも、あの治療は技術力が問われるのであって魔力の大きさはそれほど問題ではない。問題は、許婚だ。

バルスは、この方面に致命的とまで言えるほどの無能であった。それは本人の自覚の範疇であり、バルスは今までの人生でもそれをのらりくらりとかわして生きてきた。社交の場で上手く女性陣をかわして生きてきたのだ。問題先送りである。

そして今、時は来たれり。今のバルスの課題は、この回避不可能な現象をいかに回避するかである。更なる問題先送りだ。

藁のベットでうずくまるバルスを見つめて、ルイズは余程大変な治療だったのだろうと想像する。

「そう。でもよかったじゃない。タバサも喜んでたでしょ？」

「ああ」

バルスはムラマサへと手を伸ばすと、ガシッと掴んで抱え込む。
壁に背を預けて目を閉じると、いつもの眠る体勢へと入った。ルイズもベットの中に身体を滑り込ませ、枕をポンポンと叩いた。
その枕が二個あって、もう一人分の寝る場所が用意されていることにバルスは気づいていない。ルイズはもう一人分の寝る場所のシーツもポンポンと叩き、丁寧に皺をとった。

大丈夫。言うのよ、ルイズ＝フランソワーズ。

ルイズは時間稼ぎのようなその仕草をやめ、意を決した。

「バルス」

「何だ？」

「そ、その、あの、床に寝るのって、あんまり身体に良くないと思うのよ」

バルスは顔を俯かせたまま、しかし、怪訝そうに眉をひそめた。

「藁のベットもあるし、俺は外で寝ていたからな。こっちの方が慣れてる」

坐って寝るのはバルスの基本スタイル。剣を抱えておくことで、敵襲に素早く対応することができる。長い年月バルスはバルスの世界でこのスタイルを貫いてきたので、逆に普通の人が寝るような柔らかいベットの上など居心地が悪くて寝られなくなっていた。
バルスの取り付く島もない一言に、ルイズは悲しそうに黙りこむ。そこへ助け船を出すものがいた。余計なことに余計なことを重ねて事態を収拾不可能にする天才、ムラマサである。

「まあ、そう言わずに聞いておあげなさいよ。ルイズちゃんったら、ご主人様がタバサちゃんと二人きりだからって一日中ヤキモキしてたんだから」

「ちょっ！でたらめ言うんじゃないわよ！」

ムラマサは、鞘に納められたまま言葉を発する。何故ムラマサが鞘に突っ込まれた状態で話せるようになったかと言えば、それはタルブでバルスが魔力を解放したのがその原因。膨大な魔力が一気に噴出したので、身近にあった鞘の封印式が吹っ飛んでしまったのだ。おまけに封印を司る白色魔力が回復していないので、封印式を埋め直すこともできない。ムラマサ、やり放題だった。

「ほらほら、そんなこと言ってないで。言いたいことははっきり言った方がいいわよ？」

「うるさいわね！明日姫様の戴冠式なんだからちゃんと起きること！それだけ！」

ルイズはプイッとバルスに背を向け、布団をかぶって横になる。窓の外の月を見ながら、ルイズは眉間にしわを寄せた。

何よ、何よ。私の気持ちも知らないで。あんたなんか、一生床で寝てればいいんだわ。

ルイズはギュウッと目をつぶる。少し感情が落ち着いてくると、ルイズはチラリとバルスの姿を見た。いつものように背を壁に預けているが、寝息を立てている様子はない。

ルイズは、時々バルスが変なあざを手に拵えていたことを思い出

す。それは決まって朝で、寝ていた時にできたのだろう。あんな体勢で寝て、身体を痛めないわけがない。

それなのに、床の方が落ち着くというバルス。余程酷い人生を送ってきたのだろうと想像し、ルイズは胸が熱くなってきた。ベットで寝られない人生など、自分だったら耐えられない。

「ねえ、バルス。起きてる？」

「ああ」

「ちょっとこっち来て」

怪訝そうな顔をしたバルスだったが、渋々といった様子で立ち上がる。ルイズの我がままは今に始まったことではなく、断ると余計に始末に負えない事態へと発展することが多い。一時の面倒など、享受した方がまだマシだ。

ルイズは身体を起こしてベットの上に坐り、バルスはベットの前に立つ。ポンポン、とルイズは開けた一人分のスペースを叩いて見せた。

「あんた、今日からここで寝ること。これ、命令」

「お前、人の話聞いてたのか…？」

「言うことときかないとご飯抜き。これ、絶対」

我がまま、ここに極まれり。バルスは唖然としてルイズの仏頂面を見つめる。

「お前、自分で何言ってるのか分かってるのか？」

「何って、私はあんたのためを思って…」

言葉を途中に、ルイズの顔がみるみる赤くなっていく。確かに、今までのやり取りを要約するとえらいことになっていた。

あんた、私の隣で寝なさい。じゃないと許さない。やだやだ絶対許さない。一緒に寝てくれないとイヤ。どえらいことである。

ルイズは頭が爆発し、グルグルと感情メーターが回り始めた。

「違う！ちちちち、違う違う違うのよ！かか、か、か、か、勘違いしないでよね！」

ブンブンとルイズは腕を振り回し、バルスはその姿にまたも唖然とする。もはや、ルイズを止める者など誰もいない。まるで小さな暴君だ。

「ベットで寝られないなんて可哀想だから！そう思っただけなんだから！」

めったに出ないルイズの本音が飛び出して、シンと部屋全体が静まり返った。バルスは照れ臭そうに頭をかくと、頭を下げた。

「悪い。俺が間違っていたようだ」

バルスは藁のベットへと向かい、白いローブを脱ぐ。畳んで藁のベットに置くと、再びルイズのベットの前に立った。ルイズはビシッとバルスの片手を指さす。

「ムラマサも禁止」

バルスはすぐ横の床にムラマサを横たえ、ベットへと身体を滑り込ませる。それは手を伸ばせばすぐにムラマサに届く距離だが、視界に入らない場所。バルスはハルケギニアに来て、初めて柔らかなベットに身を預ける。

だがしかし、ルイズの寝息と甘い香りで、人生で一番眠れない夜を過ごすバルスだった。

バルスが目を覚ますと、そこは冷たい地面の床だった。湿気が酷く、薄暗い。バルスは床に坐ったまま、自分を閉じ込める木の扉を眺める。

木の扉は上の方に四角い穴が開いており、鉄格子がはめられている。さらに言えば、木の扉は物凄く厚く頑丈につくられていた。

ここは、バルスの知らないどこかの地下牢。バルスはやっと得られた睡眠に満足感を覚え、大きく欠伸した。そう、どうしてこうなったかと問われれば、睡眠不足が原因としか言いようがない。

眠れないまま朝を迎えたまでは良かった。宿舎の外に出たらシエスタに会って、タルブの家族が無事だったと聞かされた。シエスタは満面の笑顔だった。全然問題ない。

それからルイズと王女の戴冠式に出かけた。そして、アンリエッタ王女のパレードに参列した。パレードの中のアンリエッタ王女は中々に凛々しく、トリステインの人々皆が祝福していた。全然問題ない。

ところが、そのパレードが運の尽き。眠さも相まってぼんやりと王女の立ち姿を見ていたら、誰かに背中を押された。故意じゃなかったのだろうが、バルスは押された拍子によろめいて王女の馬車の

前に立ってしまった。背中にはでかい剣、ムラマサ。不審者として即刻取り押さえられた。アホすぎて笑えない。

「さて、ずらかるか」

バルスはゆっくりと立ち上がり、分厚い扉を見据える。こんな扉など、バルスの前では意味をなさない。バルスの周りの空気がボンッとはじけ、バルスの髪は青へと、瞳は紫へと変わる。

バルスが腕を扉へかざすと、ドオンッという音ともに扉は吹っ飛んだ。カツカツと足音を鳴らし、大胆不敵にも牢から歩みでた。

バルスは首を左右に振り、あたりの様子を確認する。薄暗い閉鎖的な空間に、石でできた螺旋階段。そして、この場に似つかわしくない一人の若い女性が驚いた顔をして立っていた。

短く切った金髪の下、バルスを捉える澄みきった青い瞳。所々板金で保護された鎖帷子に身を包み、上に羽織るは百合の紋章が施されたサーコート。

バルスは見覚えのある顔とパレードで自分をねじ伏せた細い剣を見て、ポン、と手を叩いた。

いきなり脱獄失敗か。

脱獄して三秒。歩数にして二歩。しかも、自分をとっ捕まえた銃士隊の一人に見つかったのだ。失敗と言わずして何と言う。女性の腰からサッと細い剣が引き抜かれ、青い瞳がバルスを切り裂くように睨みつける。

「貴様、ここで何をしているか！？」

「何って、見ての通り脱獄だ。散歩してるように見えるのか？」

盗人猛々しいとはまさにこのこと。バルスはキョロキョロと自分の体を見て、吹っ飛ばした扉を指さす。扉の外にいますよ、と言わんばかりに。

女性の瞳はにわかに怒りを孕み、眉間にしわが寄る。細長い剣が、女性の姿に似つかわしくないほど早く振り上げられた。

「貴様っ！」

細長い剣が振り下ろされる。その素早さからして、並大抵の剣士ではないとバルスは踏んだ。ならば、それ相応の力で報いるのがバルスの流儀。紫色の魔力が沸き立ち、同色の瞳が女性をスッと睨みつける。

「御待ちなさい、アニエス！」

暗闇に響いた声に、アニエスはピタリと細身の剣を止めた。バルスもその聞き覚えのある声に反応し、魔力を抑える。アニエスの後ろから、これまたこの場に似つかわしくない白いドレス姿のアンリエッタが姿を現す。

「アニエス、危ないところでした」

アンリエッタは強い眼差しで、まるでアニエスを咎めるような口調で話す。アニエスは不満そうな顔をアンリエッタに向けた。

「殺すつもりなどありませんでした。ただ、あまりにこの男が無礼な事を…」

「違うのです、アニエス。あなたが殺されてしまうところでした」

アニエスはキョトンとキツネに抓まれたかのようになった後、瞳を揺らして驚く。バルスも同じくキョトンとした後、アニエスと同時に驚いた。

バルスはブンブンと首を横に振って否定する。バルスはアニエスを殺すつもりなど毛頭なかった。ちょっと吹っ飛ばして半殺しにしようと思っただけである。

だが、アンリエッタのバルスを見る目はいつもと様子が違っていた。何と言うべきか、どこかに恐れをはらんでいたのだ。無論、バルスに対しての、だ。

とはいえ、そこはバルスも慣れたもの。自分の魔力を見て、むしろ恐れない者の方が珍しい。アンリエッタのような恐怖を宿した瞳など、見飽きていた。

「こんなところまで来てどうしたんだ？」

バルスはあくまで今まで通りの自然体を通す。無礼、無礼極まりない。世の中に無礼という言葉以上のものがあれば、それが当てはまる。アニエスはバルスの態度に喰ってかかった。

「この慮外者め！口のきき方に気をつけろ！」

「アニエス、下がっていてください。私はこの方と二人きりで話したいのです」

アニエスはアンリエッタに制止され、不満そうに退く。

「しかし陛下、この者は捕えた男ではありません。捕えた男は黒髪でした」

「よいのです。この方で間違いありません」

アンリエッタはアニエスを華麗に避けて、バルスの前へとあゆみよる。アニエスは腑に落ちない様子で、バルスを睨みつけるように様子をうかがっていた。何か怪しい動きをしようものなら、すぐにでも斬りかかりそうだ。

アンリエッタはバルスの前に立つと、そっとバルスの両手を握った。

「バルスさん。折り入って、あなたにお願いしたいことがあるのです」

バルスは目を閉じて、アンリエッタの話に聞き入る。アンリエッタの願いは大体予想がついていたが、バルスは結論を急ぐような無粋なことはしなかった。

「あのタルブでの戦いで、敵軍を退けたのはあなた一人の御力です」

「それが？」

「その力を、私に貸しては下さいませんか？」

「何故だ？敵は退けた。これ以上を望もうと？」

アンリエッタは首を横に振り、バルスに訴えかける。

「今、国中が戦争一色に染まっています。軍部もこの機を逃さず、こちらからアルビオンを攻撃せよと主張しています。マザリーニ枢機卿を始め、重臣たちも軍の意向に賛成の様子」

「で、姫さんとしては？」

「私は、私は戦争を避けたいのです！」

フッと、バルスは自嘲する。バルスの予想は見事に外れた。バルスは、てっきりアンリエッタに戦争に参加するよう言われると思っていたのだ。

正直言って、アルビオンに侵攻したところでトリステインは勝てない。兵糧の問題、輸送の問題、兵の問題、艦隊の問題、地の利の問題。将の問題に内政上の問題。数え上げればきりがない。そして、敵には得体のしれない名将がいる。

バルスがその魔力を振るえば勝つこともできるかもしれないが、バルスにはその気がない。あまり目立ちすぎると自分に恐怖を感じる輩が増えて、身の回りの親しい者にまで危害が加わる可能性があるのだから。

「バルスさん。どうかあなたの力で、ルイズとともに私を助けてください。私の数少ない味方として」

ギュウッと握りしめてくるアンリエッタの手は、力なくかよわい少女のものだった。先ほどまで、戴冠式のパレードで凛々しい姿を見せていた者とは思えない。バルスはニコリと笑顔を見せる。

「あんたは偉いな」

「え？」

「俺の事、怖いんだろ？」

アンリエッタは瞳を動揺させ、後ろめたそうにそらす。バルスは知っている。自分に恐怖を覚えた者は、中々その心根を明かすこと

はできない。バルスの世界でそれが出来た者など、一人としていなかった。

ところが、アンリエッタは違う。その力に恐怖しながらも受け入れ、認めている。必要としている。

「あなたの勇気に免じて、微力ながら力をお貸しいたしましょう。女王陛下」

頭を下げたバルスに、アンリエッタは口元を押さえて驚いた。しかし、その意図するところにすぐ気がつき、喜びを顔に表す。

「ありがとうございます、バルスさん」

その瞳から恐怖が払しょくされることはなかったが、アンリエッタは精一杯の笑顔を作っていた。アンリエッタは作った笑顔をスッとそらし、アニエスを見る。

「アニエス。ミス・ヴァリエールをお連れしてください」

「はっ！」

アニエスが再び近づいて来ると、今度はサーコートの後ろからピンク色のブロンドが姿を現した。だが、鳶色の瞳も、可愛らしい唇も、完全にあきれ顔だった。

最初、ルイズはバルスが心配で仕方がなかった。バルスが、殺されてしまうのではないかと。ひどい扱いを受けているのではないかと。それはもう、瞳が涙で潤んで視界が歪んでしまうほどに心配だったのだ。

ところが、地下牢に来て見た光景は固く閉じられた扉をぶっ飛ばすバルスの姿。

王城が吹き飛ばされなくてよかったわ…。

ルイズは、バルスを心配したことをアホらしく思った。むしろ、バルスを捕えた者たちを心配すべきだった、と。

ルイズはバルスの前にツカツカと歩み寄った。

「全く、何やってるのよ？この後戦勝祝賀会も控えてるんだから」

「何って、捕まったからな。脱走」

バルスの言い草に、ルイズはカチンとくる。あれ程心配したのに、訳の分からない論理まで飛び出した。捕まったから脱走するという発想自体がぶっ飛んでいる。

ルイズはビシッとバルスを指さす。

「あんた、戦慄モード禁止」

「何だ、その戦慄モードというのは…」

「その変身。それになるとあんた無茶苦茶だし。みんな怖がるわ」

確かに、とバルスはポンと手を叩く。あまり力を使いすぎると、そもそも身近な者たちがアンリエッタのように怯えるかもしれない。そこからも、バルスの世界で発生したバルス対世界という状況を招きかねないのだ。

バルスはコクコクと頷き、ルイズは仁王立ちで応える。

アンリエッタは、二人の様子を見てクスッと笑いをこぼした。まるで、飼いならされた使い魔と厳しい主人の関係を見ているようだったからだ。

「そのお話なのですが、戦勝祝賀会にはその姿で来てください。バルスさん」

「何故？」

「どうしてですか、姫様？」

眉をへの字に曲げて不満そうにするルイズと、意外そうな顔をするバルス。アンリエッタはバルスに怯えているのだから、ルイズの言うことに大賛成のはずである。

「今はお話しできませんが、私に考えがあるのです。これから王宮内では、その、戦慄モード、というのでいてください」

ルイズはずっと不満そうな顔をしていたが、アンリエッタの言うことには逆らえない。渋々といった様子で頷き、心配そうにバルスを見上げた。だが、ルイズの心配はどこ吹く風。バルスは全く別の事を心配していた。

「それで定着するのか？戦慄モード…」

第三話　ダンスの御相手

戦勝祝賀会。それは、タルブの会戦で戦功を上げた者への叙勲式を兼ねており、同時にパーティーを兼ねていた。木の丸テーブルに白いクロスがしかれ、その上に豪華な料理が彩られる。王城の一室は、その丸テーブルや料理で埋め尽くされ、その周りを貴族たちが囲んでいた。各々がワイングラスやシャンパンの入ったグラスを片手に、思い思いの相手と立ち話している。

ルイズは他の貴婦人たちと同様、いや、それ以上に美しく感じられるほどに淡いピンクの白いドレスで着飾っている。キュルケも青いドレスで若い貴族の男たちを付き従え、周りに侍らせていた。

一人の若い貴族の男が、ルイズに歩み寄る。スラッとした、中々の男前である。

「ミス・ヴァリエール。是非私と踊っていただけませんか」

フイッとルイズはダンスの誘いを無視し、平然を装って歩き始める。ルイズがダンスの誘いを断るのは、これで何度目だったか断った本人にも分からない程だ。その公爵家の息女という地位もさることながら、ルイズの美しさがダンスの誘いに拍車をかけているのは明白である。キュルケもそれは同様で、ダンスの誘いを断った数は知れない。

だが、二人の意識は一人の男にくぎづけだった。青い髪に紫色の瞳を称えた、その男に。

タバサが用事で来られなくなったこの戦勝祝賀会で、誰がバルスとダンスを踊るか、という勝負は二人の一騎打ちになるはずだった。ところが、予想外の敵が立ちはだかったのである。

何考えてるのよ、バルス。そんな奴と話してないで私をダンスに誘

いなさいよ。

ダーリンたら、何考えてるのかしら？不思議な組み合わせね…。

ルイズとキュルケが様子をうかがう先、そこにはバルスと話す金髪の青年の姿があった。胸に勲章をぶら下げ、気障な笑みを浮かべてバルスと話し込んでいる。

「で、君はタバサとどこまでいったんだい？」

「ラグドリアン湖」

「ああ、君はそういう人だったね…」

あの世での境目での出来事、タルブで何があったのか、日常のくだらない話。湯水のごとく溢れだす話題で、バルスとギーシュの会話は止まることを知らない。

その光景は異様としか言いようがない。女たらしのギーシュが女性をダンスに誘わず、バルスと話し込んでいることなど数日前まで考えられなかった。

ギーシュはバルスの背に負われたムラマサを見上げる。

「君の主人はどこまでいったんだい？」

「それが分からないのよ。私も置いてけぼりだったから」

バルスはタバサとの許婚の話を誰にも喋っていない。それは、長い付き合いのムラマサにも同様である。何かあったに違いないとバルスの様子からムラマサは感づいていたが。

ムラマサとギーシュが結託してバルスから何があったのかを聞き

出そうと構えた時、ファンファーレの音が鳴り響いた。

「アンリエッタ女王陛下の、御成〜り〜！」

ガチャリと大きな扉が開き、アニエスを含む銃士隊を従え、純白のドレスに身を包んだアンリエッタが姿を現す。静々と歩くその様は白百合のような美しさを漂わせ、気品に満ち溢れている。その場の者でアンリエッタを見ない者はおらず、専用の椅子が用意された場所まで階段を上がっていくのを誰もが見送っていた。

「皆さま、よくお集まりくださいました」

アンリエッタはタルブの会戦に参加した者たちの働きを称え、その勇猛を祝福する。タルブの会戦での戦死者は全くいないため、死者へのいたわりの言葉も不要。貴族たちはアンリエッタの堂々とした態度を見て、そして、自分たちの功績を称えられて熱い何かを胸の内にため込んでいく。

アンリエッタのスピーチが終わったところでそれは最高潮に達し、男の貴族たちが片腕を振り上げた。

「アンリエッタ女王陛下万歳！トリステインに栄光あれ！」

口々に貴族たちは新女王を称え、次々と腕を振り上げる。アンリエッタはその熱狂をスッと手を挙げて抑えた。

「本日は、皆さまに紹介しなければならない方がいます。此度の戦、勝利の立役者、バルス＝タイラント殿」

バルスは驚いてギーシュと顔を見合わせる。ギーシュはフッと笑い、バルスの背中を叩いて送り出した。

バルスは疑問符を浮かべながら、アンリエッタの元へと歩んでいく。そのままかしずくと、アンリエッタが顔を上げるようバルスに促した。

「バルス＝タイラント殿。あなたのおかげで此度の戦、死者を出さずに大勝することができました。あなたの提供してくれた、新兵器によって」

バルスは唖然としてアンリエッタを見上げ、貴族たちはざわざわと騒ぐ。参戦した貴族たちは、どのようにトリステインがアルビオンに勝利したのか全ての者たちが知らなかった。何しろ、目を覚ましたと思ったらアルビオンが撤退し、いつの間にか勝利を収めていたのである。

目が覚めた時、自分たちは大砲や竜のブレスで死んだはずだったのに、何事もなかったかのように無傷だった。それどころか、タルブの会戦以前よりも身体の調子がいい。

その全ての結果をもたらしたのが、顔を見たこともないバルスという人物。正確には、バルスが作った新兵器だというのである。階級、領地、出身地。貴族たちの間で様々な憶測が流れるが、真実を知る者はいない。

「その功績により、あなたにシュバリエの称号を与えます」

場内がどよめきに包まれ、貴族たちは顔を見合わせる。たった今、アンリエッタはバルスと言う男をシュバリエに叙するといった。それは、たった今までバルスが平民だったことに他ならない。

そもそも、アニエスのような平民にシュバリエの称号を与えてきたことが貴族たちの間で問題となってきていたのだ。中には歯噛みしている貴族も見受けられる。感情の差はあれ、貴族たちの大半が不満そのものだった。

しかし、ルイズとキュルケは不安を感じていた。バルスは異国の侯爵なのだ。それを知らないこととはいえシュバリエに叙するなど、バルスが普通の貴族なら憤慨してしかるべきところである。そしてバルスの力からして、王城が吹っ飛びかねない。

「無礼よ！」

場内に女性の声が響き渡り、シンと沈黙が支配する。

「この御方をどなたと心得ているのよ！？」

貴族たちは慌てて狼藉者の姿を探すが、その姿を見つけることはできない。ただ、アンリエッタとルイズ、キュルケ、ギーシュだけがその声の主に気が付き、驚いて見つめている。

「ラインハルト帝国、バルス＝タイラント侯爵！異国の王にシュバリエを叙されるような言われはないわ！」

張り上げられた大声がどこから発せられたのか、貴族たちもようやく気がついた。バルスに背負われた剣を見て、唖然としている。

バルスは顔を伏せたまま、大いなる意思の言葉でポツリとつぶやく。

『少し黙っていろ。これ以上状況をややこしくするな』

『でも、だって、無礼…。何でもありません』

アンリエッタの作戦は、大体予測がついた。平民であるバルスを貴族たちの目の前でシュバリエに叙することで、戦功を上げれば平民でも貴族にするという印象を再度植え付けること。

そして、バルスは女王が直々にシュバリエを叙するほどのお気に入りであるという印象を与えること。数少ない味方に政治的な力を与えるために。

だが、その目論見はムラマサの一撃で混沌へと変化した。バルスとアンリエッタ、お互いに無礼を働き合ってどう転ぶか分からない。最悪の場合、バルスはこの場で命を狙われる可能性もある。

そうなれば、全面戦争は明白。王城を吹き飛ばし、貴族たちを吹き飛ばし、世界を敵に回したあの日々が戻ってくるだけだ。バルスは俯いたまま、アンリエッタの反応がいいものであることを祈る。

「御顔をおあげください、侯爵」

バルスが恐る恐る顔を上げると、そこにはアンリエッタの笑顔があった。

「知らないこととはいえ、無礼をいたしました。非礼をお詫びいたします。」

どうなってんの、とバルスは唖然としてアンリエッタを見上げ続ける。普通なら、女王に対する無礼討ちでもおかしくない。それが、何故か謝罪されている。

「よろしければ、今一度あなたの身分を明かしては戴けませんか？」

「…ラインハルト帝国、バルス＝タイラント。身分は侯爵、軍内では少将でございます」

ざわざわと貴族たちがざわめく。どこにある国か、何故身分を偽っていたか、など様々な憶測が流れる。貴族たちはアンリエッタを見上げ、その処遇に注目した。

「バルス＝タイラント侯爵。あなたを客卿としてお迎えしたいのですが、お受けしていただけますか？」

客卿、それは外国人の官吏の事。つまり、アンリエッタはバルスを侯爵として迎えるというのである。中々の強かさにバルスも舌を巻いたが、それは大きなリスクを伴っていた。貴族たちの中から、二人の男が歩み出る。

一人は痩せこけて骨ばった男。白髪、白髭で白い大臣服に身を包んでおり、初老の男性に見える。もう一人は白くなりかかった金髪に口髭をはやし、威厳に満ちた男性。左目にモノクルをはめているのが特徴的で、赤い服と紫色の上着が貴族たちの中でも群を抜いて目立っている。

まず、白髪に白髭の男が口調を強めた。

「お待ちください。その者が本当に侯爵でありましょうか？」

「マザリーニ枢機卿…」

更に、威厳に満ちた男もアンリエッタを諫めるように賛同した。

「そのような素性の知れない者を客卿とするなど、聞いたこともありません。せめてこの場で証拠を見せていただくか、素性が知れてからでも遅くはないでしょう」

「ラ・ヴァリエール公爵…」

もっともな点を突かれ、アンリエッタは押し黙る。ルイズもキュルケも水の精霊がそれを認め、バルスの実力を知っているから侯爵だと信じることができていた。だが、この場にいる者たちは違う。

それを知る者は誰一人としておらず、バルスは女王を口先だけでたぶらかす不審者でしかない。

何か策はないか、と焦るアンリエッタの前で、バルスはスッと立ち上がった。バルスは約束してしまったのだ。協力する、と。

「証拠とは言えませんが、我が魔法を御目にかけましょう」

バルスはマザリーニとヴァリエール公爵を横目に、バルコニーへと歩いていく。ハルケギニアでは、メイジとしての力量が少なからず重視されていた。魔力が強いほど尊敬され、信頼される。

バルスは貴族たちをかき分けて、金髪を頼りにギーシュを探した。

「ギーシュ。悪いが、杖をかしてくれ」

「あ、ああ」

ギーシュがポイッとバラを放り、パシッとバルスがつかみ取る。バルスは笑顔でギーシュに感謝すると、また貴族たちをかき分けて今度は窓の前へと立った。窓を開け放ち、白い床のバルコニーへと歩み出る。

バルスは月明かりの元に立つと、大仰にバラの杖を月へと掲げた。

「我が親友の杖よ。今一時、我にその力を示せ！」

バルスは書物により、ハルケギニアの魔法はその行使に杖を必須とすることを知っていた。そして、それを必要としない魔法を先住魔法とし、よくない印象を抱いていることも知っていた。そして、杖には契約が必要であることもまた知っていた。故に、大仰にして杖と契約したかのように見せかけたのである。

実際、杖との契約は何日もかかるのが普通であり、全く契約でき

ていないのだが。
　バルスの魔法は、一見先住魔法に見える。実際には虚無、火、風、土、水からなるペンタゴンや元素を根本とする系統魔法からは完全に独立した系統からなるので関係性は皆無。ただ、杖を使わないから先住魔法に見えてしまうのだ。
　そこで、バルスは考えた。バルスは血統に依存するこの世界の魔法を行使できない。だが、真似ることはできる。どのようなプロセスで魔法が行使され、魔力がどう流れ、発言するのか。目が教えてくれる。

「ウル・カーノ！」

　バルスの大仰な杖との契約に眉をひそめていた貴族たちが、不安そうにしていたアンリエッタが、その光景にくぎ付けとなった。空気が灼熱のごとく熱くなり、蜃気楼を作りだして揺らぐ。スクウェアクラスのような魔力に、貴族たちがたじろぐ。杖の先で生まれ出た小さな炎は、ボシュッと音を立てて消えうせた。

「イル・ウィンデ！」

　ブオッと空気がかき回され、灼熱により出た貴族たちの汗を冷やす。しかし、引き始めた汗の代わりにスクウェアクラスのような重厚な空気の震えが脂汗を呼び起こした。杖の先で踊り狂っていた小さな竜巻が消え、風が嘘のように収まる。

「イル・ウォータル！」

　ポチャンと水の滴が落ちるような音がして、ひんやりとした空気が辺りを支配する。人によっては寒いともとれる空気の中で、貴族たちの汗が完全に引いていく。代わりに襲ってきたのは、スクウェ

アクラスのような魔力が想起させる悪寒だった。杖の先にできていた水玉がパシャッと消え、滴がポタリと地面を濡らす。

「イル・アース・デル！」

バルコニーに転がっていた、小さな石がパッと光りを放つ。その石は錬金を終えても輝くことをやめず、月の光を返し続けていた。

バルスは石を取り上げ、息をのむ貴族たちの中へと歩んでいく。親友ギーシュに杖を渡し、ついでにその石も手の中におさめた。

「ありがとう、異国の親友」

ギーシュはその石を手にして、じっと輝きを見つめる。周りの貴族たちもギーシュの手の中を覗き込み、石を凝視していた。

ギーシュは震えた。土系統のメイジだからこそわかる、その重さ。その質。黄金に輝くそれは、真鍮などではない。

「き、金だ。ゴールドじゃないか！」

それは、全系統においてスクウェアクラスであることの証明。少なくとも実力の面で、バルスが侯爵であることを疑う者は誰一人としていなくなった。ざわめきだした貴族たちをかき分け、バルスは再びアンリエッタの前でかしずく。

アンリエッタはゴクリと唾を飲み込んで、畏怖の心を落ち着けた。

「この者を客卿として迎えることに、異論の者はありますか？」

シンと静まりかえり、異論をはさむ者はない。そのままバルスはアンリエッタによって客卿として迎えられることが決まり、バルスはホッと胸をなでおろした。

しかしそれもつかの間、異国のスクウェアクラスメイジに興味を持たない者などいない。バルスは貴族たちに取り囲まれ、質問攻めにあう。バルスは、その質問の過程でやっと気付いた。

全系統スクウェアクラスは、やりすぎだったということを。

「えらい目にあった…」

王城の中庭というには広すぎる広場で、バルスは池を眺めていた。双月が池に写り、ため息をつくバルスの顔もまた反射する。水面に写ったムラマサが、呆れたような声を出した。

「当り前じゃない。ご主人様はもっと加減を知るべきね」

「いや、流石に全系統を極めることがそんなに難しいとは気付かなかった」

バルスの世界では、才能は別として火、風、土、水の系統を極めることは誰にでもできることだった。学んで、努力すればできることだったのだ。だが、ハルケギニアの魔法は違ったらしい。全ての系統を極めるなど、才能の塊にしか不可能だったのだ。

自分の世界の常識が、バルスの目を曇らせていた。

他にも、何故それほどのメイジなのに武器を携帯しているのかと尋ねられた。ハルケギニアでは、メイジは武器を携帯しないものらしい。それは、自分の魔法に自信がないからと受け取られるからだ

そうだ。

バルスの世界は違う。場合によっては魔法よりも強いマシンガン等の銃火器が普及しているため、魔法だけでは身を守りにくい。魔法とは、あくまで戦争や生活の一手段にすぎないのだ。

アルビオン侵攻についてどう思っているか、新兵器とは何か、といった国家の重要機密から、魔法についてや、果ては女性関係の話まで色々と質問が飛び出したが、その辺は適当にあしらうことができた。ヴァリエール公爵をはじめとする貴族たちとも友好関係を結べたのは大きい。

アンリエッタの気遣いにより、戦慄モード状態のバルスが客卿として印象付けられたので、普通の状態に戻れば今まで通りの生活も送れる。悔いを残したのは、やりすぎたことだけだった。

「そもそも、お前が余計なことを言わなければよかったんだが」

「何のことかしら？忘れたわ」

「ほう。思い出させてくれよう」

バルスはムラマサを引き抜き、池へと突っ込む。バッシャバッシャとやるバルスとやいのやいのと叫ぶムラマサは、背後に忍び寄るバッサバッサという音に全く気が付いていない。

ズシン、という音でバルスはやっと気が付き、池からムラマサを引き上げた。シルフィードが首をもたげて、バルスの様子をうかがっている。

『な、何してるのね…』

『何って、記憶を取り戻そうとしていたんだ』

意味のわからないことをのたまうバルスに、素直なシルフィードは更に首をもたげた。どうやらバルスは、池の水をかき混ぜると記憶が戻る生物らしいと。不可解きわまりない。

一方、バルスにとっても不可解きわまりないことはあった。怪訝そうにシルフィードを見上げている。

「何故そっちの言葉で話しかける？別に聞かれて困る話ではないだろう？」

『人間の言葉を話すのは、お姉さまに禁止されてるのね』

シルフィード曰く、高度三千メイル以上、なおかつタバサと二人きりでない限り人語を喋ることを禁止されているらしい。人語を解すことが分かると、色々と問題があるとか。色々との部分は何分シルフィードの説明のため、いまいち要領を得なかった。

『で、何の用だ？』

韻竜たるシルフィードの前で、バルスはどっしりと構えている。シルフィードには理解できなかった。

生物的な格として、シルフィードは圧倒的にバルスの上にいるはずである。ところが、この態度はどうだ。

何かこの人、怖いのね。何か前よりも数十倍怖いのね…。

身体もちんちくりんの癖に、何故だか超がつくほど怖い。ただ質問されただけなのに、怖い。しかし、シルフィードは韻竜なのだ。ここで引き下がるわけにはいかない。

『まず、その怖い格好をやめるのね』

『怖い格好?』

『何か怖いのね。何というか、その目に戦慄を覚えるのね』

バルスはハンマーで殴られたような顔をした後、少ししょんぼりして黒髪、黒い瞳に戻った。結構気にしていたらしい。

シルフィードはバルスが素直に言うことを聞いたことに気をよくし、普段の調子を取り戻す。

『何でお前、お姉さまの事放っておくのね』

『何の話だ?』

『お姉さまの許婚なのに、どうして放っておくのね』

シルフィードとしては声に精一杯ドスを利かせていたが、そもそもの声が声なのでバルスが気がついてはいない。だが、バルスは驚愕した。シルフィードがそれを知っていたからではない。背中の奴が完全復活したからだ。

『何よそれ、何の話!?』

シルフィードは剣が喋ったことにギョッとしたが、重大な話の最中である。気を取り直して不可解生物バルスと話を進める。

『お姉さまをデートにも誘わず、あまつさえ一人でパーティーに出て他の女の子と踊ってるなんて、万死に値するのね』

『いや、踊ってないぞ…』

バルスの反論は、シルフィードには届かない。シルフィードは、タバサに許婚が出来たと聞いて大いに喜んだ。

常々、主人であるタバサに笑顔を取り戻してほしいと願っていたシルフィードは、それを取り戻すのに一番手っ取り早いのは恋だと思っていた。候補とはいえ、その相手が出来たというのだ。喜ばないわけがない。

ところが、その相手ときたらどうだ。主人の実家からの帰りでお膳立てしてやったにもかかわらず、あれだけ主人の魅力を堪能させてやったにもかかわらず、あれからデートの一つにも誘わない。

無駄に怖いし、いや、もはや取り柄として怖いしか上げられない。おまけにいつも他の女の子と一緒にいて、浮気しまくり。主人の恋人赤点不合格。

それは完全な誤解であるのだが、状況的には正しかった。あれ以来、バルスは戴冠式やら何やらでタバサと会っていない。

おまけに、バルスは恋に関して無能である。どれほど無能かと言うと、魔法の才能と真逆なほどに、絶望的に無能である。憐れみと哀しみで大地が震えるほどに無能なのだから仕方がない。どうしようもなく、超絶無能なのだ。多分、暇だったとしてもデートなど思いもよらないだろう。

『とにかく、黙ってついてくるのね』

バルスはガブッとシルフィードに咥えられ、ポイッと背中に乗せられた。バルスは観念したようで、どこにでも連れて行けといった様子である。

シルフィードは翼を翻し、バルスをどこかへと連れて行くのだった。

バルスは、鬱蒼とした森の中をとぼとぼと歩いていた。シルフィードはバルスを叩き落とすとムラマサを取り上げ、早々とどこかへと飛んで行ってしまったのだ。空を飛んできた時にトリステイン学院が見えたのでその近くのはずだが、どうやらバルスは本格的にシルフィードに嫌われてしまったようだった。

突然目の前に現れて、突然森まで連れて行って突き落とされたのだ。そうとしか考えられない。

バルスは魔力を解放してとっとと帰ろうと思ったが、ルイズの戦慄モード禁止令を思い出した。仕方なく、普通に歩いて森を抜けることにしたのである。

バルスが夜空を見上げながら方向を確認しつつ歩いていると、いつしか泉のほとりに出ていた。木でできた小屋が立っており、バルスはキョロキョロとあたりを見回す。人影はなく、人が住んでいる様子はない。

こんなところがあったのか。

その場所を、バルスは甚く気に入った。何かがあれば、ここに来てみるのも悪くない。ルイズに追い出されたりだとか、ルイズに殴られたりだとか。何しろ、あの我がまま娘は非常に気が変わりやすいのだから。

バルスは小屋などを見て回り、次いで泉のほとりへと歩を進める。そして、ハタとその歩みをとめた。泉のほとりで、誰かが軽やかにステップを踏んでいる。ダンスのステップだ。

バルスは警戒し、背中のムラマサを取ろうとして腕を上げた。

そうか、こんな時に…。

バルスの上がった腕は、ムラマサを掴むに至らなかった。敵だった場合を考え、茂みに身を隠しながら顔だけを出して泉のほとりを覗く。

そこでステップを踏んでいたのは、双月をスポットライトにした青い髪の少女だった。空に二つ、泉に二つの月を得て、紐とボタンが複雑に絡んだ、可愛らしいレースが幾重にもあしらわれたドレスが浮かび上がる。

それはそれは、とても楽しそうに少女は踊る。軽やかにステップを踏んで。

やれやれ、誰と踊っているんだ?

バルスは、その少女の相手に挑戦したくなった。自分自身の全実力を持って勝負したくなったのだ。それほどまでに少女を楽しませる見えない相手を、完膚なきまでにたたきつぶしてやりたくなったのだ。

こんな時でも闘争心でのみしかその行動を起こせないバルスは救い難いかもしれない。だが、バルスがその心を嫉妬と知るには、恋愛の才能がなさすぎたのだ。結果としてやることが同じだけで、及第点といえる。

少女のステップが終わるのを見計らって、バルスは歩み寄る。

「次は私と踊ってくださいますか?ミス」

差し出された手とその手の持ち主を見て、少女は夢から覚めたような顔をした。

「どうして!?」

「風の精霊に誘われたので」

まるで歯の浮くようなセリフに、少女はクスッと笑いを漏らす。

「全然似合わない」

「正当な評価、光栄の至り」

二人は手を取り合い、軽やかにステップを踏み始める。月明かりに写しだされた少女の顔は、一人で踊っていた時のそれよりも笑顔に満たされていたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0441y/

ゼロの使い魔～一騎当神～

2012年1月13日02時50分発行